

SD

Space Design

0010

Monthly Journal of Art and Architecture

スペースデザイン ISSN 0963-0987
第43巻2009年10月1日発行 (毎月1回1日発行)
定価04042円5日税三郵便物認可

特集 改造建築…公共建築の増改築の手法

The Architecture of Transformation
Methods of Conversion and Additions

作品：ライヒスタック、ヒバラツハ市立図書館、大英博物館、
テート・モダン、ベネトン・アート・スクール、東京大学工学部1号館、
リール市立美術館、国際決済銀行指名設計競技案、国立国語子ども図書館、他
インタビュ：フランチェスコ・ダル・コオ、ボリス・ボドレツカ、
アンリ・シリアーニ、安藤忠雄、香山壽夫、伊東豊雄、
ポール・シユメトフ、イーボス&ヴァーナル、他 インタビュアー：宮脇勝

20歳過ぎたら 健診を。 人間の話では ありません。



働きざかりのビルを診断、中から元気にする。関電工でリニューアル。
コンピューターや通信機器など、加速する技術の進歩に追われて息切れしているのは、私たち人間だけではありません。あなたが働いているそのビルも、電気配線など様々な設備の面で、中から疲れやすくなっています。だから、関電工でリニューアルを。ビルの内部を診断した上で、設計、施工してビル内環境をリフレッシュします。関電工はビルの設備に関するプロフェッショナル。新しいビルの電気設備から、今あるビルのメンテナンスまで、最高の技術力でお応えします。ビルをきちんと長生きさせるために、ビルのドクター関電工にお任せください。

ビルの誕生からリニューアルまで
総合設備の

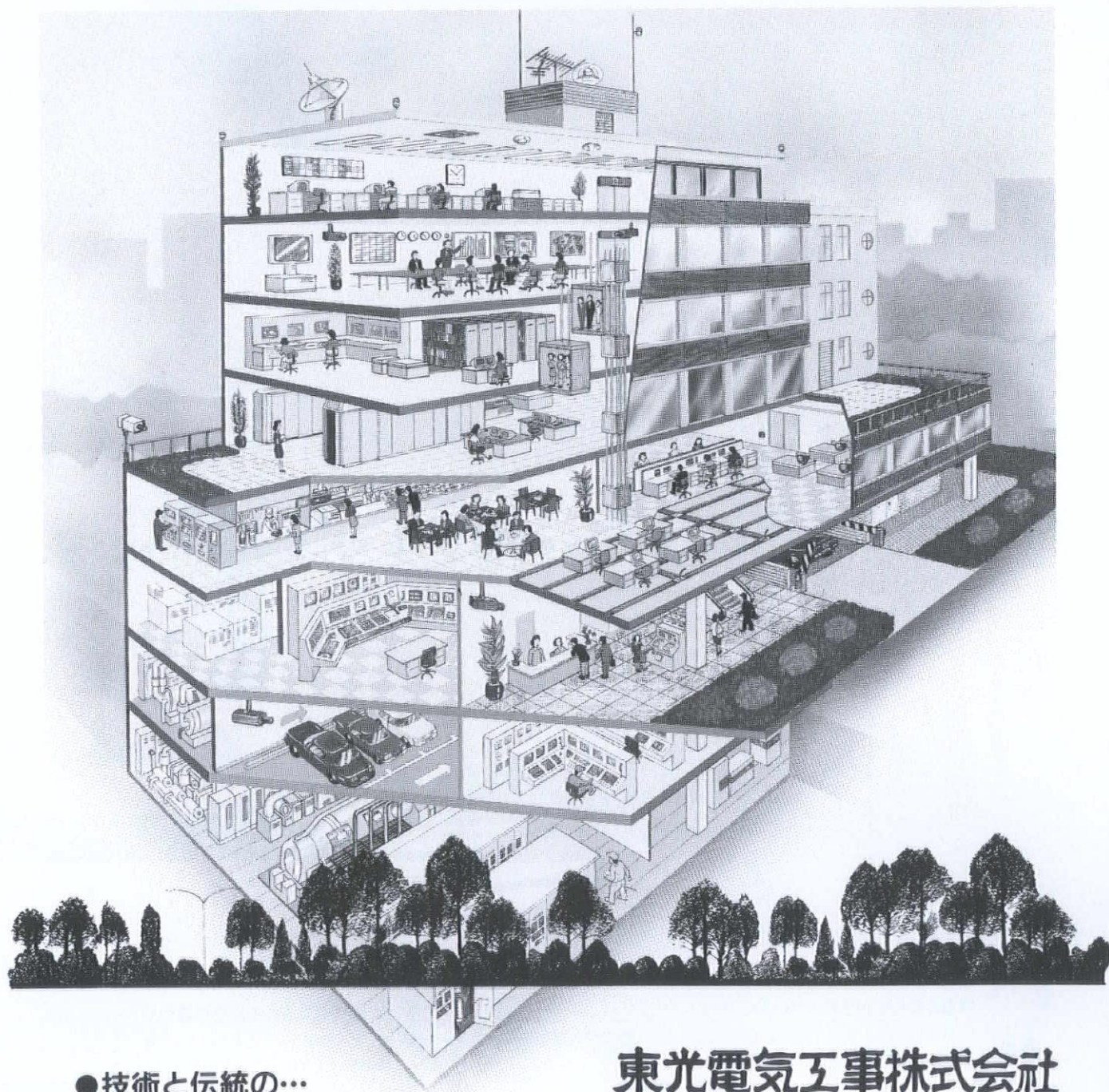
 **関電工**

本社 〒108-8533 東京都港区芝浦4丁目8番33号



快適さは…安全、確実が基本。

快適な環境づくりに、 豊かな経験。



●技術と伝統の…

内線工事 ■ 外線工事

東光電気工事株式会社

本社 〒101-8350 東京都千代田区西神田1-4-5 TEL.(03)3292-2111

支社所在地／札幌・仙台・大宮・千葉・丸の内(東京)・新宿(東京)・横浜・名古屋・大阪・広島・福岡

もう一つのカジマを知ってください。

高層のビルを建てる。巨大なダムを造る。長い海底トンネルを掘る。確かにカジマの仕事ですが、しかしそれは、

ほんの一面にすぎません。私たちが四六時中生活する住まいの、ここにも、あそこにも、意外なところにカジマの仕事が隠れています。毎日が健康で、安心して、しかも快適に暮らせるために、

マンションや住宅用につくられた沢山の建材や工法たち。環境に配慮しつつ、これからの高齢化する社会に向けて、カジマは何ができるのか。そんな気持ちで、住空間に役立つ商品を開発しています。



健康に暮らせる住まいづくりへ。

住まいは健康を大きく左右します。湿気や結露、カビなどの発生は住まいを損なうだけでなく、そこに暮らす人々の健康にも影響を与えます。鹿児島は、空気中の水分を吸ったり吐いたり、脱臭機能ももつ天然素材「ゼオライト」に注目。耐火性にも優れたこのゼオライト建材は、室内の湿度を一年中快適な状態に保ち、健康住宅を実現する夢の建材です。

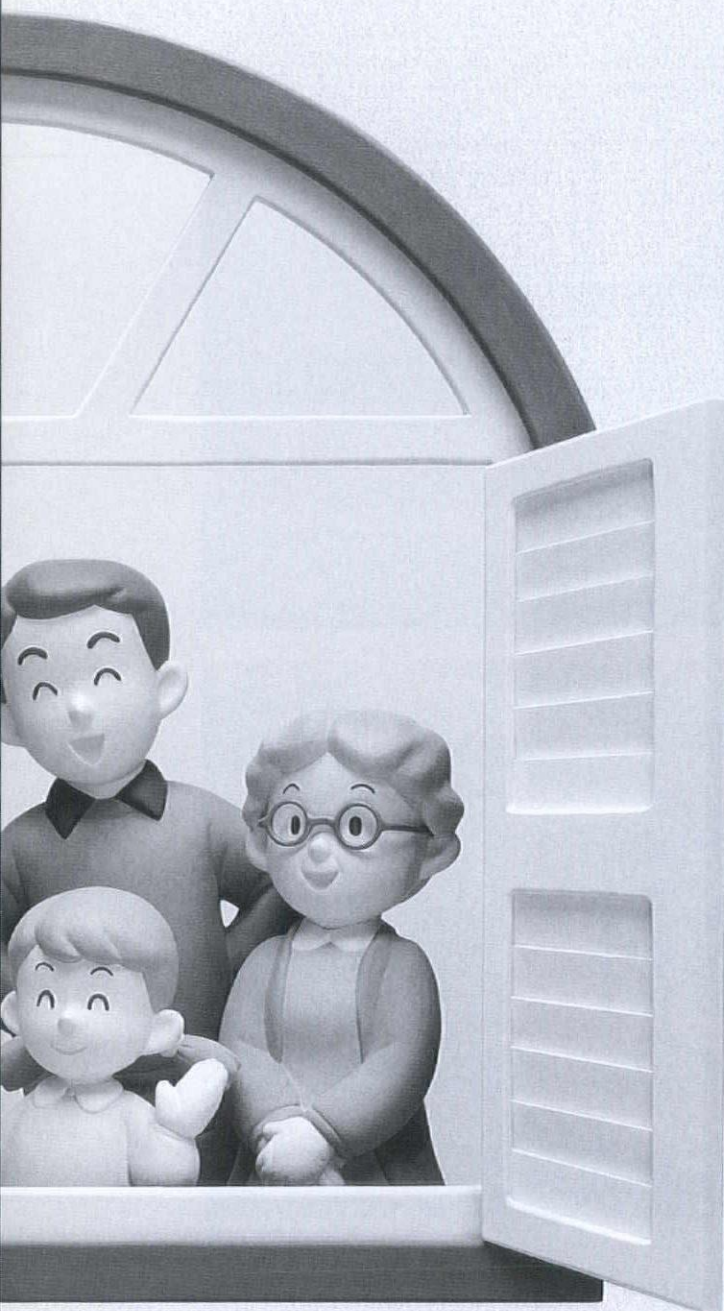


自然を身近に感じる快適環境づくりへ。

ガーデニングを楽しむ人がたいへんな勢いで増えています。庭やベランダで自然を楽しむのはとても素晴らしいこと。鹿児島の「ケイソイル」「草花名人」は、バルコニーや屋上庭園にぴったりの、軽くて保水性の高い人工土壌です。重さの条件が厳しい屋上やベランダ、バルコニーでも、緑豊かな自然を育てることができ、生活に潤いを与えます。



ひとのふだんへ。



地震や火災に負けない安心空間づくりへ。

住まいを考えると、地震への対策が不可欠です。

壊れない住まいを目指すのであれば、構造を強くすれば解決します。しかし、家具の転倒などによる被害は防ぐことができません。鹿島の「戸建住宅免震システム」は、建物と基礎との間に設置するボールベアリングを活用。建物に伝わる地震エネルギーを1/5以下に減らし、安全で安心な住まいを実現します。



ボールベアリングが受皿の上をなめらかに動きます。



100年をつくる会社

in 鹿島

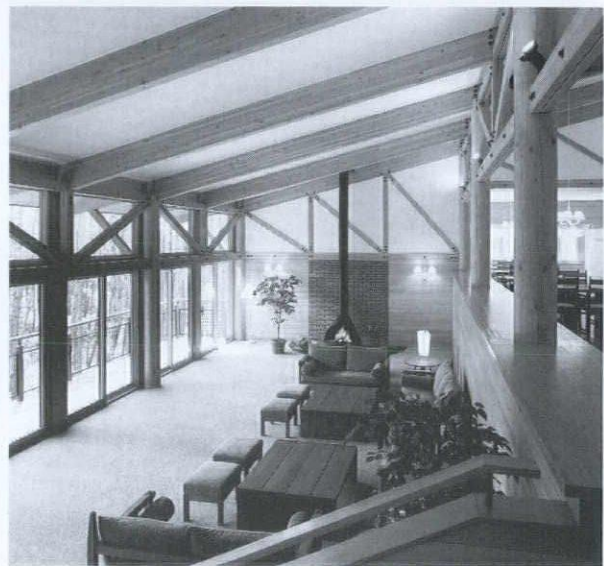
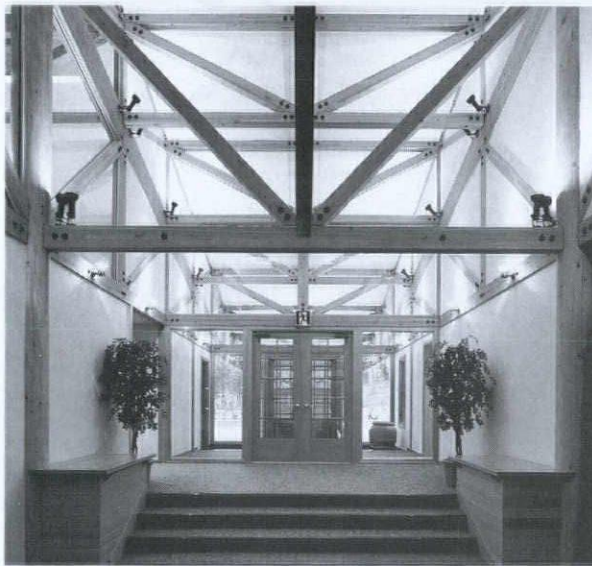
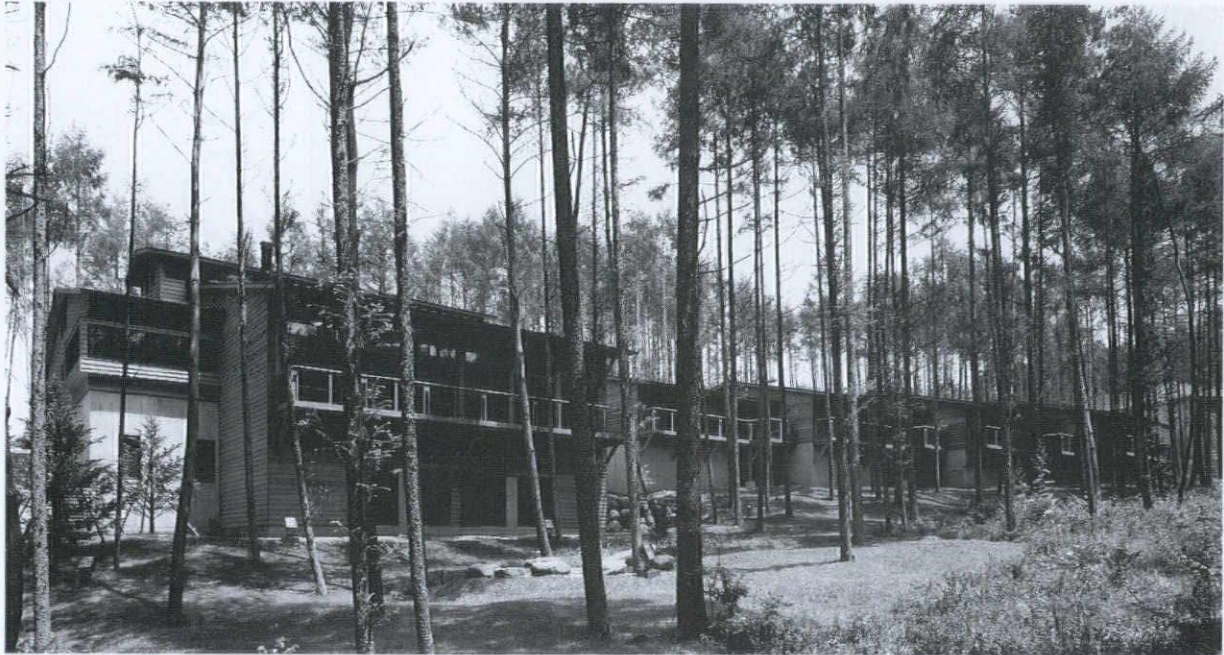
KAJIMA CORPORATION

本社:東京都港区元赤坂1-2-7 ☎107-8388

ホームページ <http://www.kajima.co.jp/>

大興物産の海外建材シリーズ

No.6 木製品(ツーバイフォー, 集成材)



大興夢科山荘

大興物産は、米国ツーバイフォーシステム用各種部材をパッケージ輸入しており、企画段階から調達・施工段階までトータルなコーディネーションを致します。

お問い合わせは、大興物産株式会社・海外調達部まで。
〒107-8318 東京都港区元赤坂1-5-31(新井ビル) TEL 03-5474-6054 FAX 03-5474-6386

建設資機材の総合商社 鹿島グループ 大興物産株式会社

本 社 〒107-8307 東京都港区元赤坂1-6-4 安全ビル

本 社 ☎(03)5474-6060 FAX(03)5474-6076
東京支店 ☎(03)5474-6072 FAX(03)3423-1915
横浜支店 ☎(045)212-3925 FAX(045)212-3996
名古屋支店 ☎(052)961-6171 FAX(052)961-6179
大阪支店 ☎(06)6762-5661 FAX(06)6762-1074

札幌営業所 ☎(011)231-6841 FAX(011)222-4074
東北営業所 ☎(022)219-6861 FAX(022)219-6867
関東営業所 ☎(03)5632-6717 FAX(03)5632-6719
北陸営業所 ☎(025)247-2286 FAX(025)243-5248
広島営業所 ☎(082)249-9221 FAX(082)249-9270

四国営業所 ☎(0878)39-3191 FAX(0878)35-4722
九州営業所 ☎(092)441-2624 FAX(092)471-7996
シンガポール
オフィス ☎65-3440590 FAX65-3446714

しっかりと技術で明日をささえます。

ビルひとつとっても、電気設備から空調設備・給排水設備など、中電工の技術はこんなに生かされています。そして、あなたの快適環境を支えるために、送電・配電・地中線工事などの他に先端技術の開発・導入も行い、幅広い分野で設備工事を手掛けています。



エネルギー関連

情報通信関連

電気通信工事の設計・施工

鋼構造物工事の設計・施工

土木建築一式工事の設計・施工

空調管工事の設計・施工

環境関連

一般水道施設工事の設計・施工

防災・消防施設工事の設計・施工

電気機器の設計・製作・販売・修理・据付・保守

電気設備工事の設計・施工

送配電線工事等の設計・施工



株式会社 中電工

本店 / 〒730-0855 広島市中区小網町6番12号 TEL082-291-7411
支店 / 広島・岡山・山口・島根・鳥取・東京・大阪

最先端のハーモニー。

さまざまな先端技術が調和して、「快適」という名のハーモニーを奏でる。トーエネックのエンジニアリングは、まさにそんなイメージです。電気設備をはじめ、情報通信・冷暖房・空調・防災設備など…。システム設計から施工・保守まで、高度で総合的な技術力を活かし、全国主要都市を拠点に幅広いネットワークでみなさまにお応えしています。オフィスビルやマンション、ホテル、工場、さらにはコミュニティ施設。あらゆるスペースを、心地よい技術のハーモニーで包み込みたい。インテリジェント&ヒューマン。私たちは、トーエネックです。

いろいろな技術を結んで、トータルに考える。
トーエネック エンジニアリング

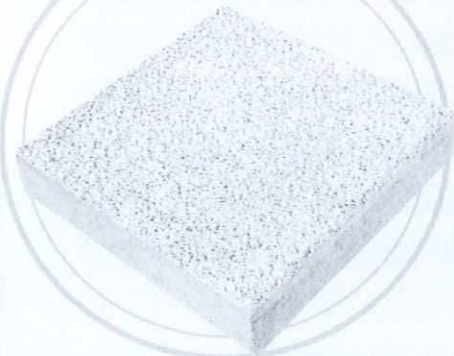
先端技術で、システムする。

TOE/NEC

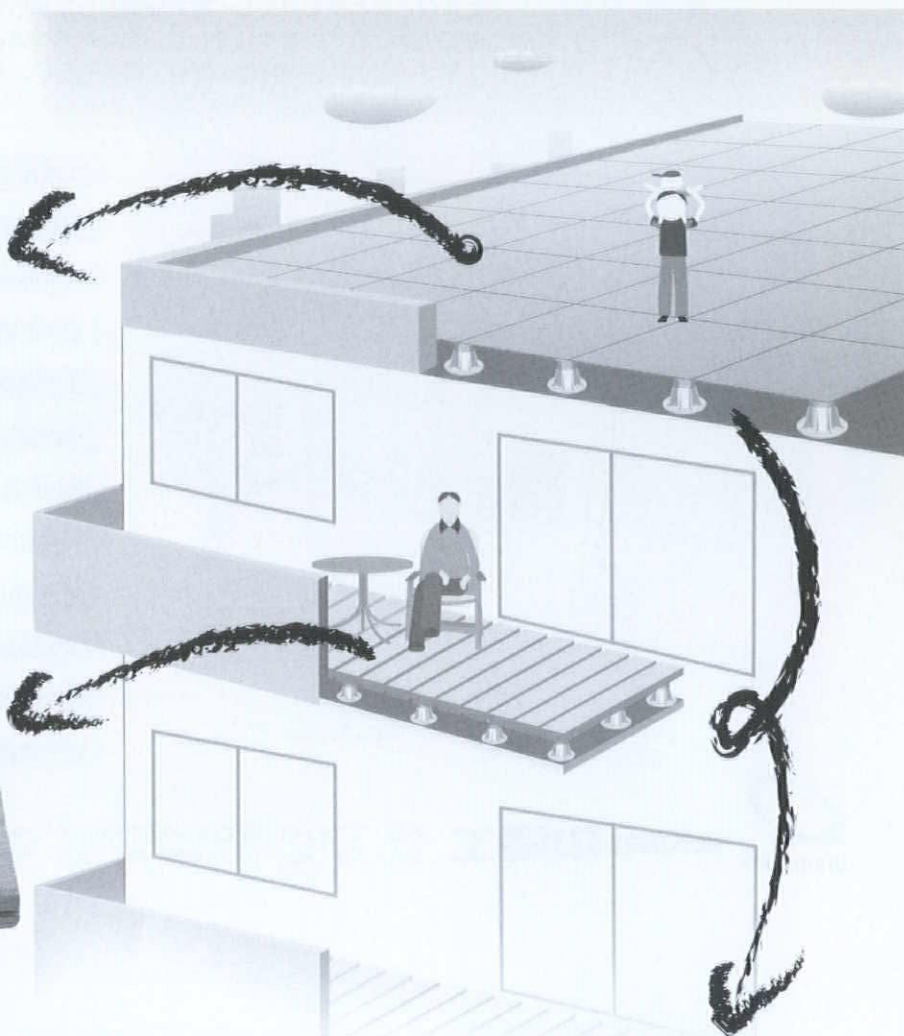
株式会社 トーエネック

本店 / 名古屋市中区栄1-20-31 〒460-0008 ☎(052)221-1111
東京本店 / 東京都豊島区巣鴨1-3-11 〒170-0002 ☎(03)5395-7111
大阪本店 / 大阪市淀川区新北野3-9-2 〒532-0025 ☎(06)6305-2181
名古屋支店 / 名古屋市港区千早3-1-32 〒455-0011 ☎(052)659-1123

PFストーンパネル



PFウッドパネル(超硬質木材)



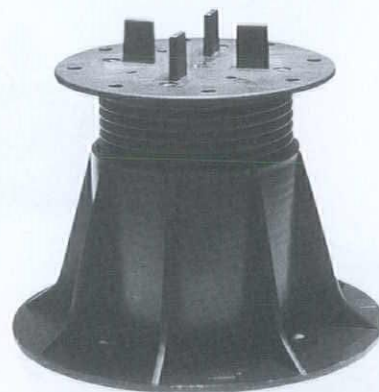
ユニークな発想で開発された「PFシステム」は、コンクリート製平板「PFパネル」を専用支持脚「PFスタンド」にて支持して二重床を設置し、防水層と二重床との間にフリースペースを確保する新しいタイプの防水層化粧保護システムです。耐久性に優れたポリプロピレン樹脂製の「PFスタンド」は、独自のねじジャッキ作用により容易にレベル調整が可能であり、フラットな床面を確実に、素早く施工することができます。また、PFパネルの外に、凝石板の「PFストーンパネル」、洗出し板の「PFロックパネル」さらに木質板の「PFウッドパネル」も用意されているので、様々なデザインに対応できます。

【PFシステムの適用箇所】

- 陸屋根をはじめ、ガーデンルーフ隣接部、人工地盤、ルーフバルコニー（テラス、ベランダ）犬走り、室内二重床、外溝一般部等にご採用下さい。

容易な施工、軽量で丈夫、フラットな仕上り新しいタイプの乾式浮き床工法……

PFシステム



PFスタンド B-4タイプ

《特徴》

- 保護コンクリートが不要
- 32～600mmの自在な高さ設定
- スピーディで正確な施工
- 高い排水性
- アクセスフリーな空間
- 容易なメンテナンス



総合防水材料メーカー

日新工業株式会社



営業本部 ☎ 103-0005 東京都中央区日本橋久松町9-2
TEL.03 (5644) 7211 (大代)

●ホームページ / <http://www.nisshinkogyo.co.jp/>

札幌・仙台・春日部・東京・千葉・横浜・名古屋・金沢・大阪・高松・広島・福岡

0011

特集

ヒューマン-センター・デザインの可能性

アドバンス・プロダクトデザインからソーシャルデザインまで

単なるデザインを超え、環境・社会・コミュニケーションまでを含む、人間の生き方をめぐる新たなデザインの概念——ヒューマン-センター・デザイン（HCD）。「あらゆる人々が快適に利用できるように、モノや空間、コミュニケーション環境をデザインしよう」と唱うHCDは、「ユニバーサルデザイン」や「ソーシャルデザイン」といった概念を包含する21世紀デザインの新たなパラダイムといえる。

本特集では、HCDの概念とその可能性について、既成のジャンルを超えた横断的視点から、事例とともにデザインの基盤思想を提示する。

●座談会＝HCDをめぐる状況と可能性

柏木博×川崎和男×中原蒼二×彦坂裕

●アメリカにおけるHCDの現在

●実践するHCDの現在

川崎和男の構想と実践／企業にみるHCD開発／ジョン・アレンの実践：

〈ヌースフィア〉〈サイバースフィア〉〈バイオスフィア〉

●HCDの中の情報技術とライフデザイン

●デジタルコミュニティと創造生活基盤

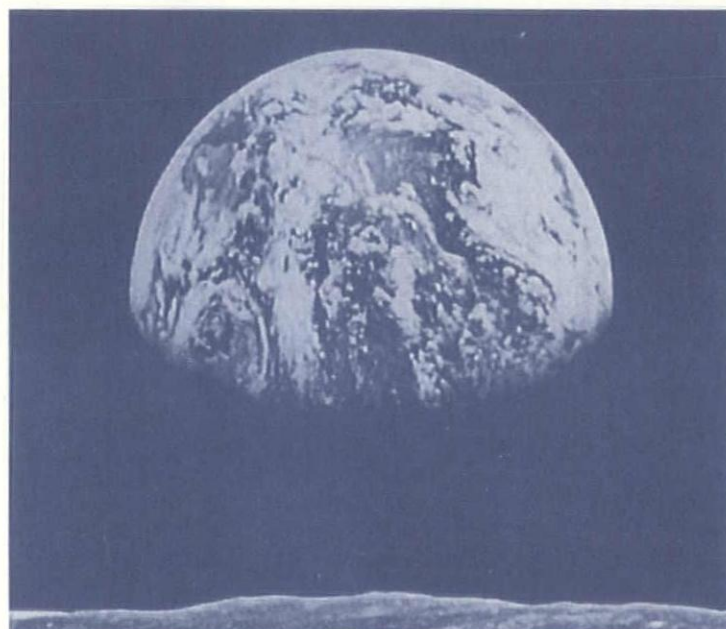
●HCDと未来コミュニティ：身体から都市へ

荒川修作の〈センソリアム・シティ〉

監修＝彦坂裕

企画・編集協力＝中原蒼二・信時正人

アポロ11号から写した地球



0008

特集

本 20世紀ブックデザインの精鋭

ブックデザインとは、周到に計画され、論理立てられた「構築物」に他ならない。「紙束とインク」に過ぎないはずの「本」に魔力を吹き込んできた20世紀のブックデザインを一望。形態と構造の極限に挑んだ出版物の数々を紹介し、この不死身のメディアの可能性を探る。

●北園克衛：奇跡のデザインワーク

詩集『空気の箱』、自装詩集：『白の断片』、『煙の直線』、『黒い火』、『VOU』、プラスチック・ポエム、他。

●進化するフォルム：2000年のDTP

『VISIONAIRE』、tomato、fuel、『漢聲』、他。

●造本実験の世紀：「本」を超えるために

連鎖するウサギ穴、「リアル」への道標、ポップアップ・スキヤンダル、黒いページ、ウルムの遺産、箱の中の解放区、フルクサス・アネックス、アーティスト・ブックからの跳躍

●本の置かれている場所 ●SD特選必携書

●インタビュー＝杉浦康平

デザインプロセスに潜む構造

●文＝金澤一志、山口信博、蜂賀 亨、渡部千春、方 振寧、たかばやすお、北橋朋也

●監修＝金澤一志 ●写真＝藤井 保、新 良太

特別定価＝2300円／本体2190円



0009

特集

木造モダニズム 1930s-50s 素材を転換させた日本の発想

「木造モダニズム」が、今あたらしい。建築界をこえてひろがる、モダニズム再考のムーブメント、そして「木」という素材への回帰。これらを包み込むテーマが、第二次大戦をはさんだ1930～50年代の日本にあった。資材窮乏の中、「木」でモダニズム建築をつくる。日本人モダニストたちはここで育ち、現代建築のベースができあがったのだ。「日本」というアイデンティティと「モダニズム」の再構築の手がかりがここにある。

●木造表現のパラダイム

井上邸、聖ポール教会、日向別邸、聴竹居、前川自邸、他。

●モダニティの構築

土浦自邸、コアのあるH氏の住まい、試作小住宅、他。

●インターナショナル리티の超越

八幡浜市立病院伝染病棟、日土小学校、川ノ内小学校、他。

●トピックス＝モダンデザインにおける匿名性原理の消長
文＝黒沢 隆

●対談＝木造のとき 黒沢 隆×内藤 廣

●年譜：木造モダニズムの振幅

●文＝大川三雄、矢代真己、田所辰之助、濱崎良実、渡辺研司

●写真＝清水 襄

定価＝2000円／本体1905円



鹿島出版会
東京都港区赤坂6-5-13
電話：03-5561-2550
振替：00160-2-180883
Home Page Address：
http://www.kajima-publishing.co.jp/
index.htm
年間定期購読料
26,000円（特別定価号十消費税、送料込み）



SDバックナンバー常備店
東京
八重洲ブックセンター 03-8231-8203
三省堂本店（神田）03-3233-3314
書泉グランデ 03-3295-0011
紀伊国屋本店 03-3354-0131
大盛堂書店 03-3463-0511
大阪
旭屋書店本店 99-999-9999
柳々堂 06-443-0167
札幌／旭屋書店 011-241-3007
横浜／有隣堂本店 045-261-1231
京都／大龍堂書店 075-231-3036

9811 「白」と「透明」の詩：
モダンデザインの秀作135 3000円
白い陶磁器と透明ガラスで出来た日常生活の中の小モノたち135点を紹介する。カシミール・マレービッチ、ゲートルード・ヴェースガルト、柳宗理、他。

9812 SDレビュー1998 2000円
第17回SDレビュー誌上発表
小特集4題：「シャルロット・ベリアン」[「ハブニング」展]
「アルトの空間構成」[メタルシート・ストラクチャーによる造形秀平の近作]

9901 環境共生の現在 2700円
プロジェクトを紹介しながら近年の動向を俯瞰し、次世代のヴィジョンを示唆する。
エムシャーパーク、東京ガス（アースポート）、世田谷環境共生住宅、2005年国際博覧会構想案、他。

9902 ダッチ・モデル：
建築・都市・ランドスケープ 2000円
オランダの都市・社会のシステムを5つのキーワードによって探る。OMA、MVRDV、West8、クーン・ファン・フェルゼン、メカノ、ケース・クリスティアーンス、他。

9903 木の空間：
木素材による快適建築 2000円
次世代スタンダードを示唆する木の使われ方を紹介する。趙海光、インテンシオナリーズ、河西立雄、葛西潔、みかんぐみ、H DESIGN、他。

9904 ガウディの愛弟子ジュジョールの夢 2000円
ジュジョールの通した作品を、写真とオリジナル・ドローイングで紹介する。撮影＝鈴木久雄、文＝丹下敏明、他。[ドナルド・ジャッド：空間と認識のコンシステンシー]

9905 跳発するマテリアリティ：
素材の進化とデザインの可能性 2500円
国内外における素材と技術のデザイン事例を取り上げながら、そのデザインに隠された素材の応用の「手法」、「技術」を分析する。素材史年表、素材地図1999、他。

9906 小川晋一：
Transbody / Super traffic 2000円
小川晋一の13年間の仕事を、実作、計画案、展覧会への出品作品を通して紹介する。作品＝キュビストの家、ミニマリストの家、他。文＝鶴沢隆、岡河貢、小川晋一、他。

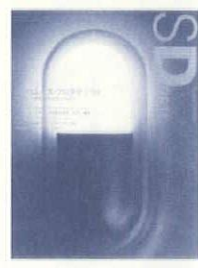
9907 学校建築：
個性を育む環境創出へ向けて 2500円
学校建築設計の手引きとして、今後の学校建築に求められる事項を解説し、実例を現地レポートを交えて紹介する。文＝上野淳、他。座談会＝堀昭代十佐藤学十船越徹十小嶋一浩十上野淳。

9908 階段：
Beyond Function 2000円
近年の国内の階段。21作品を、「起伏」、「移ろい」、「軽み」、「天空」といった4つのキーワードで緩やかに分節しながら、階段をめぐる詩集のような形で紹介する。
文＝渡辺武信、下村純一。

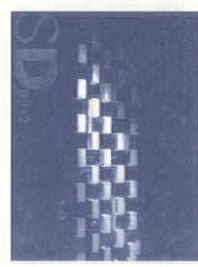
9809 ベルリン・トポグラフィ 2000円
今世紀最後の首都移転が展開されている、ハイポテンシャルな状況をドキュメントする。文＝内山佳代子、杉本俊多、山下昌彦、飯島洋一、花田和幸、他。
個性の彩る集住群：長野市今井ニュータウンの試み



9910
東京リノベーション
スペースの再生転用の事例を紹介するとともに、その手法やスペースの新しい可能性を探る。
企画編集協力＝粕谷矩中
写真＝村角創一
隅田川再生とリバーサイドスペース 写真＝加藤高六
2000円



9911
ジャパニーズ・プロダクツ'99
インディペンデントな活動を展開するデザイナーを中心に紹介し、日本におけるプロダクト・デザインの可能性を探る。
企画協力・文＝川上典子、青山玲、写真＝高山幸三
2300円



9912
SDレビュー1999
第18回SDレビュー1999入選展の結果を審査員のコメントと共に誌上発表する。
エリック・ブリュッグマンの建築 文＝ユハニ・パッラスマー、田中雅美、他。
ハブニング展1999/2000
2000円



0001
横 文彦 1993-1999
1999年から最新作までの作品を進行中のプロジェクトを含め、豊富な写真、スケッチ、図面で紹介する。
文＝横文彦、D. スチュワート、富永 謙
対談＝横文彦×門内輝行
4100円



0002
コミュニケーション・キッチン
建築家によるキッチンスペース、メーカーのキッチン機器を紹介しながら、国内で実現できるキッチンスペースの可能性を探る。
文＝黒田秀雄、下島資子、他。黒田秀雄×黒田秀雄×西澤×東利恵
2000円



0003
リカルド・ボフィール 1995-2000
クラシシズムとモダニズムの現代的融合の表現をめざして活動を展開するリカルド・ボフィールの近年の主要作品、プロジェクトを紹介する。
文＝リカルド・ボフィール、飯島洋一、櫻井義夫、志村直登
2000円



0004
歴史的都市を読む
近代都市への反省を踏まえ、改めて今、歴史的都市に注目し、都市の形成、空間構造の魅力についてフィールドワークの成果をレポートする。
対談＝長尾重武×陣内秀信
監修＝陣内秀信。
2000円



0005
ヒューマノイド・インターフェイス
メディア化されたインターフェイスは、センサー・情報処理能力・運動能力を備えて身体と関わる。このようなメディア化をともなったテクノロジーと身体の新たな関わり方を考察する。
編集協力＝小田切博、他。
2000円



0006
クライム・ダイサム・アーキテクツ
クライム・ダイサム・アーキテクツの、これまでのデザイン活動の全貌を紹介する。
文＝伊東豊雄、渡部千春、萩原修、西沢立衛、クライム・ダイサム・アーキテクツ。
2000円



0007
ツール・ド・ロマネスク
中世の光と空間をテーマに、フランス西部の巡礼路にそって、ロマネスク教会建築を紹介する。
企画協力＝櫻井義夫 写真＝堀内広治 文＝羽生修二、長塚安司、田窪恭二、山田健。
2000円



0008
本：20世紀ブックデザインの精鋭
北園克衛の「空気の箱」[VOU] 他、「VISIONAIRE」、「漢聲」、「tomato」、「fuel」、「フルクサス・アネックス」、「ウルムの遺産」、他。文＝蜂賀亨、渡部千春、方振寧、北橋朋也、他。インタビュー＝杉浦康平。
監修＝金澤一志
2300円



0009
木造モダニズム1930s-50s
近年のモダニズム再考。「木」という素材への回帰といった動きの、日本におけるパイオニアともいえる1930～50年代の「木造モダニズム」というカテゴリー。その全貌を紹介する。文＝大川三雄、黒沢隆、他。写真＝清水真
2000円



9906 Sinichi Ogawa: Transbody / Super traffic:

Introduces 13 years of Sinichi Ogawa's achievements through Cubist House and Minimalist House and other completed works, plans, and works submitted to exhibitions. Text: Takashi Uzawa, Mitsugu Okagawa, Sinichi Ogawa, and others.

¥2,000



9907 School Architecture:

Toward Environments That Foster Individuality

Offered as a guide for the architectural design of schools, this issue comments on topics to be addressed in school architecture from now on, combined with on-site reports of specific examples. Text: Jun Ueno et al.

¥2,500



9908 Stairs: Beyond Function

Introduces 21 recent Japanese stair designs in the manner of a poetic anthology, dividing the works loosely in four categories: "undulation", "transition", "lightness", and "open above". Text by Takenobu Watanabe and Junichi Shimomura.

¥2,000



9809 Berlin Topography

The century's last transfer of a capital city is taking place. This issue documents the high potential of this move. Text: Kayoko Uchiyama, Toshimasa Sugimoto, Masahiko Yamashita, Youichi Iijima, Kazuyuki Hanada, and others.

Distinctive Housing Complexes: The Imai New Town Experiment in Nagano ¥2,000



9910 Tokyo Renovation:

Introduces several cases of space renovation and reuse and explores the methods used and the new possibilities of space they offer. Editorial Cooperation: Hijun Kasuya. Photographs: Soichi Murazumi.

Reviving the Sumida and Riverside Space. Photograph: Karoku Kato ¥2,000



9911 Japanese Products 99:
Their Independent Situation

Introduces mainly designers engaged in independent activities, and explores the potential of product design in Japan. Editorial cooperation and text by Noriko Kawakami and Akira Aoyama. Photographs by Kozo Takayama ¥2,300



9912 SD Review 1999:

Introduces the results of the 18th Exhibition of Winning Architectural Models and Drawings, along with comments from the screening committee.

Erik Byggman's Architecture: Texts by Juhani Pallasmaa and others.

HAPPENING 1999/2000 ¥2,000



0001 Fumihiko Maki 1993-1999:

Introduces a generous selection of photographs, sketches, and drawings of Maki's most recent works from 1993. Texts by Maki, David B. Stewart and Yuzuru Tominaga. Discussion: Teruyuki Monnai and Fumihiko Maki.

¥4,100



0002 Kitchen for Communication:

Introduces kitchen spaces designed by architects and kitchen furniture by manufacturers and explores the potential of kitchen spaces in Japan. Texts by Hideo Kuroda, Motoko Shimojima, etc. Discussion: Hideo Kuroda, Kiyoshi Kasai, and Rie Azuma.

¥2,000



0003 Ricardo Bofill 1995-2000:

Introduces leading works and projects of Ricardo Bofill, whose recent activity aims at a contemporary union of classicism and modernism. Texts by Ricardo Bofill, Yohichi Iijima, Yoshio Sakurai, and Naoki Shimura.

¥2,000



0004 Reading the Historical City:

Introduces the results of fieldwork-based analysis of historic cities, reporting on how the cities emerged as well as how their spatial structure gives them special appeal, from a critical perspective on the modern city. Dialogue: Shigetake Nagao and Hidenobu Jinnai. Editorial supervision: Hidenobu Jinnai. ¥2,000



0005 The Humanoid Interface:

The media of the man-machine interface now utilize sensors, information processing capabilities, and motor capabilities. This issue considers the technologies of these media and their new relationship to the human body. Editorial cooperation: Hiroshi Odagiri and others.

¥2,000



0006 Klein Dytham architecture:

Presents an overall view of the design activities to date of Klein Dytham architecture. Texts by Toyo Ito, Chiharu Watabe, Shu Hagiwara, Ryue Nishizawa, and Klein Dytham Architecture.

¥2,000



0007 Pilgrimage to Romanesque Architecture in France:

Following pilgrim routes in Western France, this issue introduces the themes of light and space in the Romanesque religious architecture of the Middle Ages. Cooperation: Yoshio Sakurai. Photographs: Kouji Horiuchi.

¥2,000



0008 Selected Bookworks in the 20th Century:

Katsue Kitasono: Kuki no Hako (Poetry Book) and VOU. VISIONAIRE and Hansheng. "tomato", "fuel", and "Fluxus Annex".

Texts by Toru Hachiga, Chiharu Watabe, Fang Zhenning, Tomoya Kitahashi. Interview with Kohei Sugiura.

Cooperation: Hitoshi Kanazawa. ¥2,300



0009 Modernism in Wooden Construction
1930s to 1950s:

Provides an overview of "modernism in wood construction in the 1930s-1950s," a pioneer movement in Japan now receiving renewed attention as part of the reappraisal of modernism and return to wood materials.

Texts by Mitsuo Ohkawa, and others. ¥2,000



アルヴァ・アアルト

巨匠A.アアルトの全主要作品を掲載した総特集。A.アアルトのデザイン・プロジェクト：武蔵野、アアルトの年表1898-1976、アアルト建築所在一覧。
3090円



菊竹清訓

メタボリスト菊竹清訓の初期から1980年までの作品集。第三世代の建築/とりかえ論1950-1960年/方法論の時代1960年-1970年/私の中の菊竹清訓の作品：内井昭蔵、他/作品データ・主要作品分布図。年表、他。
3090円



白井晟一

孤高の建築家・白井晟一の珠玉の作品集。懐館館、ノアビル、聖アキラ館、昨宵軒、辰別山荘、虚白庵、他。論文＝磯崎新、針生一郎、浅野敏一郎、白井登蔵。座談＝大江宏＋藤井正一郎＋宮内嘉久。作品文献年表1935-1975年。
3605円



象設計集団

独自の造形理念により常に新鮮な作品を生み出し続ける象設計集団の初めての作品集。そのユニークな建築群の生々しい姿を捉える。安佐町農協市民センター、名護市庁舎、宮代町立並原小学校、道修館、他。論文＝熊保聖、宇佐美圭司、他。
4000円



横文彦②

横文彦の80年代の活動を知る第2作品集。そこには増々精緻さと多彩さを加えた作品群が見て取れる。スパイラル、藤沢市秋葉台文化体育館、前沢ガーデンハウス、慶應義塾日吉図書館、電通大阪支社、京都国立近代美術館、他全21作品。
4326円



伊東豊雄

風のように、光のように変化する建築。独自の感性で育かれた作品群、その初期から1986年までの軌跡。中野本町の家、シルバー・ハット、レストラン・ノマド、馬込沢の家、風の塔、東京遊牧少女の家具、ホンダクリオショールーム他。
3914円



高松 伸

88年度建築学会賞受賞作のキリンプラザ大阪を中心とし、1988年までの全主要作品を一挙掲載。精緻なる細部と大胆な素材の扱い、独特な造形により、延び込まれた独自の作品を創り続ける高松伸の世界を紹介する。編陣I、III、他。
3800円



早川邦彦

プロジェクト、商業施設、都市型複合建築、集合住宅、住宅、コンペ案まで、初期の作品から1988年までの全主要作品を一挙紹介した早川邦彦の初作品集。SKY VILLAGE、ラビリンス、成城交差点の家、アトリウム、他。
4300円



ドイツ表現主義の建築

1920年代のドイツを席捲した表現主義の風。そこにはレンガとガラスを素材とした自由奔放な造形と多様な表情をもった建築が生まれた。近代建築誕生の母体となり、現代にも影響を与える表現主義建築の全容を紹介。B.タウト、他。
3300円



続・木造建築の現在

海外81作品、国内13作品の木造建築を紹介。豊かで暖かみのある空間を生み、またあらゆる空間構造に対応できる木構造を再評価する。インタビュー：坪井善勝、杉山英男、内田祥哉。対談：今川憲英×安村基。
3708円



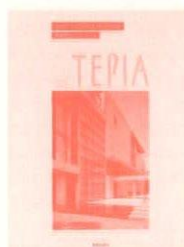
ブルーノ・タウト

1933-36年滞日期間の活動を中心に、没後40年を記念した特集。作品＝熱海の家、ボスボラス海峡に臨む別荘、ヴァイネルト通りの集合住宅、グレル通りの集合住宅、他。タウトの工芸品と著書、他。
2575円



ボザール：その栄光と歴史

ボザールの全貌を紹介。アカデミーの功罪：高階秀爾、ボザール―その歴史と思想：三宅理一編、ボザールの成立とネオ・グレコ形成、折衷主義の世界、近代の憂鬱、戦後のボザール、バリ・オペラ座の図面と写真、他。
2575円



横事務所のディテール/TEPIA

機械産業情報会館 (TEPIA) というハイテクの殿堂にふさわしいデザインを支える、精密かつダイナミックなディテールの仕組みを写真とドローイングの構成で解剖する。横文彦のディテールとしては初の作品集。
6800円



磯崎新③ 1985-1991 part 1

キーワードを軸に自らの作品をいくつかの流れに分けて、つくばセンタービル以来、1985-1991年の作品群を紹介。水戸芸術館、サンジョルディパレス、お茶の水スクエア、他。
4800円



磯崎新④ 1985-1991 part 2

part 1同様、自らの「目録」と共に作品を紹介してゆく。チーム・ディズニービルディング、北九州国際会議場、シュトゥットガルト現代美術館、バラディウム、【蝶々夫人】舞台美術、他。
4500円



カルロ・スカルパ図面集

ブリオン家墓地を始めとする主要作品のドローイング約150点を収蔵。ブリオン・ヴェガ墓地、フェルトレの道路博物館、ヴェネツィア大学文学・哲学部校舎増築、他。文：豊田博之、カルロ・スカルパ、他。
3500円



安藤忠雄⑦ アンビト・プロジェクト

70年代からの見過せないアンビト作品29点を紹介。JRA京都駅改築設計競技案、岡本ハウジング、I計画、伊豆プロジェクト、水の劇場、中之島プロジェクトII、Iギャラリー、大淀の茶室、他。
3800円



都市デザイン | 横浜

横浜市の20年にわたる都市デザイン活動の足跡を辿り、これからのアーバンデザインの課題と展望を探る。座談会：都市づくりの新局面へ向けて、横文彦×斎藤敬×小澤恵一、他。
5000円

Space Design published its first issue in 1965 as a monthly journal for a general readership introducing noteworthy achievements and leading works in the fields of architecture, urban problems, design, and the fine arts. The journal has established a solid reputation over the years in the fields of architecture and design. It enjoys the support of a broad readership in an age when up-to-date information on contemporary design, urban planning, and architecture is in heavy demand. **SD** endeavors to make its features and articles ever richer in content, focusing attention on the methodological, and aesthetic themes of modern architecture, the city, design, and the arts. The text of **SD** is mainly in Japanese, but in certain cases English translations or summaries are provided for feature articles.

Send your order for subscriptions to **Space Design** and/or for back issues or hardcover editions by:

Filling in the order card below and faxing it to:
Space Design: 81-3-5561-2561

Or mail the card to:

Subscriptions Department
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka, Minato-ku,
Tokyo 107-8345, Japan
tel: 81-3-5561-2561

An invoice will be sent immediately. Upon receipt of the invoice, you may pay by check or international money order or bank check.

Order Card

Name (in block letters please):

Address:

Fax number (if available):

Occupation:

Please check one of the options below:

- ☐ Please enter my SUBSCRIPTION to
Space Design,
starting in

	sea mail	air mail
12 issues	¥30,000	¥55,000
24 issues	¥50,000	¥80,000

Price includes postage and bank charges.

- ☐ Please process my order for the following BACK ISSUES and/or HARDCOVER EDITIONS of **SD**:

The invoice includes:

1. Price of the publication
2. Bank charges(¥1,500 per order)
3. Postage(determined upon receipt of order)

Alvar Aalto

A special comprehensive collection of celebrated architect Alvar Aalto's major works. Aalto's Design Vocabulary, by Akira Mutoh / Chronological Review of A. Aalto's Life : 1898-1976 / Worldwide Distribution of Alvar Aalto's Works ¥3,090

Tadao Ando 2

His 21 works since 1981 including Church with the Light are classified into five categories and introduced at once here. The 10-meter long drawing of Nakanoshima Project lets the readers feel his vigorous approach to architecture. ¥4,800

Arata Isozaki 2

Introduces whole of Isozaki's major works, 1976-1984, especially his shocking work : Tsukuba Center Building. Ministry of Foreign Affairs of Saudi Arabia, MOCA, Blick of Flats, Berlin, Okanoyama Graphic Art Museum, ¥4,944

Kiyonori Kikutake

Collection of Metabolist Kiyonori Kikutake's works from the early years to 1980 : Architecture of The Third Generation, On the Notion of Replaceability, Phase of Methodological Search, Data, Location of Works ¥3,090

Kisho Kurokawa 2

13 major works for these 10 years, including Hiroshima City Museum of Contemporary Art which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan, and 2 other Museums are introduced. ¥4,300

Seiichi Shirai

Introduces a collection of the gem-like works by Seiichi Shirai, an architect of proud loneliness. Kaisetsu-kan, Noa Building, Sei-Akira-kan, Sasetsuken, Kohakuan, etc. Essays by Arata Isozaki, Ichiro Haryuu, Ikuma Shirai ¥ 3,605

Atelier Zo

Presents the first collection of the works by Atelier Zo who has continuously brought forth fresh works by their original formative ideas. Nago City Hall, Shinsyukan Community Center, etc. Essay by Hiroshi Aramata ¥4,000

Kenzo Tange 3

29 projects are introduced at a stroke so that his footwork in 1980's can be seen. Also, the noticeable new Tokyo City Hall is introduced through many drawings and photographs of new model. Full English text. ¥4,100

Fumihiko Maki 2

Presents the second collection of Maki's works which show his activities in 1980s. Spiral, Keio University Hiyoshi Library, Fujisawa Municipal Gymnasium, Hillside Plaza, Tokyo Metropolitan Gymnasium, etc. ¥4,326

Toyo Ito

9 projects of his semi-permeable architectures such as restaurant NOMAD and Silver Hut and 11 projects of Transformations by Light are introduced. The Shinorama Space by Kishin Shinoyama shows White U. ¥3,900

Shin Takamatsu

All of his major works including Kirin Plaza Osaka which won 1988 The Prize of the Architectural Institute of Japan are introduced. His working field in which he has continuously been creating his sharp works can be observed. ¥3,800

Kunihiro Hayakawa

His original pastel-colored works such as ATRIUM and STEPS give the architectures allegro rhythm and feast one's eyes. His works and projects for 10 years since 1978 show his world. ¥4,300

Kazuhiro Ishii

His Sukiya-village which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan and 51 other works introduce his method of composition. ¥4,300

The Expressionist Architecture of Germany

Meaning of the Expressionism which is the mother of the modern architectures and has influence on the contemporary ones is introduced by 12 architects' works. ¥3,300

Wooden Architecture Today 1989

Introduces works of Europe, mainly German, Swiss, and French, as well as of the United States, Australia, and Japan. Works in Japan include those by Shoen Yoh, TAKE-9, Hideaki Katsura and others. ¥3,708

Bruno Taut

Introduces his activities mostly while staying in Japan 1933-36. Features in memory of Taut in 40th year of his death. Architect's Own House Istanbul, Housing on Erich-Weinert Strasse, etc. Taut's Handicraft and Books ¥2,575

Ecole des Beaux-Arts and its Glorious Tradition

Updated: Essays: History and Credo, Thought Backbone/ On the Grand Prix : List of Recipients and their Presentations/ Genealogy of its Ateliers/ Collections : Notre-Dame at Lorette, Opera Theater, Paris, etc. ¥2,575

Details by Maki & Associates

Shows detail at Forum TEPIA, a showcase of high technology using a variety of new materials. The work features studies in surface, point, and line and develops numerous types of detail. ¥6,800

Kim, Swoo Geun

Introduces his 30 projects, mainly in Korea. Masan Cathedral, Korean Overseas Development Corporation Building, Art center of Korean Cultural and Arts Foundation, Seoul Sports Complex, Nam Dae Mun Market Redevelopment Plan, etc. ¥3,090

Architects Own Houses of the World

Introduces famous architects' own houses of the World. Architects: Richard Foster, Frank Gehry, Don Hisaka, Wilhelm Holzbauer, Michael Hopkins, Barton Myers, Christopher Owen, Arthur Erickson, Ulrick Franzen, Paul Gray, etc. ¥4,944

0010

都市・建築・芸術の総合誌

スペースデザイン 第433号
2009年10月号

SD

Space Design

編集長：相川幸二

副編集長：

高木伸哉 松口 龍

編集スタッフ：

川崎 勝 石田貴子

伏見佳子

制作協力：久世 健

株式会社シンクス

発行人：井田隆章

発行所：鹿島出版会

107-8345

東京都港区赤坂6丁目5番13号

電話：

03-5561-2551 営業

03-5561-2555 編集

FAX：

03-5561-2561 営業

03-5561-2565 編集

TELEX：

02422467 KAJIMA J

振替00160-2-180883番

URL：http://www.

kajima-publishing.co.jp

005

特集

改造建築：公共建築の増改築の手法

監修：宮脇 勝

006

改造建築・都市改造

文＝宮脇 勝

013

Part1. 都市の記憶

014

ライヒスタック／フォスター・アンド・パートナーズ

019

ビベラッハ市立図書館／ボリス・ボドレック

024

オペラ・ハウス／ジャン・ヌーヴェル

028

ガスタンクA,B,C,D棟／

ジャン・ヌーヴェル＋コープ・ヒンメルブラウ＋

マンフレッド・ヴェードン＋

ヴィルヘルム・ホルツパワー

034

アンダルシア文化遺産研究所／

バスケ・コンスエグラ

038

フランクフルト21／フォン・ゲルカン&マルク

041

フェルミニのユニテ・ダビタシオン

再生プロジェクト／アンリ・シリアーニ

085

Part3. 新しい領域へ

086

メゾン・コニャック・ジェイ／ジャン・ヌーヴェル

089

バンダーベーン・デパート増築／

ヘルマン・ヘルツベルハー

093

国立現代アートスタジオ「ル・フレノア」／

バーナード・チュミ

096

国際決済銀行指名設計競技案／伊東豊雄

098

サン・シーロ・サッカースタジアム／

ジャン・カルロ・ラガッツィ

100

ミュンヘン市立図書館／クラウド・ブロック

101

国立国際子ども図書館／

建設省関東地方建設局営繕部十

安藤忠雄建築研究所十建設設計

102

マンハッタンのパントハウス／安藤忠雄

インタビュー

023

ボリス・ボドレック

032

ヴォルフ・デン・ブリックス

033

マンフレッド・ヴェードン

037

バスケ・コンスエグラ

040

マインハルト・フォン・ゲルカン

045

アンリ・シリアーニ

046

フランチェスコ・ダル・コ

051

スペンサー・デ・グレイ

(フォスター・アンド・パートナーズ)

058

安藤忠雄

068

ポール・シュメトフ

072

香山壽夫

077

アルベルト・ピアブラーナ

083

イーボス&ヴィタール

092

ヘルマン・ヘルツベルハー

097

伊東豊雄

106

ニュース：チューリッヒ・アフォルターン国際コンペ1等案

ARX New York

109

展覧会レポート：黒川紀章回顧展

飯島洋一

110

展覧会レポート：

現在の都市改造を裏付けるふたつの展覧会@ベルリン

レンゾ・ピアノ展、都市の建築の都市展

内山佳代子

112

書評

五十嵐太郎

113

新刊紹介

114

お知らせ

印刷・製本：凸版印刷株式会社

174-0056 東京都板橋区志村1丁目11番1号

電話：03-3968-5111 案内

取次店：トーハン・日販・大阪屋・大洋社・栗田出版販売・

誠光堂・鈴木書店・西村書店・中央社

定価：2,000円 [本体 1,905円]

年間直接購読料：26,000円

特別定価号+送料込み

表紙：大英博物館 (フォスター・アンド・パートナーズ)

表紙写真：ニジェール・ヤング

デザイン：山口デザイン事務所／山口信博十賀藤亜季子

0010Monthly Journal of
Art and ArchitectureNo. 433
October 2000**SD**

Space Design

Chief Editor: Koji Aikawa
Editor: Shinya Takagi, Ryu Matsuguchi
Associate Editors: Masaru Kawashima,
Takako Ishida, Yoshiko Fushimi
Production Cooperation: Takeshi Kuze, Digital Studio Thinks
Publisher: Takaaki Ida**005**

Special Feature

The Architecture of Transformation

Methods of Conversion and Additions

Guest Editor: Masaru Miyawaki

006The Architecture of Transformation / The Transformation of the City
text : Masaru Miyawaki**013**

Part1. Memories of the City

014

Reichstag / Norman Foster and Partners

019

Biberach Library / Boris Podrecca

024

Opera House / Jean Nouvel

028

Gasmeter A,B,C,D /

Jean Nouvel+Coop Himmelb(l)au+

Manfred Wehdom+Wilhelm Holzbauer

034

Andalusian Heritage Institute "Monastery of Seville"

Guillermo Vazquez Consuegra

038

Frankfurt 21 / von Gerkan, Mark and Partner

041

Firminy / Henri Ciriani

013

Part2. Enhancement of the Original

048

The British Court / Norman Foster and Partners

052

Tate Modern / Herzog & de Meuron

054

FABRICA

(Benetton Communication Research Center) /

Tadao Ando

060

Kuppersmuhl Museum "Grothe Collection" /

Herzog & de Meuron

064

Evolution Museum /

Paul Chemetov & Borja Huidobro

070

Building no.1,

Faculty of Engineering, University of Tokyo /

Hisao Kohyama

074

Contemporary Cultural Center in Barcelona /

Albert Viaplana & Helio Pinon

078

Fine Arts Museum of Lille /

Jean-Mark Ibos, Myrto Vitart

085

Part3. To the New Field of Transformation

086

Maison Cognac-jay / Jean Nouvel

089

Extension Vanderveen Department Store /

Herman Hertzberger

093

National Studio for Contemporary Arts

"Le Fresnoy" / Bernard Tschumi

096

BIS Extension Project, Basel / Toyo Ito

098

San Siro Stadium / Giancarlo Ragazzi

100

Library Munchenbrug / Klaus Block

101

Extension of International Children's Library /

Ministry of Construction + Tadao Ando +

Nikken Sekkei

102

The Penthouse of Manhattan / Tadao Ando

Interview

023

Boris Podrecca

032

Wolf D. Prix

033

Manfred Wehdom

037

Guillermo Vazquez Consuegra

040

Meinhard von Gerkan

045

Henri Ciriani

046

Francesco Dal Co

051

Spencer de Grey(Norman Foster and Partners)

058

Tadao Ando

068

Paul Chemetov

072

Hisao Kohyama

077

Albert Viaplana

083

Jean-Mark Ibos, Myrto Vitart

092

Herman Hertzberger

097

Toyo Ito

106

News: Zurich-Affoltern CECE Competition

ARX New York

109

Exhibition Report: Kisho Kurokawa Retrospective

Yoichi Iijima

110

News:Two Exhibitions Behind Actual Urban Renewal Projects:

The Berlin City and Berlin Architecture Exhibits

Kayoko Uchiyama

112

Books Review

Taro Igarashi

113

Books Information

114

Announcement

Published by

Kajima Institute Publishing Co., Ltd.

6-5-13 Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-8345, Japan

TEL: +81 3 5561 2551 [Management],

+81 3 5561 2555 [Editing]

FAX: +81 3 5561 2561 [Management],

+81 3 5561 2565 [Editing]

TELEX: 02422467 KAJIMA J

URL: <http://www.kajima.co.jp/group/publish/index.htm>

Printed in Japan

This Copy: ¥ 2,000

¥ 30,000 a year

¥ 50,000 two years

Order Form: Page 2

Cover: <The British Court> Norman Foster and Partners

Photo: Nigel Young

Design: Nobuhiro Yamaguchi / Yamaguchi Design Office

強いものである。過去の技術と突き合わせると弱い方が壊れてしまう恐れもある。しかし本当に強く、コントロールも可能ならば、弱い躯体部分をそれとなく支えることができるはずである。どこに限界があるのかを見極めるべきで、技術的な開発を続けるべきであろう。海外では徐々にそうした技術が見え始めているのである。

もうひとつの救いは、若い世代の受けとめ方にもある。本特集のような事例をいくつかの大学で学生に見せてレポートを提出させると、強い興味を示していることがわかった。当然、実現するための具体的な問題は山ほど噴出する。しかし、だからこそ今これがおもしろいといいたい。建築の文化のために実に重要な点が含まれているからである。

また、今回調べてわかったことは、とにかく改造、増改築の事例数が多いということだった。そこで、パブリック性の高い建築物の都市での役割に着目して、事例選択のポイントを次のように絞っている。

- 1) 社会性の高い建築の改造であるもの
- 2) 各国の文化や制度を反映しているもの
- 3) 既存の建築を積極的に尊重した改造であるもの
- 4) 改造後もパブリック性の高い利用をしているもの

したがって、集合住宅や個建て住宅の増改築は載せていない。まずは建築と都市の問題に正面から入ることにする。

改造の歴史をふりかえる

そもそも改造は古くから行われている。社会へ貢献の著しい建築物の改造に関する歴史的な事実のうち、いくつかわかりやすい事例を挙げてみよう。

古代～

よく知られているローマのパンテオンは、元はアグリッパによる神殿デザインであ

ったが、後に入口の列柱部分を増築した後、用途を神殿から教会に転用して現在に至っている（図1）。多神の神殿から一神の教会に改造する際、内部壁面や床の変更を行っている。これだけ有名な建築も改造されて今に至っていることは注目に値する。一方、古代ローマのコロッセオを教会に転用しようとする計画（図2）にも驚かされる。また、ローマ、フィレンツェ、ルッカなどに見られるような古代円形劇場の転用やグリッド街区の残存も、中世の都市住居組織として街に同化していった。

ギリシャ・アテネの丘の上のアクロポリスですら、今ではすっかり修復を進めているが、トルコ占領時代ではなんと神殿の中にモスクが建設されていた時期もある。さらに、スペイン地方も、幾度も他の民族と宗教が入るたびに公共建築の様式が改造された歴史をもっている。コルドバのメスキータ（図3）は内部にイスラム教とキリスト教の建築構造が混在している。また、グラナダの宮殿の増築やアンダルシア地方の鐘塔の増築に見られるようにひとつの塔に様式が積み重なるなど、新旧のぶつかり合いにはまったく驚かされる。

ルネサンス～バロック建築

サン・ピエトロ寺院のクーボラ（1547-64）の設計（図4）はミケランジェロであるが、基盤となったブラマンテの平面案（1506）を改造している。さらに後にファサード増築（16世紀末）を担当したジャコモ、そして巨大な楕円の列柱の広場を増築（1624-68、図5）したベルニーニへと設計は受け継がれ、その前面道路にあった建物がテベレ川沿いまで撤去され、現在に至るプロセスそのものは、建築の改造と街区の改造の連続に他ならない。常に前に行った設計行為を尊重して、次の設計者が引き継ぎ完成させる介入方法である。同様に、屋外の広場を整える増築の例として、カンピドリオの丘の広場とファサード（16世紀）の

付加も有名であろう。既存の環境を読んだ上で、左右対称なファサードと広場の楕円によるファサードの斜めの向きの整合など、ゼロからの設計では得られない、ミケランジェロの見事な技である。

マニエリスムの建築家ボッロミーニのラ・サビエンツァ聖堂（1642-60）は、ジャコモのバラツォへの増築であるし、フィリピーニの礼拝堂（1637-50）も、ルネサンス様式の既存の建物に連続して、曲線的な建築を介在させたものである。

パリ郊外にあるベルサイユ宮殿（1624-1756）はサン・ピエトロ同様、建物を幾度となく増築し、ファサードの奥行きをシンメトリックに増殖させ、周辺街区構成にまで影響を与えたものである（図6）。
バロック～現代都市

パリ中心のルーブル美術館の前庭にある小さな凱旋門の軸線上に、シャンゼリゼの先の大きな凱旋門がつくられている。そして、その先にさらに大きな新凱旋門（1989）が建設されたことは有名である。こうした軸の延長もまた、都市を拡大改造していく上でシンボリックな手法であろう。また、パリやヨーロッパの諸都市の形成史を地図で見ると、徐々に増築を行ってきた建築と同じことが都市スケールでも起こっている。

都市だけでなく、ランドスケープも増改築を繰り返している。パリのブルゴーニュの森やパンセンヌの森（図7）は、バロックの直線軸を使ったデザインでつくられた後、都心側への拡張とともに大きな曲線を使ったデザインに改造されて今に至っている。おもしろいのは、既存の軸構造や道路の交差点位置をそのままに、変形（トランスフォーム）している点である。ゼロからのデザインではなく、これもまた改造の特性が現れている。

近代技術の導入

もっともラディカルな改造のアプローチが戦後のイタリアから誕生した。カルロ・スカルバ（1906-1978）のヴェネツ



図3. コルドバのメスキータ内部。イスラム教とキリスト教の建築構造が混在している

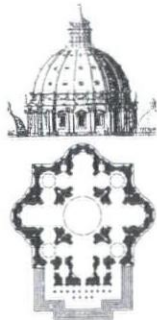


図4. ミケランジェロのサンピエトロ寺院のクーボラ（1547-64）もブラマンテによるものを改造している（出典：『建築ガイド1.ローマ』長尾重武＝訳、丸善、1991）（原書：Architect's Guide to Rome, Renzo Salvadori, Butterworth-Heinemann Ltd. 1990）

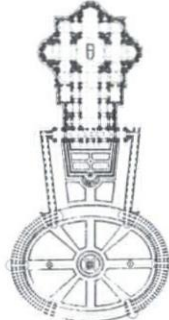


図5. ジャコモのファサード部分増築（16世紀末）ベルニーニの楕円の列柱の広場を増築（1624-68）（出典：図4に同じ）

イタリア地方の作品群は、近代の改造史の原点といえるであろう。

特に、カステル・ベッキオの改造(1956-64)は重要である。1920年代に博物館転用をほどこし直し、14世紀からナポレオン時代の様式をもつ建物を、まったく新しいものへと転換することを強調した。古いレンガや漆喰の壁に対し、コンクリートと鉄、ブロンズ、木材、プラスターの特注品を用い、光の導入方法を計算している。スカルパは、壁面端部を切り取り、彼のデザインを凝結し、騎馬像を持ちあげ(図8)、建築の歴史をドラマティックに演出している。歴史と今を同等に扱わない限り、こうしたデザインは出てこない。歴史を今の骨董品にするのではなく、今も歴史の一部という姿勢が感じられる。さらに、中央に入口があった既存の建物の動線を変更し、右側に入口を変えてみたり(図9、10)、内側からガラスの窓を付加する手法(図11)など、改造手法そのものがオリジナルに溢れている。

こうした姿勢は、やはりイタリアのBBPR、ガエ・アウレンティ、V.グレゴッティらの美術館改造技術に引き継がれている。特にアウレンティの代表作オルセー美術館の転用(1986)とバルセロナのカタロニア国立美術館(1995)では、新旧のバランス、構造補強と照明設備の一体化などがおもしろい。また、一般的な歴史地区の中で複数の建築をモダニズムに改造していったジャンカルロ・デ・カルロのウルビーノ市での仕事(1960~70年代)も知恵に富んでいる。

イタリアにおける、60年代後半から70年代に展開した歴史地区の保存運動とその制度化のプロセスは、都市計画を大きく変化させるものであった。現在のうちに、都心のゾーニングがほとんどの都市で歴史地区指定され、建物の外観や構造を保存しながら、改装するという仕組みができたのは、このときからである。たった30年前の出来事である。

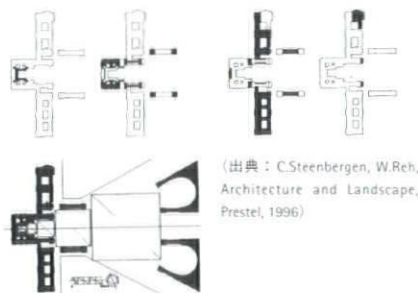


図6. ベルサイユ宮殿の増築プロセス。左上より: 1624年、1661-71年、1678-1710年、1756年。前庭のスケール展開が増築とともに街区に広がっていく様子わかる

SD0010

一方、アメリカでは70年代からの再利用ブームが商業ないし観光化とともに実践が始まり、マーケット利用による活性化など日本にも刺激を与えた。しかし、ニューヨークのペンシルベニア駅を取り壊すか、上方への増築という案には市民の反対が起こった。このときの論争で、都心部の適切な容積利用(経済的公共性)と都市の歴史(文化的公共性)との2重の公共性の矛盾が明らかになったのである。安易な高層化による増改築を選択しなかったアメリカの事件であった。

このころより大都市におけるランドマークの保全も高まり、歴史的建造物の保全に税制インセンティブを与えたり、TDR(Transferable Development Right)のような都心の歴史的建造物のために使えない上空の容積を地区内の別のビルに移転することができるという、経済効果の矛盾に取り組むアイデアがアメリカから生まれたのである。

現代の改造技術

近年、改造は活発化しており、その技術も進化している。旧東ドイツの交通インフラに高速鉄道を引き込み、プラットフォームの機能を上げながら改造統合してきた首都ベルリンの建設、パリのルーブル美術館改造に代表されるグランプロジェクト、ロンドンのテムズ川沿いのミレニアムプロジェクト、ユーロ圏をさらに結びつける空港や高速鉄道網の各国のユーロプロジェクトなど、21世紀に向けた都市規模の改造が立ち上がってきている。どの建築物の設計も都市プロジェクトの性格が強く、かつての第二次産業からの転換を図るための再開発と再利用である。

一世代前の70年代の改造と最近の改造との違いのひとつは、かつては保存vs開発、あるいはクラシックvsモダニズムの二局対立運動であったのに対し、現在はそれとは距離をおき、もっと問題をミックスしたまま解こうとするハイブリッドなものだ。具体的には、素材、設計方法の変化も影響している。特徴的な現代的

手法もは、次の5点を挙げられる。

- 1) 周辺のリズム、プロポーション、コンテクストの効果的な増幅
- 2) 透明なガラスという存在ヴォリュームのない素材を用い、あらゆる様式とのデザイン融合
- 3) エコ建築のような超ハイテクと、既存の手工芸的ローテクとの融合
- 4) 過去の構造スパンモジュールと、現在のコンクリート・ラーメン、未来のさらにスパンの飛んだビームといった工業技術の発展に伴う歴史的混構造(歴史的ハイブリッドとでもいおうか)
- 5) モダニズム建築の増築・改造・保存問題、あるいはスケルトン・インフィル、リサイクル建築

以上さまざまな時代の改造事例で共通するのは、建築は時代を超えて改造しながら、都市の記憶として共存していけるという事実である。常に都市社会が求めてきた歴史は、破壊や急速な発展ではなく、実にゆっくりとした成長であるということを見逃してはならないのだ。

国による意識の違い

改造の姿勢は、国によって異なっている。

19世紀。イギリスではJ.ラスキンやW.モリスによって、建築や工芸が社会で必要とされるという考え方が根付いていった。特に中世の職人細工や社会生活の幸福に基づく誠実さを理想としていた。そのため単なる過去のスタイルのイミテーションは、先達の建設行為に対して無礼にあたるとしている。

一方、同時期のフランスのヴィオレ・ル・デュクは、ゴシック構造の合理性を再評価し、復元実施のプロセスの中で考察した。そのため、構造系統による分類とその継承発展を願い、徹底した理論に基づく自立した「建築」を目指していた。彼も様式再生とは一線を画し、当時



図7. パリのパンセンヌの森。左: 1700年代前半のバロック的直線デザイン。(出典: G. Cerami, Il giardino e la città, 1996) 右: 1800年代後半のデザイン。既存の軸構造を用いながら曲線的に変形改造している



図8. カステル・ベッキオ。既存の壁を切り取り外にし騎馬像を持ちあげた。この空間につき込んだスカルパのデザイン密度は極めて高い

の最新技術である鋳鉄を構造物材に置換することを許容している。こうした発想は、フランス独自の合理性の追求に同調する。フランスに改造プロジェクトが多いのは、見かけだけによらない本質的な道筋にのっとることにより、建築家の歴史への介入に対する自信の表れなのかもしれない。

これに対してイタリアでは、理屈ぬきに歴史的建造物の量が多かった。保存せずに放置しても残ってきた。完全保存に対する気持ちの方が強くなっていったのは、近代化の強い圧力に直面した20世紀になってからであろう。イタリアの場合、既存のオリジナル性をもっとも重要視し、輪郭（フォルム）としての建築を守ろうとし、改造をその枠の中で行おうとする。近現代における自らの力を過信しない配慮が修復学に表れており、改造よりも保存の例が多い。また、都市と建築をつなぎとめる建築類型学（テポロジア）を開発したことで、様式分類ではなく、スケールや空間の質による分類を可能とした。また、イタリアには建築計画学がない。以前、服部岑生（千葉大学）と話しをしていて教えて頂いたのだが、テポロジアはあっても、〇〇建築といった用途に限った計画学がイタリアに存在していない。こうした事実を知ると、建築計画学をどこでも教えている日本が不思議に思えてきた。イタリアの類型学は、空間の大きさや質を分類するもので用途を優先していない。彼らにとってむしろ重要なのは、都市型か郊外型かということであり、小中学校ですら都心であれば都市型の箱を利用しているに過ぎないとみなされる。日本のような学校建築やワークスペースの議論とはちょっと異なるのだ。

それであるほど、用途が規定されていないからこそ、イタリアは転用が盛んな国なのかと改めてわかった気がした。ただ、あまりこれを強くいうと、改造建築のためには、建築計画がいらないように

聞こえるかもしれないが、決してそういう意図はない。しかし、都市計画サイドから建築を見る場合、特に都心部の建築については、専用用途で設計されるよりも、何にでも使えるようにしてあった方が都合が良いのは確かだ。さらに、空間の大きさ、タイプ、質に応じて空間類型することも建築計画として重要ではないか。イタリアのように都市と建築が、うまく連動することができる方が合理的ではないか。建築計画と改造建築の問題は表裏の関係にあるので、さらなる議論が必要だと思われる。

介入手法の分類

「改造」にはヴォリュームから見れば、「容積を変えないもの」、「増築するもの」、逆に「削除するもの」の3つしかない。これに移転改造の「移植」や躯体再利用の「スケルトン・インフィル」を加えた5つの手法について解説する。

容積を変えないもの

たとえばトリノのリンゴット工場再開発計画（レンゾ・ピアノ、1997）やミュンヘンのアルテ・ピナコテーク（ハンス・ドールガスト）、〈ビベラッハ図書館〉（ボリス・ボドレツカ、p.19参照）がある。

イタリアのトリノにおいて、アメリカの技術を駆使したリンゴット工場（1917-23）は、1階で集められた製造部品から、垂直方向に生産ラインをとり、完成した車を屋上のトラックを使ってテストをしたものだ。両サイドのスロープは1923、27年に増築したものだが、スラブが美しい。老朽化に伴う閉鎖後、1983～84年のコンペによって、1988年に建築計画がスタートした。ピアノのアプローチは、コンクリートのフレーム構造を尊重することと、唐突なことはしないというものだった。主に1、2階部分をオープンスペースにするために開口部を開き、中庭を再デザインしている。窓フレーム

システムはすべて新しいものだが、かつての雰囲気を持している。唯一未来的なのは、屋上のガラスドームの会議室とヘリポートだけと控えめである。

一方、ドイツのミュンヘンにあるアルテ・ピナコテーク（19世紀）は、フォン・クレンツェ設計のネオクラシックの美術館である。戦時中に空爆で中央ファサードが破壊された（図12）ことから、戦後P.バーレンスの弟子ドールガストが修復（1947-73）にあたった。1946年の最初の案は、歴史性を排除し、壊れた輪郭をシンプルに取り戻す案だったが、途中過程の整備（1952-55）は、中央から左に入ると階段があり、アプローチが確保され、7本の細いスチールの柱とアルミの屋根がかけられた（図13）。1955年には自らその修復を正しくなかったとし、ちょうど傷口が治っていくように修復し直している。装飾ははぶかれたが、再生遺伝子があるがごとく、南側のファサードが再生された。興味深いのは、壊れた部分がわかるように修復していることと、途中段階で補完した屋根と細いスチールの柱が残されたことだ（図14）。戦前、戦時中、補完プロセス、そして再生までのすべての記憶がこの建物に含まれているのに驚く。近年、磯崎新らの拡張コンペ案が隣の敷地で展開されている場所でもある。こうした頑固に容積を変えないまま改造するのも、都市の記憶の重みを捉えた行為であると思われる。

増築

増築には既存の建物のどこを増築するかによって「上」、「下」、「横」、「後ろ」、「隙間」、「中」の6つに可能性がある。

屋上に拡張する方法は、都心部において望まれ、欧米においては簡易なベントハウスが一般的だった。その常識から発展逸脱したのが、ウィーンのルーフトップ・リ・モデリング（コープ・ヒンメルブラウ、1989、図15）が有名であろう。わが国では東京大学6号館の屋上増築（香山壽夫、1974）が思い起こされる。一

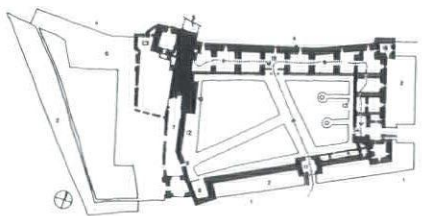


図9. スカルパ以前の入口の位置と動線（出典：R.Murphy, Carlo Scarpa Et Castelvoglio, Butterworth Architectur, 1990）

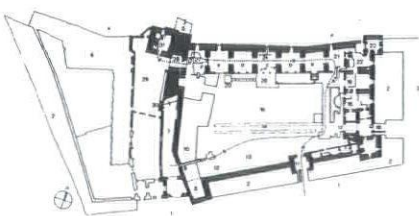


図10. スカルパによる入口と動線の変更（出典：図9に同じ）



図11. 内側からガラスの窓を付加する際に、天井から吊り下げられるガラスと床から立ち上がるガラスの2種類のフレームが中間で出くわし、それがナポレオン時代のヴェネチアンアーチと重なっている（出典：図9に同じ）

方、ミラノのサッカースタジアム（ラガツィ、p.98 参照）では、上に被さって3段階増築していて、「合体型」で拡張している。

これとは逆に地下へ拡張しようという考えも有効であることを示した、安藤忠雄（p.54 参照）、ドミニク・ペロー、トビア・スカルパ、ポール・シュメトフ（p.64 参照）などがあり、地上部の環境変化を最小化する特徴がある。同様にバルセロナのオリンピック屋外競技場（ヴィットリオ・グレゴッティ、1988）も、外壁位置を昔のままにし、地下に観客席45,000を増築させている。

次に横に伸びる好例としては、1803年のヴィツラのモジュールとヴォリュームに基づくフランクフルトの装飾博物館（リチャード・マイヤー、1979-）、ルーアンの建築家協会（マッシミリアーノ・フクサス、1992）、〈メゾン・コニャック・ジェイ〉（ジャン・ヌーヴェル、p.86 参照）、パリのヨーロッパ写真美術館（イヴ・リオン、1996）などがある。いずれも増築後の高さには注意を払っていて、水平拡張美を維持している。

一方、真後ろに増築する場合、横と違って自立したファサードを形成する可能性がある。たとえば、ブルックリン美術館の増築案（磯崎新+ジェームス・スチュワート・ボルシェック、1986）では、途中までしか完了していなかった美術館後部を補完しながら新たなヴォリュームによって完成させようとしている。〈東大工学部1号館〉（香山壽夫、1996、p.70 参照）も裏側にオープンスペースとアクセスを予測し、一旦完了してしまった背後に増築する際に、後ろ側にもファサードを補完している。

また、建物と建物の間の再発見は、壁の両面をフル活用する可能性もある。ロンドンのサックラー・ギャラリー（ノーマン・フォスター、1993）、中庭を屋内化したハンブルグ歴史博物館（フォン・ゲルカン&マルク、1989、図16）、ニユ

ー・カールスベア美術館（ヘニング・ラーセン、1996）がその良い例である。一方、既存の建物の間を新しくするというロンドンのブラッケンハウス（マイケル・ホブキンス、1992、図17）も調和が取れている。

最後に、中にはらむ可能性もある。サンタ・マリア教会（ミュンヘベルグ）のミュンヘベルグ市立図書館への転用（クラウス・ブロック、p.100 参照）では、かつての教会建物をシェルターにし、内部に鉄骨の軽い建築と設備が形成されている。なんとも形容しがたいが、実際見ると、旧建築の内部が新建築の外部に面するという空間は、実に居心地の良いものであった。

削除

増築の逆の行為である、削除も重要な改造の手法だ。たとえば、パリのマレ地区の改造が如何にあったかを思い起こして欲しい。スラム化が進んだ都心では、中世からの街区の問題として、倉庫、トイレや浴室、工場などの無秩序な増築が中庭を浸食していった。良き時代を設定し、取り除きながら改造していく方法も重要である。既存の空間を如何に切り取るか、引き算の発想によっても、さまざまなデザインが可能だろう。

移植

移植（あくまで改造利用に限っているの、移築ではない）もあり得る。建築部品を何らかの理由で、取り出し、別の建物で利用する場合、医学にたとえると移植のオベに近い。イタリア・ルネサンスの教会では、古代の神殿の跡から柱とオーダーなどの石を持ち出し、側廊などに再利用した例がある。ビザンチン建築にも見られる手法である。イタリアのジベリーナ美術館（F.ヴェネツィア、1987、図18）では、震災で残った建物のファサードを、復興した地区に移転し、かつての都市のシンボルとして中庭に面して再建した現代建築も見られる。新しい窓と古い窓によって同時に切り取られた風

景に、新旧の活かし方の独自性がある。スケルトン・インフィル
ポートランド・メトロの都市の成長管理プランの中に、インフィルによって都市部の容積を上げる考え方が出てきている。これは、既存の建築物を再利用しながら人口を吸収しようというもので、実際どのようにするのか注目されることである。一方、集合住宅の改造分野ではスケルトン・インフィルがいわれている。躯体と壁や間仕切りを区別して考え、躯体保存しながらも、個別のプログラムに合わせて増改築を自由にしようというものである。メタボリズムも増改築の考えを持っていた。一方、熊本県立美術館改造（ラペーニャ&トーレス、1992）のような躯体再利用では、既存の建物のイメージとはまったく違うレベルにまで改造することが意図された逸品である。さらに、〈クッパースミュージレ・ミュージアム〉（ヘルツォーク&ド・ムーロン、p.60 参照）では、スケルトンの一部を撤去し、2層吹き抜けの空間に変換している。

今後どのように取り組むべきか

では、今後どのように既存の環境を活かした設計ができるのだろうか。以下、プログラム、都市、ランドスケープ、ハイテク技術、改造の速度、予算と期間、意匠権、の7つの側面についてまとめる。

プログラムの決定プロセスの改造

施設をどのように利用するか、用途変更の自由度を高めておく必要がある。利用者の種類、利用の目的、プログラムなど、ソフト面がしっかりしていなくてはならない。利用プログラムの検討は行政の担当部局とコンサルタントだけでなく、総合的なマネージメントが必要である。市民への計画内容の公開と協議はどのように必要なのか、長く十分な議論をすることができる便利な予算計上手法が必要である。わが国の大きな問題は、公的計画の途中変更ができない点にもある。柔



図12. 戦時中に空爆で中央ファサードが破壊されたアルテ・ピナコテーク（出典：E.Altenhöfer, Hans Dollgast and the Alte Pinakothek Design, Projects & Reconstruction 1946-73, 9H no.9, On Continuity, 1995）

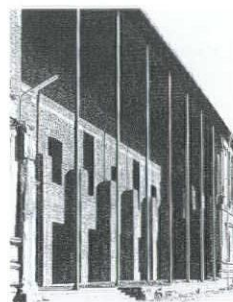


図13. 途中過程の整備（1952-55）では、中央から左に入ると階段があり、7本の細いスチールの柱とアルミの屋根がかけられた。今にしてみて、モダンとも取れるセンスがある（出典：図12に同じ）

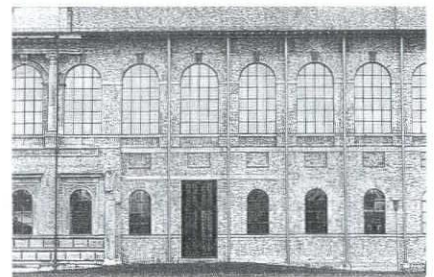


図14. 1955年にちょうど傷口が治っていくように南側のファサードが再生された。途中段階で補完した屋根と細いスチールの柱も残された（出典：図12に同じ）

軟な実務処理体制が不可欠なのである。

ヨーロッパとの差はここにあるように思われる。よい案になるまで同じ場所で何度でもコンペをするし、アメリカの場合には、市民参加が都市開発の規模に関わらず、施策決定、デザイン方針決定に根本的に導入される例もみられる。また、地区の規模が大きい場合、様子をみながらプログラムを何段階かに分けておき、いつでもプログラム修正ができるように最初からしておくことに寛容である。今の日本の行政システムでは、長期的な施策と短期的な施策との使い分けが曖昧で、短期的な改変プログラムがつかれない状況にある。ここを変える方法を政治的に議論しなくてはならない。

都市改造と改造建築の接点

従来、小さくとも建物をたくさん設計していけば都市ができるように思われてきた。しかし、いつまで経ってもそうならないことは、目の前の都市を見れば一目瞭然である。大局的な見地から面的な公共投資の予算配分を考えねばならない都市計画と、単体ないし部分的な集合による建築家との視点の違いから接点が見い出せなくなっているのである。

ここで改造建築を考えて欲しい理由のひとつは、離れすぎている建築と都市の関係を取り戻したいからである。改造には、徐々に整備していく長い時間プロセスやプログラムが重要であるという点で、建築も都市も手法が類似しているのである。

たとえば、ウィーンのカスタンクのプロジェクト（ジャン・ヌーヴェル、コープ・ヒンメルブラウ他、p.28参照）は、かつてのガス工場施設を社会住宅と商業中心に転用しようとしており、都市構造の改変に直結したプロジェクトである。また、最近オープンしたロンドンの〈テート・モダン〉（ヘルツォーク&ド・ムーロン、p.52参照）も都心域における発電施設という一工業地区を美術館という憩いの場所に転換する都市計画の変更を

伴う地区改造である。都心に残っている工業地区を徐々に改善しようとする近年の都市計画上の課題と都市の記憶の保存プログラムを活かした建築改造手法と目的が一致している。ルール工業地域のIBA方式によるエムシャーパークプロジェクト（図19）も、脱工業化社会のための広域都市計画の大きな課題を、建築家とランドスケープ・デザイナーとともに徐々に改善しているものである。

ベルリンのアルド・ロッシの遺作であるシュッツェンストラッセの街区（図20）では、建築複合が街区改造につながっていることを示している珍しい例である。ブロック内にあった建物の一部を残し、新しい建物と混在させている。また、ライプツィヒ駅の改修（図21）では、既存の構造を残しつつも、地下ショッピングセンターへ拡張、ガラスのエレベーター、エスカレータの設置をきっかけにしてデザインを一新した。ドイツ各地における既存の駅のリニューアルは、都市プロジェクトとして注目される。ランドスケープの改造と都市改造の接点すでに述べたパリの公園整備や都市軸の延長のように、ランドスケープ・デザインの方法にも改造の側面があり、見逃せない。

パリの三大公園、ラ・ヴィレット、シュトロエン、ベルシーなどは、かつての汚く治安の悪いイメージから、今では人が行きやすい公園と住宅地へと改造されている。ラ・ヴィレットはフォリーだけでなく、科学技術センター（アドリアン・ファンシルベール、1986）のように既存の構造物の再利用もみられるし、ベルシーでは、ワイン工業のための細長い土地区画割りや倉庫の記憶を再生しながら再開発が完了しつつある。

こうした従来から大型の粗悪な工場施設が集積していた都心地区を公園というオープンスペース（建物を建てない地区）に転用し、建築家の代わりに、ランドスケープ・デザイナーの改造に対する

役割が高まっている。今の日本の都心域の状況で工業跡地に公園を確保するのは、大変な仕事でもあるが、地方ならまだ可能性があると思われる。そうした場合、既存の環境を活かしたランドスケープ改造の可能性が注目されるのである。

ハイテク技術

古くなった建物の設備機能を上げるために、歴史的な建造物が、空調、電気、情報ネットワーク、熱源などの面でハイテク化する改造が行われている。ベルリンの〈ライヒスタック〉（ノーマン・フォスター、p.14参照）は、外側に残した石の外壁による断熱、ガラスのドームと逆円錐体のコーンを用いた採光と空気の排出、地下水による熱還元を利用したコジェネレーションと、天然植物油を用いたエネルギー源により二酸化炭素の排出量を94%削減するエコテック・ビルである。

一方、公共性が高い建物に対するバリアフリー化の導入も求められるため、エレベーターやエスカレータの設置がデザインのポイントとなる。クラシックな建物の場合、メインの入口の前の階段や階段室などに良い意匠が残されている場合も多く、特別な配慮が必要となる。パリの〈進化博物館〉（ポール・シュメトフ、p.64参照）のように、入口を側面に変え、基壇レベルを切り取るという方法は、正面性を保存しながら地上レベルのアクセスを可能にしている。また、〈東大工学部1号館〉でも、正面を変えずに後ろ側の新しいファサードを増築と同時にバリアフリーの問題を解決している。

また、駅の改修においてエレベーター設置が急がれたベルリンでは、新しいプラットフォームづくりとして、どの駅にもエレベーターとエスカレータが設けられ気持ちよい。ライプツィヒの駅改修（HPP、1997、図21）では駅構内のライトアップやサイン計画とともに、地下ショッピング街の設置に合わせてガラス張りの新しいエレベーターシャフト2本とエスカレータが組み込まれていて、主なデ



図15. ルーフトップ・リモデルング
(コープ・ヒンメルブラウ、1989)
© Gerald Zugmann

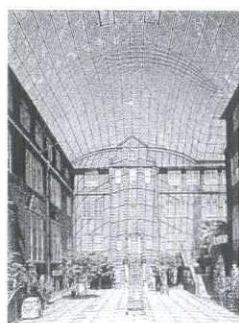


図16. ハンブルグ歴史博物館
(フォン・ゲルカン&マルク、1989)
© Klaus Frahm



図17. ブラッヘンハウス
(マイケル・ホプキンス、1992)
保全登録グレードIIの建物を改造したもの

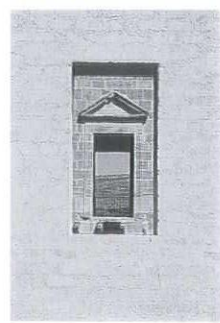


図18. 新しい窓から、地震で残った窓と、その向こうの新しい景観が重ね合わせて見える
(詳細はSD9410号参照)
© Francesco Venezia

ザインポイントとなっている。

また、増改築を行う際のポイントとして、ライトアップや色のコーディネートも忘れてはならない。特に既存建築は、現代建築とは違ったライティング効果があるため、石造、木造を問わず十分なスタディが必要である。たとえば、リヨンの〈オペラ座〉(ジャン・ヌーヴェル、p.24参照)は、夜赤くライトアップされるし、ヘルツォークの〈テート・モダン〉(p.52参照)のシリンダーも煙突のスケールに合わせたヴォリュームで十字に対比され、効果を生んでいる。ただし、あまりハイテク化が行き過ぎると、元の建物の良さが消えてしまう場合も出てくるであろう。SFでたとえれば、サイボーグとロボットの違いのように、元の人格を尊重しているのかどうかにその是非が問われることになるであろう。あくまでも、既存の環境を重視したハイテクの方が難しくもあり、おもしろいのである。

改造の速度

改造でもっとも問題になるのは、その速度である。ゆっくりとした成長ならばほとんど問題がないのだが、通常都心部は、都市構造が急速に広がったために、高容積が必要になる。既存の建築物の容積からの変化率が大きすぎる場合、デザインの調整限界を超えてしまうことが少なくない。考え方としては、元々の建物を尊重するならば、容積のアップ率は3倍が限度であろう。本編の事例でいえば、リヨンの〈オペラ座〉(図22)がわかりやすい。中身を大きく変更し、容積を既存の状態から約3倍にしている。しかも地上部分に見えるのは、既存のヴォリュームの倍だけで景観上は新旧のヴォリュームに1:1の釣り合いがある。逆にこれが限界で、それ以上の容積の調整はデザインでは難しいといわざるを得ないだろう。

一方、日本のような景観変化の早さの問題点は、既存の環境が脆弱であった

り、老いている状況の中、高度に成長させる義務感から、急速にスーパーマンに変える手術を施してきたことに原因がある。新旧のギャップの大きさから、美しくならないのは当たり前である。近代以前に比較して、その新旧のギャップは比較にならない程大きなものであるから、コンテクストを一旦壊さざるを得ないという矛盾がある。この条件下では新旧対比することは簡単である。むしろ新旧に関係を持たせるアイデアの有無を注意して見るべきであろう。ヨーロッパにおいて都市規模が比較的安定してきたルネサンス期から改造手法が発達したわけだが、今日的な改造手法の意味は、昔の手法とも異なり、こうしたギャップを緩和させた上で、都市規模を安定化させる技術でなくてはならないだろう。

予算と設計施工期間のマネージメント手法の開発よりも難しいことは、予算の計上方法であろう。今回取り上げた多くの事例のように、パブリック性の高いプロジェクトは、公共予算で成り立っている。わが国の場合、こうした予算は単年度で組まれていて、修復と新築が混在する、調査や見積もりが出しにくい工事や維持管理が必要な保存問題には向いていない。増改築などに見る算定方法や維持費への理解は、あまりにも不十分であり、プランニング段階において、デザインマネージメントの技術が必要になる。そういう意味では、〈東大工学部1号館〉のような国の施設整備事例での成功は、先例主義の仕組みの中で重要な位置にある。

さらに、既存の建物を実測する期間や、補修補強箇所の診断、施工の手間暇を勘定すると、予算面でマイナスばかりが目立ってくる。精度に対する日本人の几帳面さが仇となるばかりか、本来の目的とは違うところにエネルギーをかけてしまうことになりかねない。いかに勘弁に手を抜かなくてはならないのか、誤差をどうぶつけないようにするのかなどの

システムを受け入れねばならない。修復補修はともかく、厳格な復元作業が必要かどうかは、物件の全体性に依拠して個別に判断しなくてはならないだろう。

意匠権と公共性について

改造の意匠権も十分議論する必要がある。増改築の場合、既存の環境をいかに引き続きデザインしたかが、技となる場合が多い。ひとつの建物の中に、新旧複数の主構造が混在しながら組み合わせるように、ひとつの建物に携わった多くのデザイナーの意匠権が重なっている。一部のデザイン付加についても、ミケランジェロらの作品のように既存の環境を著しく向上できれば、新築同様に総合的な評価が得られるべきであろう。

また、意匠の公共性について、時間を経て残った建物意匠は、個人の所有・権利を越えてパブリックなものに移る可能性がある。イタリアでは、すべての建物は築50年で歴史的環境財として登録される仕組みを採っている。一個人の所有物を都市の財産として認めていく仕組みである。個人の意匠が公の意匠となることは華々しいことである。一方、そのような建物財産を完全保存するのか、改造利用するのか、あるいは壊すのか、パブリックな議論を経て判断していくことが、建築文化の認識を広める上で大切になってくるであろう。

以上のように、改造には考えるべき点が多く実にたくさんある。改造する際、少なくとも既存の状態よりも「価値を上げる(Enhancement)」責任があり、都市内での役割や効果が期待される。こうした改造の目的や手法の議論を行い、積み上げるための改造を確立していく必要がある。また、改造と同時に我々がすべきことは、「建築」が都市、歴史、一般の人々の意識の中にしっかりと位置づけられるようにすることだと思う。

(みやわき・まさる／千葉大学工学部助教授)

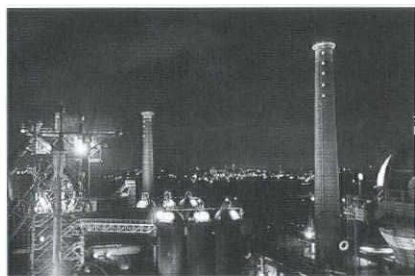


図19. ルール工業地域のエムシャープパーク再生。工場をオープンミュージアム化し、ランドスケープ・デザインとライトアップを取り入れた



図20. アルドロッシのベルリンの街区設計(1998)。既存の建物(左下部)を組み込んでいる



図21. HPPのライプツィヒの駅改修(1997)

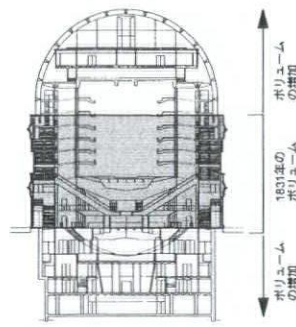
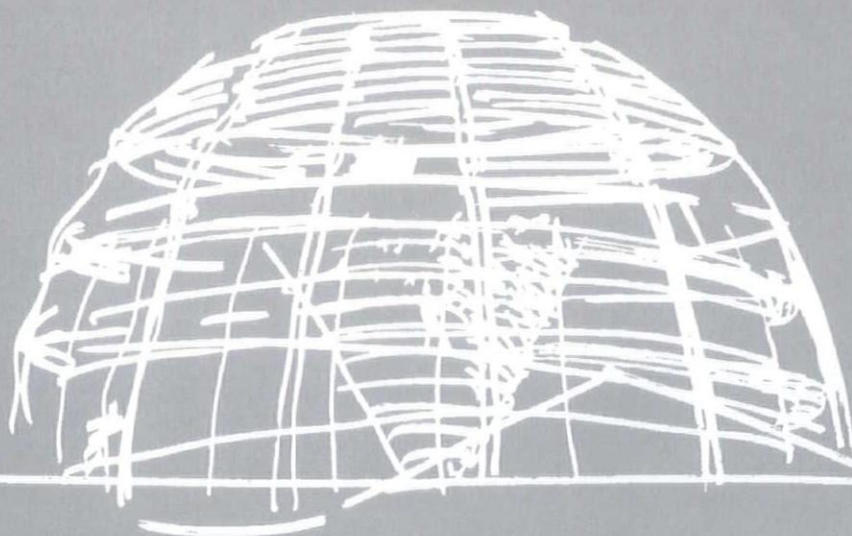


図22. リヨン・オペラ座(ジャン・ヌーヴェル)の改造によるヴォリュームの変化。地上地下合わせても3倍増が限度であろう



建築物には歴史的な成立背景がある。

そうした個々の建築物は、

デザイナーやオーナーの個人的な意向を越えて、

都市の時間的側面の一員として振る舞う責任が生じてくる。

すなわち時間的な尺度での公共性である。

新たに再開発を行う際に、

こうした建築物が担っている都市の記憶を残すような設計手法が必要である。

その場所のもっていた時代の証人となるだけでなく、

後の時代においても都市の個性として意味を持つことになるのだ。

作品解説＝宮脇 勝

透明でパブリックなアクセス性の確保

ライヒスタック（ドイツ連邦議会新議事堂）

ベルリン（ドイツ）

フォスター・アンド・パートナーズ

Methods: The transparency and public accessibility

Project name and the location: Reichstag, Berlin (Germany)

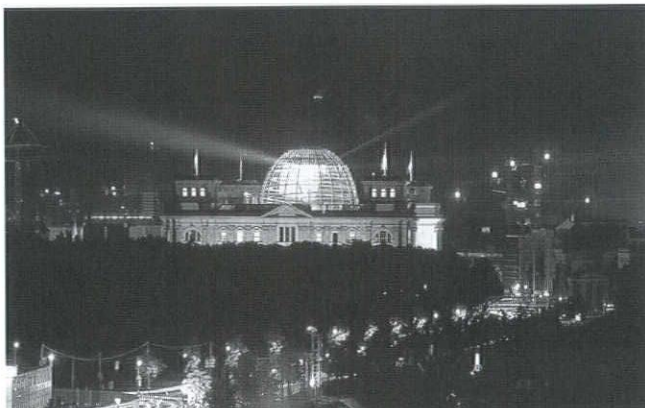
Architects: Norman Foster and Partners

Program: House of Parliament (1894)→Office Parliament (transformation: 1961-1969)→

House of Parliament (transformation: 1993-1999)



ガラスの新しいドームは、誰もが無料で訪れることができる。エレベータで屋上レベルにつくが、そこにライヒスタックの歴史を展示している。さらに展望スペースへは2重のスパイラル状のスロープを上る。中央鏡のコーンは、下の議事堂に光を届ける



ライヒスタックの夜景



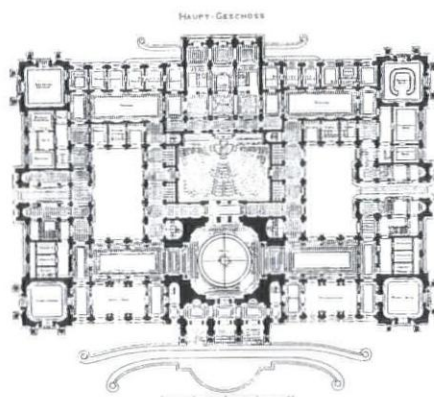
ドームは比較的遅い時間まで公開されている

オリジナルの建築は、1894年Paul Wallotsによるもの。現在のN.フォスターによるドームではドームのインテリアが公開されている。ドームが透明なために移動中、ベルリンのパノラマを360度見ることができる。また1階エントランス付近もガラス張りであるために、訪れた者は内部の議事風景を見ることが可能である。

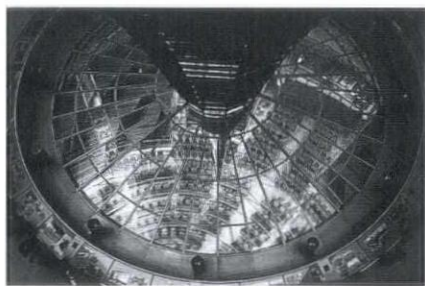
このプロジェクトでは、フォスターがシンボル性だけでなく機能を与えた点に特徴がある。新しいドームのディテールは、スロープなどをシュミレーションする目的で、3000におよぶ3Dのコンピュータドローイングで計画。またフルサイズのモックアップ模型も作成されている。ドームは鉄骨造、外膜はシングルガラスで覆われ、ベアリングは24面体、230mのふたつのスロープはダブルのスパイラルシステムで、ローマのサン・ピエトロ寺院のドームやフランスのシャンボール城の階段と比較できよう。

議事堂を隔てる東西の透明な壁としてエア・ガラスが挿入されている。南北は既存の砂岩壁を利用することにより、新しい部分とのコントラストを成している。新しい6ブースは、新聞記者やVIPのために議事堂室の中に2階レベルで跳ね出している。また、会見のための部屋は、議員室と議事堂の間の中心部分に置かれている。

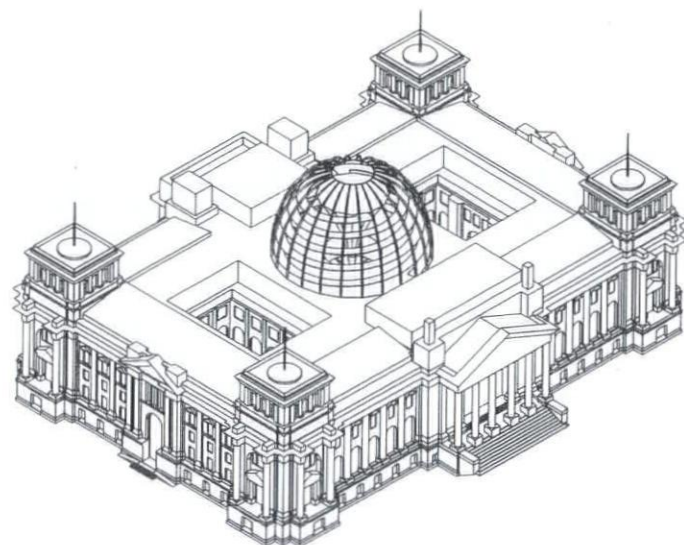
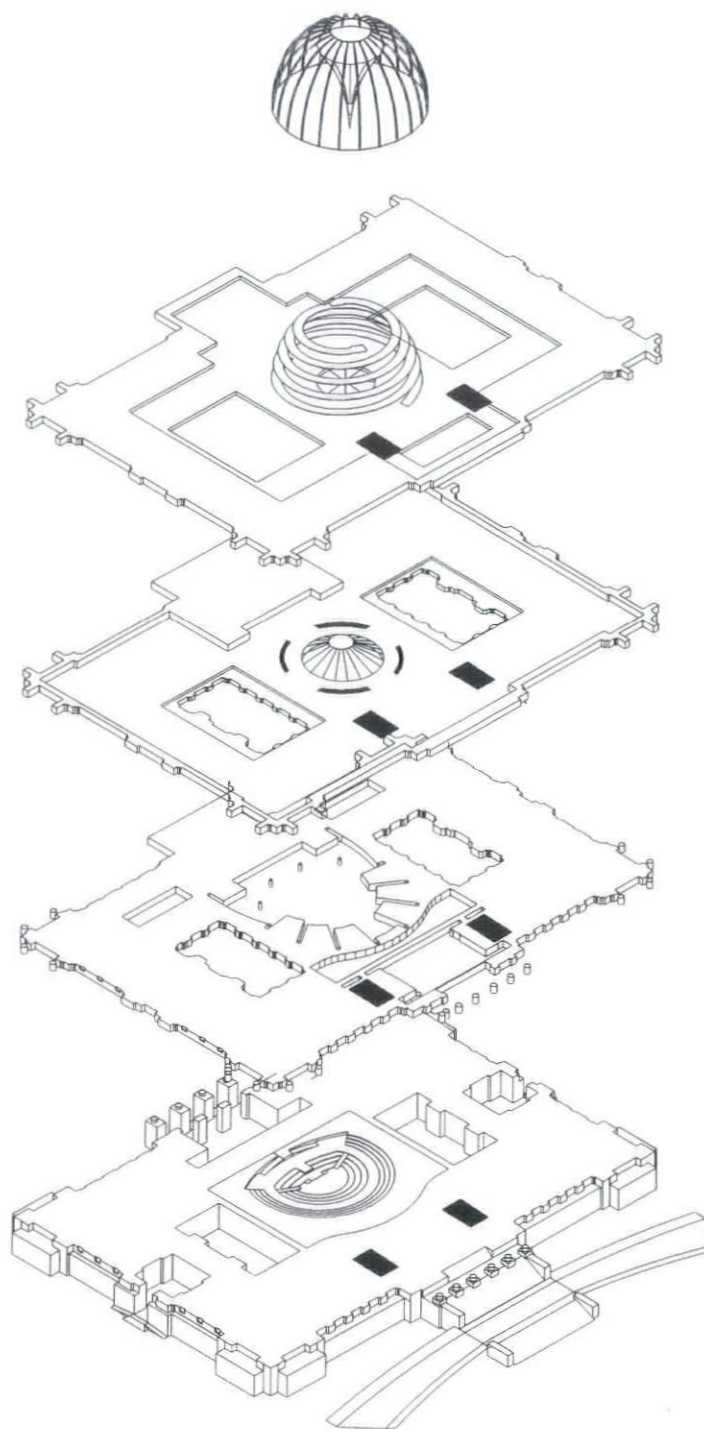
屋上テラス部分にはファン・システムが施されている。コンピュータコントロールの鏡や自然光を議事堂内部に届けるシステムが採られ、空気に関しては、8mもあるドーム王冠内の窓から外に熱気を出す仕組みだ。さらに南側の屋根の上にある太陽電池、窓ケース、バイオディーゼルによる発電機、地下熱利用などのエネルギーシステムにより、資源節約を図っている。こうしてライヒスタックは、1999年9月7日に連邦制50周年を記念してセレモニーが開かれ、その後まもなくオープンした。



Paul Wallotsの設計平面図 (1883)



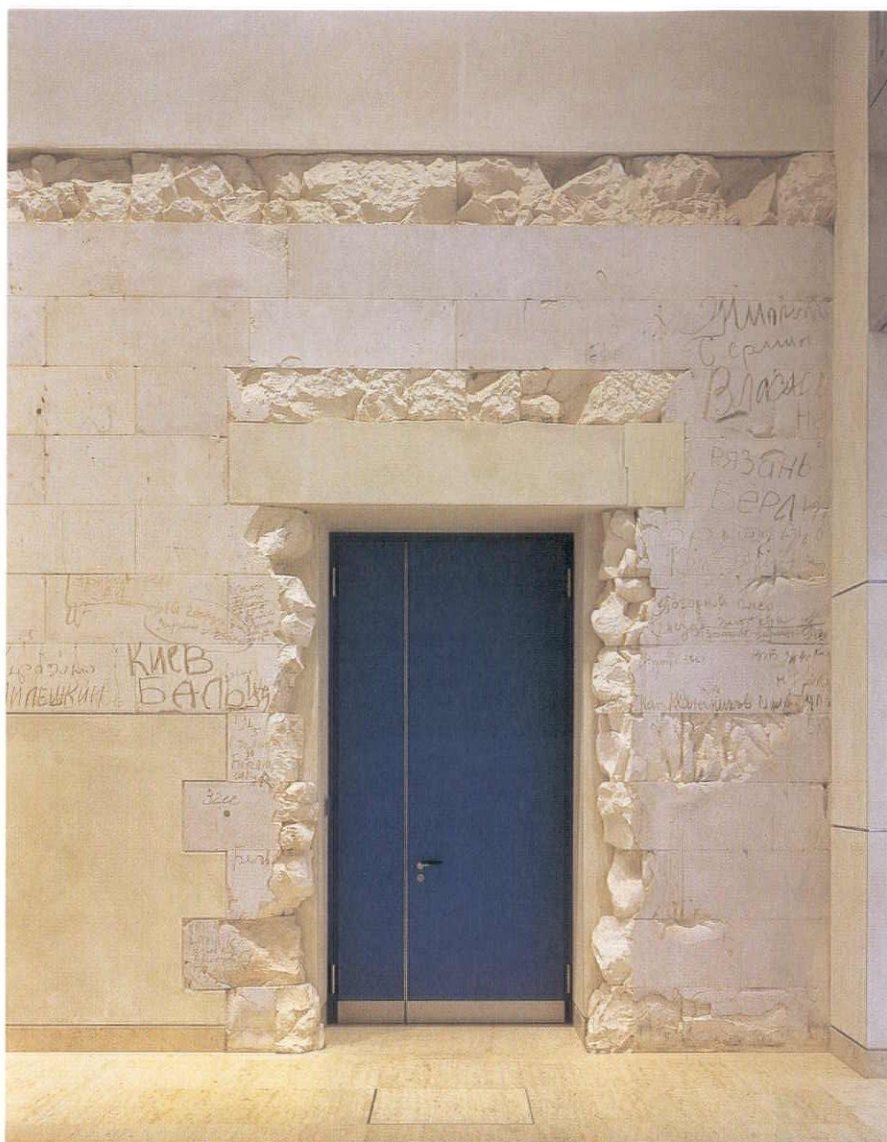
ドーム上部から議事席を見る。屋上ホールにはライヒスタックの歴史をサークル状に展示している



アクセシビリティおよび各階コンセプト図



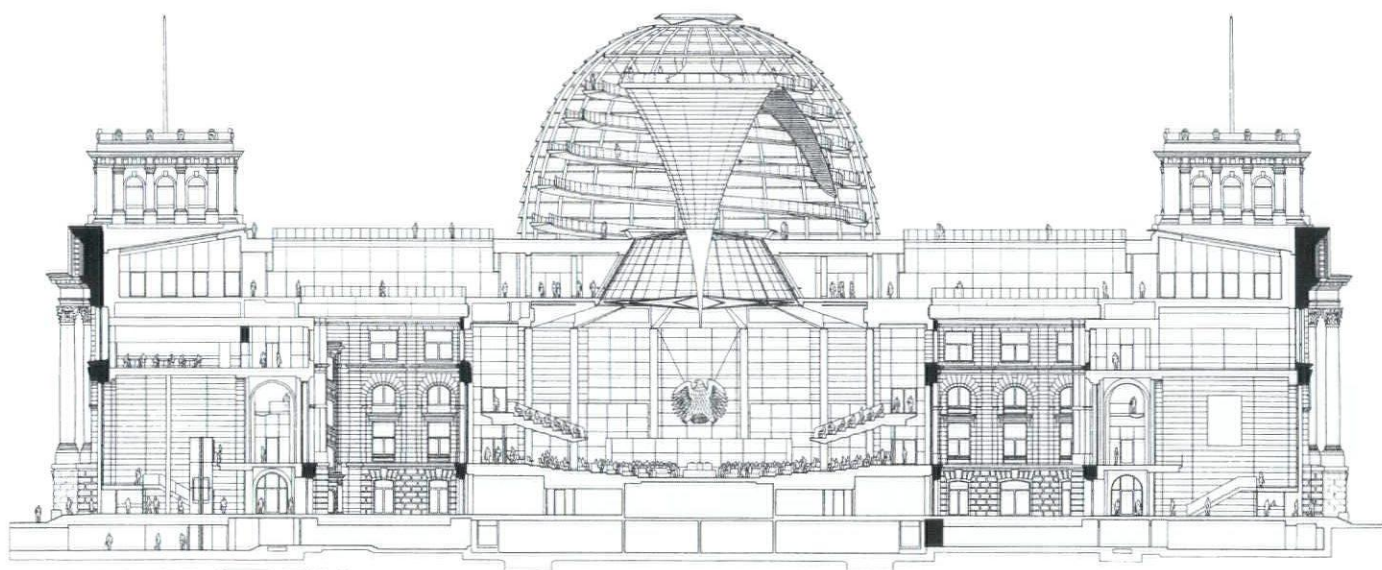
議事堂内部。入口側（左）がガラス張りになっていて、議事風景が公開されている。既存の壁（右）も活用されている。ドームや2階席キャノピーは、新しい構造物で持ち上げられている



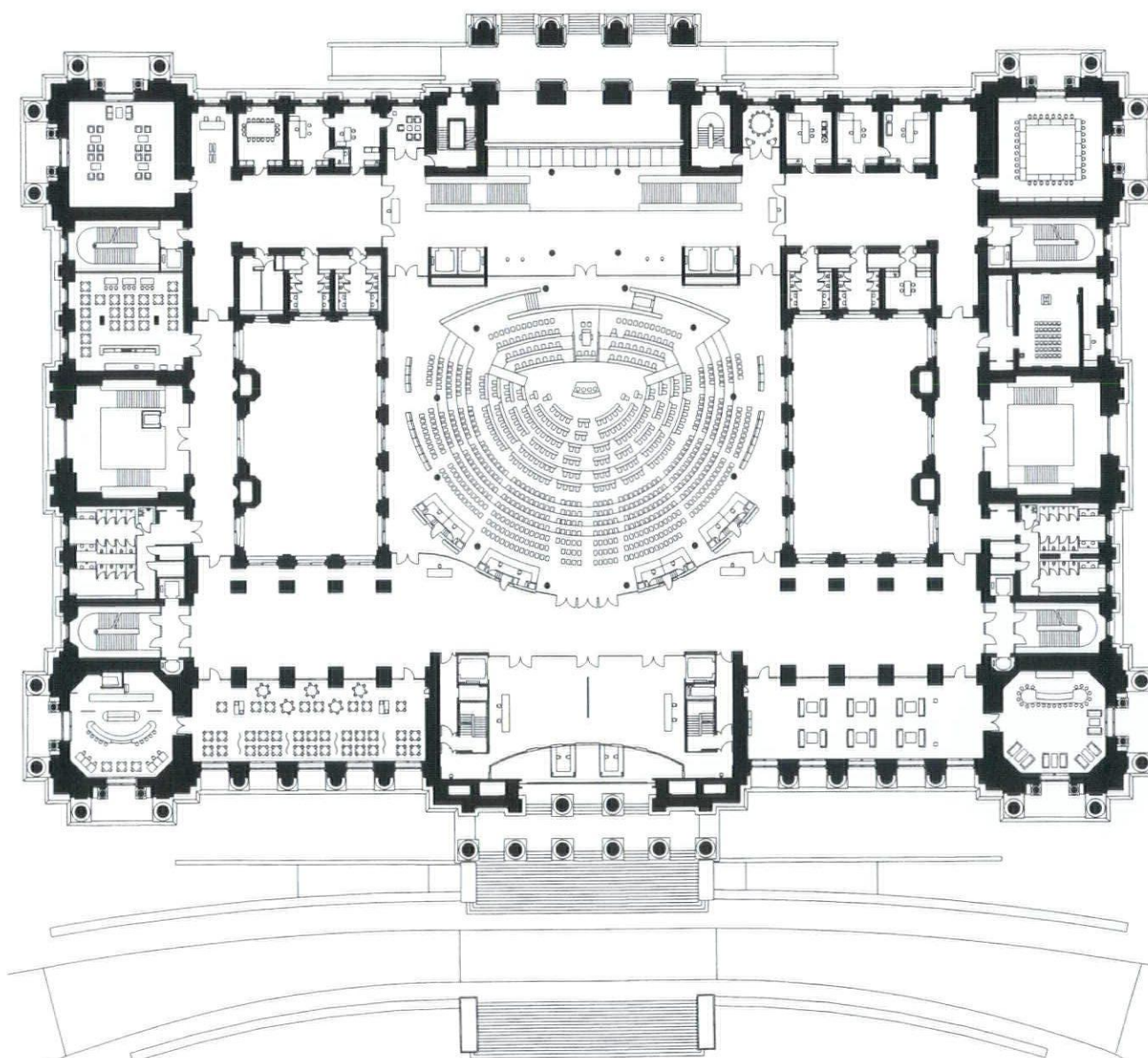
ライヒスタック内部の東側廊下には、再発見された当時勝利したロシア兵士による書き込みが、個人名を消しながらもそのまま戦争の記憶として残している。古い石は、新しい石とはっきり区別できるように仕上げている。ドアは、1960年代のものと切り離して再デザインされている



Wallots設計の19世紀の階段室吹き抜けは、1960年代の再建時に階段が取り除かれている。その跡が、新しい階段脇のガラスの向こうに見える



西側から見た断面図 (■：既存部分)



平面図。下が西向きメイン入口

歴史的構造のハイブリッド

ビベラッハ市立図書館

ビベラッハ（ドイツ）

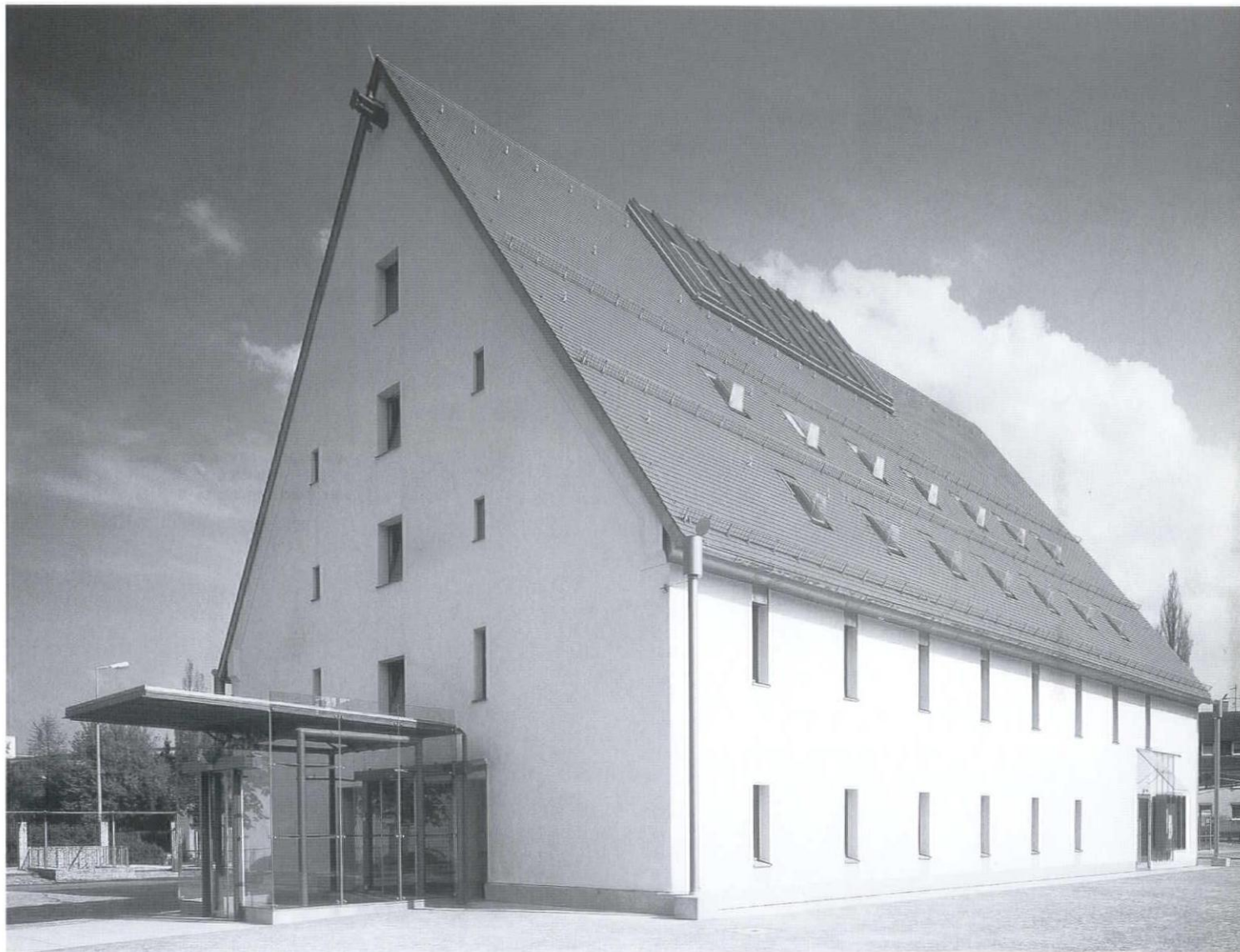
ボリス・ポドレッカ

Method: The hybrid between historic construction and contemporary one

Project name and the location: Biberach Library, Biberach (Germany)

Architect: Boris Podrecca

Program: (1894)→(transformation: 1992-1995)



改造後の外観。外観ボリュームは保持され、入口のガラスのボックスと屋根のトップライトが付加されている

南ドイツ、ビベラッハ市の都心部にあった木造6階建ての大倉庫が市立図書館へと改造され、新しい都市モニュメントとして再生された。ウィーンの建築家ボリス・ポドレッカは、歴史的な建物の厳格な扱いとディテールの処理において特徴を持っている。

彼は元の倉庫中央部の6スパン分を切り取り、垂直方向へ伸びるコアと、大きなトップライトを取り付けることで内部空間を変身させた。1階から3階はパブリックな空間、4階から6階がスタッフ用のプライベートな空間となっている。1階

の構造に傷みがあったため、コンクリート構造に置き換え、インテリアをフリーにし木造5階分を上を持ちあげている。図書閲覧個室には、プリズム型のトップライトが組み込まれ、ドイツの歴史的な出窓と現代的なセンスとを微妙に織り交ぜている。新しいエントランスにもガラスのボックスが加えられ、夜景ではその新しさがより自然に際立ってくる。

様々な建築言語が混ざり合うことで、歴史的にも地域的にも混成文化的な表現として、都市の記憶を継承している好例である。



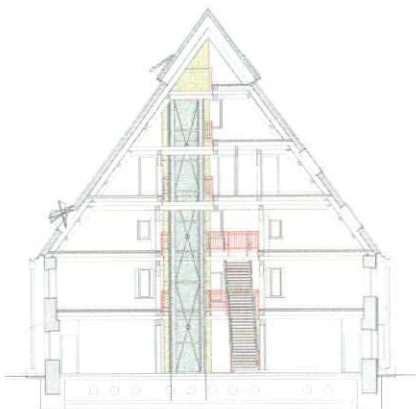
改造前の倉庫の状態



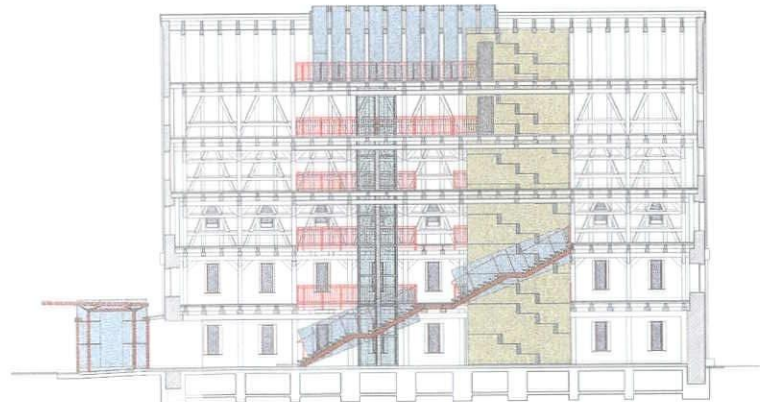
ガラスのエレベータシャフトと、既存の6階建て木構造とのハイブリット



1階入口まわり。1階の木構造のいたみがひどいため、
コンクリート構造に置き換え、
上階の木構造を持ち上げている



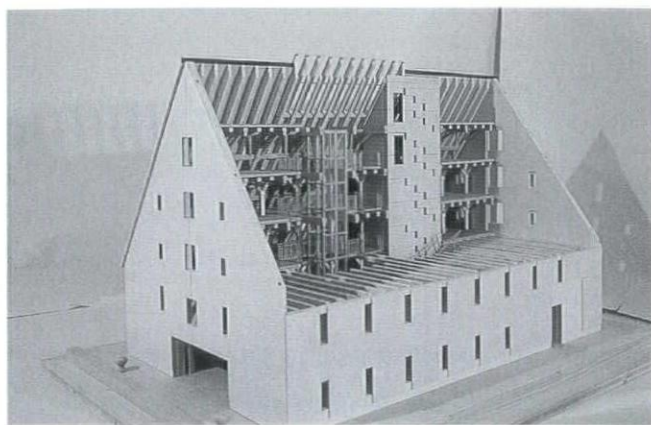
断面図 S=1:200



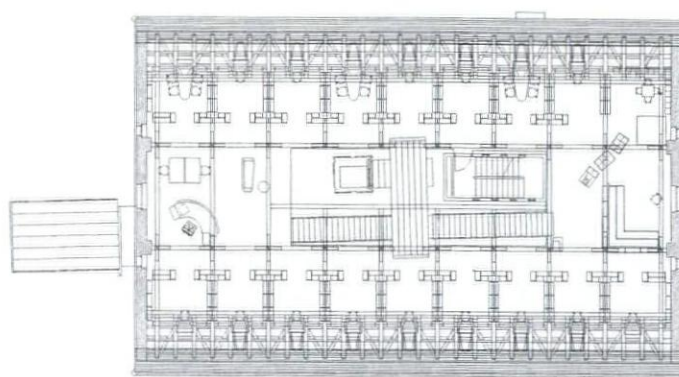
断面図 S=1:200



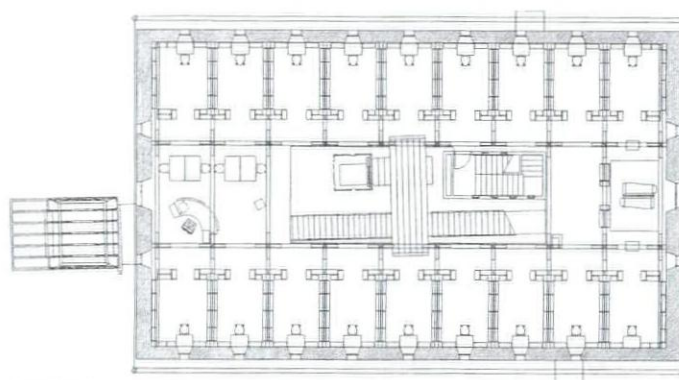
夜景。新しい部分のガラスが光とともにいっそう際立つ



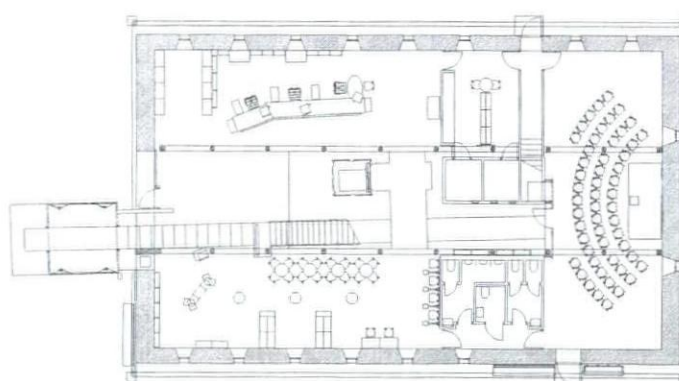
模型。新しい構成要素の混入具合がわかる



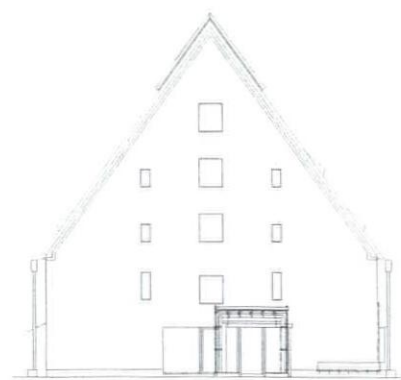
3階平面図



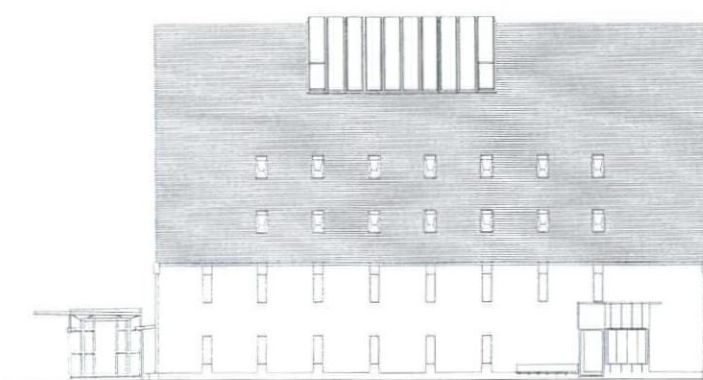
2階平面図



1階平面図 S=1:200



東側立面図 S=1:200



北側立面図 S=1:200

新旧それぞれ独立しながらの混在

——ビベラッハ市図書館のプロジェクトはどのように進められたのですか。

B.Podrecca (以下B.P.) ビベラッハ市は素晴らしい街で、ウルム市の近くに位置しています。私はシュツットガルト大学で教鞭を取っていたころ、1度レクチャで学生たちとこの街を訪れたことがありました。

レクチャの後、市長が街の中心にある建物を壊したいのだがどうすべきか、尋ねてきました。それを見に行ったら、壊すのをやめて再利用することをすすめました。もちろん新しい建物にすることもできましたが、十分とはいかないまでも、壊さなくとも現代的に活かすことができると判断したからです。

建物は、中世の都市組織の境界部分として重要な役割をもっており、周囲には博物館、タウンホール、シアターがあります。彼らは、市立図書館として再活用する方向で決断しました。とても汚れていましたが、ゴシック期のドイツの木造建築物として素晴らしいものがあり、6階建てのファンタスティックな構造が魅力です。

——どのような点を改造したのですか。

B.P. 既存の内部空間に対しては特別な思いはありませんでした。ですから、厚い壁を隔てて、内部と外部というふたつの側面が存在していますが、ここに貫くような穴を開けようと考えました。ただし、内部のオーダーを必要以上に切ることにはしたくありませんでした。建物は閉じたままにしたかったのです。私はそこにまさに「胃袋」のようなものをつくろうとしたのです。

開いたのは天頂部で、太陽光を入れるため3スパン分の大きなトッブライトを付けました。トッブライトからの光は側面からの光よりも3~4倍の効果があるでしょうから、それをゴシックの建物の中で、エレベータや階段室、その他コミュニケーションのある部分に適切な大きさで用いました。それが建物の詩的な部分となり、新しい設備もそこに集中しています。トッブライトは自動開閉します。ドイツの大きな屋根面には伝統的な小さな明かり採りがありますが、私はあまり好きではありません。印象が重すぎるからです。そこで、朝の花に付いている滴のようなガラスの出窓のデザインをしたのです。

プロポーションは伝統的な明かり採りの形に近づけてあります。古い構造の中で、新しい機能(閲覧室)を組織し直して、窓の穴を開けたのです。出窓は北側に取り付けられています。というのは、北側の窓からの光がとてもスウィートですから。

——各階の構成を教えてください。

B.P. 内部に入ると、狭いスペースがあり、そこでは新しいコンクリートの構造が目に入ります。1階部分の木の構造材がとても悪い状態にあったことから、RC造に変えているためです。ですから2階以上が木構造となる混構造になっています。1階の階段の軸が振られているのをよく人に尋ねられるのですが、それは構成的な理由ではなく、木構造の柱頭部分と階段部分がぶつからないよう

に調整したもので、柱頭部分を切らなくても良いようにするためでした。古さと新しさが混在していますが、私のしたことは、既存の状態には決してなかった自立的、厳格でシンメトリーな空間をめざしたことです。古い構造の間で、とても厳格に新しいものが組み込まれています。

——素材の選択について教えてください。

B.P. 私のガラスの使用法には、古いオーダーに則っていない部分があり、仮設的な要素として扱っています。一時的なモンタージュとして表現しています。

何百年も異なるソリッドな要素と組み合わせるとき、別の構成要素として非ソリッドなガラスを扱っています。建物全体はソリッドですが、入口のデザインは非ソリッドです。同様に、内部の階段室タワーはコンクリートでできたソリッドですが、階段は非ソリッドなものとしてデザインしています。素材の明確化に関して、第1にソリッドなコンクリート、第2に非ソリッドな鉄とガラス、第3に非ソリッドなエレベータのガラス、第4に非ソリッドなトッブライトのガラスが選択されています。これら「胃袋」の部分すべての要素が見えるようにしたいのです。こうした素材のファンタジーが、古い修復されたエレメントの中にあるように見せています。

それと、軽い構造体を乗せたり、新しい木製の梁と古い梁との2重構造体を使用されています。古さは記憶でもありますがからね。

——新旧構造は独立しているのですか。

B.P. 新旧の混在の中でそれぞれが独立していることが大切でしょう。私は杖を付けるようなことはしたくありません。ですから基礎は新しいものですし、屋根も完全に新しいものです。ドレインですら柱のように自立しています。このようにすべてが独立しているのです。

——ドイツで既存の建物を使うにあたって、どのような制限があったのですか。

B.P. とても複雑です。ドイツの法律では、たとえ歴史的モニュメント部局が建築家の改造方法のアイデアに反対したとしても、保全の方法の中の選択筋であれば、コスト的に安い方を市長が選択できるようになっています。

たとえば、伝統的な窓を再生するには、新しいものよりコストがかかります。モニュメント部局の意向による昔の意匠よりも、コスト的に再生するほどは高くない私の案の方が採用になりました。この建物の保全の指導にあたった方は、高齢で最後の仕事だったのですが、古い倉庫を気に入っていました。彼は「詩的な建物は歴史的に見なくてはならない」と私にいいました。私は、彼の薦める歴史家の手法にはノーといいましたが、彼がマネージメントできるような方法を提供したつもりです。

複雑なプロセスでしたが結果としてうまくできました。

(1999年9月25日、ウィーンにて インタビューア：宮脇 勝)

ボリス・ポドレツカ/Boris Podrecca
1940年 ベオグラード(ユーゴスラビア)生まれ
1968年 ウィーン芸術大学及びウィーン工科大学卒業
パリ、ベネツィア、ハーバードなどの客員教授を経る
1988年 シュツットガルト工科大学教授
ウィーン市建築賞(1990)、コンペなど多数受賞
ウィーン市のミレニアムタワーなどを建設中



増築のヴォリューム・バランス

オペラ・ハウス

リヨン（フランス）

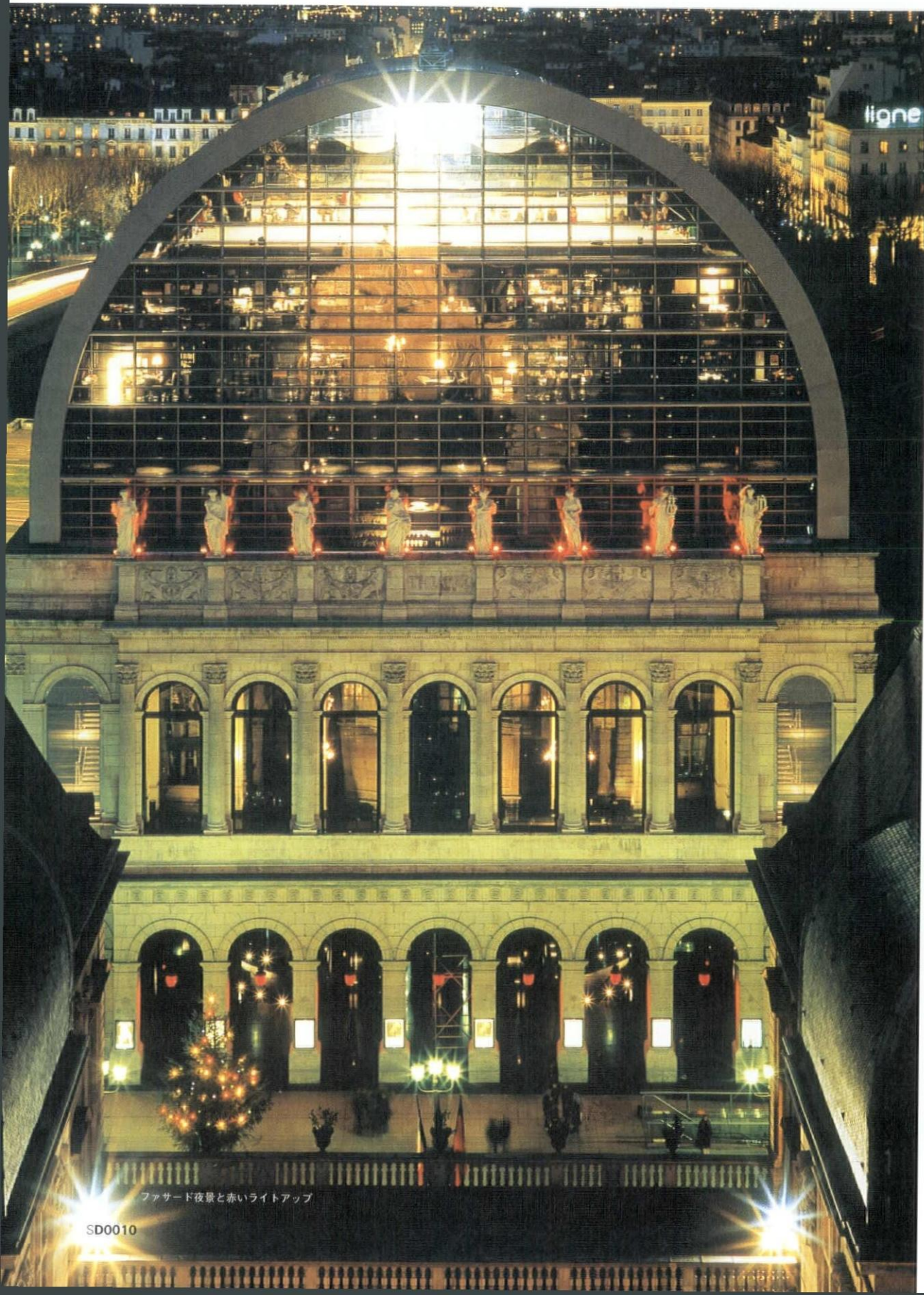
ジャン・ヌーヴェル

Method: The extension volume balance from the original monument

Project name and the location: Opera House, Lyons (France)

Architect: Jean Nouvel

Program: Opera House (1831)→ Opera House (transformation: 1993)



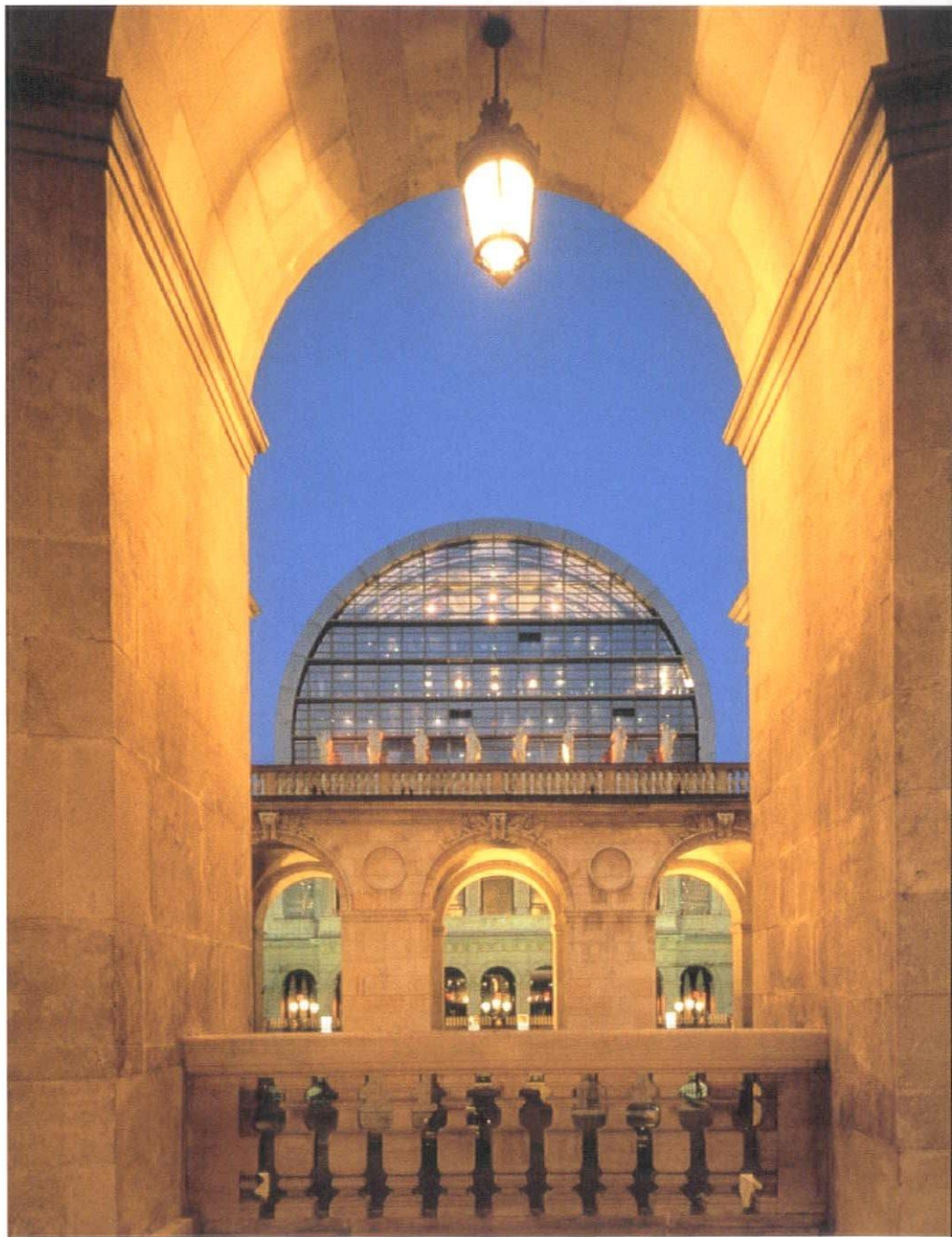
ファサード夜景と赤いライトアップ

SD0010

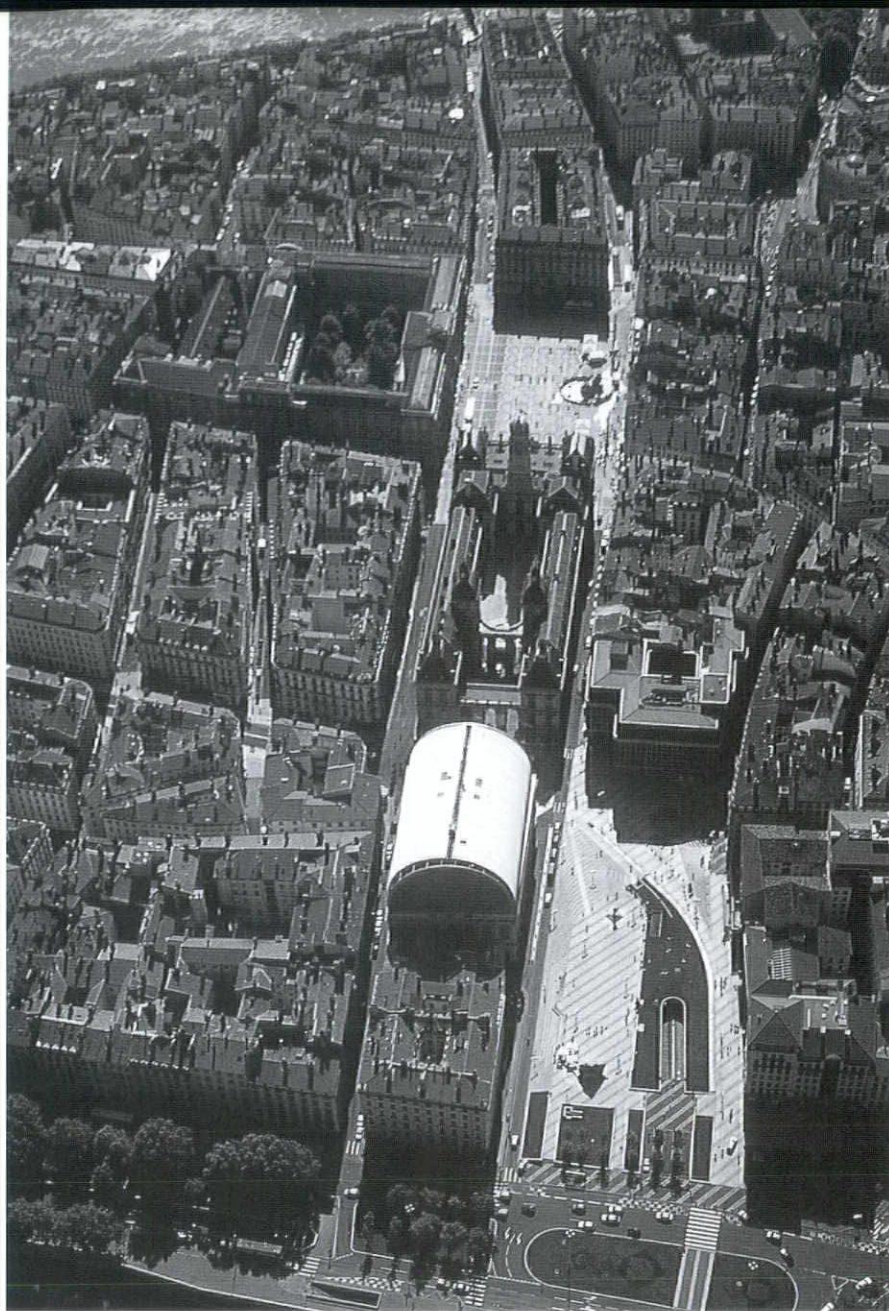
1831年にChenavard and Polletによって設計されたオペラ座は、リヨン市の都心部に位置し、市役所、宮殿と続く重要な軸線上に建つ。しかし、老朽化したオペラ座の規模は、リヨン市の発展に合わなくなり、新しいオペラ座のためにコンペが行われることとなった。

コンペに際してはJ.ヌーヴェル自身が語っているように、規定のヴォリュームでの不可能性を指摘した上で、不可欠な増築ヴォリュームを提示した。この事例から、歴史的モニュメントを改造する際の限度となるヴォリュームが、地上部で既存の2倍、地下増築を含めても3倍がデザインバランスからみて限度であろうということがわかる。さらに、注目すべきことは現代的に活用する際の赤いライトアップにみられるような、歴史的なモニュメントの照明による再生効果である。

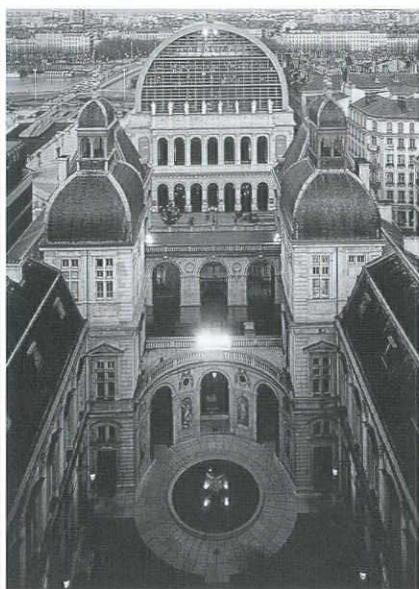
既存の屋根の上のレベルに乘せられたガラスとルーバーの新しいヴォールトは、歴史的な壁のルーファインや積石造のアーチ、彫刻などと区別しながらも全体のヴォリュームバランスを保っている。さらに、隣接する市役所のヴォールトやアーチなどにも調和していることも見逃せない。ヌーヴェルの幾何学的なデザインによって地区にパワーを与える。また、細部にわたって繊細なデザインを施すがゆえに、周辺との対比と調和をもたらし、既存の環境全体を見違えるほど活性化している。都市の記憶を残す都市計画の成功例として極めて重要である。



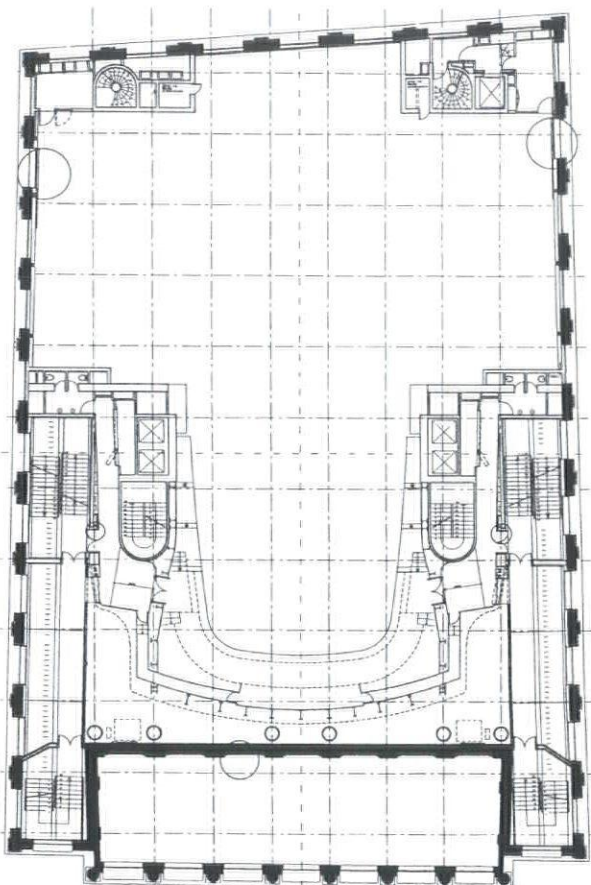
市庁舎から見たオペラ座の上部増築部分。市庁舎アーチとの重なりが、周辺とのコンテクストを生成している



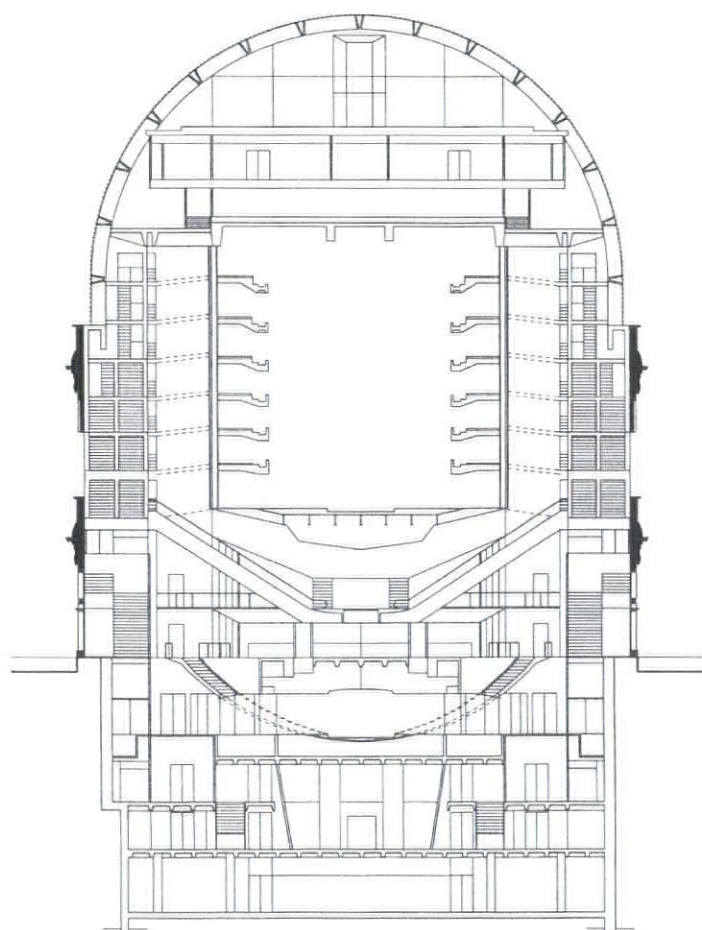
リヨン都心部の航空写真。オペラ座のボールト状の増築部分のボリュームが歴史地区に追加されていることがわかる。脇に新しい広場、奥に市庁舎、その奥に美術館前の広場へと続く。コンテキストに調和するボリュームのスケールがわかる



市庁舎中庭の奥に見るオペラ座のファサード。
ボールト状の増築は、
あらゆるコンテキストに調和する力をもっている



2階平面図 S=1:500 (■: 既存部分) 外壁とともに、ファサード側は部屋ごと構造体が残された



断面図 S=1:500 (■: 既存部分) 外壁を残しながらも、地下、内部ともまったく新しいデザインになっている。劇場コアは、ホールから吊り下げられている



オペラ座内部。黒い内装と赤いライトで構成されている

歴史的輪郭の再生

ガスタンクA,B,C,D棟

ウィーン（オーストリア）

A棟：ジャン・ヌーヴェル

B棟：コープ・ヒンメルブラウ

C棟：マンフレッド・ヴェードン

D棟：ヴィルヘルム・ホルツバウアー

Method: The transformation of historic cylinders

Project name and the location: Gasometer A, B, C, D, Wien (Austria)

Architects: Jean Nouvel (A)+Coop Himmelb(l)au (B)+Manfred Wehdorn (C)+Wilhelm Holzbauer (D)

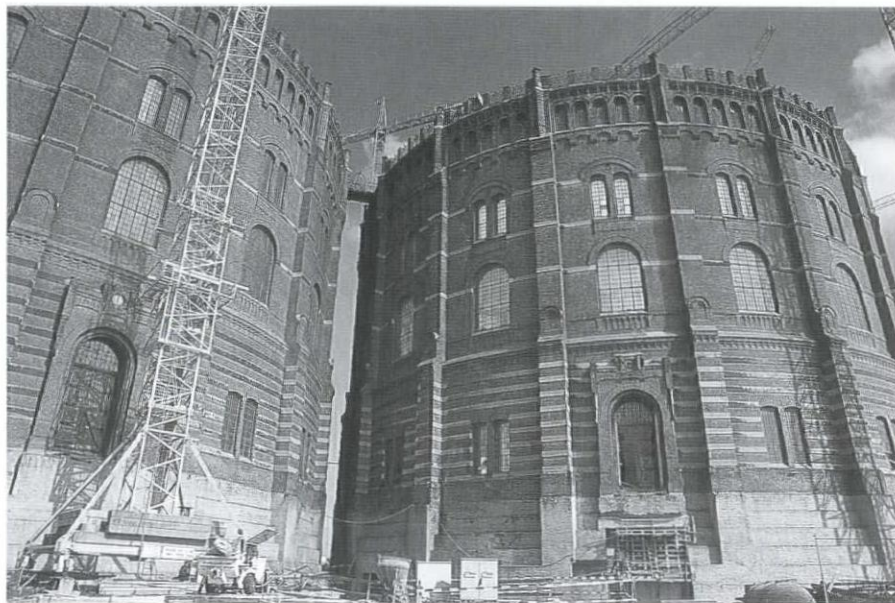
Program: Gasometer (1896-1899)→ Social Housing and Commercial Buildings

(transformation: 1995-2001)

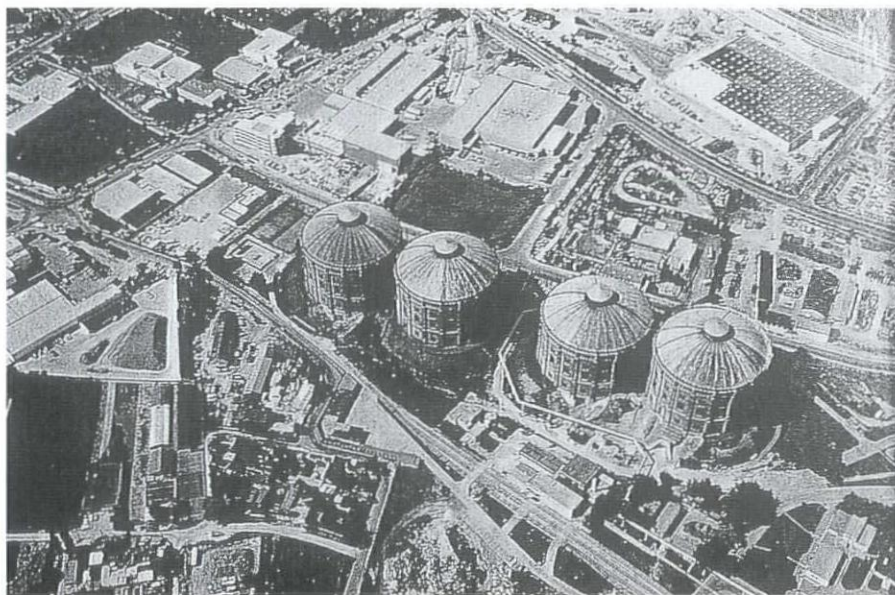
4つのレンガ造のシリンダーは、かつて明かり用のガスをウィーン市が供給するための施設として、1892年にコンペが行われ、4年後に建設されたもの。機能とは無関係に、高さ33mの外壁だけはイギリス風の歴史的な要素をもっていた。内部地下には非常用の水タンクがあり、これも含めると高さは72m、直径は64.9mの巨大なものであった。1899年から操業し1,630人が就業したこの工場も、ガス供給が電気に置き換わるとともに、しだいに不要とされ1981年に閉鎖されるが、その後、1988年の社会民主100年展で再び注目されることになる。

1993年に音楽祭などが催され、1996年にはM.ヴェードン教授が公共住宅、オフィス、ホテルへの転用を提案し、現在では都市計画再開発の対象となり、再びウィーン市の重要なシンボルとして再生されようとしている。1998年には4棟のデザイン案の国際展が催され、当初約700戸の住宅と文化施設、駐車場などの再利用プログラムがディベロッパーの参加を得て、ウィーン市の歴史的なモニュメントとして残されることになった。

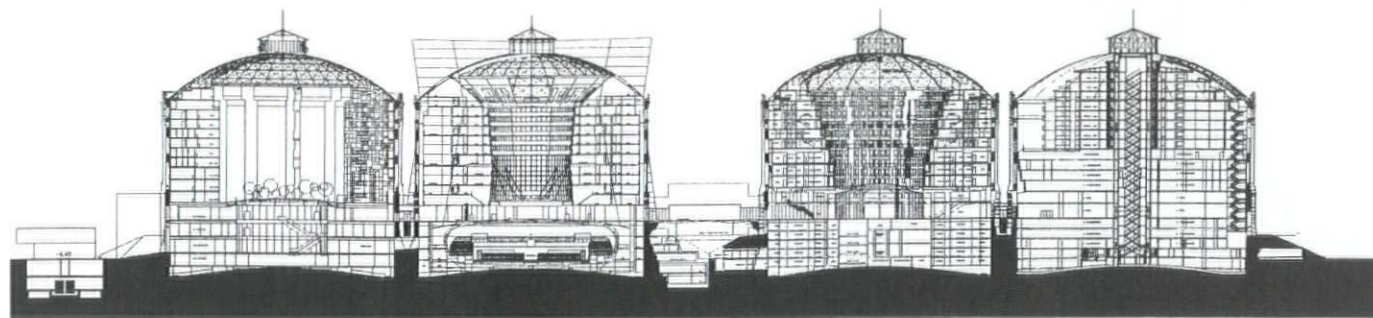
特筆すべきは、1) ガスタンクの特異な形態にもかかわらず、住宅転用を検討したこと 2) 4つのタンクに対して国際的な建築家を4人指名したことである。当初ひとつを、エンリック・オーエン・モスが担当していたが、その形態の難しさからディベロッパーに拒否され、コンペによってW.ホルツバウアーの案が採用されることになった。それぞれの棟が連結されながらつくられる新都市のイメージは、かつての工業地区と異なるだけでなく、建築家たちの協賛によって他の都市にはない、新しい文化の質を獲得するであろう。



ガスタンク外壁。内部とドームはすべて撤去された工事中の状態（1999年9月）



プロジェクト前のシェーリング地区の航空写真



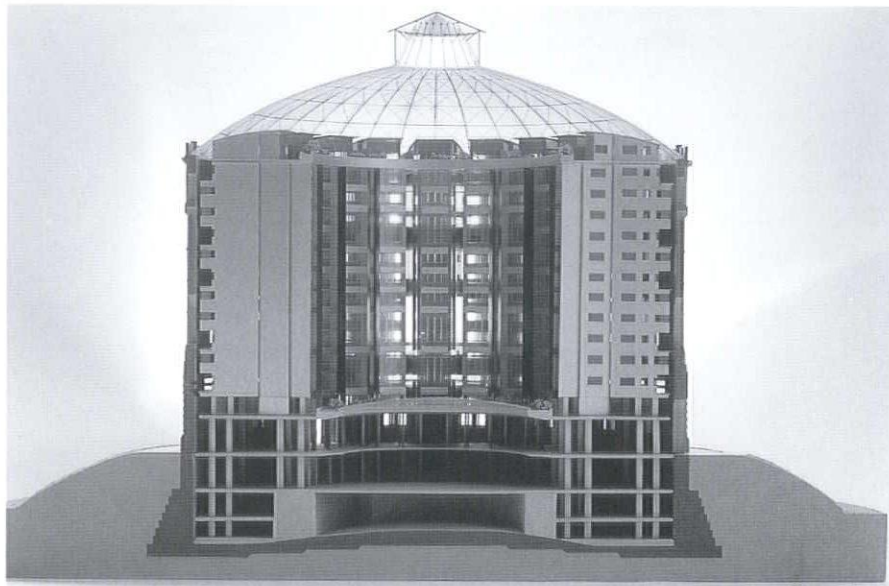
プロジェクトの連続断面図（左からA棟：J.ヌーヴェル、B棟：C.ヒンメルブラウ、C棟：M.ヴェードン、D棟：W.ホルツバウアー）

A棟

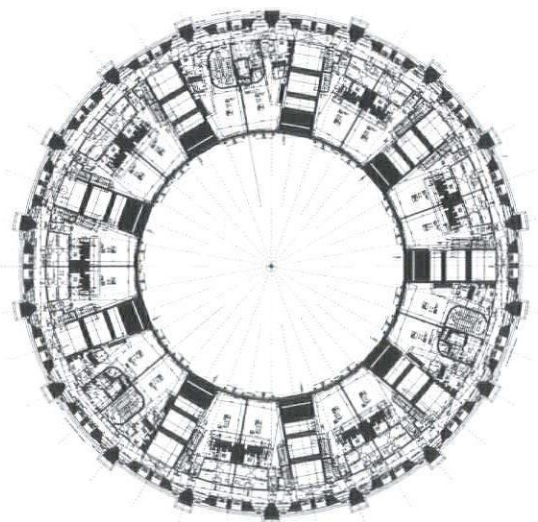
J.ヌーヴェル設計

J.ヌーヴェルの棟は、既存の建物に対して新しい住宅単位を組み込んでいる。新しい部分は基壇部の重いコンクリートと、軽い鉄骨造とから成る構造をもつ。

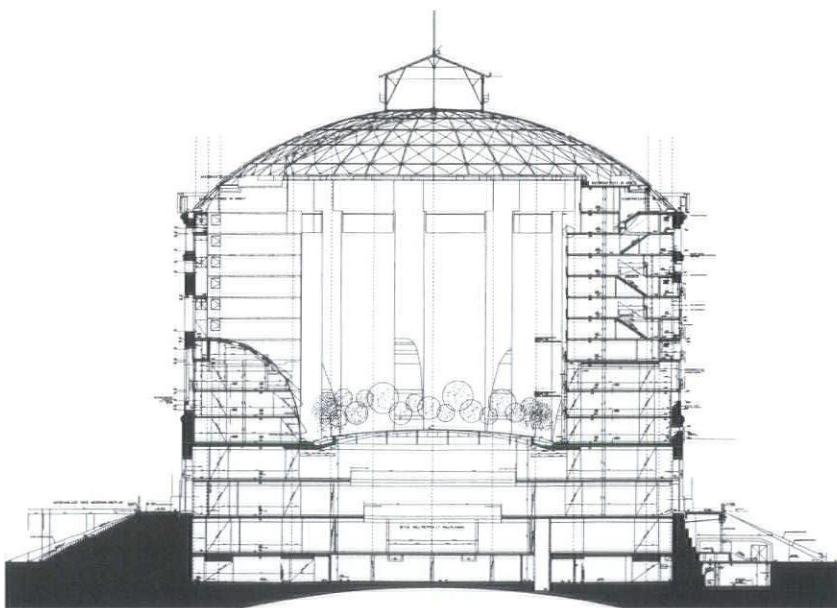
基壇部分は3層分が商業利用、さらにその上に3層分のオフィスと住宅が乗る。128の住戸は、2戸でひとつのユニットとなり、3つのサーキュレーションコアから成る。低層部のオフィスは、すべてつながっているのに対し、上層部の住宅は2部屋ごとに半屋外スペースに分けられているのが特徴である。中庭側の壁面は、「ガラス・ドーム」と呼ばれ、工業的作業としてのガラスパネルによって基壇部の商業スペースに光を採り入れている。



断面模型



8階平面図 S=1:1000 住宅部上層部に相当し、2部屋単位と半屋外とで構成されている



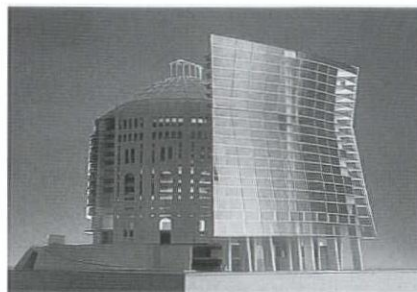
断面図 S=1:1000 既存の外壁を残し、地上レベルから3層分が商業スペースで、ガラスドームから光が入る。住宅部低層部と上層部とでタイプを変えている

B棟

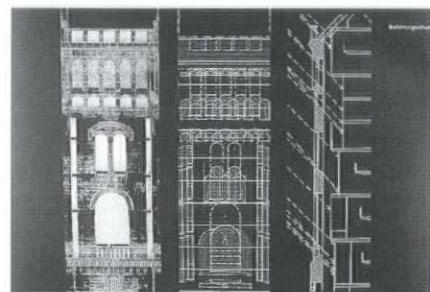
コープ・ヒンメルブラウ設計

既存のファサードを残し、3つの新しいボリュームが加えられた。既存の壁の内側につくられたシリンダー状の住宅部、「シールド」と呼ばれる増築部分の住宅部、基壇部分に組み込まれた多機能イベントホールからなる。自然光は中庭と、歴史的な壁の窓を通してシリンダー内に入る。またシールド棟は、北側のロジアのあるガラスファサード側から採光される。360種類の異なった住居形態は、メゾネット、ロフトタイプから、学生用のものまで含まれるとともに、一部オフィスを組み込むことで、職住近接を意図している。

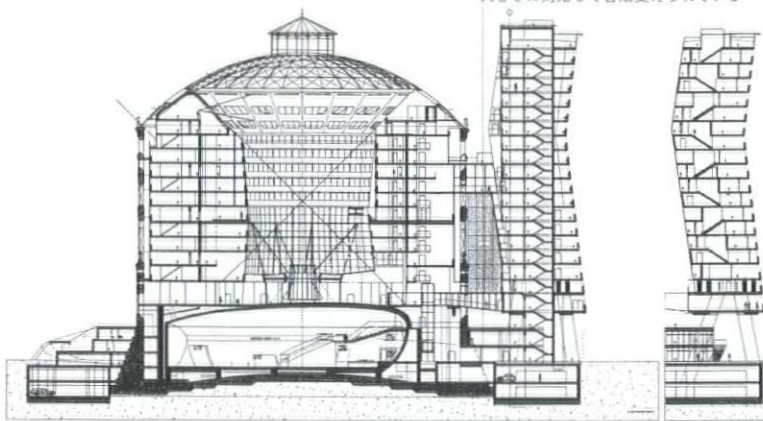
ホールへは、地下鉄に連結するショッピングモールからと外のグーグルガッセ通りからアクセスが可能である。しかし、住宅とホールが構造的にも完全に独立しているため、シリンダー内の住宅と、シールド棟の住宅との間に空間的、機能的バッファーがつくられている。これは住宅・職場・文化・商業が独立していることによって実現可能となったのと同時に、コミュニケーションも意図されている。最上階の「スカイロビー」は、住宅のための社会的空間として共有利用ができる。



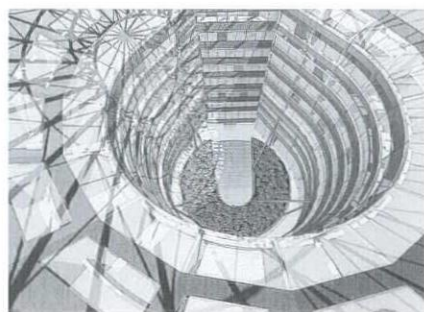
模型。右手にシールド棟のボリュームがスタディされた



採光のダイアグラム（右）。既存の壁の窓から入る光と新しい部屋の窓との間にスリットがあり、スリットの幅が既存の窓の大きさに対応して各階変えられている



断面図 S=1:1500 1階のイベントホールは独立している。最上階はスカイロビー



中庭のCG



既存の壁とシールド棟の接続部分を示すCG

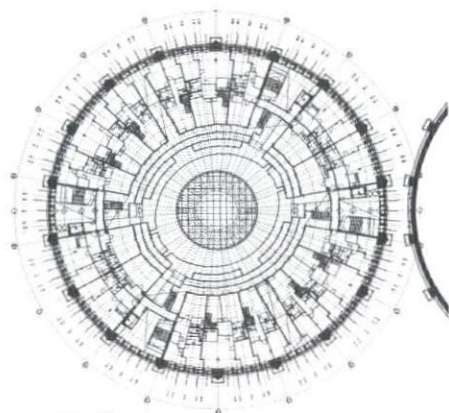
C棟

M.ヴェードン設計

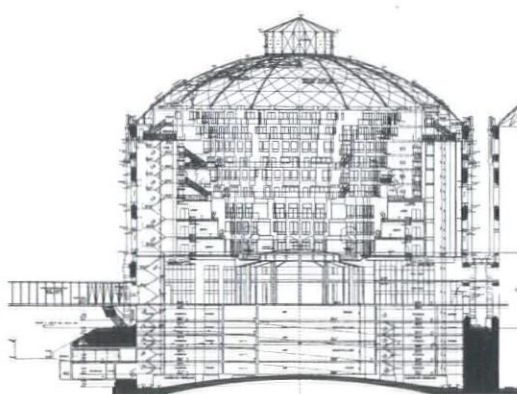
ヴェードンは、ウィーン市の保存指導をしている建築家であり、既存の環境を尊重している。このガスタンクの再利用を最初に提唱し、住宅利用の案も公開していた。ここでヴェードンは住宅としての住み心地の良さを優先し、中庭の緑化と光が入りやすいテラス利用を提案した。

基壇部には5層分の駐車場、モールレベルには

2層分の商業施設、その上に3層分のオフィスと6層分の住宅が組み込まれている。住宅部分は、歴史的な壁の内側に接した4つの階段室によって6つのグループに分けられた基準平面をもち、メゾネットタイプの住居が92戸ある。屋上は、シェル状の鉄骨フレームとガラスを用いた外部空間である。



平面図



断面図



模型写真

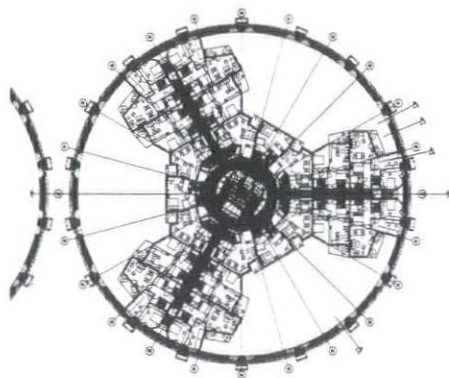
D棟

W.ホルツパワー設計

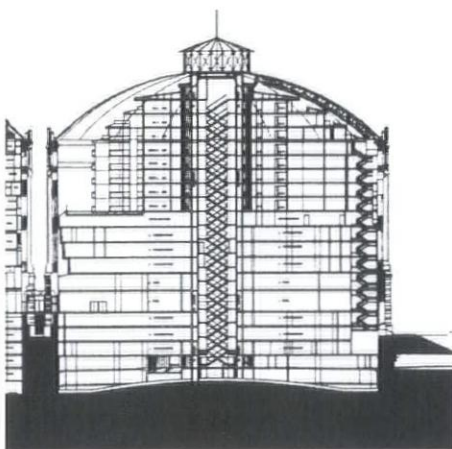
コンペにおいて、シェルとガラス面の位置を離し、中心にエレベータ動線、3つの廊下と3つの中庭を既存の壁面との間に構成したことが、W.ホルツパワー案の勝因だった。居住者はランドスケープとしての新しい半屋外を見出すことになる。

実施計画では、ショッピングモール2層分、オフィス3層分をワンフロアに変更し、上層部はコ

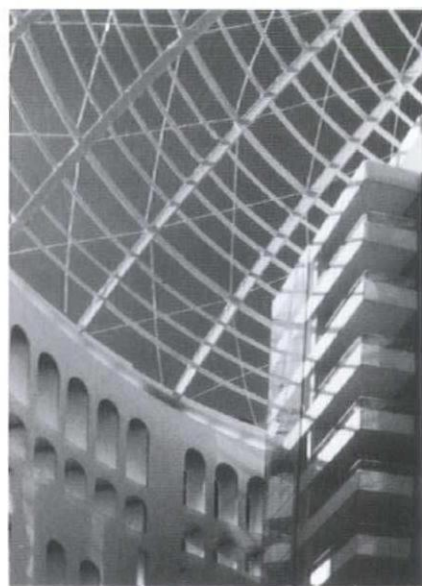
ンペ案の通りに3つの中庭をもつ平面構成による141戸の住宅が入る。地下部には3層分の古文書館、2層分の駐車場を計画。オフィスと古文書館はウィーンの国立古文書館の使用となる。また、幼稚園も併設される予定である。



平面図



断面図



模型写真

形態を乗り換える方法、変化させる方法

インタビュアー
ヴォルフ・デン・ブリックス (Coop Himmelb(l)au)

ヴォルフ・デン・ブリックス / Wolf D.Prix (Coop Himmelb(l)au)
1954年ウィーン(オーストリア)生まれ
ウィーン工科大学、南カリフォルニア大学、マーストリヒト大学に学ぶ
1980年、エシユウィンスキーと共に事務所設立



——ガスタンクのプロジェクトについてうかがいますが、その設計プロセスはいかなるもので、どのような共同活動があったのですか。

W.D.Prix (以下W.D.P.) このガスメータのプロジェクトは、今あるウィーンでのプロジェクトでも、もっとも重要なものだと思います。その理由は、単に規模が大きいということだけでなく、他に3つの要因があります。

まずはじめに、ウィーンの都市が社会住宅によってできているということです。ウィーンの建築は世紀末に建造されたものが文化の特質を担っていますが、それはオフィスやその他の施設であって、公共住宅が含まれていなかったのです。やがて現在に至るまで、社会住宅は都市に巻き込まれ、変化を遂げてきました。

次に、ウィーンではランドマークの保存が重要になっていることです。非常に周囲に影響のある建築のことです。それらは厳重に保存する傾向にあります。20年前まで使用していたガスのエネルギーも、現在では使用されなくなり、その建物の表皮だけが残されていました。建物を残そうとするいくつかの試行がなされましたが、誰もランドマークに出資できず、またどのようにすべきかわからなかったのです。建築家はホテルやギャラリーを提案したりしましたが、財政的な支援が得られませんでした。そこで今回のプロジェクトをコーディネートしたビショップ (Bischof) 博士は、地元の社会住宅の建設に興味をもったのです。住宅だけでなく、レンタルスペース、オフィス、文化施設などを含めた総合的で多機能の複合センターとして、新しい施設を組み込もうとしたのです。

最後の要因として、ウィーンは都心が歴史的に非常に強いモノセンターで、それが現代建築とは異なる発展をしてきた組織でできている点です。しかし、新しい都市センターをつくっていくとすると、現代建築で構成していきますよね。ここでは川の向こうにも新しい都市が建設されています。ですから今回のセンターを含め、ふたつの新しい都心とひとつの歴史的な都心の形成により、新旧の緊張を保ちながら現代建築に注意を払おうとするのが、我々のコンセプトとストーリーなのです。

——なぜ、あなたの担当する建物にだけシールド状のデザインされた棟がつけられているのですか。また、シールドの建物には多くのスタディがなされていますが、どのように決定しているのですか。

W.D.P. シールドの棟がついているのにはふたつの理由があります。

まず、それには新しい機能が含まれていて、また新しいサインにもなっているということです。イメージとして誰も建物の外観を変えようとはしていませんが、何か新しいことが起こっていることを誰もがわかるようにするため、建物の外側に新しい建物を加えて、新しいシェイプをもたらそうとしています。そこで、全体のシェイプに対する多くのスタディを行っています。

ふたつめの理由としては、財政的な意図として

都市計画が連動しており、必要な住戸数を設けることが求められたことです。これはとても財政的に重要なことでした。経済的にみて、新しい都心にふさわしいヴォリュームが出てきたわけです。3,000人以上収容する住居が求められました。インフラも合わせて整備されています。形は、他の建物とのバランスによって決められているとともに、多くのスタディの中から選んだものを発展させたものです。経済的な要求や正規の機能にも対応が加えられています。

——古い構造体はどのように再利用したのですか。また、どのように思われましたか。

W.D.P. 古い煉瓦の壁 (スキン) が囲っています。そのスキンには、元からの窓があり、構造はそのままにしています。

構造問題がどこにでもあって、下部の構造は、上部層の12万tの鉄骨とコンクリートでできたヘビーメタリックストラクチャーを支えているのです。古い壁には構造の負荷をかけるわけにはいきません。

——新旧の建物の間にあるスリットの考え方にとても興味があります。古い窓を通過して、新しい建物の窓に光が入るようになっていきますね。

W.D.P. はい。ご存じの通り、光、音響、構造の問題などをスタディする必要があります。我々の注意は、新旧の建物の間にあるスリットの幅を変化させることで調整しています。また、スリットによって調整するだけでなく、平面配置上でも、より良い光の状態を求めて計画しています。

——古い壁にはガラスが入っていて、内側の建物にもガラスが入っていますね。2重になっているのですか。

W.D.P. 古い壁にガラスはところどころ入っていたり、入っていないところもあります。

——スリットには空気が通り抜けているのですか。W.D.P. そうです。

——改造建築というものをどのようにお考えですか。オーストリア独自の方法があるのでしょうか。

W.D.P. 新しい世紀には、新しい建築が必要でしょう。我々は、移り換える (Transit)、形態を変化させる (Transform) 方法を発展させる必要があるでしょう。

——特に、新旧の間にどのような関係があるのか、そこに興味があるのですが。新旧はどのように結合するのでしょうか。

W.D.P. (ガスメータプロジェクトを指して) このようにです (笑)。

(1999年9月24日、ウィーンにて インタビュアー：宮脇 勝)

ガスタンク再利用の提案プロセス

インタビュー：マンフレッド・ヴェードン

——ガスタンクを改造するプロジェクトはとてもユニークな着想ですが、どのような経緯があったのか教えてください。

M.Wehdorn (以下M.W.) 驚くべきことは、実現しつつあるこのプロジェクトの内容が、すでに10年も前に考えられていたことです。私は1986年に、ガスタンクを使っていくつかの案を考えました。そして89年に今あるような住宅への転用を考えたのです。同年、「社会民主主義の100年」という大きな展示会にその案を発表しました。ひとつの建物はすでに利用可能な状態でした。また原則的なこととして、地下鉄のシステムも入ることを支持していました。つまり、今のプロジェクトの内容のほとんどは、10年前に考えられていたのです。

——ウィーン市はいつごろからガスタンク地区の整備に関心をもったのですか。ガスタンクの所有者は民間企業ですか。

M.W. いいえ、ガス会社は民間のものではなく、ウィーンの会社とヨーロッパの事業主体による最初の大きな共同体です。工場のいくつかはイギリスの技師が設計しています。計画の歴史を振り返る必要がありますが、以前は大勢の人がここに来て楽しむことができるように博物館利用を考えていました。それまでこの地区がどのようにあったか、そして今後どのようになるかを示す必要があります。

次に住宅利用を市に提案しましたが、当初それはクレイジーなアイデアだといわれました(笑)。今ある原型はもう当初できていたのです。住宅以外にも、すでにショッピングモール、オープンスペース、駐車場、オフィスなどのシステムは考えてあったのです。97年には、ブダペスト(ハンガリー)と共同で短期間ですがウィーンで展示会をし、この地区のディスカッションを行っています。

展示会では実現が可能だという確信が得られましたが、政治的な問題点が浮かびました。投票では反対の声も上がりましたが、国際的な展示会のフェアとなりました。その後も政治的な関心や建築家の関心を継続させる必要があったので、都市計画上の位置づけをする仕事をしましたし、出版もしました。ガスタンクの転用の必要性を市に理解させる必要がありましたからね。そして、徐々に計画を変えていったのです。

——このプロジェクトを実施するにあたっては、4人の建築家が参加することになったのも興味深いことのひとつです。この仕組みもユニークだと思うのですが。

M.W. つまり、4つの異なった要素が見出せるということですね。最初、ウィーン市が4人の建築家を招待しました。エンリック・オーエン・モス、ジャン・ヌーヴェル、コープ・ヒンメルブラウと私です。しかし、オーエン・モスのプロジェクトは実施できなかった。経済的に合わなかったようです。そこで次の段階で、4人目をコンペで決めることになりました。地元の建設会社と共同で担当することになりました。全体の責任は市が負っています。

このプロジェクトの父親は私です。おもしろいことに、このプロジェクトにはふたつの側面があります。ガスタンクとは思えないような19世紀様式のレンガ造であるとともに、アパートメントの窓に見られるようなディテールが既存の建物にあることです。それは私にとっては信じられないデザインなのですが、アパートメントに改造することによって、建設から100年後の今、遂に本来の窓の意味を得たことになります。

タンクの基壇には災害に備えた水のタンクがあり、上方にはドームがかかっていた。内側にもドームがあり、ガスの量に応じて上下に動くことができました。つまり、窓は機能をまったくもっていませんでした。一方、基壇部分のポリウムが分割されていることも、現在の住宅化の場合にも活かされています。最上部のドームも修復して架けることになっています。展示会のときにはそこを回ってみることができ、エキサイティングなものになりました。

——あなたの担当する棟のプロジェクトのコンセプトを紹介していただけませんか。

M.W. 現代の建築では、自然との融合が重要だと思われ、私にとっては、グリーンハウスのようにしようと思いました。ですから、基壇中央部分に大きな木があって、すべての部屋からみることができ、建築と自然をミックスすることに関心があります。

ドームのフレームですが、防災上からもガラスは入っておらず、中庭は外部空間です。平面には4段階あります。外部から入るセクターがあり、どこも棚になっていて、外部に面しています。コープ・ヒンメルブラウの案との違いは、アプローチの途中で誰もが古い壁を通して外側を見渡すことができ、住宅にせよオフィスにせよ外側から直接入れるようになっている点です。

——修復して架けられる上部のドーム構造は、古いレンガの壁に乗せるのですか、それとも新しい構造の方に乗せるのですか。

M.W. 古いオリジナルの方の壁です。

——普通、新しいものを上に乗せる場合、古い構造を信用しないものなのですが、この場合は大丈夫なのですか。

M.W. 思うに、古い構造がつくられた時代が重要です。19世紀の構造材は、少なくとも現代のものより良いものです(笑)。本当です。

——このガスタンクのプロジェクトには、国の文化財保護のようなコントロールがかかっているのですか。

M.W. いいえ。これは再利用のためのものです。国のモニュメント保存の対象になってはいません。国の担当局からは、再利用の認可を得ています。しかし、保存のための援助費用はかかっていません。1994年の都市マスタープランでは部分的な注意を付けています。

(1999年9月25日、ウィーンにて インタビューアー：宮脇 勝)



マンフレッド・ヴェードン / Manfred Wehdorn
1942年ウィーン生まれ
1969年ウィーン工科大学卒業
1981年ウィーン工科大学教授(モニュメントおよび土地の修復)
1991年ウィーン市都市開発諮問委員会会長
ウィーン市の歴史地区の指定や世界遺産や産業遺産などの保全活動を行っている

新旧の混成と屋根の延長

アンダルシア文化遺産研究所「セビリアの修道院」

セビリア（スペイン）

バスケス・コンスエグラ

Method: The integration of the mixed development between old and new/ The prolong of roof

Project name and the location: Andalusian Heritage Institute "Monastery of Seville", Seville (Spain)

Architect: Guillermo Vazquez Consuegra

Program: Monastery (5C)→ Ceramic Industry (transformation: 1835)→ Institute(transformation: 1987-90, 1992-95)



入口付近。既存の建物の瓦屋根が延長され駐車場の屋根に続いている。構造は鉄骨に切り替わっているが、屋根の素材が継続された

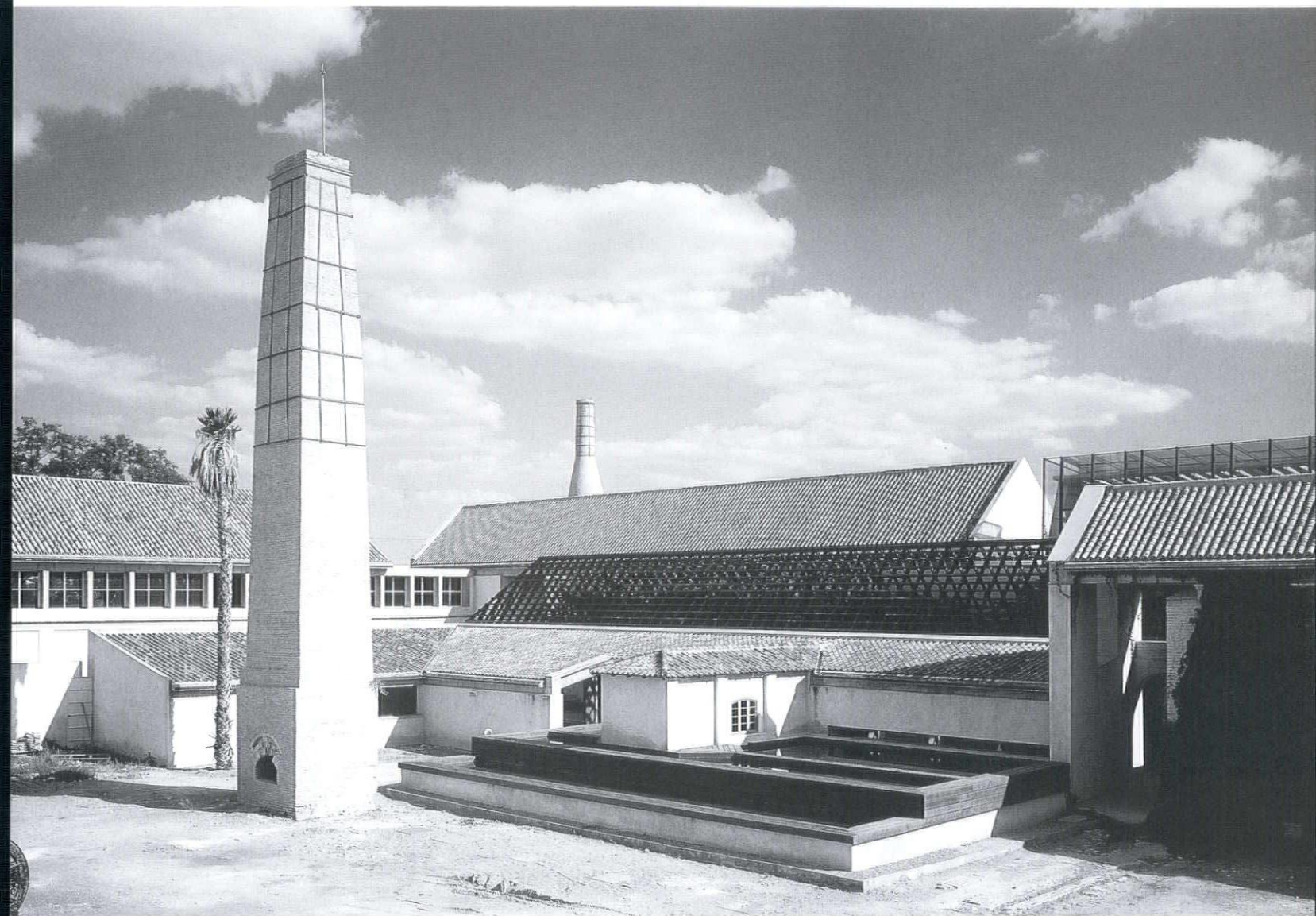
セビリア市街と川を挟んで位置するこの修道院は、14世紀から徐々に手を加えて成長してきたが、ある時期から使用されなくなっていた。その後、1835年にイギリス人の実業家が買い取り、有名な製陶工場に改造され、煙突が林立する中庭の空間となった。そして今回の改造計画では、アンダルシア文化遺産研究所が入る。

既存環境では、建物の質や保存状態が不揃いで、その混沌が空間の特徴をつくっていた。たとえば敷地西側の倉庫の一角は、何度も改造されたにもかかわらずかなり整っていた。修道院の個室跡も密集した中に残っていたことが確認されている。

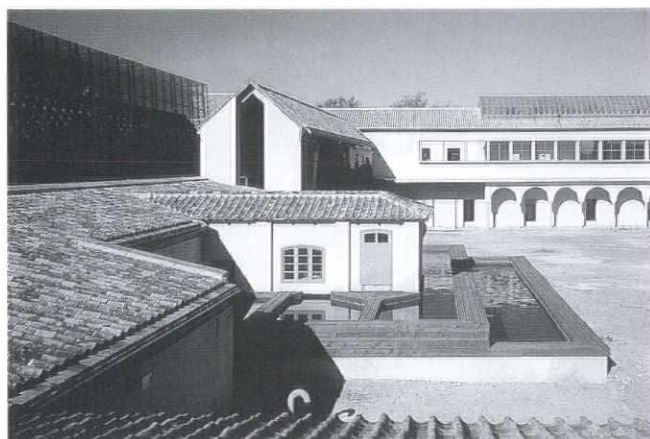
1992年セビリア万博の開催準備の一環として、アンダルシア地方の文化を建築的に示すために今回再利用の計画がもち上がった。第一段階ではどの構造を残すのかを检查し、混在した建築の組織構造をはっきりさせ、撤去部分を決定した。このため、北側の講堂は手つかずのまま残されている。第二段階では既存建物の各辺に沿って新しい建物を配し、徐々に調律をおこなっている。旧来から残されていた空間性質は回廊や通路、中庭といった重要な部分が保持されている。ここに新旧のデザインが対比しながらも、建築計画や配置計画では新旧が混在融合し、全体では静かに調和し

ている。

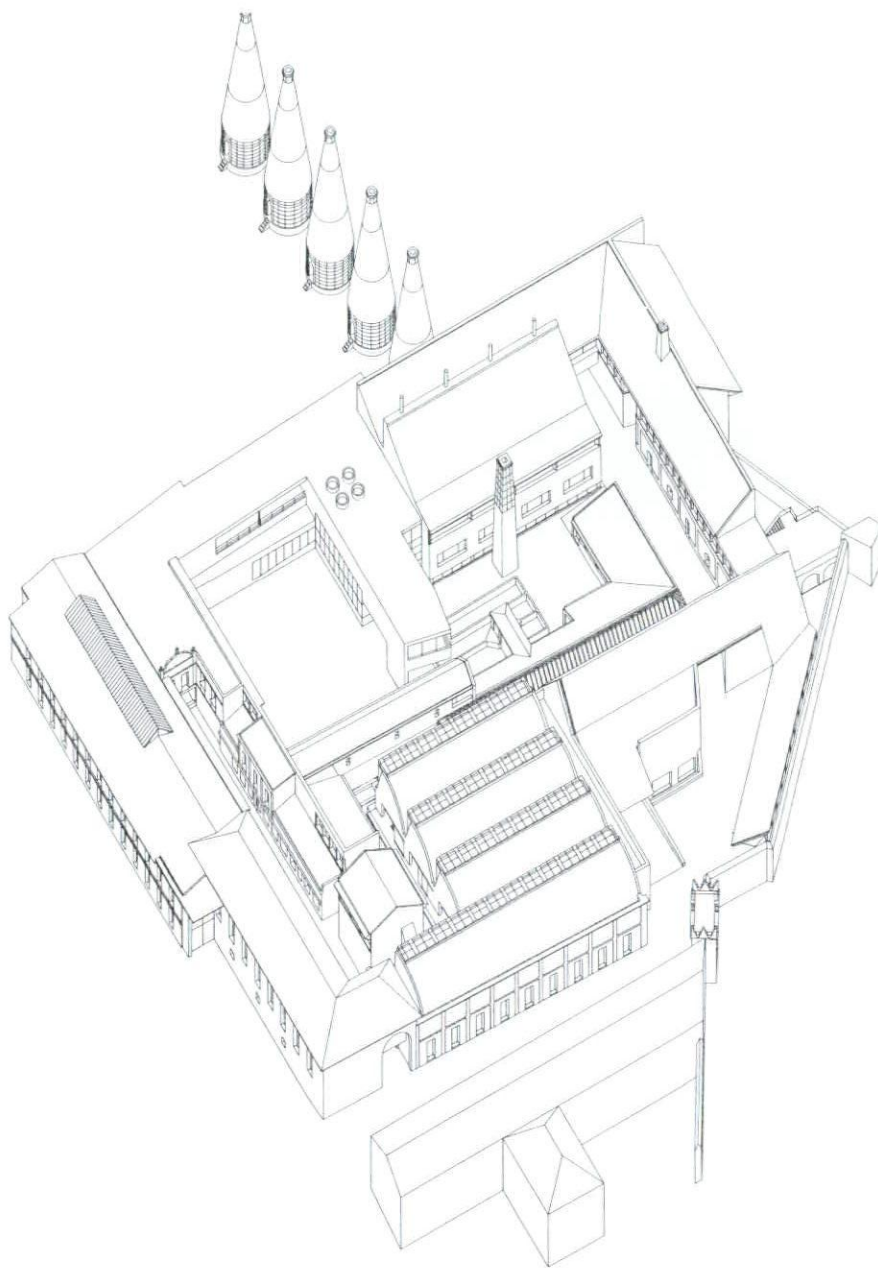
このプロジェクトでは、アンダルシア地方の文化を懐古的に保存するのではなく、取捨選択すること自体が設計行為に入っている点が重要であろう。過去からの地域の文脈が継承されるように、良質な部分が残されながら、新しい部分と組織的に融合して総合拡張している。ときおり見られる軽快な屋根の増築手法なども興味深い。工事は万博のために90年まで行われ、1992～95年に再開したが、予算上の問題でまだ完成には至っていない。この施設は研究所のため、展示会期以外、普段は中に入ることができない。



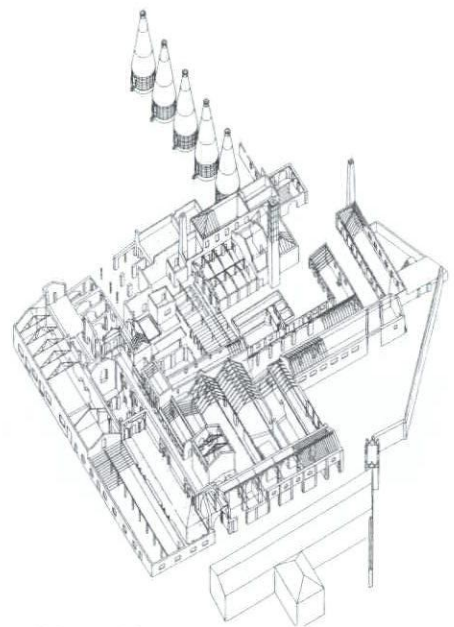
中庭。旧貯水槽を中庭の池としている。手前の低層部カフェと、奥の建物に挟まれた部分に、新しい木造屋根トラスが架けられた回廊部分が組み込まれている



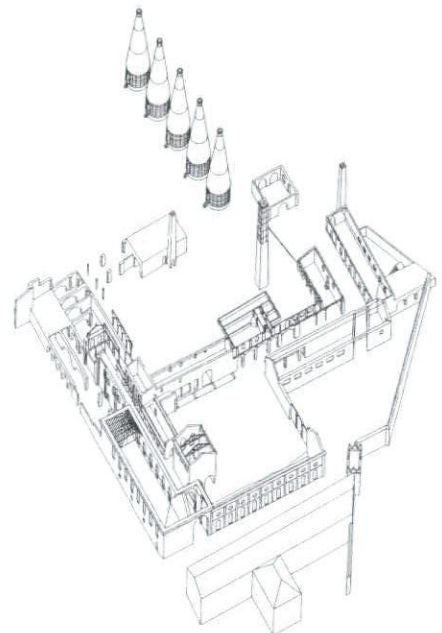
中庭。ヴォリュームはそのままに、既存の建物の切り妻の変更がみえる。奥の右側には、既存の小さなアーチ構造体を含んだギャラリー棟があり、新旧の混在した空間になっている



新たに計画された部分を加えたアクソメ



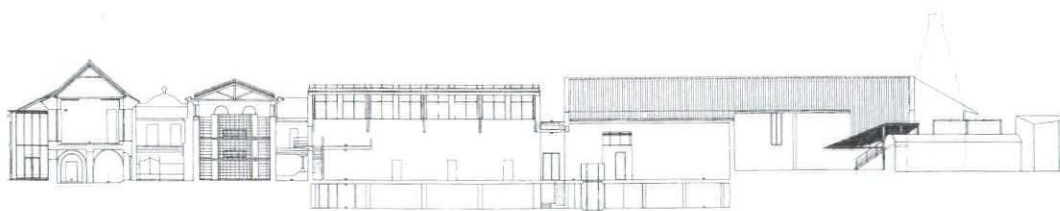
既存の状態のアクソメ



撤去後、残した部分を示すアクソメ



断面図 S=1:800



断面図 S=1:800

批評性のある新旧のコントラストへ

インタビュー：バスケス・コンスエグラ

——どのようにプロジェクトが始まったのですか。
V.Consuegra（以下V.C.） かつてここに残っていた建物は、解決せぬままに放置してあったものです。

1986年からプロジェクトが始まり、1992年まで仕事を続け、この年のセビリア博ではイタリアによる地中海風景の展示会を催しました。我々は、そのためにも仕事をしましたが、博覧会が終わった後は、この建物の再建が中断してしまいました。1995年から96年くらいまでしばしば整備しましたが、未だ完成はしていません。

——プロジェクトは州政府の出資なのですか。

V.C. そうです。アンダルシア州政府です。今日問題なのは資金がないことです。さらに問題は、この建物の再利用プログラムがそのときなかったことです。プログラムなしに、改修のプロジェクトを開始したのです。

特徴的なのは、セビリア博のためのパビリオンの中で、この建物だけがアンダルシア地方の特性を表していたことです。他の建物は、新設のパビリオンばかりです。

この設計時期と同時に、私はセビリア博のタワーやメインパビリオンのプロジェクトもやっていました。

——僕も見にいきました。盛大なものでしたね。

V.C. 博覧会以前は、あそこには何もなかったのです。世界中から観光客が何か目新しいものを見にやってきました。そのため、地域的な建物も必要になったのです。あの建物だけが、地域に残された建造物としてあったわけで、組織側はそれを活用しようとしたわけです。

そこで、廃墟化していたあの建物を、とても急いで改修するという話になりました。だから、利用プログラムなしに、建物の改修設計に入ることになったわけです。最初の案は、アンダルシア博物館でした。次に情報学校、最終的には、現在あるように文化財修復研究所になりました。

——文化財保護サイドのコントロールはどのようにあったのですか。スペインにおける文化財保護と改造のための制度はあるのですか。

V.C. スペインでも厳しいです。改造に入るまでにモニュメントの調査をしなくてはならないことになっています。

しかし、このプロジェクトの場合は、ちょっと特殊だったと思います。つまり、政府側が博覧会に間に合わせるために改修を急いでいましたから、コントロールはこの場合、他のものより厳しくなかったと思います。私自身の判断で、建築的空間の特質を判断し、取捨選択することができました。通常だと、文化財をあつかう監督者は、現代建築家にその改修を任せることに不安をもっています。現代建築の特質がだいぶ違いますから。しかし、これは正解ではないと思います。過去の建築と現代の建築の「結婚」について、本当に自分が信じるころでは、デザイン上制御できるものだと思います。

この建物から発見された遺跡や工場建築を、我々

は現在の価値において見立てることができました。それがもっとも重要なことです。考古学上とても興味深いものも、プロジェクトの一要素として興味をもって見ていました。過去のものではなく、今のもの、未来のものと共に使っていました。利用価値のない遺跡部分も考古学的価値として、壊さずに覆っている部分もあります。

——私は、あなたの改造方法にとっても興味をもっています。他の建築家と違って、古いものと新しいものとの間に、あるハーモニーがあるからです。これは現代建築をベースにすると、簡単そうに実際難しい手法だと思います。

素材も伝統的なものを併用し、屋根の角度の延長など、連続して使える部分も取り込んであります。それでいて軽くなっていますね。

V.C. 今日、修復建築の手法は、ふたつの方法があると思います。

ひとつは、マニュアルに則って、同等の型や素材を使っていくことで、義務でもあるものです。歴史主義ともいえるでしょう。もうひとつは、現代建築によるコントラストを並立することです。

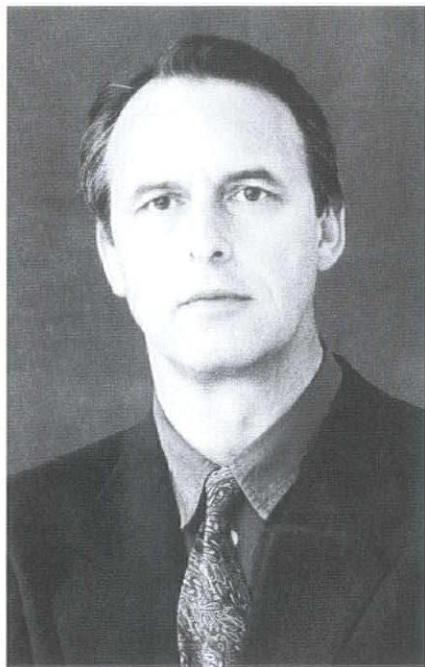
私は、後者に興味をもっていますが、ただし、素材や類似性にも配慮し、接合の調整を考えている点が特徴でしょう。関係性を試しています。新旧の出会いに配慮し、新旧を切って対比させる方法ではありません。縁を切って対比するのに比べて難しいですが、興味深いです。アクセントを付けながら、連続させていくのです。モニュメントは、存続する中で最高の価値になるように介入していく方が良いでしょう。さまざまな要素が長い時間をかけて総合化していきます。

私の改造以降も、誰かがあの建物に介入し、さらに価値を上げていく可能性が残されています。建築のモニュメント性とは、100年とか人生の期間よりもっと長いものでしょう。大きな建物になればなるほど、改修や変更が加わってきて、アイデアが重ねられていくものです。

そして、プロタコニズムに対して、私は「静かな建築」を話しています。歴史主義はここではとても簡単です。それは私の場合興味がありません。興味があるのは、新旧のコントラストや批評です。類似したプロジェクトをセビリアでもまたこころみえています。

（1999年9月3日、セビリアにて インタビューー：宮脇 勝）

バスケス・コンスエグラ / Guillermo Vazquez Consuegra
1945年 セビリア（スペイン）生まれ
1972年 セビリア建築学校卒業、建築高等学校教授
1988年 ヨーロッパ建築コミッティー、アンダルシア建築コミッティーのメンバー
1989年 フエンスアイレス国際建築セミナー客員教授
1992年 セビリア万博の航海パビリオンと展望塔の設計



鉄道地区改造と旧駅のアーチ保存

フランクフルト 21

フランクフルト (ドイツ)

フォン・ゲルカン&マルク+パートナーズ

Methods: The transformation of the railway district / The preservation of the old arches

Project name and the location: Frankfurt 21, Frankfurt (Germany)

Architects: Meinhard von Gerkan, Mark and Partner

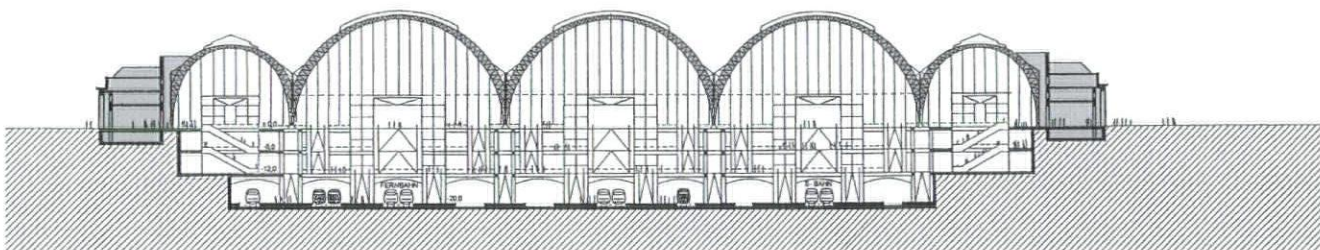
Program: Station and Railway (19C) → Complex Development (transformation project: 1996)



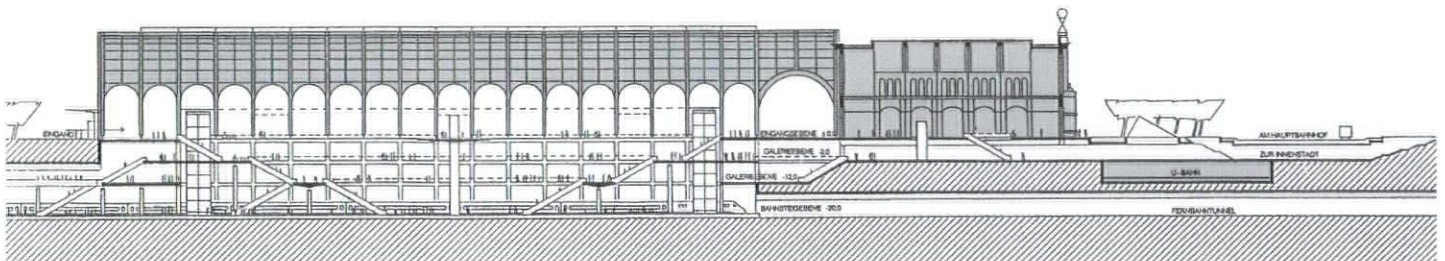
現在のフランクフルト中央駅付近



改造後のフランクフルト中央駅付近のCG モンタージュ。既存の駅アーチを残し、軌道を地下化する
ことで、地上部を建物とオープンスペースに転換する。貨物用の駅を撤去して市街地化する
提案



正面側の断面図 (■ : 既存部分)



長手方向の断面図 (■ : 既存部分)

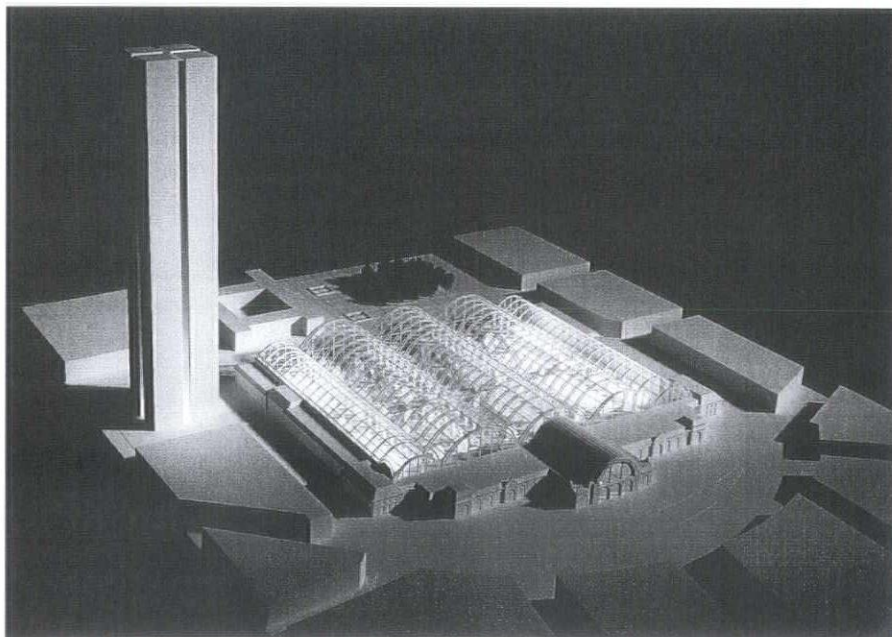
現在のフランクフルト駅ターミナル部分は、機能的に老朽化している。このため基本計画案では、既存の大アーチなど歴史的な価値の高い大部分を残しながらプラットフォームレベルを現在よりも約20m下げ、地下鉄よりも深い部分に高速鉄道を通過型で通すことが計画された。既存の建築物や鉄骨アーチは、新しい強化コンクリートで同じレベルに保ちながら、アーチから入る巨大な自然光を使い、大規模な地下空間がまるで地下に在るとはわからないほどのヴォリュームで改造されるというものである。駅を地下拡張することにより、さまざまな方位からの人のアクセス性が高められると同時に、ホール全体の視覚的效果も立体的に高められている。地下空間には商業施設なども入り、複合施設としての機能も高められている。さらに、軌道が地下化されることで、駅周辺の地上部分が公園とオフィス街を建設することが可能になるというメリットがある。

この一大プロジェクトは「フランクフルト21」と呼ばれ、中央駅付近の67.5haと隣接する貨物駅の撤去による70.8haの土地が再開発用地として都心部に出現する。こうした駅空間の立体化を用いた新しい都市デザインの手法は、海外の他の諸都市にも影響を与えつつある。

フォン・ゲルカン+マルクは、中央駅の後ろ側に160m幅で3kmの緑化されたセントラルパークと、両側に住宅を中心とした建物を建設するという提案をしている。一方、もうひとつの駅の跡地利用地区は、既存のビジネス街に隣接し、60m幅で2kmの緑化された大通り「トレード・フェア・ブルバール」を中心に、両側に高層オフィスや住宅棟が建設提案されている。彼らは高層ビジネス街を予測しており、両方合わせると実質100万m²の床を生み出すことができると報告している。



プラットフォーム・レベルからのCG。地下に居るとは感じない大きな空間とトップライトの採用。既存のアーチを強化コンクリートで持ちあげている



模型

改造型の駅デザインと鉄道の地下化

インタビュアー

マインハルト・フォン・ゲルカン（フォン・ゲルカン & マルクハルト・パートナーズ）

——ドイツにおける駅の都市デザインの状況はどうなっているのですか。ドイツ鉄道会社と地方自治体の間にパートナーシップがあるのですか。
M.Gerkan（以下M.G.） 今世紀初めから7年前まで、ドイツ鉄道は国鉄でしたが、現在では民営化し独立しています。しかし、経営面では地方自治体の支援を得ています。交通会社としてはヨーロッパの中で最大規模ですが、財政的に公共交通のための支援を得ていて、地方ごとのプロジェクトに応じて所有したり売却したりしているのです。

——日本とドイツでは同様の状況があると思います。したがって、財政的に公共支援する場合、プロジェクトに行政などが参加することになると思いますか。

M.G. ええ。都市計画として、方針を加えることになりますからね。鉄道会社はそれぞれの自治体において、都市計画上の許可を受けなくてはならないので、地方自治体と共同で事業を行う義務があるのです。

——駅プロジェクトに参加していった過程を教えてくださいいただけますか。

M.G. 5年ほど前、ドイツ鉄道会社がプロジェクトを検討し始めていて、プロポーザルする機会がありました。しかし、政党に応じて反対が起こり、当時それらのプロジェクトは公開することができないという非常に難しい側面がありました。第3案の段階でようやく公開でき、自治体の都市計画家と政府の承諾を得ようとしてしました。

20、30年と経つと都市化が進み、もうひとつの都市がそこにあることになりました。お金はかかりますが、将来のことを考える必要があると考えたのです。

——フランクフルト駅に関しては、既存建築を活かした改造タイプとして興味深いですね。新しい構造が古い構造を持ちあげていますよね。

M.G. フランクフルト駅は街でも歴史的建造物として重要であるとともに、世界的にも駅としては古いもののひとつとして貴重ですから、壊すことはできないと思います。

——ファサードは保存される面と新しくする面があるのですか。

M.G. ファサードは既存のままです。変わるの地下空間です。

——線路側をカバーして反対側にも新しい都市をつくらうというのがコンセプトかどうかについてですが、実現の可能性はどうですか。

M.G. まだ議論中です。政治レベルで賛成も反対もあります。とてもコストがかかるためでしょう。

——誰が反対しているのですか。こんなにグリーンスペースがあるのに。

M.G. 多くの人ですよ。緑の党とか。

フランクフルト駅のプロジェクトでは、軌道が地上レベルよりも35m地下になっています。そのレベルに至るまで、段々に商業テナントが計画

されています。駐車場、映画館などもプログラムされています。ただ、周辺の関係者たちは反対しています。これだけの商業施設ができると、既存の商店街は存続できなくなる。それが反対者たちでもあります。

——京都駅でも同じ議論がありました。

M.G. そうなんですか。ですから我々は既存の駅の様子とプロジェクトのモンタージュとを比較して見せています。

——建築と都市デザインの両立について、どのようにお考えですか。若い建築家たちに都市計画に参加することを薦めることができますか。

日本では丹下健三氏のように巨大なプロジェクトに参加できると若手は思っていない。

M.G. ドイツでは、フリーランスの建築家は、コンペに参加し勝つしかないでしょう。しかし、都市デザインの仕事はそれとは異なり、とても大きなチームを組むことになります。ひとりでは行うことはできませんから、大なり小なり匿名性となるわけです。ですから公開することがとても難しいのです。

都市デザインの仕事は重要ですが、多くの人が設計に参加しているため、都市計画上とても責任がある。だから匿名なのです。ドイツでは、都市計画のための新しいアイデアは通常フリーの建築家によるものであって、都市計画プランナー自身のもではありません。たとえば、ひとりの建築家として他の都市で鉄道関連のデザインしようとします。もしそこで鉄道会社とともにプロジェクトを進められたなら、学者や学生たちと共同してプロジェクトを進めることができる者として、知られるチャンスになるでしょう。都市デザインも都市計画も政府や自治体の仕事に連続しているからです。

——その場合、建築家は政府や都市計画部局のコーディネーター役になるのですか。

M.G. いいえ、コーディネーターとは違います。都市計画サイドにプレゼンテーションする側の立場です。今朝も都市計画サイドと会議をしていました。多くの仕事は行政に関わっているため、できることとできないことを選択や、ほんの少しの部分だけがクリエイティブなものなのです。コンペに勝って人に知られるようになれば、自分の学生にも言っているのですが、実際に新しい道を実現しようとする、とても難しいものがあります。

——あなたは多くのコンペで勝ち抜いてきましたが、現在は大学で何を教えられているのですか。

M.G. 建築設計です。生活環境として、都市全体のデザインからスタートするようにと学生たちに言っています。

（1999年10月1日、ハンブルグにて インタビューアー：宮脇 勝）

マインハルト・フォン・ゲルカン / Meinhard von Gerkan

1935年リガ（ラトヴィア）生まれ

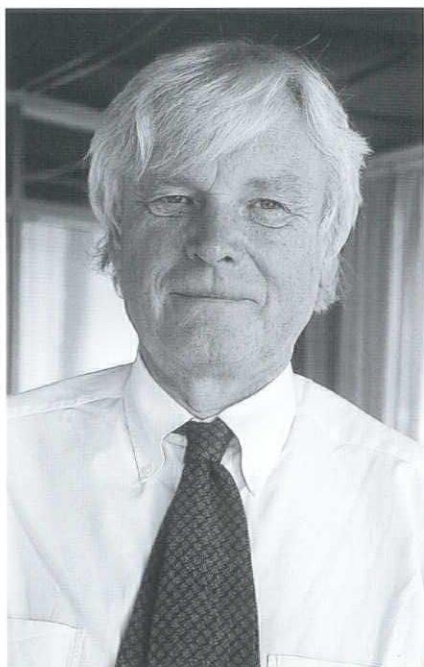
1964年ベルリン工科大学、プラウシッシュバイク工科大学を卒業

1965年ベルリンとともに事務所を開設

1974年プラウシッシュバイク工科大学教授

1995年 AA&A 会長

1981年1号のものは100を越える。現在、ベルリンの新レール駅を建設中



モダニズム建築の再生 とル・コルビュジェの精神

フィルミニのユニテ・ダビタシオン再生プロジェクト

フィルミニ（フランス）

アンリ・シリアーニ

Methods: Revitalization of modernism architecture and Le Corbusier's spirit

Project name and the location: Firminy, Firminy (France)

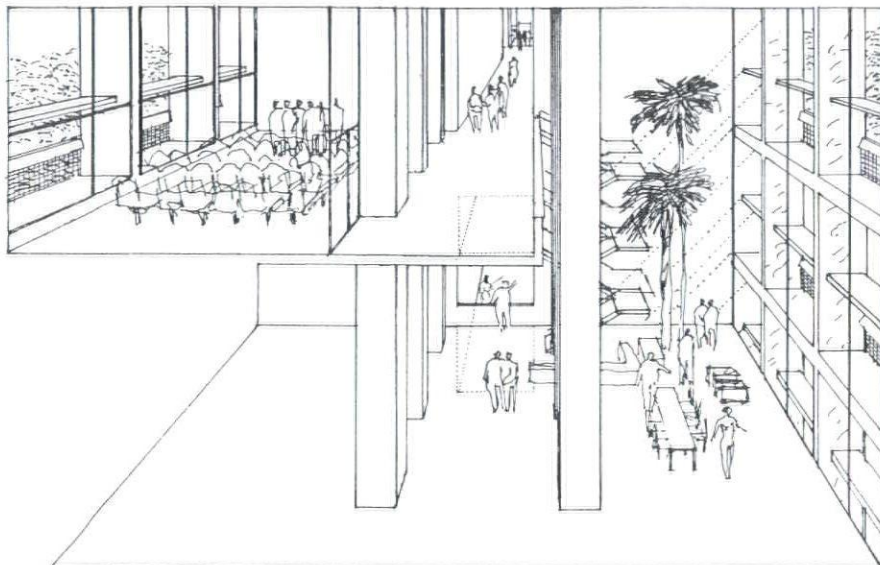
Architect: Henri Ciriani

Program: Housing (1967)→Housing(Additional project: 1995-)

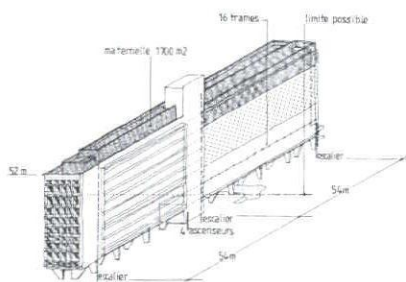
フランス中央部フェルミニ市にあるユニテは、ル・コルビュジェのユニテの実作4つのうちでもっとも低予算でつくられたものだ。当初考えられていた都市計画も、炭坑の閉山により実現されず、郊外に1棟だけが建設された。居住者は現在全戸のうち約半分。所有者のフィルミニ住宅公社は防犯の理由で南側に住民を移動させている。この後、同公社はコルビュジェの良き理解者である建築家アンリ・シリアーニに改修を依頼し、約30年経たモダニズム建築を現在の建築法規に則って改造することをすすめた。

シリアーニは、住宅のタイプを本来のユニテのように改造し、北側に非常階段の設置、屋上の増築、文化的プログラムの導入などを提案した。さらに、ユニテの孤立化を避けるために、他の建築家を招いて周辺にも集合住宅などを徐々に建設し、ル・コルビュジェの博物館として活性化するように説得している。しかしル・コルビュジェ財団は、完全な保存を主張する反対意見書を市と公社に提出し、計画は議論中である。シリアーニによれば、このユニテは他のユニテと異なり、コルビュジェ自身の考えが実現できなかったことを指摘し、ヴォリュームやファサードをそのままに、本来の活きたユニテの風景へと向かわせる改造をこころみているという。

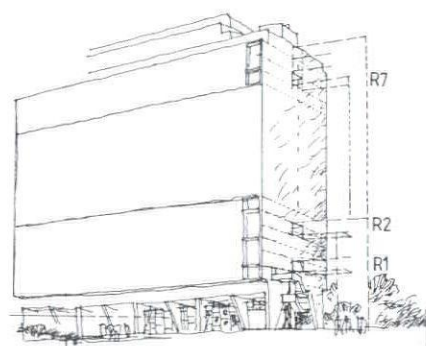
モダニズムが過去の一様式として扱われるのではなく、その理想を継続する意志として増築設計される様は注目すべきであろう。また、シリアーニ得意の光に満ちた空間は、晩年のコルビュジェを知る建築家としてモダニズムを勇気づけるに違いない。



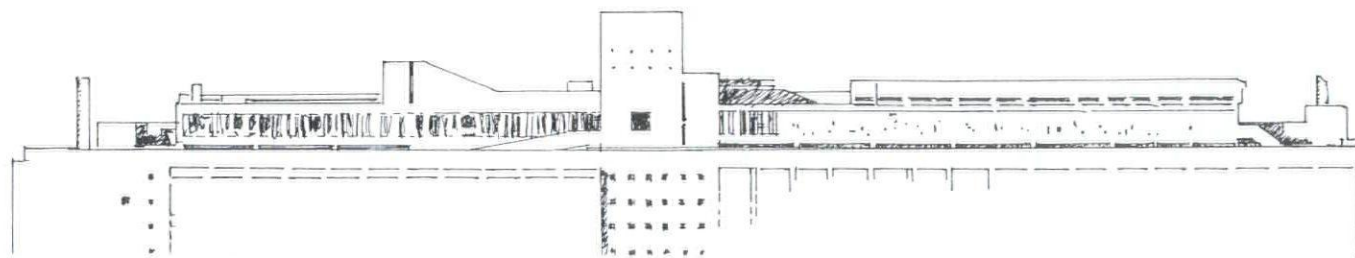
内部のパブリックスペース。両側から光が入る吹き抜けホール



改造後のプログラム。幼稚園としての屋上増築（1700m²）、奥側上層の生活用プログラム改造（4000m²）、中層部分のホテル転用（6000m²）、低層部の独立したサーキュレーション（4000m²）、中央部の4機のエレベータの設置



北側の切妻面と非常動線の付加の検討



屋上のボリューム。左側が幼稚園

コルビュジエのテーマを理解し再生へ

インタビュアー アンリ・シリアーニ

——フィルミニ市のコルビュジエの建物を改造するというアイデアはとても衝撃的なのですが、モダニズムの今後の問題を明らかにするためにも、詳しく教えてください。

H.Ciriani (以下 H.C.) フィルミニ市のユニテもコルビュジエの他のユニテのように計画されていたとすると、3つの棟から成っていたでしょう。しかし土地は造成されていたにもかかわらず、1棟しか建てられませんでした。この街の中心に競技場があります。彼はここに理想的な街の中心地をつくろうと試みていたようです。

私がここで「何ができるか」という仕事を依頼されたとき、この公共住宅に住人は半分しかいませんでしたし、家賃が安すぎたので残りは貸し出していませんでした。そこでこの区域の改修方法を探すために、私は呼ばれたのです。それに、少ない所員でありながら私がこの仕事を引き受けたのは、コルビュジエをよく知らない他の誰かに受けて欲しくなかったことも重要です。

——このプロジェクトはフィルミニ市から依頼されたのですか。依頼されたとき、どう感じられましたか。

H.C. フィルミニ市から依頼されましたが、これはプログラム作成のためのコンペでした。

プログラムは、ドゥニーズ・ジョックスと共同で製作しました。コンペを勝ち取り、我々が提案したのは、すべてのユニテの上にさらに新しいユニテを設置することでした。現在屋上部分はユニテダバタシオンとして理想的な類型ではありません。ユニテの類型とは、3層になっていて上部または下部がデュプレックス（メゾネット）になっていることです。この街は、労働者の多い貧しいところなのでコルビュジエは小さな住宅を要請されたのです。

——どのくらいの規模ですか。

H.C. プロトタイプは各々の広さがあります。みなさんご存知のユニテは、子供部屋がふたつ上階にあり、主寝室はサロンに2層になっていて、サロンにはキッチンがついている。合わせて4、5部屋になります。しかしこの地域は、デュプレックスになっていない住居でした。すべての住居にとってファサードはひとつで、ロジャアがある。つまり、この地域に限って純粋なユニテではなかったのです。そのため、私は一部壊すことが可能と判断しましたのです。根本的にコルビュジエの住居はすべて素晴らしいと思いますから、本来なら私は手を加えませんが、ペンキを塗り替えるとか、電気のスイッチを取り替えるとかぐらいしかないでしょう。しかし、もうひとつ改造しなくてはならない理由があったのです。

ここで理解していただきたいのは、今日のフランスの基準では、このような建物は許されないということです。法規が変わり、住宅では50m、オフィスは28mまでという高さ規制ができました。IGH (Immeuble A Grande Hauteur/高層建築物規定) という法律があり、非常に厳格で、さらに、その基準によりエレベーターを設置しなくてはなりません。コルビュジエ信仰の人たちとの最

初の問題はそれでした。

今日コルビュジエ愛好家には2通りいますね。コルビュジエ信仰者（宗教的にコルビュジエを崇拝している人たち）は、彼がいなかったこと、書いていないことはすべきではないと思っています。私も財団には登録していますが信仰者に比べたら少数派です。コルビュジエと一緒に仕事をしてきた人々の中には、老齢ですでに亡くなった方々もいます。また、財団には当初から携わっていた人が少しずつ減ってきました。コルビュジエは財団に3回以上選ばれる人がいてはいけないという規則をつくっていたんですね。そのため、今日では歴史家が増え、建築家が減ってきています。我々建築家はコルビュジエの作品が広く知られることを願っていますが、信仰者はコルビュジエの作品に手を加えようとはしないのです。

私は反対に、世界中にフィルミニにコルビュジエらしい教会をさらに建てることを望んでいます。つまり方向性の再確認をすれば良いと思っているのです。私はコルビュジエの作品をよく知っていますし、彼のレスプリヌーヴォーのバビリオンはさまざまな形で、郊外にもここにもあそこにも建てられてきました。彼はそのアイデアを構築することを望みました。だから私はコルビュジエのアイデアを構築したいのです。むしろ、私は彼がした通りのことには興味がありません。しかし、彼のアイデアを構築する様には興味があり、そのアイデアは活かすべきであり、死なすべきではないと考えています。コルビュジエのアイデア自体はあまり知られていませんが、コルビュジエは建築にエモーションと空間の喜びを導入したのです。

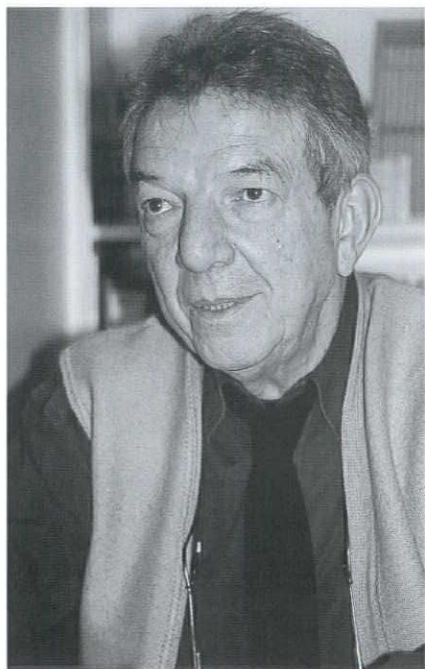
しかし残念なことに、世界中で「コルビュジエ、コルビュジエ」といいながら、その構築にはエモーションも空間の喜びもありません。だからこそ、私はこのプロジェクトによって、根幹にあるアイデアが何であったかを理解できるようにしたかったのです。そのためにマルセイユのユニテは、重要なプロトタイプなのです。

そこで私は屋上を機能させようと思ったのですが、それは禁止されました。歴史家たちはコルビュジエの建物には何も付加してはいけないといいましたし、みんなが同意したことです。しかしながら実はこれもコルビュジエのテーマだったのです。世界中で写真に撮られ、真似をされ、みんなが好んだとても彫刻的なものです。これはテーマなのです。彼は常にピロティが生きていることを望みました。しかし今日では彼が望まなかったことだらけです。ただ彼はその場を活かしたかったのです。

我々はガラス仕上げにしたかった。そう、床もガラスに。そしてそこらをまるで小さなユートピアとしてこのプロジェクトの潜在能力を発揮させたかったのです。さらに、我々が問題点として取り上げたのは、将来的には広くこの町のことが人々に知られるよう、伝承の場にするということでした。

——図にはホテルも記されていますが。

H.C. そうです。ホテルはこの小さな地方団体のサービスとなるのです。オフィス、アトリエそ



アンリ・シリアーニ/Henri Ciriani
1936年リマ（ベル）生まれ
1960年ベルギー国立工科大学卒業、助教授
1964-65年フランス政府給費留学生
1976年、フランス、オランダに事務所開設
1980年、現在までパリ建築大学教授（パリ・ペルビル校）
1983年フランス建築グランプリなど
世界各国でレクチュアや展示会を行っている

て小さな住居、大きな住居、とても大きな住居と、ひとつの建物の中はヴァリエーションに富んでいるのです。非常に洗練されたプログラムとすべく大変努力をしました。

さらに有名なファサードの問題もありました。コルビュジエは、ときとして非常階段のようなものを設置していました。ロジャアやエレベーターがあります。しかしコルビュジエは、決定的なものパブリック性のあるファサードのアイディアであるとし、階段は決定的なものではないと解釈していたのです。すべてのファサードには、その裏に理想の住居が隠されています。ファサードはパブリックの場において住居の代表となるのです。

たとえば、小さな家にとっての前の歩道のような空間です。それはみんなにとって共有のもので、中に大きな吹き抜けをつくったときに思いました。この建物をスケールで理解してもらうためには、まるで都市の風景があるかのように、中から両側の建物のファサードを透かして見渡せるようにするのです。まさに伝承の場とするのです。ガラス張りなのでホールの内部から見渡せます。建物の中でありながら、開かれた本のようなユニテダビタシオンのプロジェクトの中で生活するのです。

我々はプログラム作成のためにプロジェクトをつくりました。それはコルビュジエの考え方もありました。しかし、今日ではプロジェクトのアイデアなしでプログラムを作成しています。我々は非常に良い経験をしました。沢山の費用も使いましたが、大変喜ばしいことでもあります。私に

とってこのプロジェクトは非常に重要でした。なぜなら、私は建築家アンリ・シリアーニでありながら、コルビュジエ自身にならなければならなかったからです。と、同時に私にとっては非常に辛いことでもありました。私が考えたことは、すべて彼がすでに考えていたことだからです。

たとえば、前述の内側のホールから両側を見渡せる大ファサードなどは、コルビュジエのアルジェの高層住宅のプロジェクトにも見られます。すべてがコルビュジエのものなのです。私はフランスでは建築家として形態主義者であり、理論家であるとされているので、その対策として、弟子らしく大家を尊重することに努めました。しかし、彼らは反対し、信じてくれませんでした。

——フィルミニの住人はこの計画についてどう思っていますか。

H.C. 彼らにとっても、少し問題があります。というのは、この計画により家賃が上がるのではないかと心配しているからです。それ以外は非常に満足しているようです。本当に我々は多くの時間を費やしてきましたが、それは私にとっては当然のことなのです。なぜなら私はコルビュジエに対してそれだけのことを返さなくてはならないからです。

——この論議はまだ続くのでしょうか？

H.C. 私は、都市計画を行うことも考えて、提案しました。人をこの街に呼び、保養所として滞在できるようにすることです。

結局私の案が残ったのはここだったようです。ここには世界中の建築家たちにコルビュジエへのオマージュとしての住宅計画を募ろうと考えています。コルビュジエの生きた美術館とするように、彼の住宅モデルを建てることも考えました。今のところ市から12軒の住宅を建てることを依頼されています。しかし、世界中から建築家を集めることは大仕事なので、4軒の住宅に関しては若い建築家たちへのコンペになる予定です。ゆっくりと進めていきたいと考えています。

この計画が立ち上がったときに現地に赴き、私はフィルミニの住人を冬の時代は終わりで、心機一転だと盛り上げてきました。彼らは政治的にも湧き上がりました。ただ、特に彼らは知的な人々ですから、その上に歴史家たちと議論をするエネルギーはありません。

たとえば建築文化面で法王のような存在であるジャン・ルイ・コーエンは「コルビュジエの作品は終わった」といっています。皆、どのプロジェクトが素晴らしいかを知るべきでしょう。しかし、難しいことに色々なことをいう人がいる。私はテーマとして、あなたが私の仕事に関心を示してくれたことに対し感動しています。ただし、マルセイユのユニテであつたら、プロトタイプなので私は手を入れることはしなかったでしょう。フィルミニの場合はレプリカシリーズの中のひとつで余りお金もかかっていません。ひとつのモデルには手を加えることは決してできませんが、現在死にかけているフィルミニのユニテを生かし続ける事は大切なことであると同時に、とても難し



H.シリアーニによるフィルミニのユニテのスケッチ

いことだと感じています。

モダニズム建築の危機は、未来を予想できなくなってしまったことにあると思われます。機能主義とは、より精通すればするほど価値が少なくなります。オフィスビルが完璧であればオフィスにしか利用できません。多様なものに利用するのであれば、悲観的な未来に踏み込まなくてはなりません。今日、とても住むことができないような住宅デザインが最良とされているのです。現在は未来と同じように貧しいようです。このままでは、明るい未来は考えられません。あなた方は誰よりもそれをご存知でしょう。広島原爆までは未来はつねに明るいものでした。しかし本当の未来はその先なのです。今、人々は自らを破壊できる限界を知っているといえるでしょう。

昔の人間は寛大であり、未来を順調に進んでいると考えていました。しかし我々は、未来がさらにひどくなると考えています。建築とは、人間が希望と未来を改めて救うことを見つけ出そうとすることであり、それが希望です。もし世界が今の状態を受け入れられなければ、希望を再構築すべきなのです。

——もしコルビュジエの作品が死につつあるとしたら、未来のためにもそれらを改造していくことを望みますか。

H.C. まさにその通りです。それがわたしのポジションなのです。コルビュジエの作品は十数件が文化財に指定されています。サヴォア邸や財団のあるラ・ロッシュ邸のように国がメンテナンスや宣伝をしてくれている場合は話は別ですが。

——改造できるのはこのフィルミニのユニテだけなのですか。

H.C. このユニテはファサードのみが文化財指定されています。そのため私はファサードには手を加えません。コルビュジエのオルセー駅ホテルの計画でテラスつきの小さなキューブには穴（ヴォイド）が空いていて、パリ市のシンボルである船のマークがついていました。私も穴を開けたかった。この穴はファサードを残し見通すためにあるのです。これがコルビュジエのアイデアです。

——このプロジェクトの中にはシリアーニさん自身のデザインはあるのですか。

H.C. いいえ。私はより少ない素材で建物をつくろうとしています。未来をそこに設置できるようにそしてそれだけが最終的なものとなるように。その時代の考え以外のものを組み込むことは行っていないませんでした。ポジティブな思考だったからです。不変なものとか変なものとの区別をした時点で、ネガティブな思考になっているのです。完全なものをつくってしまうと未来へとは続きませんからね。まあ、重要文化財に指定されれば話は少し別ですけど。人々が幸せに生きるために建築は存在するのです。

——コルビュジエが当時構想したモダニズムの空間は、今にしてみるとそれもひとつのコンテクストなのでしょうか。

H.C. コルビュジエのユートピアは必ずしも彼だけの思考ではありませんでしたが、ユートピアはあの時代のものでした。彼は、時代の人でアヴァンギャルドでした。しかし、彼ら大家たちが、最良の社会の中にいたことを忘れてはいけません。

建築家がより良い社会のために働くことは自然なことです。昔はいわずともより良い社会のために働いていました。そのことを考えるに、分散された今日の社会では建築を優良視することができません。今まで話してきたように、皆が一緒に改善しようところみなければならないと思うのですが、現在では何かアイデアを出そうとしても、それらを無視する人たちがいるのです。

50年代のモダニズム建築は皆を幸せにしました。モダンであることはそれだけで人生の始まりであったのに、今日の人は無知であることをなんとも思っていない。我々は当時、改善するために働けばよかった。現在改善するということさえ人はよく知りません。改善という概念は、あなた方の文化のように他とは違うということです。ただ、日本も今は変わったかもしれませんがね。完全に西洋化されていますから。有名なお寺があっても、そのお寺が素晴らしいものだとしたら普通は保存し修復していくでしょう。

しかし今では、誰も何が良いものなのかをわからなくなっています。社会では、良いものを知るべきです。かつて彼らは知っていたのです。雑誌のためではなく、プロジェクトのためのプロジェクトを作成したことを。そして洗練された考えをもっていました。当時の雑誌は大きな写真ではなく、非常に説明的で住宅がいくつあるのか、光はどのように入るのかということを紹介していました。もし、あなたのように分析をしなければ、人々は思考を停止し、文化から取り残されてしまいます。その時、希望もなく、すべてが個人単位に縮小されてしまうのです。みながみな、芸術家ではないのでそれは残念なことです。が、あなたがこの件に興味を示されたことがとても嬉しいのです。

——今日、話されたことは未来の建築家たちにとって希望を与えるとても重要なことだと思いますが、これは彼らへのメッセージととらえてよいですね。

H.C. ええ。こういった方法のみで、私は教え、伝え続けるのです。

(2000年3月22日、パリにて インタビュアー：宮脇 勝)

国ごとに異なる改造事情、「時代」が決める転用内容

——修復、再生、改造といった手法について、特にイタリアは歴史上発達してきたと思われますが、どのように考えてらっしゃいますか。

Francesco Dal Co（以下 F.D.C.） 修復、再生、改造の大きな問題は、手法が国によって異なっているということです。再生の仕方ですがイタリアの場合、過去において建設された建築群、歴史的な建築群が、非常に際立っています。このことが、修復や改造のときにベーシックな問題となります。

いつの時代でも、再生や改造の問題は、常に建設的です。我々は地域の開発の際、改造を行います。偉大で歴史ある建築を改造する。

たとえばオフィスを博物館に転用する場合、改造を行います。こうして我々は、自然を改造し、歴史を改造してきました。こうしたテーマは、建設的であり基礎的なことでしょう。改造の方法は様々ですが、要するにいくつかの歴史的で古い都市の部分構造を壊し、新しいものに取り換えることを指します。あるいは、古い建物を新しいオフィスとして再利用することも可能です。特徴的な転用は博物館です。フランスのルーブル宮も今は、博物館になっているでしょう。

20世紀初頭までの社会のように生き残った時代様式や古代様式、あるいはある確かな時期の優れたものに価値を置いてきたのに対し、私たちの社会の新しい問題、つまり20世紀末の問題とは、価値ある建物を建設することによって、時代の価値や時代に付与する意義をよく理解しない社会となっていることにあります。

我々西洋、特にヨーロッパにおいて、より重要に考えられていることは、すべてを保存しようということにあります。つまり、既存の建築物を壊すのではなく、改造しようとするのです。今日では、古い工場も改造して、美術館にしています。また、ドイツのルール地方では、古い工場を観光のために用いていま

す。ミラノ、ヴェネツィア、ローマなどの工場も再利用し、建物の価値に貢献しようとしています。

我々の時代、つまりラジカルな方法での改造の可能性は、いくつかの部分壊すことにあり、これはすでに1400年代や1500年代に行われていたものです。しかし、今日、時代の価値へ貢献しようとするならば、保存に力を入れる結果となるでしょう。これが、私たちを取り巻く社会状況なのです。こうした精神は、基本的なこととして建築にも同じことがいえます。建築は常に改造され、修正を伴うものですが、私たちは改造や修正について不安を感じることも事実です。たとえば工場を壊し、まったく新しい博物館をつくらうとすることから生じる不安。ですから、古い工場を残しながら、その「中」において新しい博物館をつくらうとする方法を好んでいるのです。同じことは、ランドスケープにもいえます。風景は、ある地域にすでに存在しているものであり、それゆえ、より自然や歴史につながっているものです。今日の私たちは、歴史の「中」に生きているわけで、「同じ自然」や「同じ歴史」の「中」にいるわけです。これが今日の現代性なのです。

——改造は修復と切り離して考えられますか。

F.D.C. いいえ。改造はとてもヨーロッパ的な特徴をもっています。すでに準備されてきたテーマであるともいえますが、必ずや将来も重要なテーマのひとつであり続けるでしょう。状況は国によって異なりますが、恐らく日本もそうでしょう。日本には日本の文化がありますから。

たとえばロンドンにある大工場が、偉大な美術館に改造されました。大工場のイメージを保ちながらです。このように建物の価値、過去の価値は私たちの時代にとっても大切なものなのです。

——どんな建物に、改造が可能とされるのでしょうか。

F.D.C. これは、先ほどの問題に引き続く大問題ですね。サン・ピエトロ寺院ですら改造することは技術的に可能です。しかし、大切なのは、それぞれの建物をどう利用するかを、それぞれの「時代」が決定しているということです。これは「どの時代」においてもいえることです。何に変わるかは私の知る限りではありません。すべて「時代」が決めることなのです。

たとえば現時点において、サン・ピエトロ寺院を別の用途に転用することを想像するのは難しいでしょう。それぞれの時代の常識によって、改造が可能か否かを定めることができるのだと思います。トルコでは何世紀も前に、パルテノン神殿を戦争のための施設として利用していました。しかし、私たちは今日、教会を居住施設に転用することはできないでしょう。それぞれの時代やアイデアで、何が考えられるのかが重要なのです。

一方、歴史的な文化財の改造は不可能です。なぜなら、私たちは知っているからです。そのモニュメントが何であったのか、何を意味していたのかという重要なことを覚えているのですから。

——ローマのパンテオンは、寺院から教会に転用されましたね。

F.D.C. これも「その時代」の考え方です。今日、パンテオンを我々は改造することはできませんし、サン・ピエトロ寺院に介入することもできません。私たちの異なった感覚や、私たちの異なった時代感覚ではできないのです。

——では、私たちにはどのような改造が可能なのでしょう。

F.D.C. 現在、改造するにあたってルールがありませんから、もっと研究が必要でしょうね。それは同時に私たちの生き方のプログラムでもあります。しかし規律がないのが現状です。

——イタリアにおける改造の特徴はどこにあるのですか。

F.D.C. イタリアにおける改造という手

法は、他の国に比べてもとても強いものだと思います。イタリアには歴史に対する規律がありますし、これほど歴史的な都市や集落が沢山残っている国は他にないでしょうからね。ですからイタリアでは、新しい建築を実施することの方が困難であり、逆に保存することの方が重要になっているといえます。

——この保存に対する政府や地方自治体の考え方はいかがですか。

F.D.C. イタリアにおいて、実現したものはかなり少ないといえます。きっと政府や自治体は、必要なだけ国家を近代化することができなかったものと思われます。しかし、将来的にみてもイタリアは改造という視点に立った場合、もっとも強い国のひとつだといえるでしょうね。

——『Casabella』の編集をしながら、最近の増改築のプロジェクト（大英博物館、ルーブル博物館、ライヒスタック等）をどのようにみてらっしゃいますか。

F.D.C. こうしたプロジェクトは、とても自然なものだと思います。建築家にとって、新しく行う改造プロジェクトはより重要なもののひとつです。多くの巨匠たちは、ルネサンス時代において、それぞれのテーマに応じて改造のプロジェクトをおこなってきました。すでに建設された環境の中で、建築家が力を込めたより良い時代の環境を調整することは、将来への可能性のひとつだと思います。

——今世紀の改造の仕事の中で、カルロ・スカルパの役割について、どのように思われますか。

F.D.C. カルロ・スカルパは、このような改造の視点に立ったとき、もっとも優れた建築家といえるでしょう。彼の改造における表現方法は、「継続的な」建築になろうとしています。スカルパは、おそらく今世紀の偉大な建築家のひとりですが、特徴的なのは、歴史性の意義に関する問題に直面していたということです。

スカルパは、博物館の改修プロジェクトをいくつかおこなっています。カステ

ル・ヴェッキオやパラッツォ・アバテリス（シチリア）等です。

また、スカルパの行った改造のベースには、美的感覚の提示があります。そこでは、実に沢山の新しい試みをおこなっています。ですから、スカルパは修復家ではありません。彼の改造は再生のアイデアであって、既存の環境を再利用することにあります。修復（レストア）とは、時間を後ろ向きにさかのぼることを意味するのに対し、スカルパの改造はそういう仕事ではありませんでした。彼のすべてのプロジェクトは後ろではなく、常に前に向かう新しいものです。

——しかも、歴史を尊重しているようですね。

F.D.C. カステル・ベッキオでは、すべての時代様式がミックスされています。彼の表現が、「時代」の中で行われていることが読みとれるでしょう。

一方、修復（レストア）は、「時代」を表現しているのではなく、むしろ「事実」を表現しているのです。スカルパは、建物のストーリー（歴史）の積み重ねを表現しているのであって、建物の部分的なエレメントを表現しているのではありません。

——改造という視点から見ると、建築と都市計画の関係は、どのようにあると思われますか。

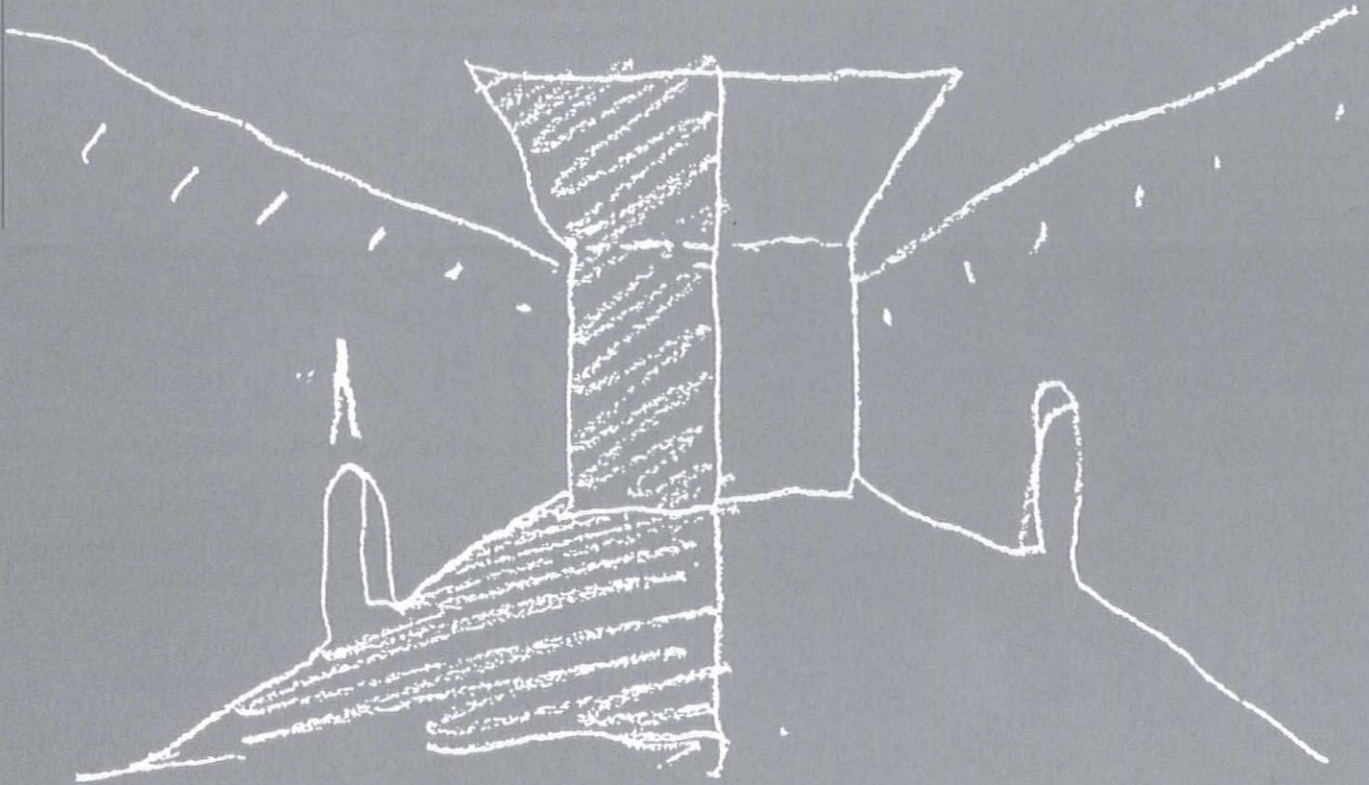
F.D.C. 思うに、常に都市全体の改造は少なくなっているようです。1800年代において、大規模な都市計画がありました。この状況下において建築物は、この全体計画に従って徐々に建設されていきました。しかし、私たちの20世紀では、個々の建築の設計を通じ、いくつかの建築物が集まって都市を形成するようになっていると感じられます。80年代から90年代のヨーロッパはまさにそうです。20世紀での大きな変化とは、まさにこの点に見られると思います。

（2000年7月18日、ミラノにて インタビュー：宮脇 勝）



フランチェスコ・ダル・コ / Francesco Dal Co
1945年 フェッラーラ（イタリア）生まれ
1971年 ヴェネツィア建築大学卒業
1991-1998年 ヴェネツィア・ビエンナーレ建築部門ディレクター
現在ヴェネツィア建築大学教授、建築史学科長
出版社 Electa の顧問、雑誌 Lotus, Zodiac の運営委員、雑誌 Casabella 編集長
著書に「カルロ・スカルパ全作品集」（Electa、1984年）、「イタリアの建築：1945-1985」（a+u臨時増刊号、1988年）など

既存の価値を高める改造



habitat de les shams. Cos de comunicacions verticals

建築物の改造ルールはとても曖昧である。

しかし、もっとも重要な目的のひとつである、

「既存の価値を高める」ということを忘れてはならない。

「新旧の対比」というとき、「新」のための「旧」ではない、

両者が共に高まる手法を探し出す必要がある。

単純な解答ではなく複合した解答にこそ対比の魅力があるのだ。

既存の建築の設計意図だけでなく、

再利用のために多くの人のプログラムや思いが関わる。

ここにデザイナーの文化的素養が試されている。

作品解説（特記なきもの）＝宮脇 勝

中庭の改造

大英博物館（ミレニアム・プロジェクト）

ロンドン（イギリス）

フォスター・アンド・パートナーズ

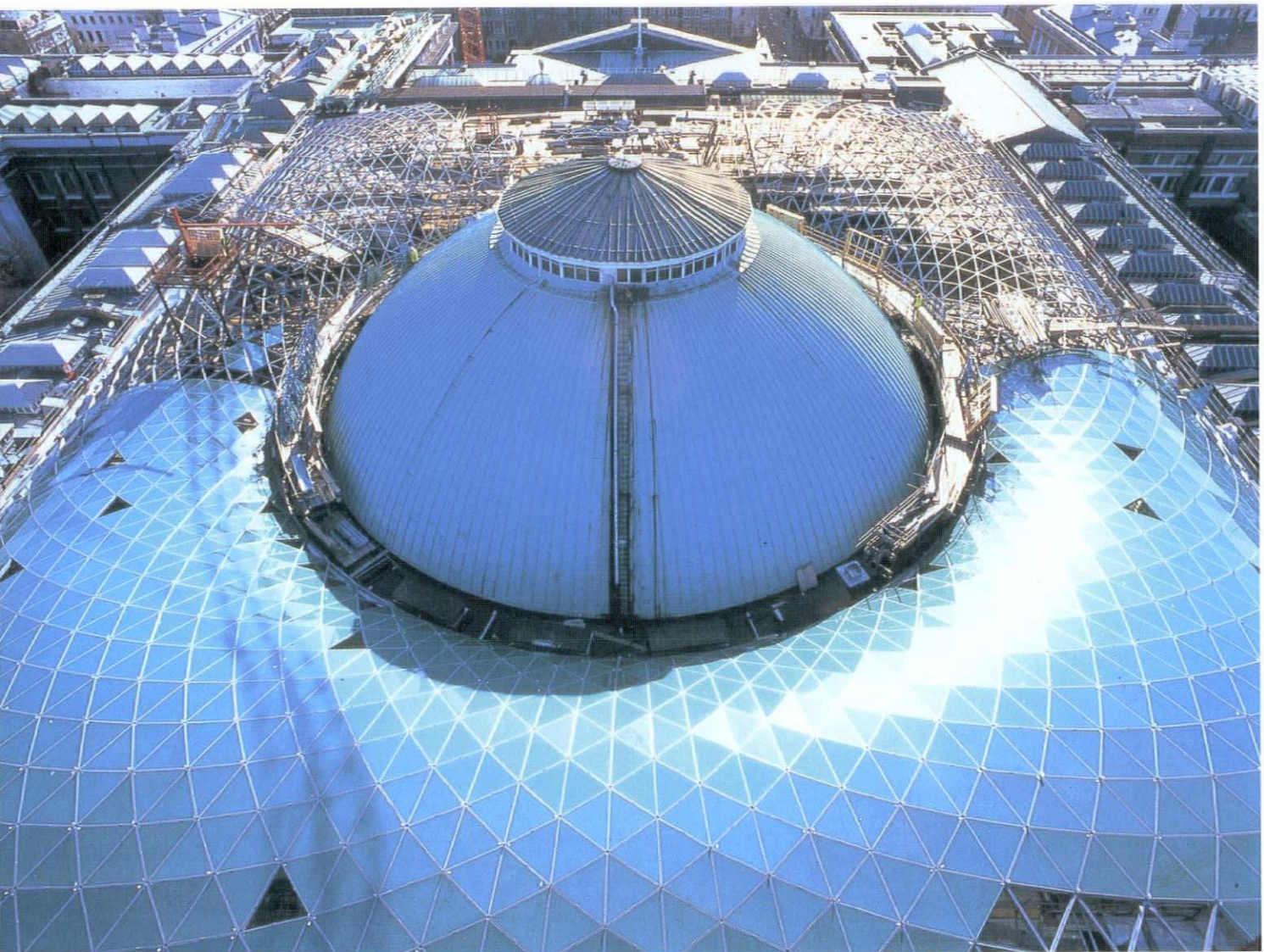
Method: The courtyard transformation

Project name and the location: The British Court, London (UK)

Architects: Norman Foster and Partners

Program: Museum (1823-50)→Museum (addition of the Reading Room: 1857)

→Museum (extension of Front Hall: 1870s)→Museum (transformation: 1993)



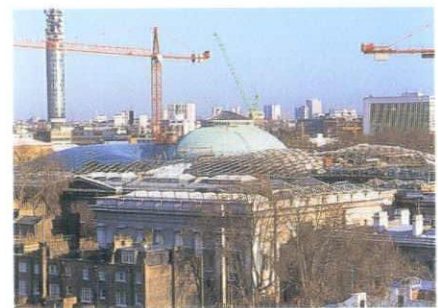
現在建設中のガラス・ルーフ



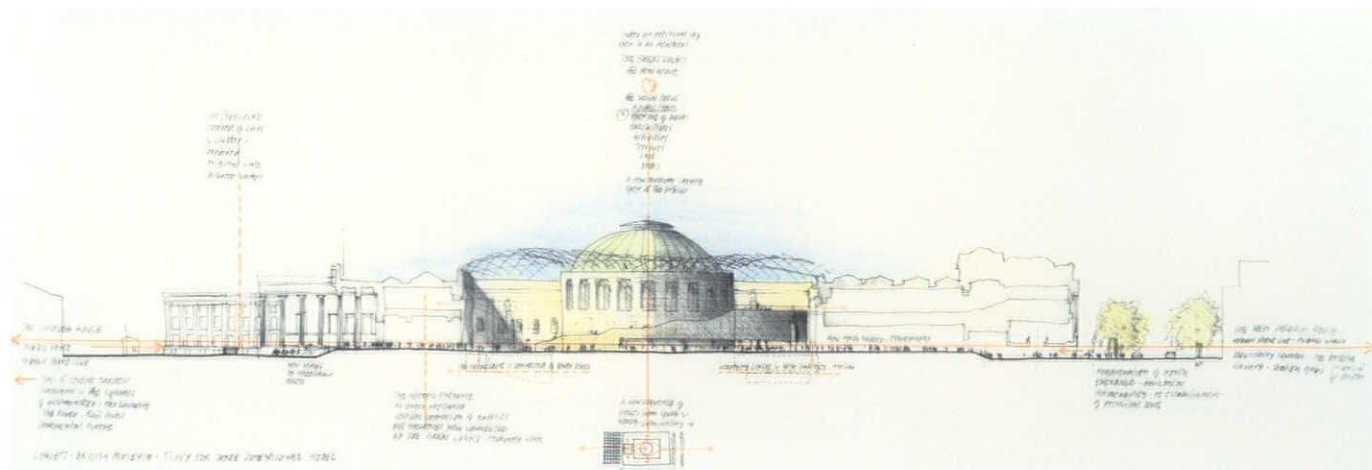
既存の中庭と周辺環境



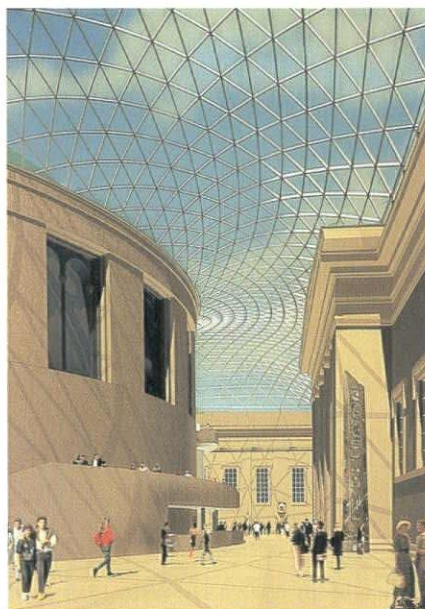
中庭に無秩序に増築された部分を撤去する工事



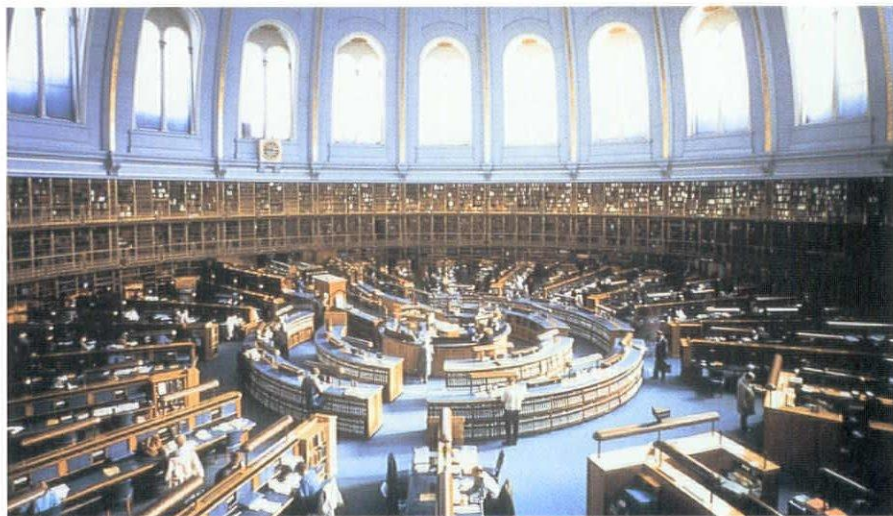
ゆるやかなカーブをもつガラス・ルーフのフレーム



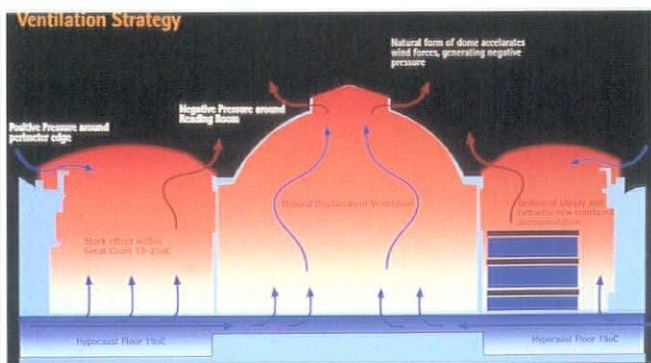
N.フォスターによるコンセプト・スケッチ。中庭に軽やかなガラスの屋根を掛け、床レベルが統一される



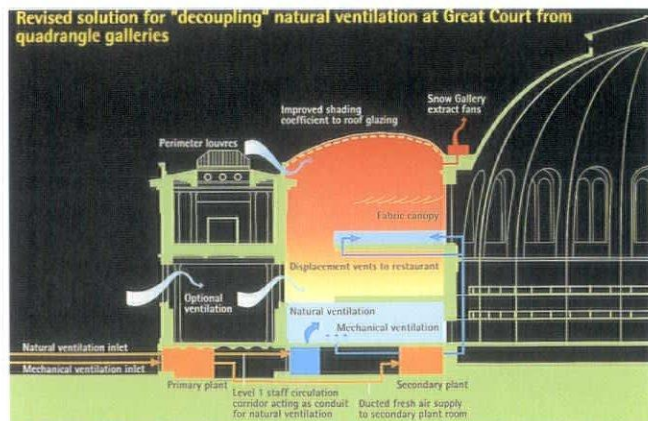
中庭の改造後のCG



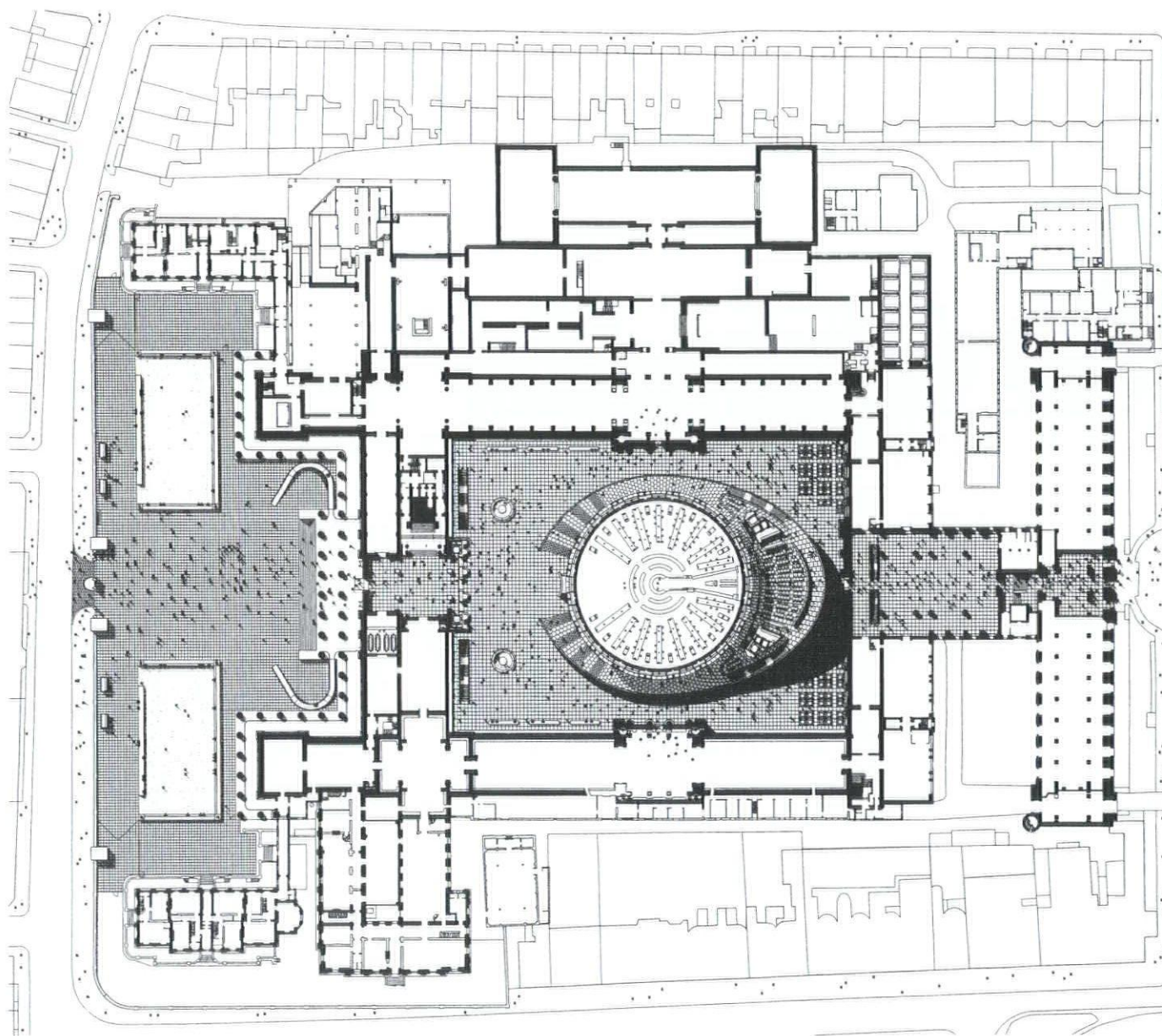
改造前のドーム内部の図書館



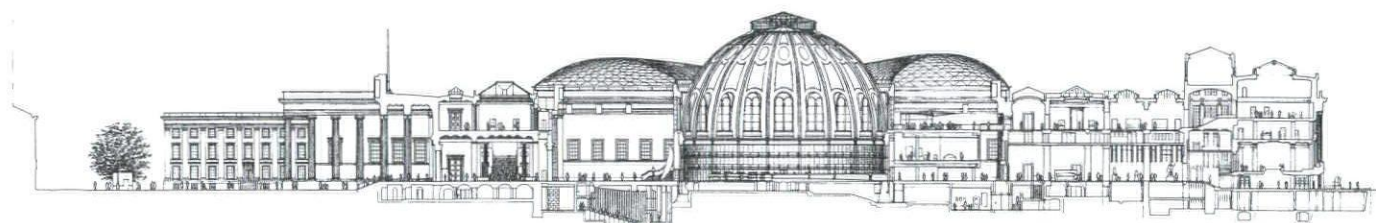
空調の計画図例。床下の空調から吹き出す冷気（19℃）をコントロールすることで、中庭上部の新しいガラス面や、既存のドームの上部開口から自然換気を行い、19-25℃に保つシステム



中庭の自然換気を補完する解決方法。基壇部分から取り込んだ空気を冷やして床下から吹き出す機械空調を補完するために、既存の建物の開口や上部ガラス端部の開口とドーム側上部のファンによる換気、ガラス面の加工による日よけ効果を期待している



平面図 (■：既存部分)



断面図

現在工事中の大英博物館の改造は、ロンドンのミレニアム・プロジェクトのひとつであり、大英博物館にとっては、250周年のプログラムでもある。中庭を占めていた専門家のための図書館（Reading Room）を中心に修復し、一般利用スペースに転換することが意図され、中庭（100m×70m）をガラスでカバーする点に特徴がある。従来からの大きな問題である、あふれる観光客に対応するスペースの不足、複雑な動線、中庭で繰り返された増築の無秩序さ、歴史的建造物のバリアフリーなど、数々の問題点をかかえて息詰まった博物

館を、N.フォスターはエンjoyすることができるよう再構成している。

既存の建築物は、1823年のロベルト・シュミルケ（Robert Smirke）によるデザイン。これはギリシャ様式のリバイバルで1850年までに建設された。前面ホールの拡張が1870年代にあり、中庭南側が増築される。今回の大改造では、中庭増築部28,000m²を撤去し、中庭をパブリック・メインホールとして屋内化再整備し、南側の内庭立面柱などが再建される。19世紀には、年間10万人の訪問客のためにデザインされた博物館だ

が年々観光客が増え、90年代には年間600万人に増加し混乱した。中庭と図書館がバリアフリー化され、ポर्टランド産の石を敷き詰めた中庭が一般客のメインエントランスとなり各展示室への動線が飛躍的に明快になった。また、修復されたドーム内は図書館に、その外側には楕円状に増築がなされ、新しいサービス機能が付加される。図書館は一般利用のものに変更され、マルチメディア機能が準備される。中庭の地下空間は美術教育センターとなり、多目的室や講堂として子供たちや国際的な催し物に対応した設備が整えられる。

——大英博物館の改造プロジェクトは、どのような議論がなされているのでしょうか。

建物は政府によりモニュメントとして第1グレードに登録されていると思います。そのような条件で、改造が可能なのでしょう。

Spencer de Gray（以下 S.G.） イギリスでは、歴史的な建物を管轄するイングリッシュ・ヘリテイジ（登録文化財制度）というものがあります。それは、政府からの出先機関で、歴史的な建物を承認する機関です。大英博物館の建物は、その中でも第1グレードに認定されています。つまり、英国の歴史遺産の中でもっとも高いカテゴリーに評価されているもののひとつで、国にとってもっとも重要な建物なのです。

そのため、イングリッシュ・ヘリテイジ側との対話は、建造物の進歩、発展に関するものが中心となり、彼らは絶対的な存在であります。

デザインの話や議論を進めるときには、イングリッシュ・ヘリテイジとの話し合いも同時にスタートします。彼らと話しをするときの良い点は、たとえ計画中的ものが事例としてみせることができないようなものであっても、より良いものへ改善していく方向に検討していくことができる点です。

彼らは議論をとても注意深く聞いています。また、彼らからすべてのプロジェクトの承認が必要になります。

ご存じのように、大英博物館の計画の場合、中庭、つまり中心部分が重要であるにもかかわらず、開かれた読書空間がなかっただけでなく、その周りにあった中庭の残余としての空間に書庫が増築されていました。

我々にとって幸運なことに、中庭の増築建物は第二次大戦時に破壊され、戦後再建されたものであり、その周りに第1グレードに登録された建物が囲んでいたのです。つまり中庭には、歴史的な建築が何も組み込まれてはいなかったのです。

そのため中庭で我々が提案したことは、イングリッシュ・ヘリテイジ側に容易に受け入れられました。彼らは書庫の建物を移動させたくはなかったのです。我々はさらに1階レベルと中庭のレベルを統一し、中庭の床を基準とすることを提案しました。以前は中庭のレベルの方が建物のメインレベルより低かったのです。そこが今回変更した大きな点ですね。

イングリッシュ・ヘリテイジ側は、これによって周りのギャラリーに連続再統合できるというメリットをすぐに理解してくれ、このアイデアの主な部分に賛成してくれました。

次の点は、もっとも難しかったことですが、中庭の良好な環境を保ちながら、屋根をかけて内部化した点です。ここでは自然に関する多くの議論がありました。私は、イングリッシュ・ヘリテイジは、サックラー・ギャラリー・アカデミー（N. フォスター、1993）のことを前例にしていたと思います。あれは、屋外の空間を内部空間に変えたものですからね。さらに、ロンドンには中庭を内部化した建物が沢山あります。こういった利用を慣習として理解したのだと思います。中庭を内部化するという考えは、すでに確立した方法になっていると思いますね。確立していないのは、

高さに関する議論でしょう。

計画段階において、私たちは屋根のカーブ、かわいらしいフラッグルーフの角度からスタディしていきました。問題は不均一な屋根勾配の考え方にありました。屋根のデザインをシンプルに実現しながら解くというものでした。最終段階のデザインでは、読書室から周りの建物まで全体を三角形のネットをかけるというアイデアが基本となりました。イングリッシュ・ヘリテイジへも、その考えを説明したのですが、彼らは、ネットという巧みな解決方法を絶対好みませんでした。

しかしイングリッシュ・ヘリテイジとは、とても身近で仕事をしていたから、そのスタディとデザインの決定プロセスを説明していくうちに最後の段階ではチームの一員として、考え方や問題の所在を共有し、理解するようになっていったのです。こうしたプロセスは、イングリッシュ・ヘリテイジとともに良い評判になったようです。

我々は常に彼らとともに近くにいました。計画案についてもそうです。

たとえば、GLAのような新しいマスの建物が、ロンドンブリッジのそばに建てられるというように歴史的にデリケートな地区での新しい建築の計画であっても、またロンドンブリッジやロンドンタワーの近くで新しい建築をつくろうとする場合でも、イングリッシュ・ヘリテイジの承認を得なくてはなりません。こうしたことは、彼らとの議論や対話を成り立たせる上で重要な側面です。

私は、しばしば彼らの望んだことは成功していると思います。しかし、歴史的な建物に関わりながら仕事することは、とても複雑な仕事となってきました。修繕する仕事と新しい仕事とを両軸に考えていかなくてはならないからです。

（2000年3月31日、ロンドンにて インタビュアー：宮脇 勝）

工業スケールの変換

テート・モダン

ロンドン（イギリス）

ヘルツォーク&ド・ムーロン

Method: The conversion for the industrial scale

Project name and the location: Tate Modern, London (UK)

Architects: Herzog & de Meuron

Program: Electric works (19c)→ Museum (conversion: 1995-2000)



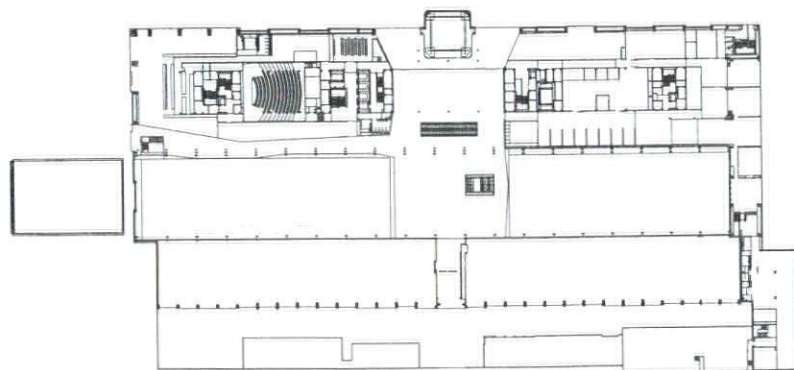
テート・モダン外観。かつて近寄り難かったこの周辺は、芝生の整備によって一変し、くつろぎの場となった



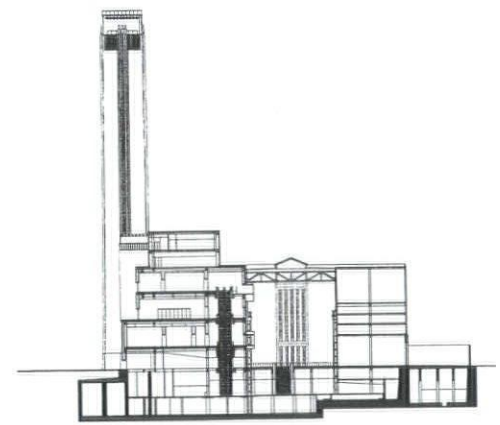
屋上部分



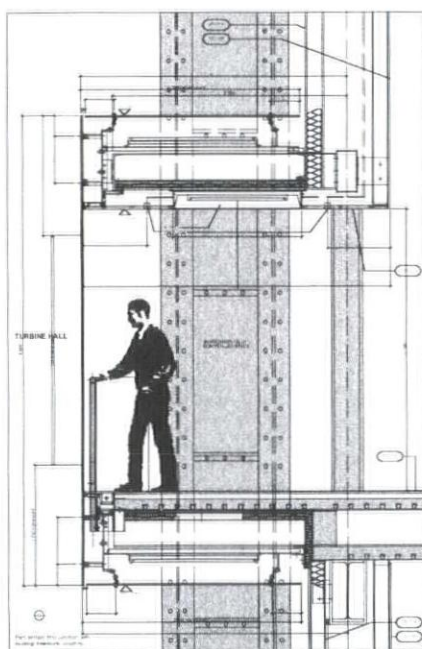
タービンホールに面した光のシリンダー状デッキ



1階平面図 S=1:2000



断面図 S=1:2000



既存の鉄骨に組み込んだデッキの詳細 S=1:70

テムズ川沿いにある新しいテート・モダン、周辺にセント・ポール寺院があり、歩行者用としてN.フォスターによるミレニウム・ブリッジでつなぐ工事が進められている。元のジル・スコット (Giles Scott) が設計した発電所のための工業建築の質というランドマーク性を保ちながら、パワフルな現代的建築として変換するねらいがあった。特にタービン・ホールは、工場の雰囲気のあるギャラリーであるとともに、ロンドンでもっとも巨



タービン・ホール。工業スケールの内部空間に取り入れられた大きなスロープや光のシリンダー、トップライトなど、すべてがランドスケープ的な大きさである

大な屋内の開かれた広場でもある。そこで人々は、都市の通りのようにコミュニケーションすることが可能である。一方、新しいエレメントである屋上のガラス部分は、既存のレンガの塔のボリュームにバランスをとった水平方向のシリンダーとなっており、周辺に新しいランドスケープを提供している。また、ガラス部分の内部からはセント・ポール寺院などの眺望が見える。外構もテムズ川への親水空間として一体的に整備され、かつ

ての工業地区とは異なり人々が近づきやすい場所へと転換された。1階コーナー部分は、レンガの壁をカットしてガラスを入れ、カフェにしている。重たい既存の壁を比較的自由に扱っているのも特徴的な手法である。展示室は6つのグループから成り、それぞれ異なったサイズの空間と採光方法のバリエーションがある。展示方法は、テーマ別になっている。なお、オイルタンク室の部分などは2期工事が続けられる。

新しい環境建築による歴史的魅力的向上

ベネトン・アート・スクール「ファブリカ」

トレヴィゾ (イタリア)

安藤忠雄

Method: Enhancement of old charm by new environmental architecture

project name and the location: FABRICA (Benetton Communication Research Center), Treviso (Italy)

Architect: Tadao Ando

Program: Villa (17C) → School (transformation: 1992-2000)

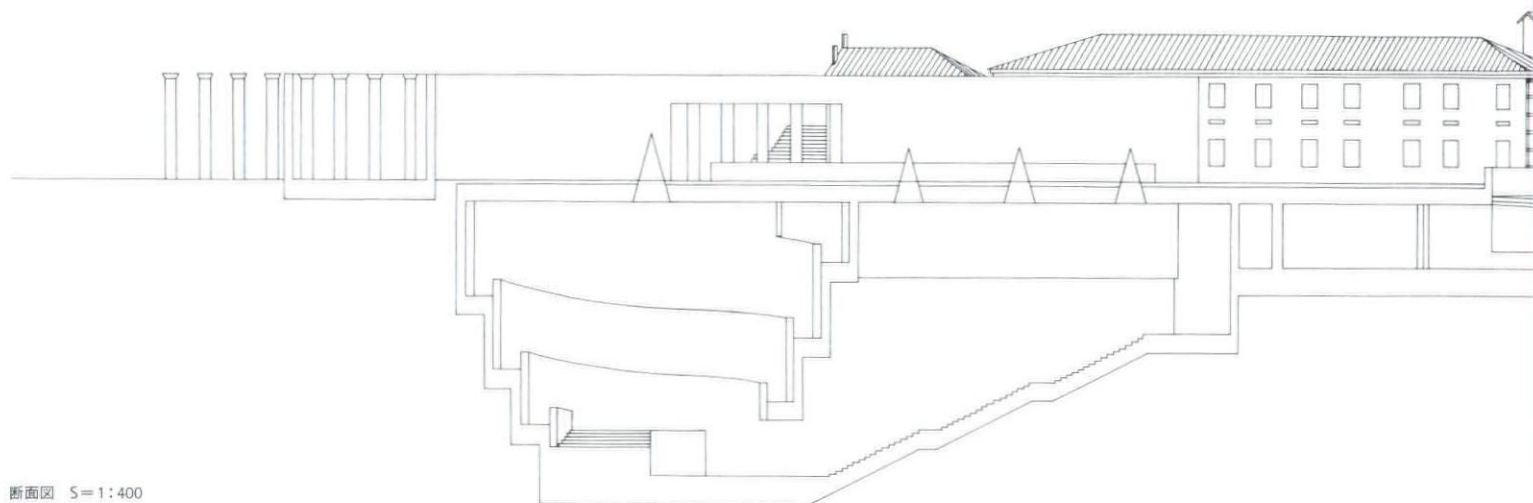
敷地は北イタリア、ヴェネツィアから30km離れたトレヴィゾの郊外ヴィツェンツァに位置する。敷地内には17世紀に建てられたバラディオ風のヴィッラが残っており、これらを保存修復することを前提に計画が進められた。

この学校は建築やデザイン、写真、グラフィックアート、映像、テキスタイルなどの応用美術の分野で実績をもつ世界中の若者を受け入れる研究施設である。施設には研究室、アトリエ、スタジオ、アートギャラリー、講堂、カフェテリア、図書室などが用意されている。建築は湖の地方の田

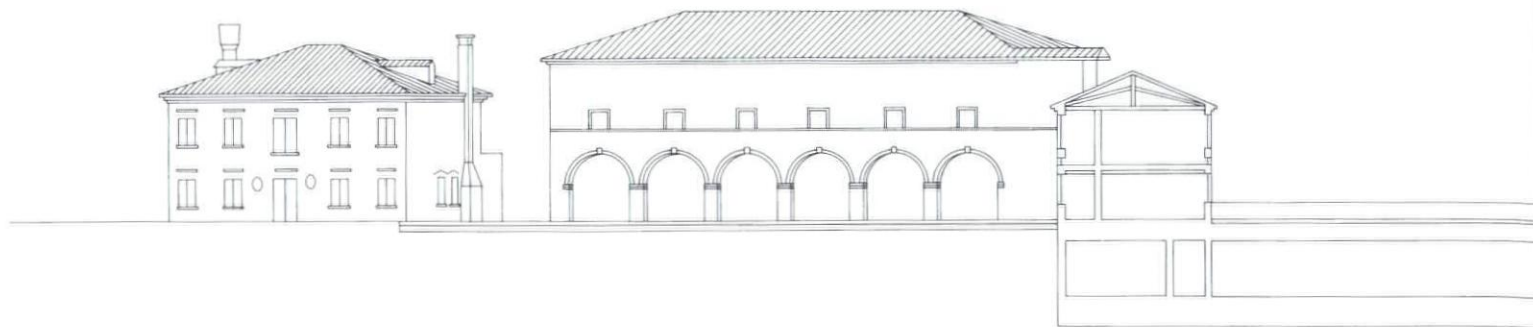
園風景を活かすように配置され、古いヴィッラを残しつつ、新しい建物の大部分はサンクンコートに面した地上レベル以下に設けられている。古いヴィッラの前の池、外のギャラリーでもある列柱の広場、2層分の高さをもつ楕円形の地下広場、その広場に続く階段状に掘られた広場と、屋外のスペースは互いに連続していく。修復された内部を改造した古いヴィッラには各アトリエやスタジオが入り、楕円形の広場に面しては図書館とアートギャラリー、階段状広場に面して木工、金属などのスタジオがそれぞれ配される。列柱をもつ幅

7mの新しくつくられたギャラリーが、古いヴィッラを貫通し、列柱はヴィラの前面に設けられた池を横切る。

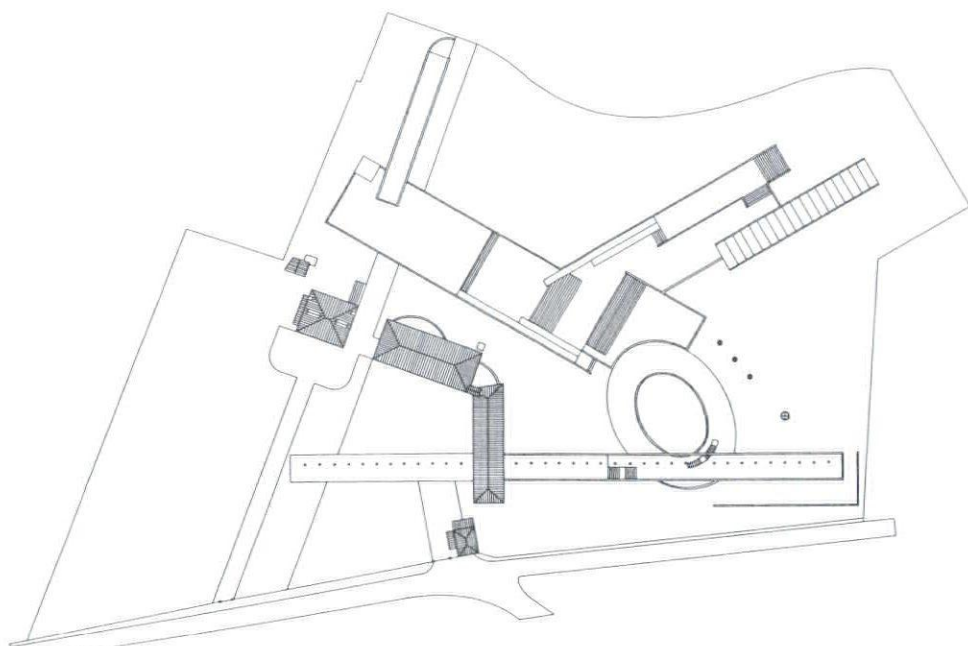
図書館は地下深く螺旋状に下降する直径20mの書庫を備えており、世界中の芸術、デザイン関連の書籍・資料が収集され、新しい建築が加わることで古いヴィッラが活性化される。時間を超えて互いに刺激し合いながらも全体としての調和を目指す。新たな精神が過去との対話を通じて創造力を生みだしてゆくことを、建築に表現しようとした。(安藤忠雄)



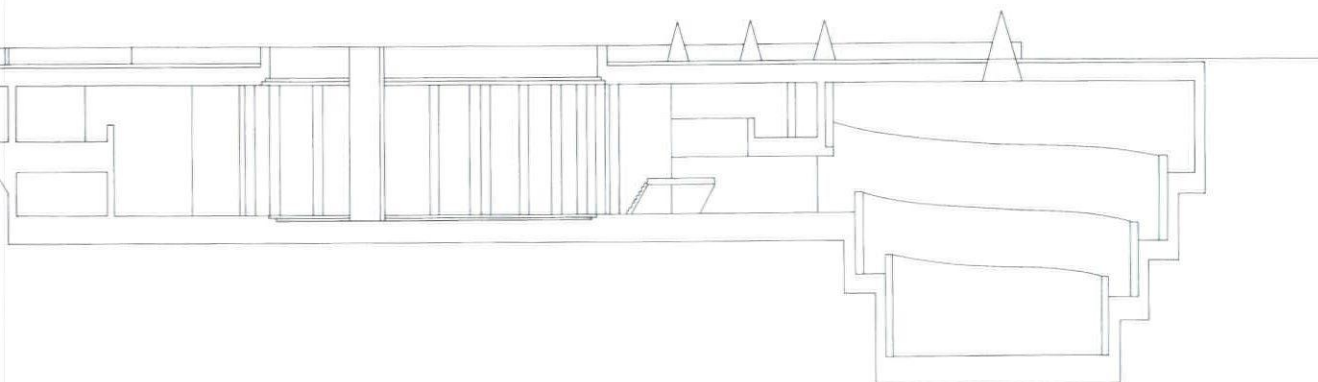
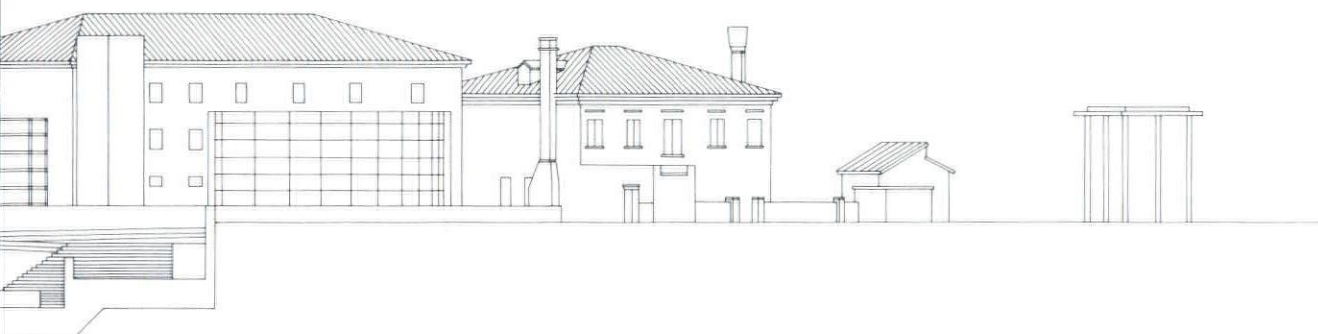
断面図 S=1:400



断面図 S=1:400



配置図 S=1:2000





新しい列柱と既存の建物



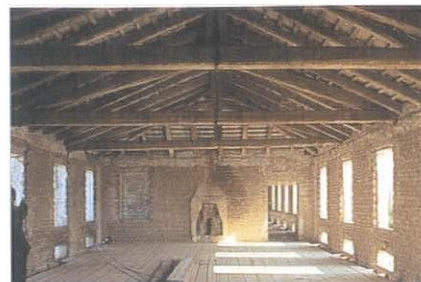
修復工事中の既存の構造物



正面側からみた列柱と修復されたヴィッラ



修復整備された内観



修復工事中の内観



水にアーチを映し込むことにより、増幅演出された既存のヴィラの環境

時代の空間感性と融合した新たな体験

——この特集では「増改築」をテーマに探りたいと考えています。

安藤 私も、自分の設計した建物に自分の手で増築を計画することを何度かしてきましたが、増築というのは単なる付け足しではなくて、ひとつの創造的試みだと思います。歴史的建造物の保存・再生は、このような普通の増築とはまた違うものですが、以前から興味をもって取り組んでいます。たとえば、神戸の異人館にその違いを見いだせると思います。北野町周辺に住んでいたことがあったんですが、異人館も1970年代初めにどんどん壊されていきました。それも自然なことで「消滅」していくならまだしも、「解体」されるという姿をみてきたのです。

神戸は元々明治から政府の強い意志に基づいてつくられてきた港町で、その歴史の中で、居留地と異人館が神戸の風景をつくってきたんだと思います。神戸の人たちは、これをずっとみてきた。居留地は防災上の配慮もなされた優れた都市計画に基づいてつくられており、単体の建物というより環境全体が保存すべき対象といえると思います。しかし、阪神淡路大震災によって多くの建物が破壊されたのです。

たとえば、居留地に建ち並んでいた銀行ですが、一部分を残しそのほとんどが破壊されました。そのとき、僕はその一部分残っているものだけでも修理し、保存した上で新しいものをつくってもらいたいとそれぞれの所有者に掛け合いに行ったのですが、まったく相手にされない。そういう意識が社会の中にないためです。

一方、野沢セメントの17号館は、三沢先生、内田祥哉先生がやってこられた歴史的建造物の保存委員会の、強い要望の下に復元されました。これはとても意味のあることでした。僕も、神戸の町づくりの魅力の原点が異人館にあるならばと考え、北野町に〈ローズ・ガーデン〉というのをつくりました。これは新築の商業建築でしたが、近代建築のボキャブラリーを使いながら、壁のイメージを周囲の煉瓦壁に合わせることで、既存の異人館を引き立てていこうとしたものです。魅力の中心に異人館を据えることで、異人館が残っていくと考えたんですね。それが当初、古い建築物に対する我々の対応だったんです。

その後、いくつかの古い建築物の保存、修復と新しい建築物の挿入とをやってきました。たとえば、〈大山崎山荘美術館〉。既存の山荘は70年前の建物です。関係者からも、最初はいろいろいわれました。「えっ、あんなものを安藤さん残すんですか」「新しいものを建ててくれて依頼しているのに」と。僕は歴史の上に則った方が、建築というものの奥行きを表現できると思うんですよね。イタリア、トレヴィゾの〈ベネトン・アート・スクール〉も同様に17世紀のヴィッラ風の建物を保存・改修して、新しいものを挿入するというものですが、新築するよりもエネルギーがかかるんですね。

たとえば「素材」の問題です。大山崎山荘のときは、当時と同じ材料、金物、衛生器具等を探しましたがみつからず、雰囲気を変えないような現在入手可能な材料を苦心して選びました。ところ

が日本と違いイタリアでは、古材バンクのようなものがあり、17世紀の煉瓦が建物の修復のためにストックされているのです。また、当時の技術も伝承されており、意識の高さに驚きました。

——〈ベネトン・アートスクール〉の場合はクライアントから建物の保存を頼まれたのですか。

安藤 ええ、そうです。新しいものは全部地下に入っていますが、保存修復だけでなく、再生でないとおもしろくないわけですよね。新しいメッセージを建築家がそこに込めることができれば、再生となるわけですね。この場合、地下に新しい建物が入っているの、元の建物は「環境」として残っているわけです。その「環境」を残すべきだと。新しい建築物が全面に出てきたら「環境」を壊してしまいます。建物の再生にはクライアントと建築家の判断力が重要です。

日本では、この判断力が欠落しているんですよ。上野の〈国立国際子ども図書館〉は、100年の時間が経っています。老朽化したから壊すという考えをしたのでは、こういう建物は残りません。

——古い建物に対して、どこを残し、どこに入り込んで、どこまでやって良いのかを判断するのは難しいことです。建築家の判断力が試されるわけですよね。

安藤 難しいですね。建築家に教養を求めている。つまりここでは「建築」という美学的な教養を求められているのであって、「建築」という「機能」とか「技術」とかはあまり求められていないんですね。「教養」というものをベースに判断力を求められ意志決定していかなければならない。建築家は、まだそれがなかなか弱い。

——たぶん、改造で評価されるべきところとは、「既存の環境」のどこを取ってどこを新しくするかという切り取り方自体に、既に設計が入っている点だと思うんです。そういうのがちゃんと評価されるべきではと。たとえば、改築に入ったときに、最初に設計した人がいますから、著作権がどうなるのかということも出てくるでしょうし。

安藤 でも著作権もつくったときからの時間で切れると思うんですけれど。

一概にはいえませんが、50年以上生き続けられ外観的な面だけにおいても十分に公共性をもったものになると思うんですよね。著作権という作家自身に関わる問題よりも、公共性を維持しながら、その建物が時代に合わせて生まれ変わっていくのか、そして都市の記憶をつないでいけるかということの方が重要なのではないのでしょうか。だから、時間が経てば切れてしまう。

——逆にいうと、安藤さんがつくられた建物に50年後、誰が入っても良いと認めることにもなるとは思います。

安藤 ええ。良いと思いますよ。50年も経ったらもういいやって(笑)。でもそれはやはり、判断力をもった人でないと困る。

白井晟一さんがつくった〈松井田町の役場〉と

安藤忠雄 Tadao Ando
1941年 大阪生まれ 独学で建築を学ぶ
1969年 安藤忠雄建築研究所を設立
1979年 日本建築学会賞
1985年 アルヴァ・アアルト賞
1994年 日本芸術大賞
1995年 プリツカー賞
1997年 RIBAトリプルメダルなど多数受賞
1997年 東京大学教授



というのが群馬県安中市にあるんですが、先日これをどうするかを話し合ったんです。たぶん1955年頃のもんです。残すだけではおもしろくない。判断力がないとだめですね。次の時代にどう導けるにかかっていますからね。

——今回の特集では、海外の方がさまざまな制度や考えの中でつくられたものを集めています、国内の最前線というところ……

安藤 だいたい、正面だけ残すものが多いですよ。あれはどうも片手落ちだと思うんですよ。空間に残す意味があるとしたら、そのボリュームを考えなければならない。僕は建築というのはボリュームが重要で、空間があることによって感じ方の違いが生じるものだと考えています。壁1枚にはボリュームがありません。外の1枚だけ残すと外には残るけれど、それだけが残っても中途半端だと思うんです。建築というのはボリュームの芸術ですからね。そのボリュームの考えかたとして、直島のベネッセの民家の改築はおもしろいですよ。町にある民家をたくさん借り切って元の形に修復つつ、現代美術の展示をしている。しかもそれを何軒もつくろうとしている。これにより、町に今までと違った空間ができると考えています。

——安藤さんの保存・再生案の中には、古い建物にガラスの箱を挿入するという一連のシリーズがありますよね。〈テート・ギャラリー〉、〈国立国際子ども図書館〉、〈マンハッタン・ペントハウス〉と。

安藤 ええ。そこででき上がってくる新しい空間と建築との刺激的な関係が良ければ、その関係によってまた50年、100年生き延びていこうと考えています。だから、癒着したかたちで仕上げていくことはやめたいと考えています。中途半端にやると、自分たちが問いかけようとしていることの問題点がはっきりしないですからね。

辰野金吾がつくった東京駅も、現在ではホテルになっています。あれも、あの時代の精神、技術、思いやりでホテルをつくっていたら、また違ったものになっていたでしょう。しかし疑似洋風の形で再構築されてしまった。残しかたを考えなければならない。

——最近の海外の改造事例をみると、機能的なバージョンアップとしてハイテクな改造が行われていて、その点が過去の改造事例とは違ってきていると思うんですが。

安藤 我々のやっているのは、機能的なバージョンアップという感じではないです。イメージーション、イメージの話ですからね。新しいものをつくってやることで、古いものを際立たせ、その価値を高めることで新旧合わせた環境全体が甦る。古いものは壊すと元にもどれないわけですから、そのあたりもしっかりと考えないといけな。

日本は建築をつくるのが非常に早いですが、イタリアはゆっくりしていて、ひとつの建物で10年かかったりする。その分、建物を消耗品のよう、すぐに壊してしまう日本と違い、数世紀という時間にわたり建物をいたわり、大切にす。

るという意識を国民全員がもっています。

カルロ・スカルパは300設計したけれども新築は3つだといひます。後は展示や増改築です。彼は建築を「何も地面に建てることだけではなくて、表現行為そのものを建築だ」と考えていたのだと思うんです。自分はどういう意志をもってつくるかというときに、生き方、考え方、表現の仕方がつながっているべきだと思うんです。

日本の建築家は、「自分の生き方」とかいう格好悪いことはいいたくないわけですよ。しかし、西洋の建築家の場合、「自分の生き方」と「考え方」と「つくるもの」とは割と連動している。

今、他にも海外で既存の建物の再生ををてがけています。〈アルマーニホール〉の改修と、マルセル・プロイヤーが戦後1950年代にセントジョンズという場所につくった教会の増築と新しいセミナーハウスを設計していますが、古いものと新しいものがうまくジョイントするようにしたいと思っています。ここでも重要なのは、どれだけ古いものを読みとるかということでしょうね。その視点がしっかりしていないと、どこを残して良いかわからない。

今、日本人には古いものが大切だという気持ちが希薄だと思います。そして、古いものとして残してきた歴史がないから、どうやってうまく残すべきかわからない。「日本の歴史というのは、歴史を消した上に、また新しい歴史をつくっていく歴史だ」と、鈴木博之先生はおっしゃっていた。

日本は、建築が持つ人間や社会に対する存在価値というものを機能でしかみていない国だということが問題なのです。それは地域社会や個人レベルでも同じです。機能は確かに問われます。しかし、実際機能を超えたものが都市の記憶として残っていく。それを認知しない国なんですね。つまり、「使いにくいじゃないか」というときに、すぐに建物を「解体」してしまうんです。

——しかし都心部に残すというとき、容積の問題が必ず出てくると思うんですが。

安藤 その点では古いものは基本的にやっかいでしょうね。残すというのは大変なことですから。ただ残すのではなく、どう残し、どう使うかを考えなければならない。それはまた、次元の違う話だと思います。

——都市問題との関係について、安藤先生の世代の建築家が、都市計画を決定している人たちと一緒にやっている姿を見せられれば、僕らの世代も都市についてもっと語れるようになるのではと思うんですが。残念ながらこのままでは都市と建築が離れていくことになる。

安藤 建築家がもう冷めているように思えますね。建築家のいうことが難しすぎて、一般の人たちの理解を得られないということもありますし理屈よりも、まず、内容をよくしないとだめでしょう。

——中之島の初期計画案を掘り起こしてみると、古いモジュールと、コンクリートという現代のモジュール、そして安藤先生による超ロングモジュールがひとつの建物に入り込んでいる絵になっ

ている。こんなのを実際見てみたいですね。

安藤 建築の本来的な空間というのも、時代とともに変わってきています。明治や大正の空間と、現在のものと。そこに新しいものを挿入する時に歴史の問題もあるけれど、空間そのものに対する問題意識もあるでしょう。空間を体験するとき、一気に体験者に伝えていくような残し方をしないと、本当の意味で、生まれ変わることにはならないのではないのでしょうか。そう、スケールって大事だと思いますよ。ですから大阪の中之島のスケッチでは、何段階かで挿入していこうと考えたのです。

——現在ヴェネツィアなどに残っている建物は、木の梁でスパンが3.5～4m程度です。それ以上飛ばすとすると、贅沢でお金が必要だった。ベネトンの場合にはどのようにお考えになったのですか。安藤 ベネトンでも、元の建物のスパンは3、4mです。新しく挿入しているコンクリートのスパンは、それよりも長くしている。それが「技術の推移」というものを表現しているのだと思います。

また材料も、レンガと新しいコンクリートを対比しながら残している。そういうふう、いろいろなものを残し、同時に感じていくことで、次の時代に何かをバトンタッチできるのではないかと思います。

一口に「建物の再生」といいますが、技術とか、人間関係、その時代の精神、空間に対する感性とか、いろいろなものを同時にその空間の中で体験できるということを考えてみなければなりません。そう考えると、古い建物と新しい建物の合体というのは、大変おもしろい。こんなおもしろいテーマを、何で今まで放っているのかと思いますね。

——安藤先生は、ずっとこういことをいひ続けていますよね。20、30年と。

安藤 そうです。こういことを僕は30年間いひ続けて、やっといくつかの仕事ができたんです。たいへん短い近代以降の日本の建築の歴史、生活史の中からでも、建築をつくった人たちの表現と思ひ、またいろいろなものが重なって魅力あるものとして生まれ変わります。だからこれほど有意義でおもしろい仕事はないと思うんですが、残念なことに多くのものが気楽に壊されています。考えてないですよ。

保存という仕事を通して、我々建築の設計家、建築技術者が社会に認知されて残っていくことにつながるはずだと思います。

(2000年5月24日、大阪にて インタビュー：宮脇 勝)

外壁と内部空間の変換と切り妻角度の延長

クッパースミュレ・ミュージアム「グローテ・コレクション」

デュイスブルグ（ドイツ）

ヘルツォーク&ド・ムーロン

Methods: The wall and space conversion / the prolong of the roof angle

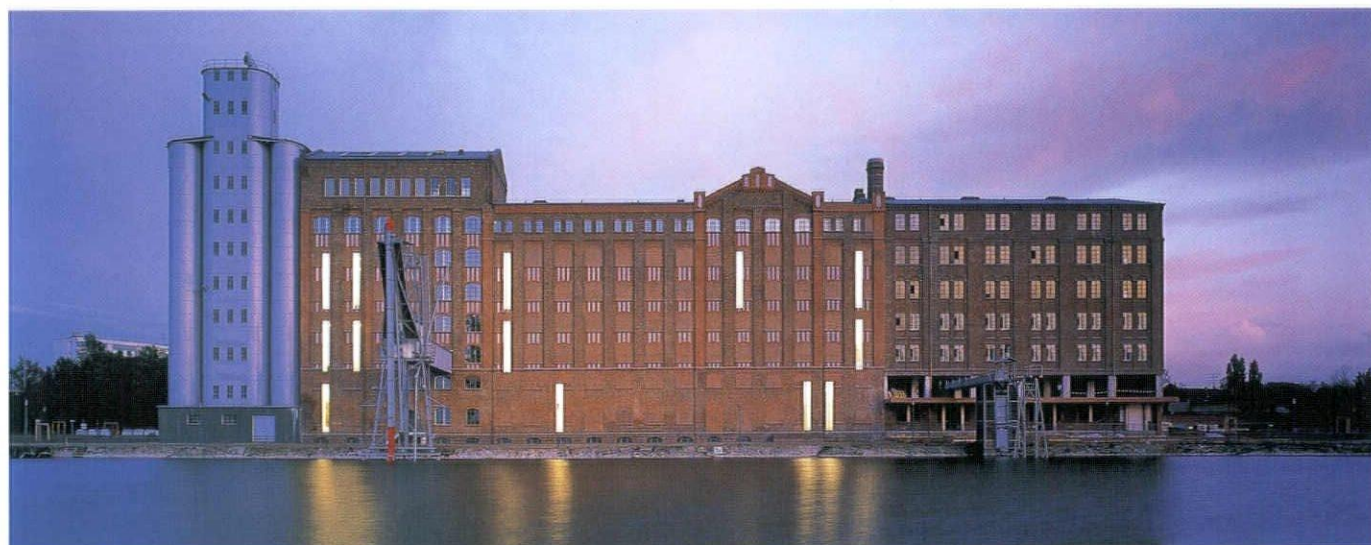
Project name and the location: Koppersmühle Museum "Grothe Collection", Duisburg (Germany)

Architects: Herzog & de Meuron

Program: Mill (1908-16) → Museum (conversion and addition: 1997-1998)



入口側立面。既存の建物の切妻屋根の角度を延長して増築された階段エレベータ室

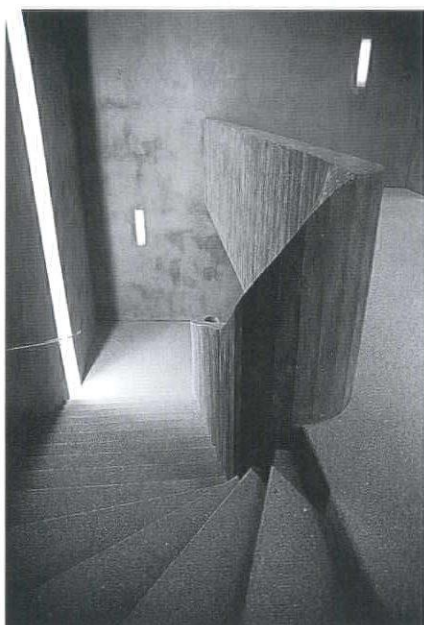


運河側立面。展示室の大きさに合わせて縦長の窓が切り取られた

SD0010



レンガの壁を切り取った入口部分



階段室内部



階段室内部

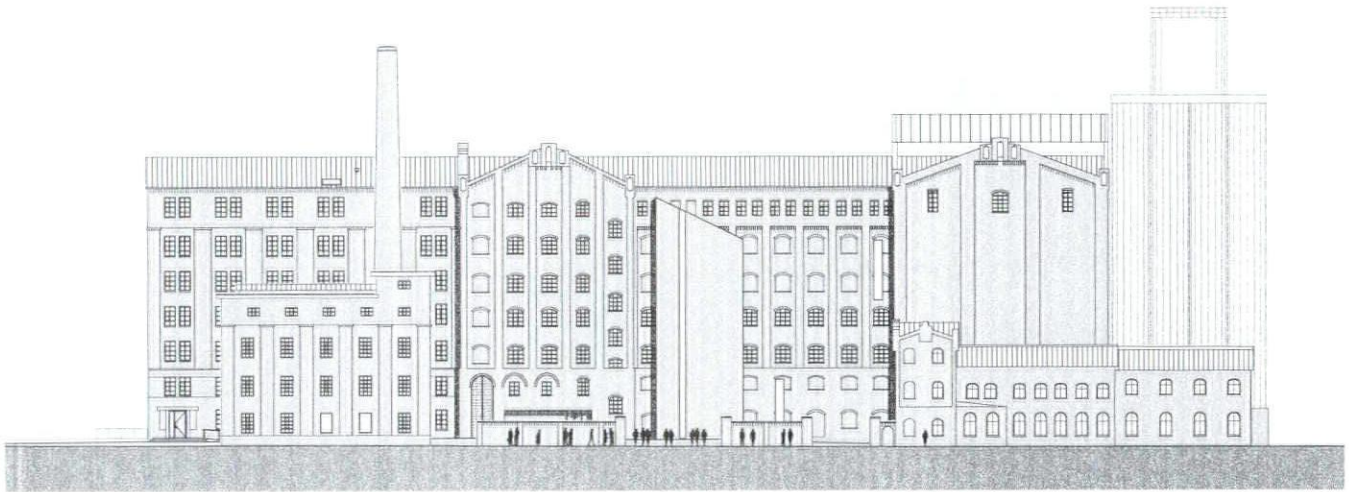
1908～16年に建設された古い工場は、キーファー（Kiefer）兄弟とヨゼフ・ヴァイス（Joseph Weiss）によって運河沿いにつくられた。この地区の再開発は、N.フォスターによってマスタープランがつくれ、歴史的な工場建築はハンス・グローテ（Hans Grothe）のコレクションである戦後のドイツ芸術を集めた美術館に転用された。

改造は元の構造体のほとんどを再利用し、天井高が5～6mある展示スペースをつくるために床を取り除いている。展示スペースに光のスリット

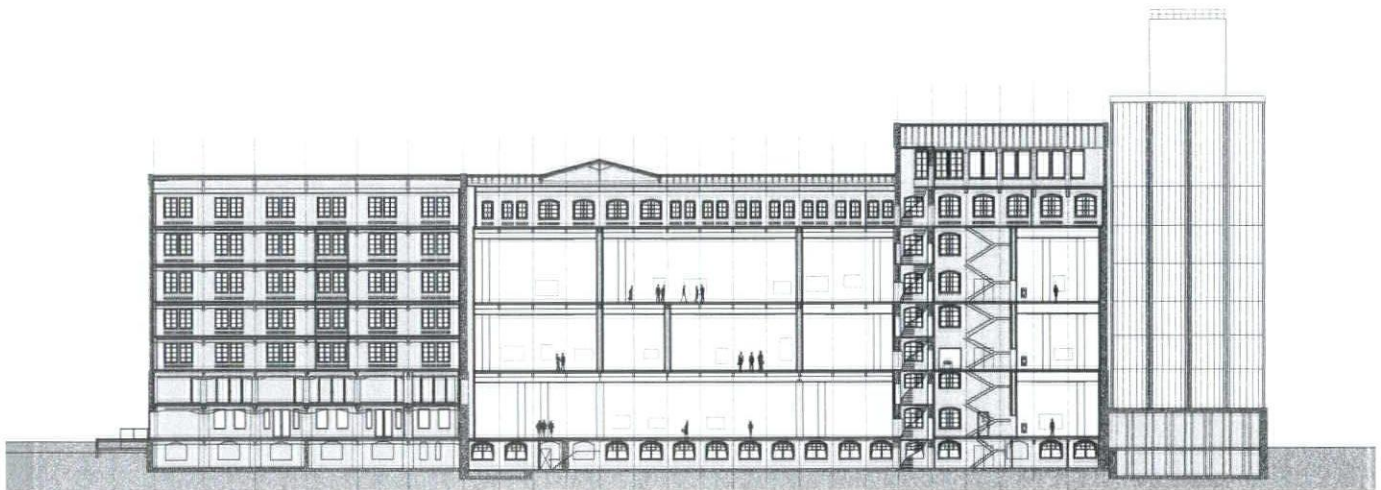
を入れるのために、既存の窓はレンガで埋めたり、切り取ることでレンガの外壁は古くもあり新しくもある新たな質を獲得している。このことは、建物のボリュームに単一的特性を高める働きをもつ。

内部においては、強固な白い壁と縦のスリット窓から入る光が厳格な空間をつくっているのに対し、すべての床には極めてデリケートな質感の石材が選択され使用されている。ここでは、空間というよりも、さまざまな質が溢れていることに驚く。既存の切妻屋根の角度を延長し、カットされ

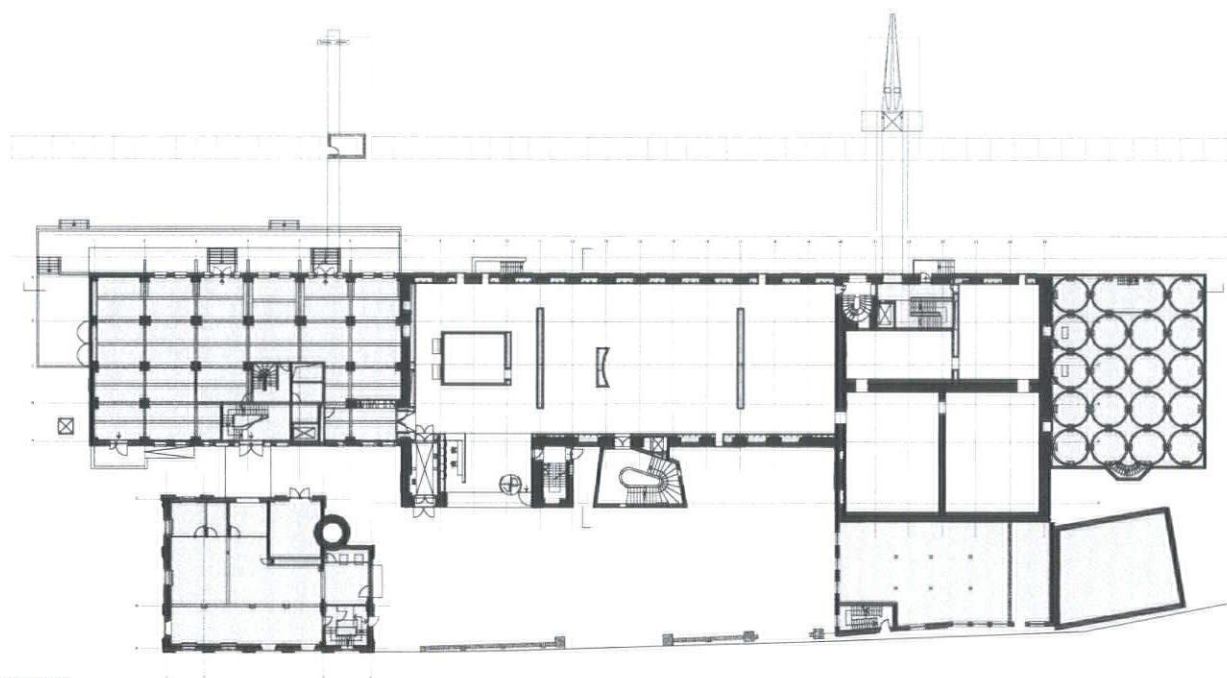
た立面をもつ新しく付加された階段室とエレベータ部分も、コンクリートに含まれる艶消しの色の感触によりレンガの壁と調和しつつ、新しい特質を加えている。一方運河側では、既存のレンガ壁とともにある昔の窓と、新しい内部機能に応じてつくられた大きなスリット状の窓とが、ひとつの壁の中でオーバーラップして現れている。現在まだすべての工事は完了していないが、美術館はすでにオープンしており、非常に親切的な運営がなされている。



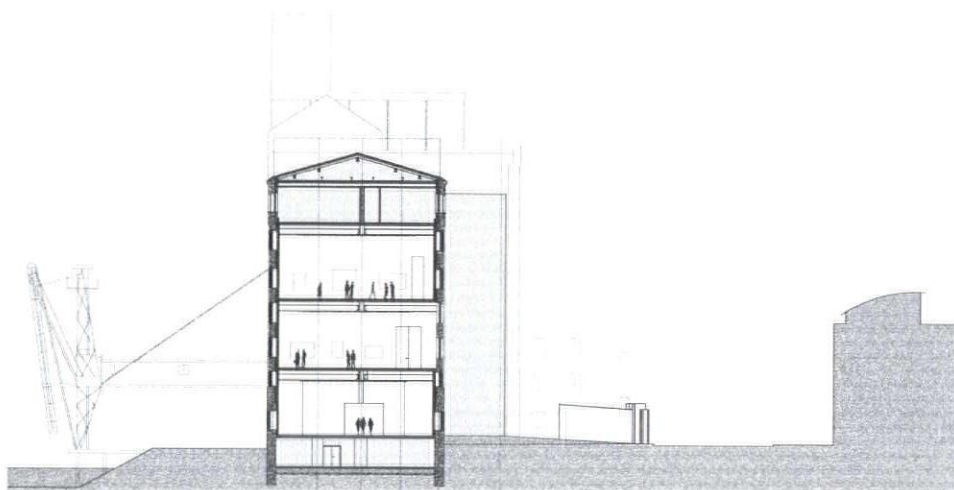
立面図



断面図。展示室は2層吹き抜けに改造されている



1階平面図



断面図

地下への拡張と 歴史的建造物のバリアフリー

進化博物館

パリ（フランス）

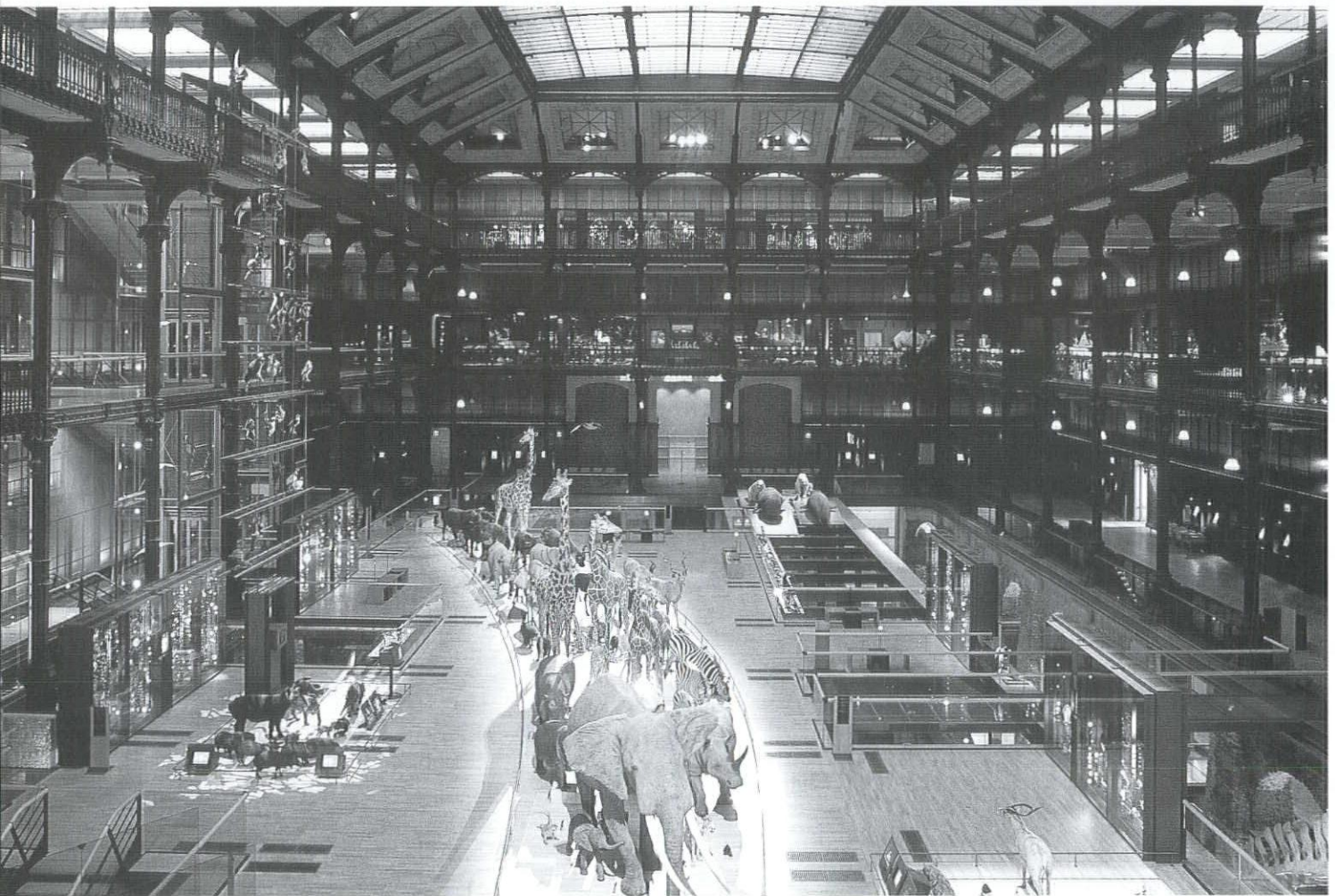
ポール・シュメトフ & ボルハ・ユイドプロ

Methods: The extension to the underground / The barrier-free in the historic monument

Project name and the location: Evolution Museum, Paris (France)

Architects: Paul Chemetov & Borja Huidobro

Program: Museum (1889) → Museum (transformed: 1994)

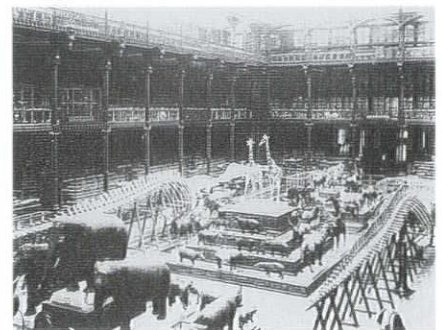


主展示ホール

1870～89年に本格的な自然史博物館が、Jules Andreによってフランス革命100年記念の一環として完成した。1889～64年まで博物館は大庭園に沿って増築されるが、その後閉鎖され1975年に1度破壊計画が持ちあがる。しかし、文化財保存の指定がファサード部分にされながらパリのグラン・プロジェクトとして1987年にコンペとなり、勝ったP.シュメトフのデザインによる種々の改造を経て1994年にオープンすることとなった。

エントランスがファサード側ではなく、側面に切り取られたガラス面からであることも特徴である。高い基壇部分をもつクラシカルなデザインに階段のアプローチはつきものであるが、バリアフリーで現代的な地上レベルのアクセスを確保する

ために、あえて側面を切り取っている。庭園側のメインファサードの保存と現代的改造で矛盾するアクセスレベルの調整方法は見事である。また、全体ヴォリュームを保持しながら、展示スペースを拡張するために、地下への増築がなされたのも興味深い。地上レベルから入ると、そこは元の地下レベルにあたる。新たにつくられた2階レベルは基壇部分であり、元の1階レベルにあたる。2階は大地のレベル、1階は水面下のレベルとして展示されているのわかりやすい。側面的一方は、階段とエレベータシャフトが加えられ、側面一体が照明器具になっている設備コアだ。トッブライトは改修され、オリジナルに似せながらもスリットを付けて照明設備や消火設備を備えている。



改造前、19世紀の展示状態



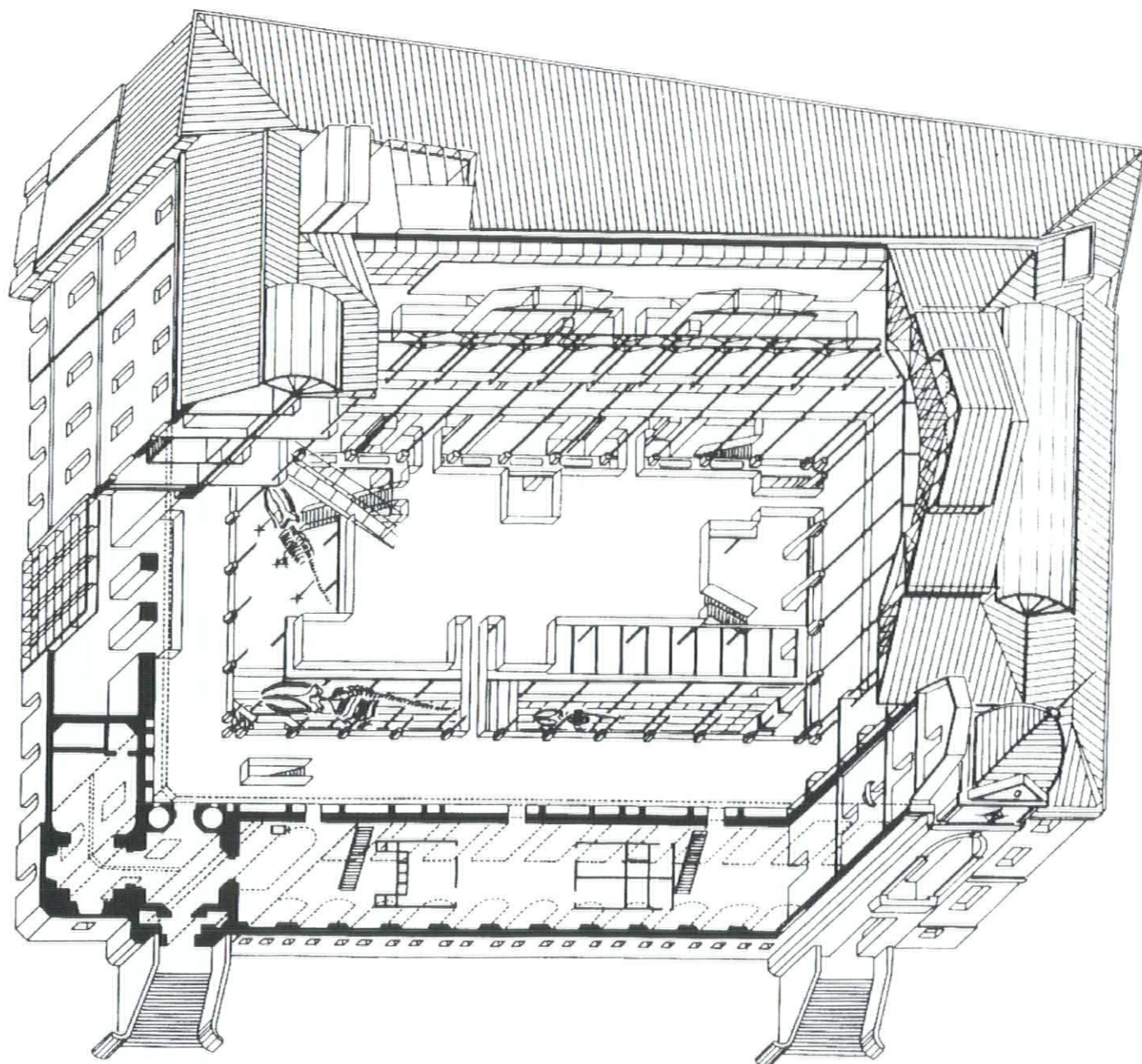
公園モニュメントと博物館のファサード



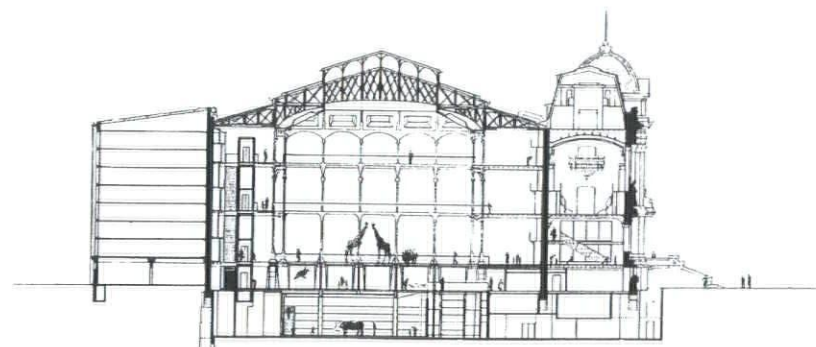
側面を切り取った新しいエントランス周り



地下拡張した新1階レベル「海底の展示」と旧1階レベル「大地の展示」

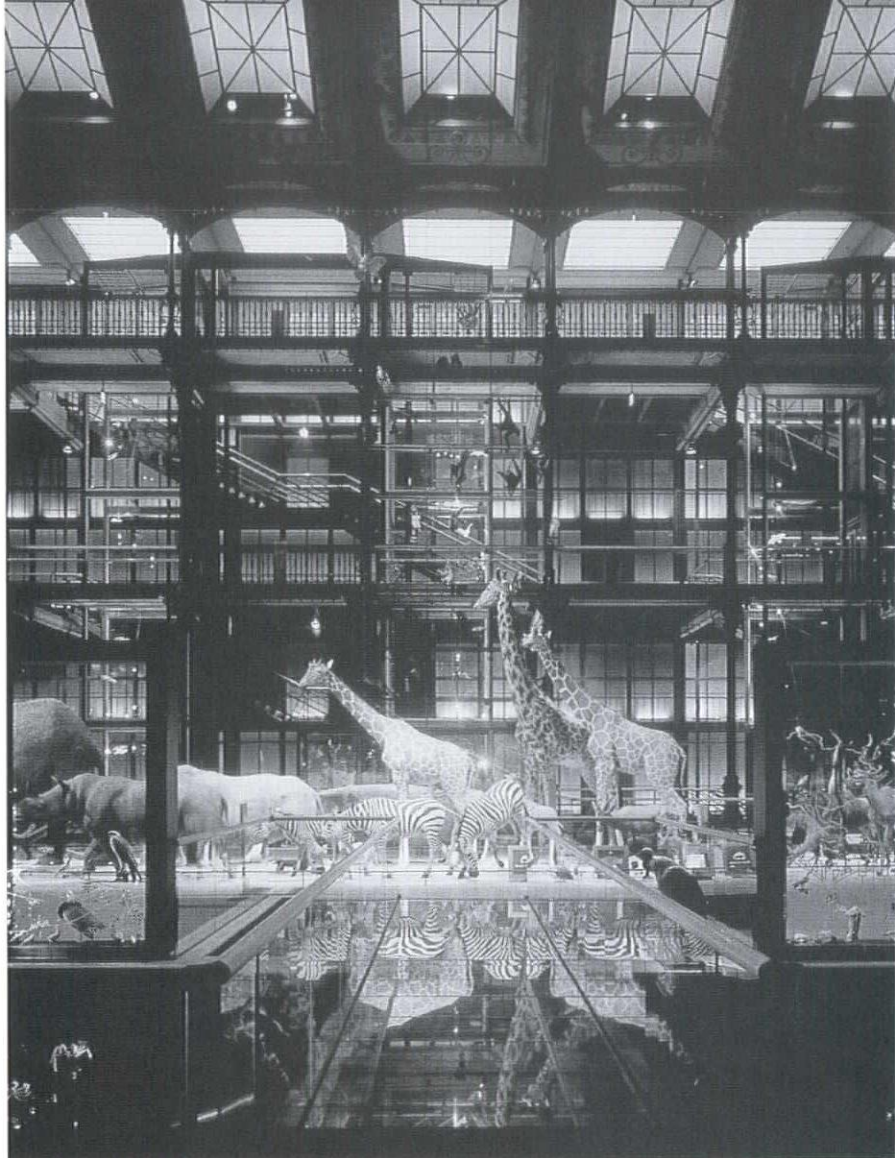


アクソメ。左側が入口。中央部分を地下に掘る。入口を入ると「海底の展示」、かつての1階レベルは「大地の展示」レベル。図の上側にエレベータと階段がゾーニングされ、壁面一面が照明となっている



断面図 S=1:1000。右側が公園側のファサード。その階段を上がったレベルが、かつての1階レベル。地上レベルに展示空間が新たに設けられているほか、さらに地下にもかつての基礎構造を見せながら展示空間が拡張されている

19世紀の鉄の仕事を尊重しつつ、ガラス面に効果的に展示物が映しだされている。照明演出にも力が入られている



壁面の照明とガラスのエレベータシャフト



年代におけるネオクラシックの建築家で、国の公認建築家となった人がいます。この人が1836年に自然史博物館の横に続く温室群をつくったのです。我々はそれも改修しましたが、1852年に彼はこの自然史博物館のマスタープランの案もだしています。

1870年の戦争の後、弟子であるアンドレ（Jules Andre）がプロジェクトを開始し、実際に建設されたのが1882-89年、竣工はエッフェル塔などと同時に、フランス革命100周年記念の年です。博物館は「文化を知るため」、エッフェル塔は「フランスの施工技術を知るため」のグラン・プロジェクト（国の大事業）でしたが、その後、1889-1964年に博物館は閉鎖されたのです。それ以来メンテナンスはされておらず、また戦争中、上部のガラスが壊され、戦後その蓋もしていなかったのに加え汚れもひどく電気も通っていないという状態でした。1975年にはこの建物の破壊計画ももち上がったのですが、重要文化財認定建築家たちが保存を訴えたのです。

——このプロジェクトは、パリの都市計画のなかでどのような位置づけでなされたのでしょうか。P.C. グラン・プロジェクトとして、1987年のコンペで勝ち取ったものです。このコンペでは驚いたことに、博物館学（ミュゼオグラフィ）の観点よりも、歴史的観点に立った設計であるということが評価されました。普通の建築家というのは既存の建物を壊さなければ計画ができないと思いますが、そこで差がついたんですね。

また、審査委員長はフランスでも珍しいノーベル賞受賞者でした。このプロジェクトは既存の建物改修において方法論的観点から他に例をみないくらい素晴らしいできだと思えます。それにミュゼオグラフィの観点からいえば、数年後、他の人がやり直し、より良くしていくと考えられますが、今のところは、自然博物館のプロトタイプのひとつになるでしょうね。比較するものに、大英博物館、ニューヨークの自然歴史博物館の例がありますね。

大英博物館は19世紀の大博物館らしい建物ですが、知識者のための図書館のようなもので一般の人たちのためのものではありませんでした。19世紀の博物館は世界中でこのような知識者たちの図書館的モデルの元に建てられていました。

一方、30年代のアメリカはハリウッドの映画的な博物館です。ニューヨークではジオラマなどが良くできています。

50-60年代には大衆教育的な美術館として、大英博物館の新館ができ、グラフィックで矢印をつくっていたりします。この3段階の博物館変遷を経て、博物館の関心はミュゼオグラフィの観点からゼネラリストへと向けられていったのです。

展示について私はすべての責任を負っています。建築、ミュゼオグラフィ、セノグラフィ、照明といったすべてにです。だからといって私ひと

ましたが、私たちは30年来的につき合いです。テアトルのプロジェクトをよく一緒にやりました。彼のようなパートナーと議論をし、コンセプトを洗練させることができてとても幸運でした。「建築は何よりも優先である」と思いがちですが、建築家として自己中心的になってはいけないのです。

——設計をコンサルティングしていくときにどのくらいの時間がかかったのですか。予算は十分にあったのでしょうか。文化財院側とぶつかったところはどこにあったのですか。

P.C. プロジェクトを開始したのが1989年で、竣工が94年です。5年という期間は信じられないほど短いものです。その期間内でスタディと施工、しかも修復までしなくてはならなかったのです。期間としてとても短いです。

予算のことで、総予算は修復もすべて含めて4億フラン（約66億円）でした。その中で我々が携わった分は2億4千万フラン（約40億円）で、建設に1億8千5百万フラン（約31億円）、ミュゼオグラフィに5千万フラン（約9億円）かかりました。これはすべて税抜きの金額です。適切な予算でした。我々が改修した部分の床面積が1万9千㎡ですが1万フラン/㎡弱（約16万円/㎡）になりますね。パブリックスペースでは、7千㎡で7千フラン/㎡（約12万円/㎡）、とフランスの博物館の建設費用としては、とても低くなっています。両方合わせて、美術館の部分のみで、1万7千フラン/㎡ぐらいですから、我々はその3/4を占めていたということになります。

この例を通して気づいたのは、もし、すべてを壊さず既存の建物を再利用する場合、用心さえすれば経費の節約が可能であるということです。

ルーブル美術館の場合、ナポレオン3世の部分を大半残せたはずなのに壊してしまいましたからね。必要のないところまで壊し過ぎました。私の行ったこのプロジェクトでは19世紀の建物は壊していません。単に節約のためだけでなく、建物の価値自身、歴史、記念、思い出、夢をも保存しようとしたのです。

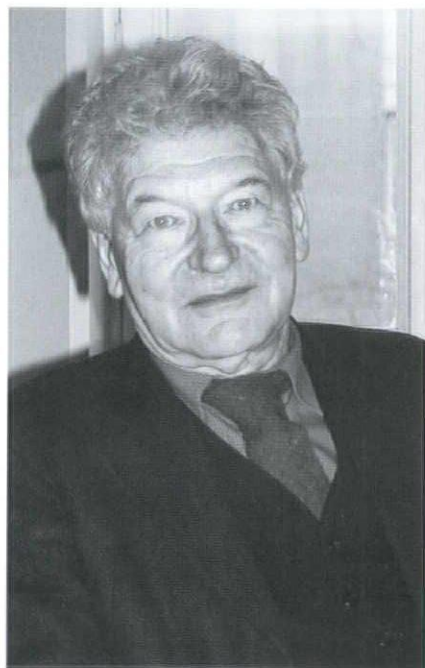
——この建物は重要文化財に指定されているのですか。

P.C. すべての視点において、必ずしも私はフランス重要文化財院（Institut Monument Historique de France）を支持できるとは考えていません。とても曖昧なのです。

一方イタリアでは歴史家、または建築家といったそれぞれの専門家が、その実施が的確かどうかを確認しています。しかしフランスでは、重要文化財所属の建築家が自ら決定し、監理をし、実施をするのですから普通ではありません。フランスにおけるいくつかの悲劇は、このような状況のせいなのではないかと思っています。

当時のままの姿に修復できるのは素晴らしいことですが、トランスフォーメーション（改造）は

ポール・シュメトフ／Paul Chemetov
1928年パリ生まれ
1959年エコール・デ・ボザール卒業
1977-89年パリ大学教授
1980年フランス建築グランプリ、芸術文化勲章など
1993-98年スイス・ローザンヌ工科大学教授
パリでは大蔵省庁舎や進化博物館改修が代表作



新しいプロジェクトなのです。私は新しい建物を建てるよりも改造の方が文化だと思っています。建物を改造することの方が、文化の知識、経験を問われる世の中でもっとも難しい仕事です。

建設が終わった後に、この建物全体が文化財に指定されるようになりました。非常におかしな状況ですが、今日では改造された建築物が文化財に指定されているのです。

——以前はファサードだけの重要文化財指定でしたから、建物の価値が上がったというわけですか。

P.C. ええ、そうです。鉄格子を修復しなくてはならなかったのは、私は前世紀には存在しなかった鉄格子の案を出しましたが、重要文化財の建築家にはそれを却下され、幾度か彼等とぶつかりました。ここに重要文化財院の曖昧な点が現れていると思うのです。重要文化財院側は例外もありますけれど、一般的に流儀を重んじ、知識を蔑ろにしているのです。

——この建物に関しては一般の市民やジャーナリストからはどのような反響があったのでしょうか。

P.C. 奇妙なことに一般市民、専門家そして、ジャーナリストたちには大変評判がよかったです。はじめてのことです。たいてい一般市民や専門家たち、ジャーナリストは、建築に関してとても批判的ですからね。

この博物館を訪れるのに最適なのは、あまり人がいないときです。ゆっくりと作品を鑑賞できます。建物を満喫するには、最速2時間は必要ですね。人波におされ、見たい物をゆっくりと見れない、まあ、それが現代のコンセプトなのでしょうけれど。

しかし、人数を尊重しないと建物が傷みます。たとえば、今回のプロジェクトでは空調システムに問題がおきました。60万人の来館者数にあわせてプログラムされていたのですが、空調に予想以上の電気代がかかったので、今度は効果照明を消してしまいました。

——空調設備はどのように設置してあるのでしょうか。

P.C. 既存のガラスの脇に、すべての配管が通っています。床のグリルから吐出し、屋根部分から排出しています。ある意味、ポンピドーセンターとは対照的で、ここではテクニック面がすべて隠されています。この建物が建設された当時は空調設備は存在しなかったもので、これらの設備を外観として共存させられないのです。

——照明方法やトップライトについて教えてください。

P.C. 劇場のようなプログラムで、ガラス張りの部分に36基のプロジェクト照明設備を組み込んでいます。日の出から始まり、雷とともに日没するというアイデアを、ルネ・アリオと共に考えました。そこに特別に作曲された音楽と動物の鳴き声が調和するという仕掛けです。ただ、今では1日に1度しか作動させていません。

トップライトのデザインは当時のモチーフを活かしていますが、スリットを開けています。これは通気のシステムも含めセキュリティに見合うガラスだけを再設置しました。通気システムは消防法によるものです。

——展示空間として工夫されていることは何ですか。

P.C. この博物館が、19世紀から数えて第4の博物館形態を提示しているといえるのは、イリュージョン（幻想）ではなく、アリュージョン（引喻）という点においてです。ですからここには偽物の岩などありません。自然を再現させるのではなく、想起させるのです。

たとえば、猿は木々の中にはいません。偽物の木を置いても意味がないので、猿が木々の中で何をしているかということ尊重し、ここでは猿はぶら下がり運動をしています。

通常、白熊は氷（glace：仏）の上にありますね。フランス語のじゃれなのですが、ここではガラス板（glass：英）の上にあります。フランスではこのような言葉の遊びによって展示されている白熊が人工的で、生きていないことを理解します。だからといってポリエステルでできた氷のような物ではなく、あくまでも冷たい質感のある物の上にいるのです。

一方、鳥はエスカレーターの脇に吊されています。そのエスカレーターの動きが鳥たちを少しずつつ動かしていることにお気づきになるでしょう。それで十分なのです。訪問者に対し、鑑賞のイニシアティブを取らせるという配慮があるのです。ディズニーランドとはまったく反対ですね。ここでは大人であっても、子どもであっても、想像力を駆られたり、夢をみる事ができるのです。

——プランニングに関してお聞きしたいのですが、エントランスとアプローチの考え方がとても面白いと思われるのですが。

P.C. 図面を見ると分かりますが、昔の建物は公園側はエントランスでギャラリーがあり、この建物から庭に続く階段がありました。

一方、我々の関心は、ジュシュー（Bernard de Jussieu）が18世紀に日本から持ち込んだ〈ソフォラジャボニカ〉が植えられている側面の部分にありました。痛んでいた建物（アンドレ設計）の解体のおかげで、街からの眺望を得られたのです。ここでもまた、文化財院との戦いでした。というのも、我々はこの部分だけの保存が可能だと思ったからです。

この建物に面していた建物を解体することになったので、その床ラインのみを残したらどうかと提案したのですが、文化財院側は反対し、さらに現在の実現した案にも反対していました。側面に大きな穴の開いた部分に、彼等はアンドレ風の設計の意匠を求めてきたのです。19世紀のネオクラシックのものをです。しかし私は鉄とガラスのファサードをつくることにしました。19世紀に技術があれば、きっとこうしていたと思うからです。

——なぜ、そもそも正面からではなく、側面からアプローチさせるようにしたのですか。

P.C. 我々は、このアプローチのおかげでコンペに勝ちました。特にこの大きなサイズの横軸からアプローチさせることにとても興味をもったのです。

ひとつめの理由は、ハンディキャップの人々がクラシックな大階段を上らなくても済むということ。ふたつめとして、夜、鉄柵を閉めることによって公園を閉鎖しても美術館を開館できる、ということがあげられます。このふたつの要素が勝因でしたね。側面からアクセスさせるという案は我々だけでしたから。

——元の建物の地下を利用しながら、増築するアイデアも興味深いです。

P.C. これもこのプロジェクトの良いアイデアのひとつです。建物のセンター部分の地下には何も無かったので掘りました。おそらく1万年程前の砂が出てきたのですが、その中に我々は700万フラン（約1.1千万円）相当の砂金を発見し、それが大きな収入源にもなりました。

——このベースメントは非常に深いですが、掘ってみてその深さがわかったのでしょうか。

P.C. 深いということはわかっていましたが、どのような状況かはわかっていませんでした。それに資料もありませんでした。ですから地下の基礎構造を発見したとき、すぐにそれを保存し、公開しようと思ったのです。これは19世紀の建築技術の高度な意識を証明するものです。

——古い構造体の中に新しい構造体をつくるのに、なにか問題が生じましたか。

P.C. 古い構造体と新しい構造体は、それぞれ独立しています。教訓として19世紀の構造をそのまま再築することを避けました。たとえば古い躯体には現代のコンクリートや鉄を使い、当時のオリジナルのものと、現代のものとを区別しました。

また、ホールに使われている木材はその下部に樫材、さらにその下には樺の木が使われています。我々は当時のものを忠実に再利用しようと思いました。この建物の中を歩きながらそれぞれのエレメントの年代をいい当てることができます。また方法論として重要なことですが、既存の建築物への介入工事は知識的にも素材的にもリパシブルでなければならない。もしもこの建物を壊すことがあったとしたら、元の19世紀の姿に戻す事ができる。そういう介入の仕方を施したつもりです。

（2000年3月22日、パリにて、インタビュー：宮脇 勝十 河原田 千鶴子 十島 基樹）

中庭への増築と 裏側への新ファサードの付加

東京大学工学部1号館

東京（日本）

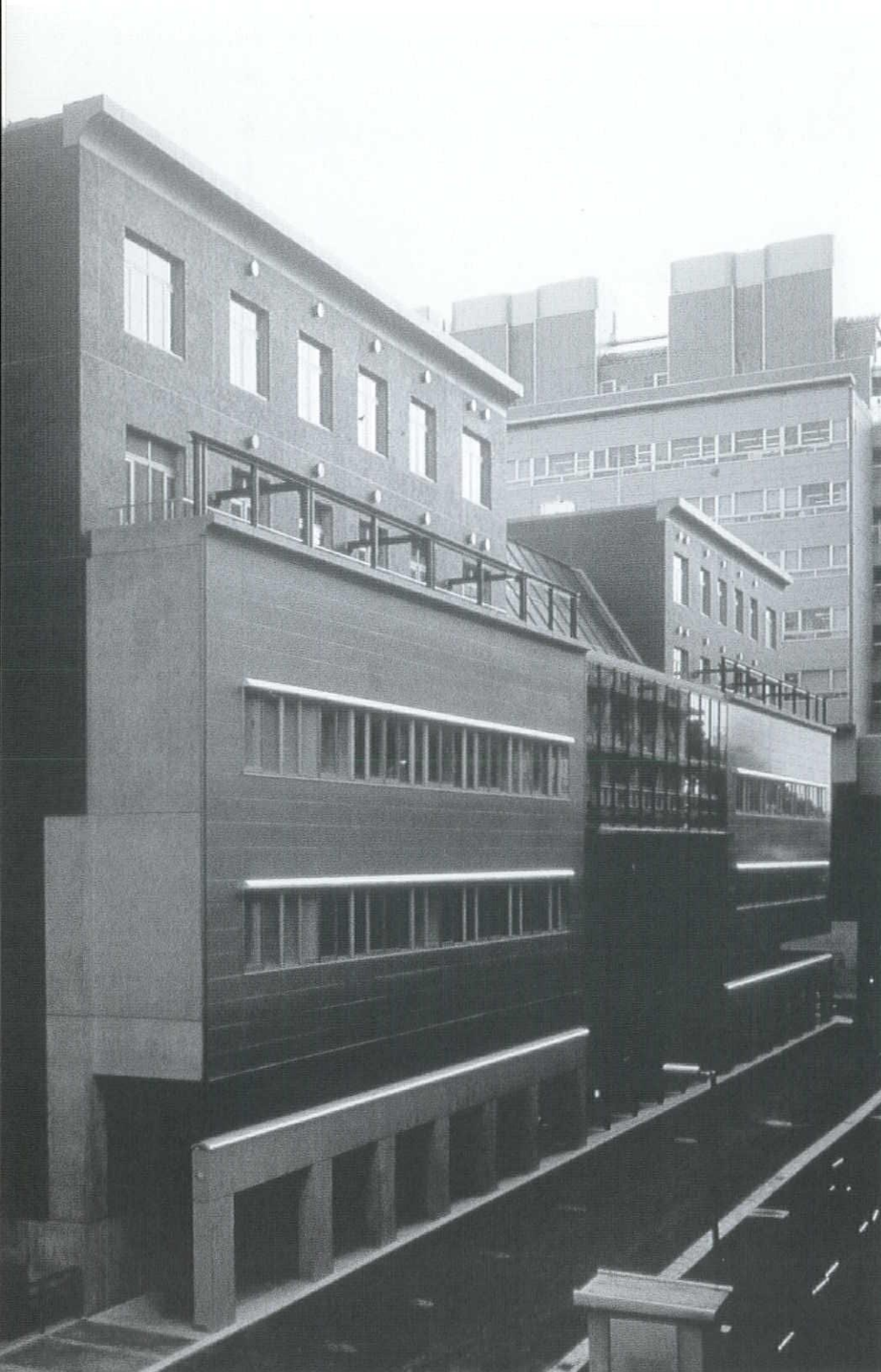
香山壽夫

Methods: The extension to the courtyard / The addition of the new facade to the back side

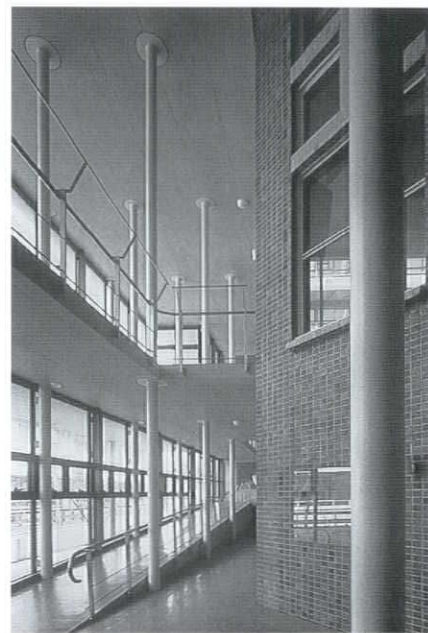
Project name and the location: Building no.1, Faculty of Engineering, University of Tokyo, Tokyo (Japan)

Architect: Hisao Kohyama

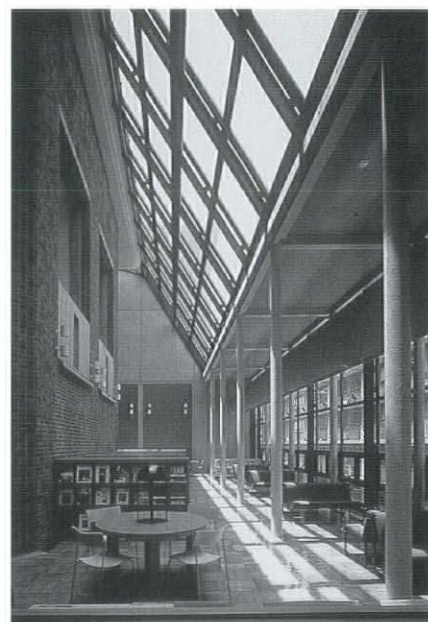
Program: University (1935)→University (transformation and addition: 1996)



増築部分にできた新しいファサード



増築部分のホールと既存の外壁（右）



既存の外壁（左）と図書館読書のトップライト

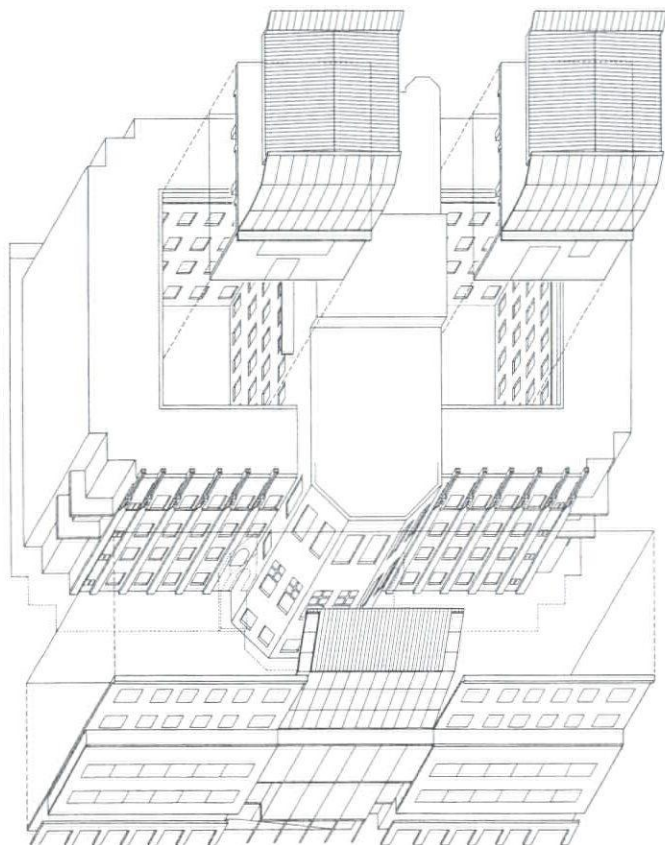
工学部1号館の増改築は、「内田ゴシック」と呼ばれる内田祥三による東京大学の施設の改修例の中でも一際目立った存在である。建築および土木学科が入っているため、生きた教科書としての建物ともいえる。またわが国における公共施設の増改築のモデルとして、可能性や諸問題を明らかにしている点でも意義深いものがあるだろう。

設計者・香山壽夫の、既存の建物に愛着をもっ

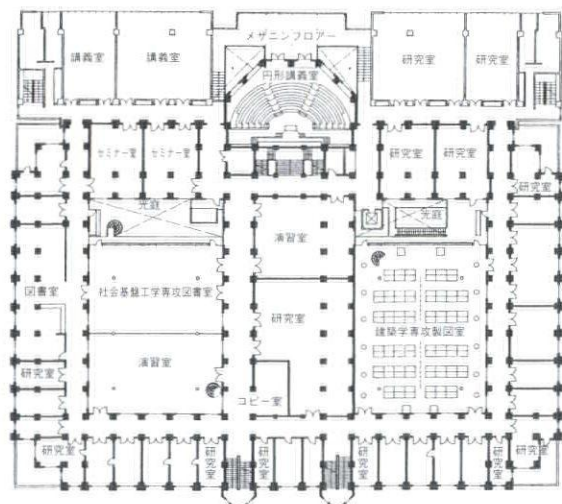
て残すことを事前に考え実務の中で早急に対処すること、さらに適材適所の改修設計判断をある程度フレキシブルにしておくなどの姿勢がうかがえる。平面、断面、配置の特徴を最大限活かした上での中庭の増築、外観の修復と同時に窓サッシ等のリ・デザイン、将来のキャンパス計画から裏側にもファサードをもたせ、旧来の壁面を内壁として再利用する増築、そして内田先生を思い出し

ながらの設計など、新旧の複合的な重なり合いが興味深い。

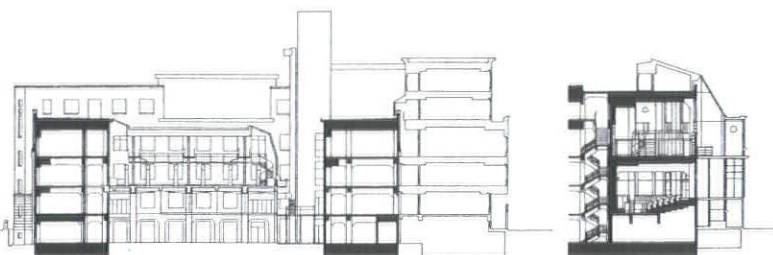
増改築において、マッシブな旧館に対しできるだけシャープな要素で構成すること、ガラス、スチールの壁と、梁のないフラットスラブ床や横力を旧館に伝えないほっそりとした鉄骨円柱を用いて、内部の床や円形講義室にみる木質感を保持するなどの注意が払われている。



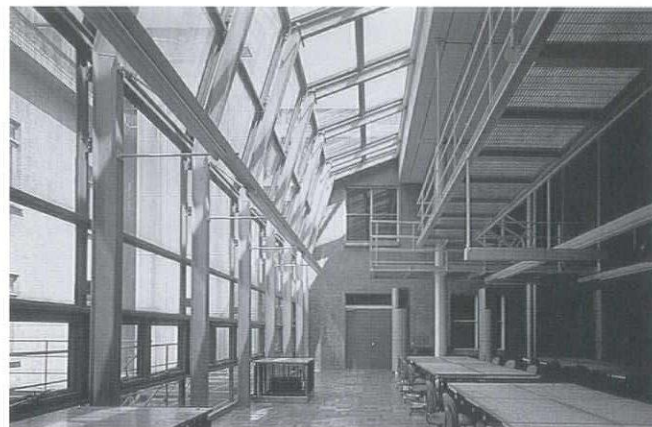
アクソメ。中庭と後ろ側への増築したボリュームがわかる



2階平面図 S=1:1000 中庭は屋内化され、設計演習室となる (■: 既存部分)



製図室部分の断面図(左)と円形講義室と図書室部分の断面図(右) S=1:1000 (■: 既存部分)



昔の中庭が製図室となった



増改築前の中庭の様子

常に対立しながら、連続していくこと

インタビュー：香山壽夫

——うまく増改築をして建築を長く使うという考え方に対して、規範がまったくない状態であると思います。アイデアもまだ開発中なのでは、と思われませんか？

香山 建物の再生というのは、特別なことではなくて、ごく基本的なことだと僕は思っています。設計というのは、本質的に連続的なものですからね。

一方で、時代時代の特徴となるテーマ、再生にもその時代の特徴的な手法というのがあります。時代ごとに特殊な展開をしていくというのが、意識の中にあり、手法としてどうやって新しいものを取り入れるのかでしょうね。

——おそらく、国によっても色々な考え方があって、入り乱れている状態といえるのではないのでしょうか。特にヨーロッパは、各国の制度の中で、様々な国の建築家がいろいろな解答を出しています。

香山 そうですね。僕自身の学生時代という、宮脇さんの時代とはまったく異なり、建物というのは完全に壊してからつくるもので、まさしくそれが近代建築ということだった。さらに、歴史の勉強は、建築家には不必要なものだとされていました。都市工学科の中で、歴史を学べるようになったというのは、あのころから考えれば大きな違いです。

そんな時代に、僕は日本を離れてアメリカに行った。そこで、たとえばミケランジェロの話など聞いていると、彼の仕事は独創的で、最高のものではある。がしかし、彼がやったことはすべて再生なんですよ。まったく新しくつくったのは、ひとつもない。すべて増改築が、人のやった基礎の上に建てたものです。それをヨーロッパでは当たり前だと思われている。

——それぞれの時代様式が混在しても、複合化しても良いとお考えになるのですか。

香山 純粋な計画都市というのは、架空のものに過ぎず、現実には存在し得ないわけです。人間が仕事や社会的な生活をするときには、必ず何かに規定された上で、自分の仕事があるわけです。本来生きているということは、全部増改築のようなものではないのでしょうか。

——モダニズムの形式は、それ以前の様式とあまりに違うために融合しづらいという側面をもっていました。モダニズム全盛期は旧態を排除して建て替えば良かった。しかし混合するとあまりにも違って見苦しく、新旧対比の手法に限られていたのではないのでしょうか。それに対して最近のは、うまくソフトに溶け込んでいるのだと思います。本当のハイテクになりつつあるんじゃないかと思えるようになってきました。

香山 なるほどね。

——いい換えると過去の弱い技術と融合させるぐらい非常にハイテクだと思うんです。ソフトテックというか。その辺が、過去の増改築手法と異なる部分ではないのでしょうか。

香山 僕らも傍観的にいえば、近代建築の初めの人たちにとっては、自分を縛っている状況というものが否応なしに目の前にあったはず。必死に拒否する方に意味があり、拒否する自分にがらみがあった部分もあったと思うんですよ。逆にいうと縛るものが弱くなってきたのかもしれない。

ない。しかし、ソフトというのは、何か新しい局面をいっているような気がしますね。

僕自身、改修の仕事はまだ十分満足にやれたとは思っていません。今、保存というをやたらにお金をかけてしまっていますが、僕にいわせれば、少々やり過ぎな感が否めません。

——ヨーロッパの場合、何に転用するかは従来の使用用途に依っていません。重要なのは改築しようとする建物が何であるかということです。

香山 やはりヨーロッパも文化財保護はうるさいものですか。

——それはもう（笑）。

香山 結果としてみれば、バラエティに富んだものが多いですね。

——イタリアは中でももっとも厳しそうですね。だけど、建築の増改築と都市の再開発が連続していて、非常におもしろい。ドイツも厳格です。逆にフランスは改造して価値を上げようすることに積極的です。いずれの場合も、建築と都市とが不可分だというのが僕にはおもしろいんです。

香山 今おしゃった建築と都市を連続的に扱うというのは大切なことですし、そのためにはつくり手からすれば、新しく使うアイデアも必要でしょう。他にもっと色々な使い方ができないかっていうんだけど、日本の場合は保存された建物のほとんどが資料館、展示館になるというように、建築家や企画者も含めてアイデアが乏しい。

——香山先生は今の日本の制度の中で、増改築の仕事を多く手がけてこられた数少ない日本の建築家です。日本でいうとなると、海外とは異なった制度の中で困難な現場だと思うのですが。

香山 日本の公共の仕事、特に国立大学の建物のような場合、すべてに先だって基準があります。面積の基準、配置の基準、そして工事単価の基準というように。しかし、こうしたシステムは、保存・再生計画のように、ケース・バイ・ケースで考えなければいけないものにはまったく適していない。

たとえば東大工学部1号館の場合は、工学部再開発の最後のまどめにするはずだったものが突然補正予算がついて順番が最初になった。文部省側からは、建物の正面だけを残して、あとはすべて建て直すようにといわれたのですが、僕は当初から全体保存を考えていたので驚きました。それで、建物を半分だけ残したりファサードだけを保存するのではなく、中庭を利用しながら建物全体を改築することを提案したわけです。この案を文部省側が理解してくださって本当に嬉しかった。

——1号館のような改修をする大学の施設は前例がないわけですよね。公務というのは、非常に前例主義です。それを崩すのは大変なことで、最終形がみえるまで理解を得るのが難しいのではと思われませんか？

香山 そうですね。しかし、実際1号館ができあがると文部省は「生きて使っているよい例」として非常に評価してくれました。こうやって新しい使いかたが発見できた。はじめは「中庭に屋根がかかるとはどういうことだ」といわれましたが、できたらこうして評価されたわけです。最初の6号館屋上増築のころと較べて、時代がそういう風に動いてきたということも少なからず影響し

香山壽夫／Hisao Koryama

1937年 東京生まれ
1960年 東京大学建築学科卒業
1965年 ベンシルヴェニア大学美術学部大学院修了
1968年 九州芸術工科大学助教授
1971年 東京大学助教授
1975-76年 イェール大学美術史学科客員研究員
1982年 ベンシルヴェニア大学客員教授
1986-97年 東京大学教授
1997年 東京大学名誉教授、明治大学理工学部教授
1999年 ベンシルヴェニア大学客員教授



ているのでしょう。

——最初の屋上増築のころもご説明いただけますか。
香山 屋上増築をつくったころ、宮脇さんはまだ学生ではなかったんでしょう。ただこんな話しをしていると、明治時代の人に江戸時代はこうだったと話しをしているみたいな気になってしまう(笑)。

僕はアメリカから帰って、しばらく九州に行き、それから東京に戻ってきたのですが、そのころ東大に都市工学科ができた。その建物のところに、私が学生の頃は機械科の煉瓦造の実験棟があり、それを1号館からみていてとても愛していたんですよ。1階建て、切り妻で屋根のところが教会のような建物でした。そういったものがいくつも壊れられなくなっていった。

当時、紛争ということもあり実際キャンパスが荒れていたわけですが、僕が日本に戻ったころには、古い建物の良さを見直そうという雰囲気になっていた。法学部の銀杏並木あたりを壊して増築しようとする考えもあったらしいが、それも、中止になった。これには都市工学科の川上秀光先生や渡辺定夫先生の功績が大きかったと思います。それまで存在しなかったキャンパスのマスタープランをつくったんです。ただ、それは平面的なもので、保存地区に網掛けを施したものでした。保存地区に入った途端に、建物の増築をしてはならないということになる。すると「面積が足りないのにどうしてくれる」という不満が生じるわけです。それならば上に1層増せば25%の面積増だと気がついたんです。それができれば誰も文句がない。「4層のを5層にする案をつくれれば先生方も文句がないだろう、だからそれをつくれ」というのが、私に与えられた東大における最初の仕事でした。自分なりに浅い経験の中で、増改築というのは非常におもしろく建築も素敵なものだと非常に燃えて取り組みましたね。

——屋上増築について、海外の場合は、よくペントハウスのように上に増築されていますね。日本で上に伸ばすのには、荷重の問題が心配になるのですが、25%ぐらいなら大丈夫なんでしょうか。それとも躯体がしっかりしていたのですか。

香山 しっかりしていたんです。もちろん増築は建築基準法を満たさないとはいけませんから、構造設計も新しく設計し直して、上に載せても構造基準を満たすように計算書を付けなくては行けない。

——増改築の問題のひとつに、設計期間が短いという問題があると思います。そもそも増改築という仕事自体がちゃんと認知されていないようです。調査期間や設計期間をある程度とり、費用も出る仕組みをつくるように話しを広げていきたいですね。
香山 そうです。医者にたとえるなら、ちゃんと科になって、診察して処置するように立派になってもらいたい。今はまだ、救急医みたいなもので、突然かつき込まれてきて、応急処置を施している状態ですね。半分救急医ですね。

——イタリアなどでは調査期間もちゃんと取っており、当然調査費もつく。それに設計期間が日本では考えられないほど長いので、その間にまた考えられる。日本ではそんなに時間がかかるなら壊してしまった方がよいだろうとなってしまう。
香山 そう。日本は単年度予算で行うでしょ。設

計や施工を「2年にする」というと、特別のようについて。1年でできるわけがないのに。前提がおかしいと思います。現状でいえば、そういう根本的な議論も大切ですが、同時に駆け込みでくる仕事に対応できる気力と、どんなことにでも対応できる能力を建築家側ももっていないといけないと思うんです。

——医学的に考えるのはすごく興味深いです。全体の中の一部分を増改築するというのであれば臓器移植に近いのかもしれませんが、もう少し未来的に考えるなら、サイボーグ手術にも思えますよね。元あった仕組みを残しながらも、スーパーマンのような機能をもつというように。しかし、改造し過ぎて元を完全になくしてしまったら、それはロボットになってしまう。

増改築のおもしろいところは、元の構造とどのような関係にあるかという点です。だめになった一部分だけ改築する場合、臓器移植の発想のように既存の環境との適合が可能かが問題になってくると思います。ですから建築の場合、新旧の関係が重要であって、移植部分をどう位置づけるかという倫理的な考え方も議論になるはずですよ。

香山 それはおもしろい話ですね。元の建物の個性がそれなりに力をもっていて、新しいものがそれに加わり、ときには両者がぶつかり合う。その中で、新しいものができるとするのが一番おもしろいケースだという気がしますね。しかし、常にそうでなくてはいけませんか、というところでもなく、さっき臓器移植という例がありましたが、建物を部分的に残し継承する「継続」もおもしろいと思います。

——できれば僕は改修と改造を区別したいと考えています。改修は元あった形を尊重してもどしていくけれど、改造はかなり手を入れ、元の関係を保ちながらも新しい領域へ空間を変えることも許容されるものだと思います。そこに建築家が入っていき、新しいアイデアを開発することはできる。ほど良いものや、センスに富むものはどういうものなのかをこの特集で知らせたかったのです。
香山 人間、あるいは社会にとって継続というものが成り立っている状況はどういう場合か、というのにつながる気がしますね。それも、対立するようなものを含みながら。それがないと、古いものの意味も出ないわけですよ。

人間、生きているということは、常に否定的に継続しているのだと思うんです。僕は古代ギリシャ人の「調和」という考えが一番良くそれを示していると思っています。対比や継続を成り立たせる、良い境界の幅をいっているわけですよ。過去と平等な関係でいる。常に対立的にありながら、連続していくのも自然界の生き方の根本だと思うんですよ。そういうふう考えていくと革命という考えは、近代の最大の妄想です。衝撃的な対比を生みつつ、安定した連続——生きるということも、そしてまた、都市の本能もまさにそこにあると思うんですよ。対比がなければ、連続も見えません。そういう意味では常に否定がある。否定というのは、自分と連続しているものを前提にして整理しているわけですよ。ですから概念としては、さっきの開発と保存とに分けて考え

るのは本来おかしいんだということにつながるかもしれない。つまり連続と対比、連続と否定というのは、共存しているのです。

それと、1号館のところでひとついい忘れたことですが、増改築にはディテールの問題があり、どこまで直して、どこまでそのままに残すかという点で意外に判断が難しい。文化財ではない1号館のような場合にでも起こることで、たとえば昔のナラの厚い床の一部が壊れていた際、施設部は直すときに当然はがして新しいものに換えるものだと思っていたようです。僕はあんな厚いムクのものはないなかつくれなくて、そのまま残し、壊れているところだけは新しいものを敷きましようといいました。古いものは古いまま、新しいものは「古いのと違うじゃないか」といわれた方がおもしろいじゃないかと思うんです。昔とそっくり同じものをつくるのでは漫画になってしまう。終わった方がよいものは、そこで終わってしまうのも良いと僕は思うんです。イタリアなどでもよくそういうことはあるでしょう。

——ええ。イタリアの保存概念はオリジナル重視なんですね。その後の人が新しい技術で修復の手を加えるときでも、色も近づけたりしつつ、むしろ違うものとわかるようにしている。フレスコの壁画の修復哲学と同じで、オリジナルと補修部分とを区別したままにするようになっていきます。

香山 日本の文化財について、こういうことをいうと意外に抵抗を受けてしまう。ディテールの問題でも、新旧が対比していた方がむしろおもしろいと思いますが、ゆとりがないと画一的な完全主義になってしまう。あるいは完全にやれないのなら、やめて壊してしまえということになる。たとえば落ちてる古い屋根のスレートを分析してフランスからきたものだとかわかったら、それを「探して来い」という。そこまでやらなくても良いじゃないのか。もうちょっとゆとりを持ってやらないと。

——ヨーロッパの事例をかなり研究したんですが、アメリカの事例はいかがでしょうか。

香山 僕自身、あるいは日本もそうでしたが、現代の建築として「保存」という考えが出てきたとき、最初の大きなインパクトを与えてくれたのは1960年代のアメリカです。

たとえばミッチェル・ジョゴラのように、フィラデルフィアの銀行とか、意識的にジャーナリズムに登場し、目の前に現れたのはアメリカの例が初めてだったと思う。アメリカはすべて壊して増改築していたため、逆に意識的に行われたものとしてその衝撃が大きかったんですね。アメリカのペンシルバニア大学も、どれだけ改修を重ねることが。芸術学部の中に建物がある、〈ファーンズ・ビルディング〉もロバート・ヴェンチュリがきれいに改装してすばらしいものとなりました。ネオゴシックに代表される、ハーバードの〈メモリアルホール〉というのも実にうまく改造されましたね。それも「SD」のヴェンチュリの特集に出ています。大学やキャンパスは、まさに小さな都市そのもので、都市のあるべき連続性を良く示しています。

(2000年3月17日、東京にて インタビュアー：宮脇 勝)

エントランスの変更と 中庭へのガラス壁の付加

バルセロナ現代文化センター

バルセロナ（スペイン）

アルベルト・ビアブラーナ&エリオ・ピニョン

Methods: The change of the entrance to the underground of the courtyard /

The addition of the new glass wall in the courtyard

Project name and the location: Contemporary Cultural Center in Barcelona (CCCB), Barcelona (Spain)

Architects: Albert Viaplana & Helio Pinon

Programs: Welfare facility (1802)→ Offices (Reuse: 1838)→ Museum (transformation: 1993)



中庭に増築されたエレベータおよびエスカレータ室。左右ガラスと中庭の床パターンを変えている



ガラスに映り込む修復された既存の建物の装飾

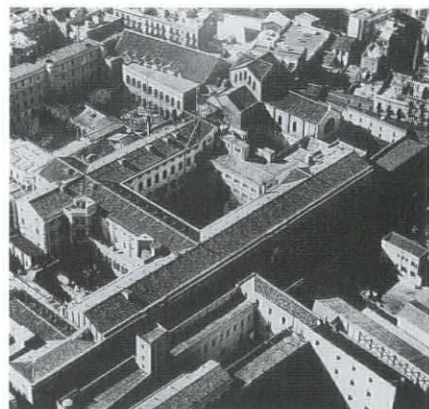
従来は1802年に建てられた「慈善の家／La Casa de la Caritat」という福祉施設だったが、1838年以降は十分に利用されていなかった。近年、バルセロナの歴史都心地区の文化軸の形成整備が周辺一帯で行われ、現代文化センターに転用することになった。

4階建ての既存の建物の大部分を残し、構造補強と外壁意匠をハンドメイドで復元する一方、中庭地下空間をメイン・エントランスとするために大規模に新築し、主な動線となるエスカレータおよびエレベータ室を中庭に増築することで、中庭を主とした新旧対比型の改造が行われた。

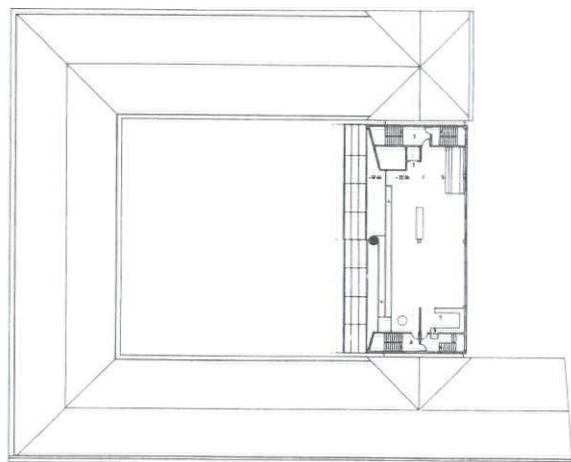
入口へは、スペインらしい中庭（パティオ）から入り、スロープを降り、地下エントランスホールを経てギャラリー階へ階段やエスカレータで昇るという動線の組立てだ。地下を含めると30m

もの高低差がある。また、中庭を取り囲む壁面のうち3面に既存の建物の意匠が復元されながらも、1面だけ新しいガラスのファサードが加わることで、独特の景観を内側につくりだしている。さらにそのガラス面は、既存の建物高さのところから屈折して飛び出している。中庭を屋内化する計画案もあったが、設計者のA.ビアブラーナは、閉じかけた屋外のままにしたのだという。中庭に立つと上のガラス面に街並が反射して映って見える。中央からデザインをふたつに割る考え方は、中庭のガラス面だけでなく床面にもおよんでいる。

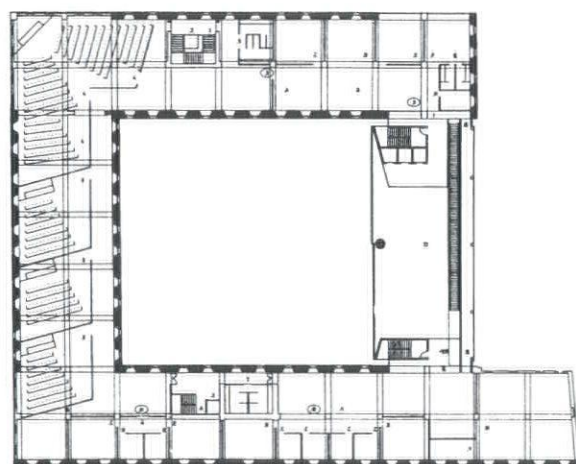
施設の特徴は、現代技術や都市環境などの見地から都市を解剖し、「都市と都市文化」を発見するためのセンターで、展示ギャラリー、AVルームを主として、ショップ、レクチュアホール、ワークショップルームなどがある。



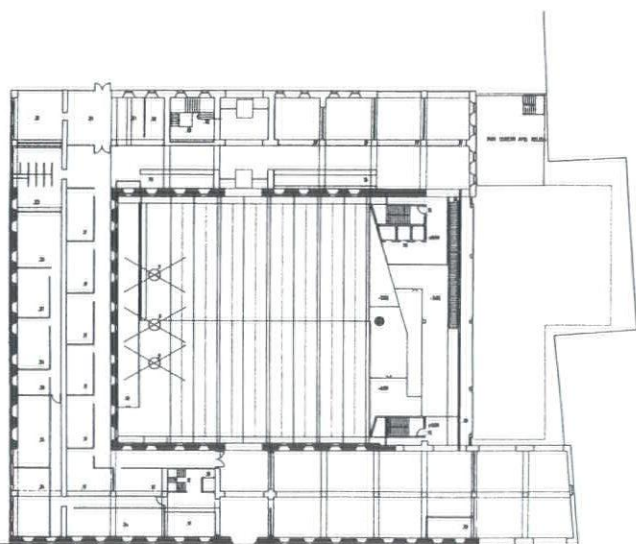
19世紀の建物の状態。この地区一帯は、バルセロナの都心文化施設を集中的に集めて再開発を進めている



4階平面図 S=1:1000

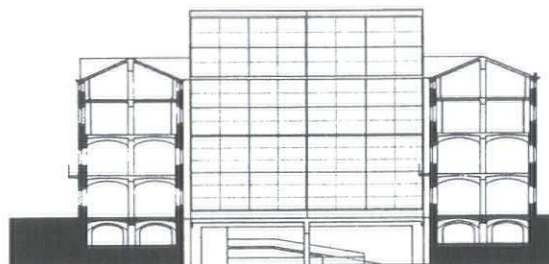


2階平面図

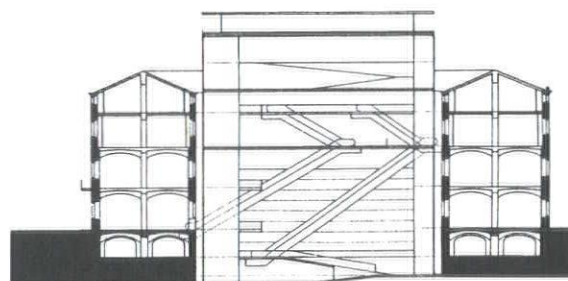


1階平面図

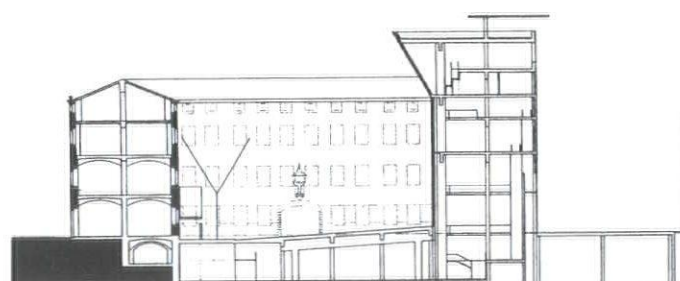
(■) : 既存部分



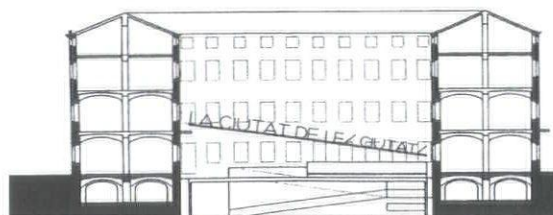
断面図 S=1:1000 地下ホールと中庭に面したガラス立面が見える



断面図。地下から展示スペースへエスカレータで移動する



断面図。地下にエントランス・ホールがある



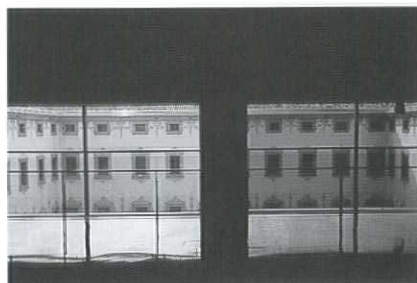
断面図。エントランス・スロープで地下に向かう



中庭に増築された移動の空間。エレベータ(左)とエスカレータ(右)



クラシックな外観は修復された。中庭に増築した部分が上部に顔をだしている

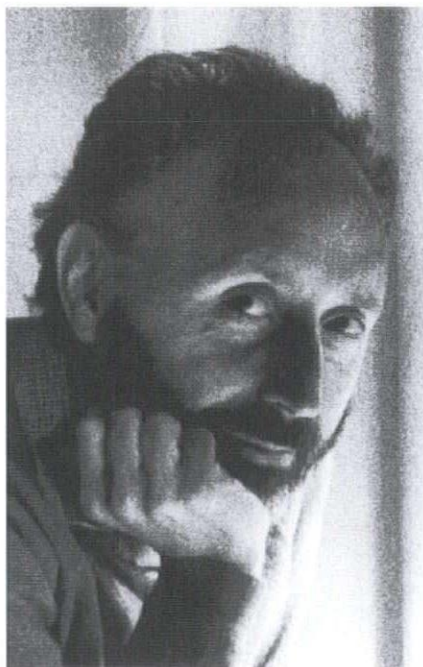


増築部分の最上階から見た中庭。左右ガラスの色が異なるため、左右色の違う双眼鏡で見ているようだ

地下に埋設されたエントランスホール

インタビュー：アルベルト・ビアプラナ

アルベルト・ビアプラナ／Albert Viaplana
1933年バルセロナ生まれ
1966年バルセロナ建築大学卒業
1971年バルセロナ大学教授
1984年FAD賞受賞



——この建物は、以前はどんな用途のものだったのですか。

A.V. Viaplana（以下 A.V.） かつては、「Caritat の家」という貧しい子供や老いた人々のための家で、バルセロナの人々を助けていました。病院とはまた違います。私は元の状態の一部をカットし、中庭に建物を付け加えています。隣には教会があります。

——スペインの歴史地区の保全制限は、どのようになっているのですか。この建物を改造するための資金は誰が出資したのですか。

A.V. バルセロナの建築家は、歴史地区のいくつかの建物を保存しなくてはなりません。今回の場合、元々の建物がきれいだったので、関係者達は残すことを考えていました。クライアントは、バルセロナ市とカタロニア政府、地域組織です。

この建物は、ふたつのウイングと「女性たちのパティオ」と呼ばれる中庭部分を保存しています。「女性たちのパティオ」と呼ばれるのは、かつて女性たちが子供や男たちとは分かれて生活する時間があったためだと思われます。それで名前が残っているのです。

改造した建物の最も重要な視点は、大きなエントランスホールをこの中庭に変更したことです。私がプロジェクトに参加する前に、中庭に覆いをかけて内部をホールとする計画がありました。私は中庭を外の自然な環境にとどめ、逆に大きなホールを地下に埋めることに変更しました。また、東西の建物を保存し、東側をエントランスと展示スペースにあて、中庭に地下に入るエントランスを加えました。

人々は、まず地下ホール（階高6m）に入り、チケットを得て、展示を見るためにエスカレータで2階まで上がります。エスカレータの動線は、一方通行で動線の案内説明を必要としません。

増築部にはエスカレータやエレベータの動線を集中させ、以前の動線とは大きく変更しました。内部空間の移動は、ポンピドーの動線のようにゲーム的に連なったものです。

建物のプログラムも変更されていて、「都市の中の都市」で、新しい要素が取り込まれています。現代都市文化を研究する機能があります。「都市の中の都市」とは、歴史地区の中にさまざまなスペースがそれぞれの目的で盛り込まれているという意味です。スタジオ、展示室、情報室が計画され、建物の館長ジュゼッペ・セラは、都市の総合的な研究を指揮しています。この建物は、文化センターとはちょっと違うんです。彼は隣に劇場をつくったりしました。

——中央で素材や色を変える手法は、どんなコンセプトを意味するのですか。

A.V. 「コミュニティ」「ドゥアリタ（ふたつの対局の概念のつながり）」つまり「ドゥアリティ」について関心があります。ふたつのエレメント、ユニットの対、人間や動物にある「対の概念」になっているという意味です。

機械はひとつのユニットで動きます。ひとつのユニットは、もうひとつの対のユニットを生むこ

とができる。こうした「シンメトリー」の概念は、「古典的なもの」でよく用いられてきました。1、3、5といった奇数の要素がその図の中心となります。それに対して、2、4といった対の要素を使っていくと、現代の自然な生活にあったシンブルなものになると思います。これを他のプロジェクトで用いています。ふたつにデザインを分割すると、スケールやボリュームは半分に減少し、ヒューマンスケールに近づくからです。この現代文化センターの場合、1種類のガラス面で張っていたら今よりも大きく感じてしまうでしょう。

また、ガラスの半分を「透明」にはしませんでした。これにより、よりアトラクティブになったと思います。奥が見えないから階高もわからなくなる。さらに、異なった角度の反射を生み、より豊かになると考えています。

——さらにあなたは、ガラスの角度を途中から変えていますね。それは反射を計算していたのですか。

A.V. このプロジェクトを始めるとき、中庭を覆われたホールにする他の案があったとさっきお話ししましたね。私のイメージでは、この中庭を建物が覆う途中の、動き出しているところを想像しています。だから、この角度を付けた部分というのは、覆うちょっと手前の状態で固定したと思って下さい。外からも、その飛び出した部分が見えます。ですから中庭側のコーニスラインで屈折した面になっているんです。さらに、中庭から飛び出した部分は、バルセロナの街中に顔を出した格好です。

——ガラス面は、何度に傾いているのですか。ガラス面の反射から計算した角度ですか。

A.V. 最初は60°を考えました。しかし、実際にはもう少し経済的な角度になっています。

元々反射を考えていたというより、説明したように中庭の覆いをイメージしていました。そして実際にはできませんでしたが、最上階にはレストランができると想定していました。中から見れば、ガラス面を使って、街全体のパノラマを見渡す双眼鏡のようにもとらえることができます。中庭から街全体へつないでいる鏡面でもあります。

——改造にあたって、構造上苦労したことは何ですか。

A.V. 構造上痛んでいた部分は、新しいコンクリートと鉄骨の梁でつくり直したり、補強したりしています。空調設備が入っているのは、新しい建築の部分で、他の展示室のような部分には設置していません。結構自分のイメージしたものになったと思っています。

（1999年9月8日、バルセロナにて インタビューアー：宮脇 勝）

ファサードを記号として映し込む

リール市立美術館

リール（フランス）

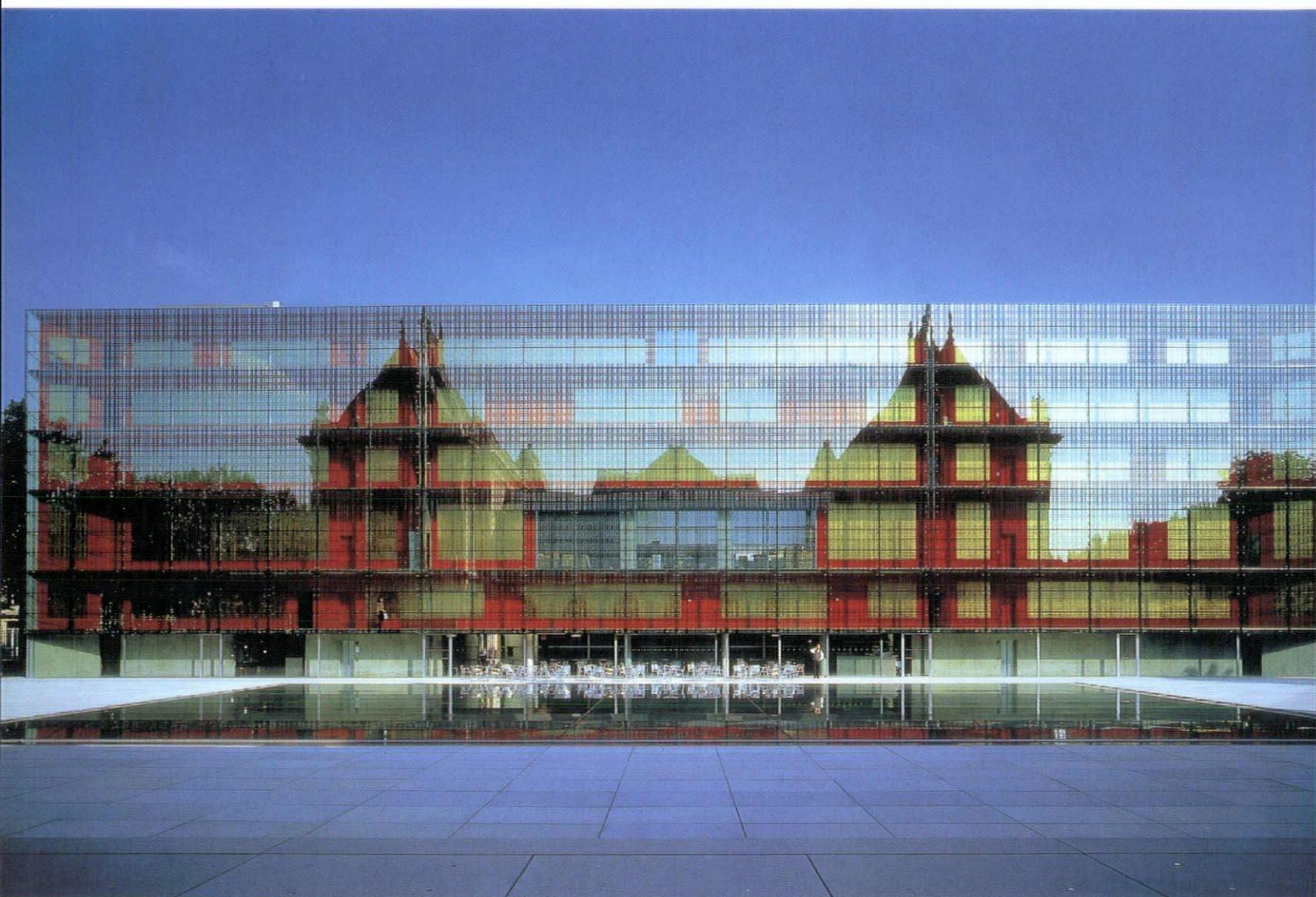
イーボス&ヴィタール

Method: The symbolic reflection of the historic facade

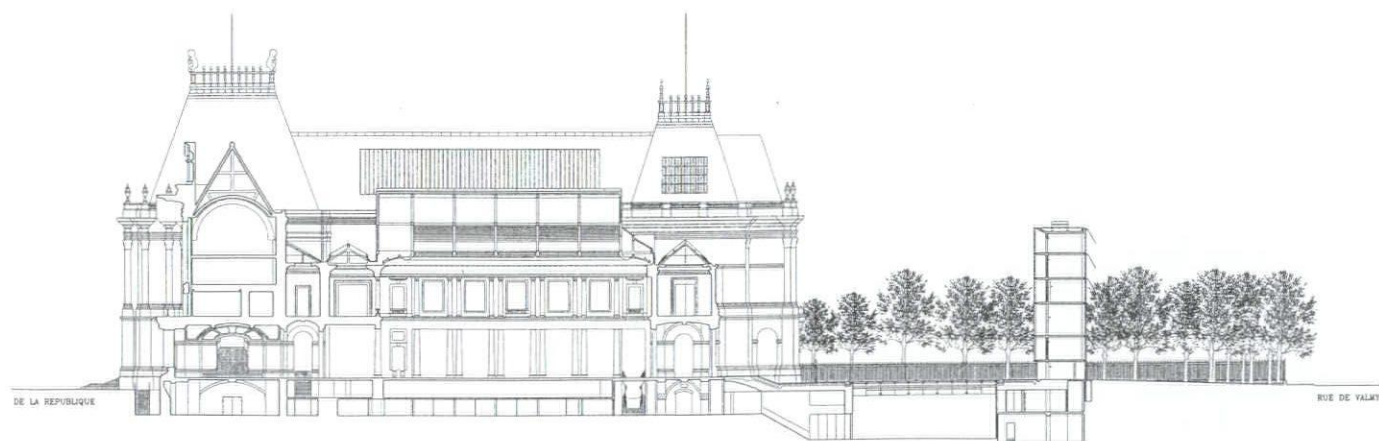
Project name and the location: Fine Arts Museum of Lille, Lille (France)

Architects: Jean-Marc Ibos, Myrto Vitart

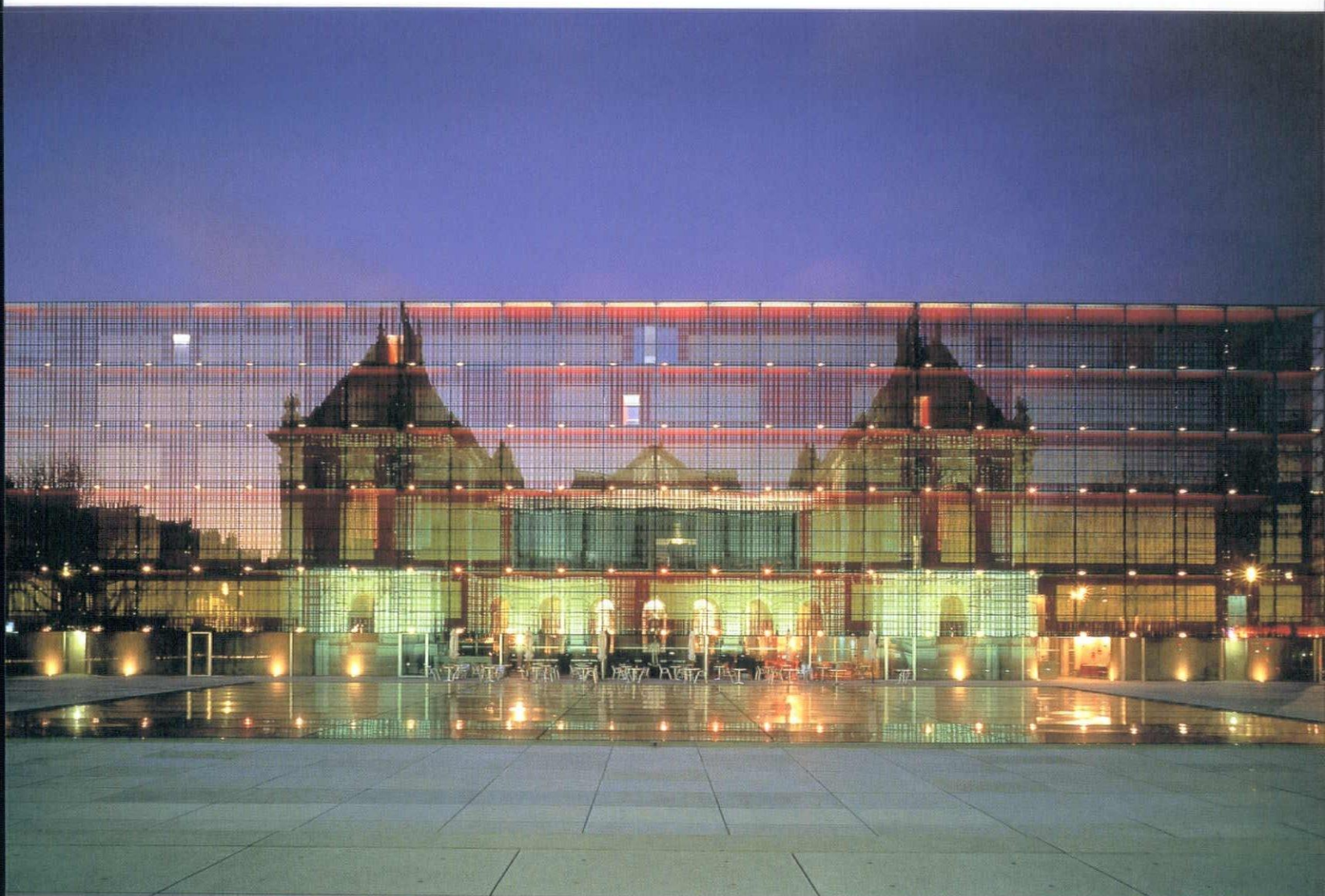
Programs: Museum (1895)→Museum (transformation: 1935)→Museum
(transformation: 1970s)→Museum (transformation and addition: 1992-97)



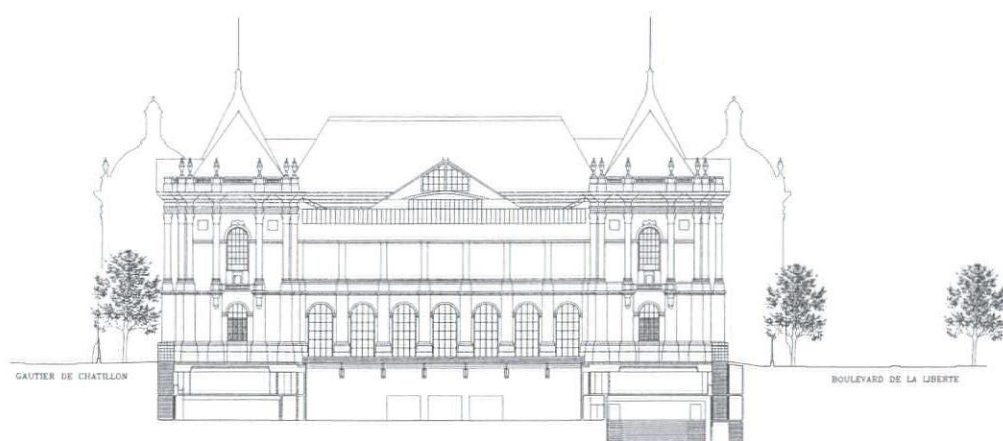
増築部分。ガラスに映り込んだ美術館本館、セリグラフィー（ガラス面の金属的模様）。内壁の金色、赤色が記号的に重なり合う



断面図 S=1:1000。本館の改修に加え、増築部分（管理棟）がつくられた。両者は、地下特別展示室でつながっており、ガラスのトップライトは地上部では水の中庭として設計されている



夜景。映り込んだ美術館の存在感が高まる



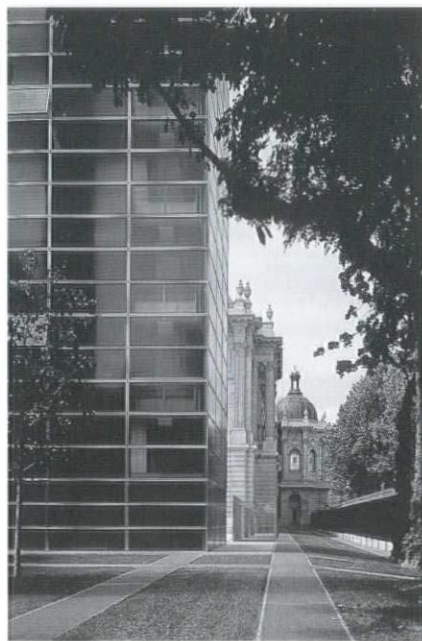
中庭側断面図 S=1:1000 地下の特別展示室

リール市の現代美術館本館のデザインは、厳格な様式で、光、陰、壮麗なボリューム、内部の見通しの連続性に特徴がある。19世紀において、当初の計画が半分しか実現されず、その後美術館は混沌とした利用が続き墮落していた。J.イーボスとM.ヴィタールは、通常の修復方法ではなく、既存の建築を限定し最小限の介入で、美術館の質を最大限に高める方法を選択した。

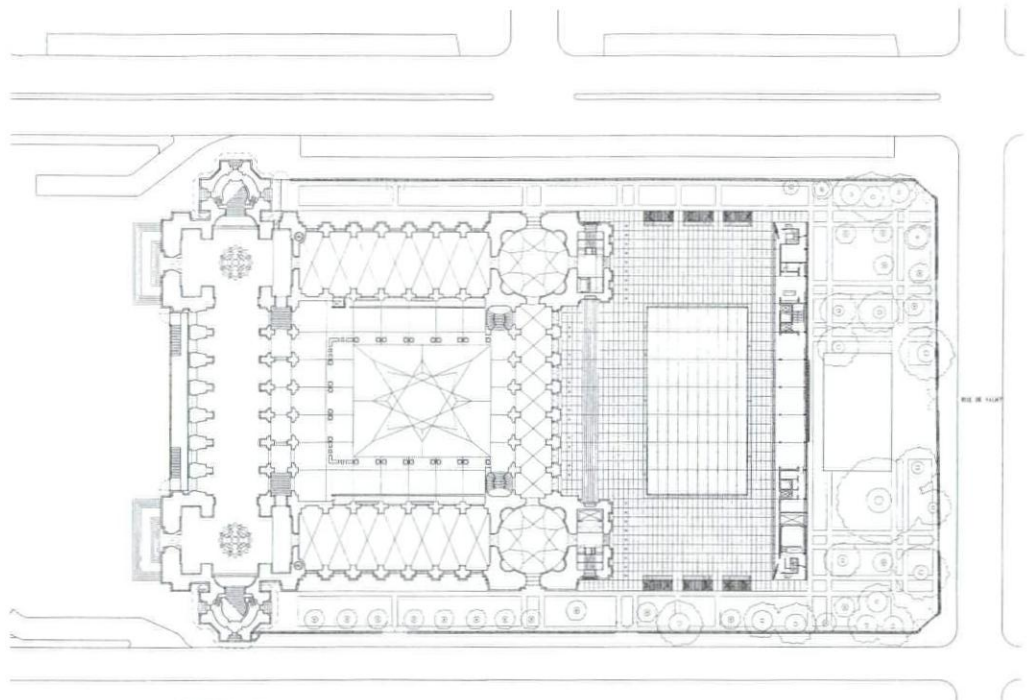
19世紀の状態は、元々中庭から奥が連続した大きな空間である。イーボスとヴィタールは、30年代と70年代の増築部分を撤去し、地下と奥に対置する増築部分を加えることで、奥行きと見通しのできる空間を取り戻している。中庭を挟んでさらに奥に対置された薄いガラスの箱は、クラシカルなファサードを反射しつつも、ガラス表面の細工によってヴァーチャルな写像を出現させている。記号としての歴史的ファサードが、増築されたオフィス棟のガラス面にスーパーインポーズされ、新旧のインターフェイスが生まれている。さらに驚くべきことに、オフィス棟を人が移動するたびに人間の像までが、まるでゲームの画面を見るように1枚のレイヤーの中に溶け込んでしまう。このような実物大のスクリーンが建築として誕生した例は他にはないだろう。



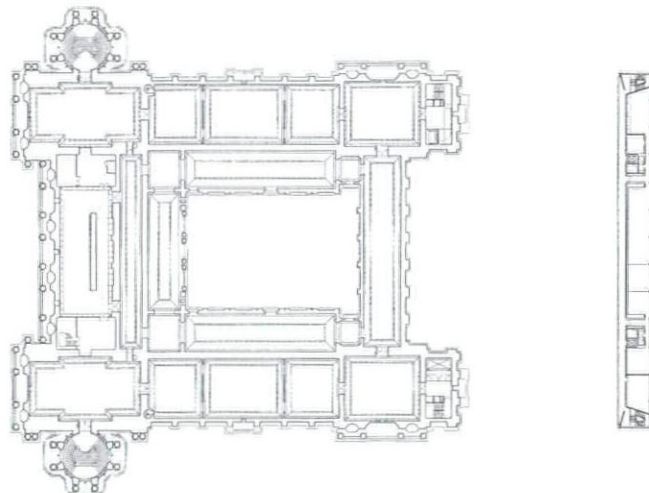
リール市都心部の広場。右側が美術館



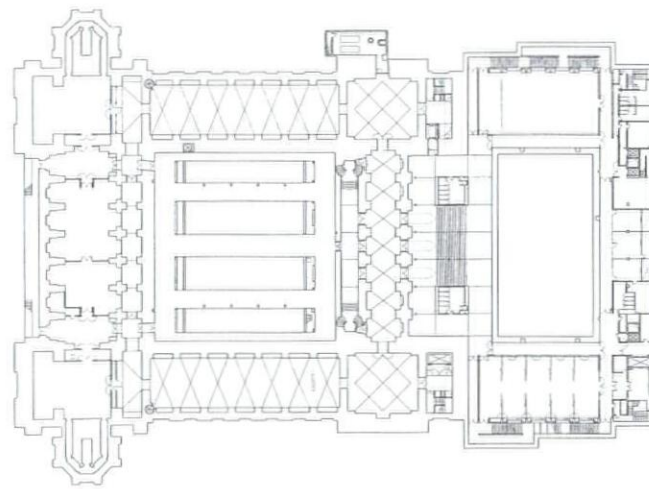
手前に増築棟、奥に美術館本館



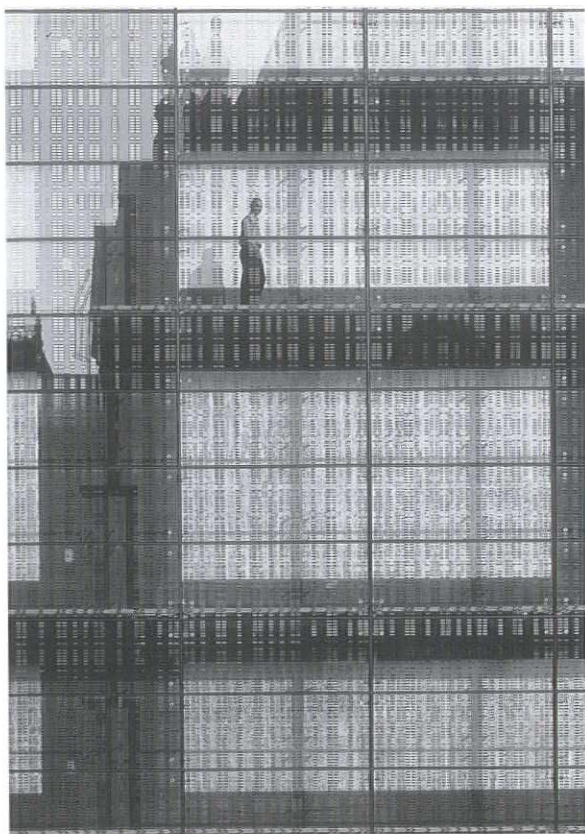
1階平面図 S=1:1500



2階平面図



地下平面図



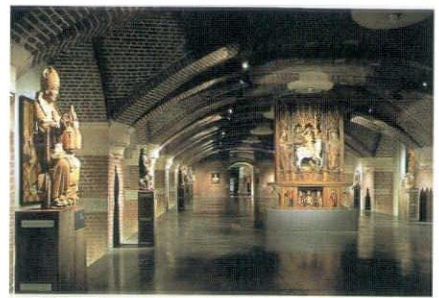
増築部分。ガラス面の向こうは、すべて管理棟の廊下になっているため、人の移動がよくわかる。まるでコンピュータゲームの画面を見るように、人の像がガラス面に組み込まれる

増築棟の内観とガラスのセリグラフィ。バックマリオンを鏡面仕上げにしているのは、表から見たときの透明感をできるだけ上げるためである

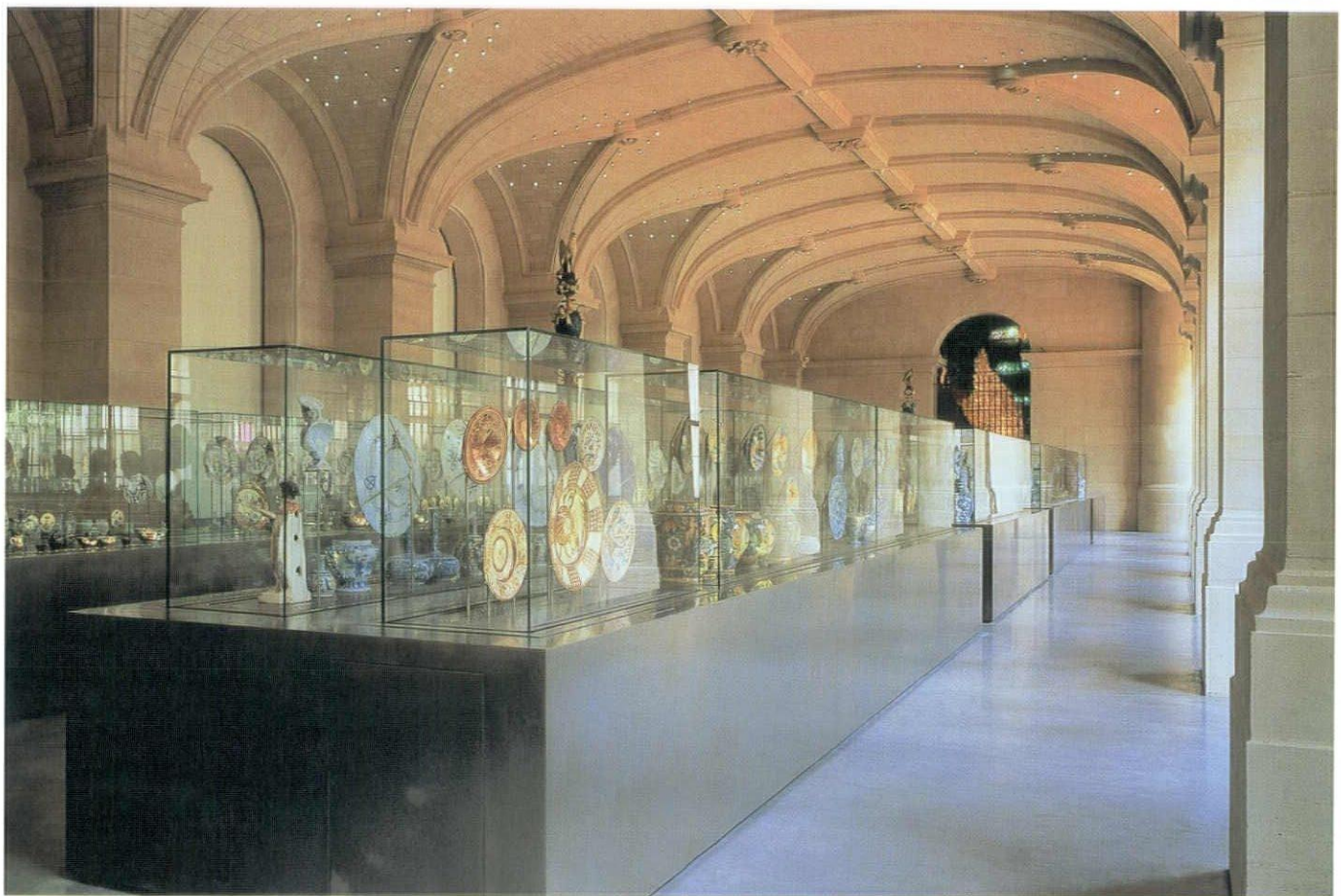




本館のアトリウム。30年代と70年代の増築部分を撤去することで、本来のスケールと奥行きを取り戻した



地下部分も撤去作業によって、展示空間となった。最小限の補修を行っている



文化財クラスの天井に組み込まれた光ファイバーによる改修。ミニマムな穴を開けるだけで、斬新な天井に変化する。大きな展示ケースのガラス部分は持ちあがる仕組み

イメージによる記号的再生

J.M.Ibos (以下 J.I.) 19 世紀に美術館建設のためのコンペがあり、元々この建物は美術館でした。多様な美術作品の展示で、絵画が主でした。1895 年に建築家たちが、現在半分だけ残っている部分を設計しました。当時の計画は、ちょうど現在の 2 倍の大きさがありました。

M.Vitar (以下 M.V.) しかし、後ろ側のファサードが無造作にふさがれていました。正面のように貫禄がないのは、後で美術館を続ける予定だったからです。

J.I. 元はふたつの四角形の平面形態でした。両者をつなぐギャラリーがあり、各々中央に中庭が計画されていましたが、予算が足りず半分しか建設されませんでした。1935 年には、スペース補足のため、中庭をガラスで覆い、1 階にアトリウム、2 階にギャラリーを増築しています。

M.V. アトリウムに 30 年代風のモニュメンタルな階段を加えました。

J.I. 元々の中庭は、ガラスで透明感があったのですが、この大きな階段を内観を完全に塞ぐことになったのです。そのため、内から外への関係がなくなりました。戦後、70 年にさらにスペースが足りなくなり、後ろ側に工場のような 4 層の行政管理棟を建設しました。すなわち、1930 年代に一度この階段によって内側をふさぎ、70 年代にこの建物で後ろ側のファサードもふさいでしまったのです。

設計は、コンペでしたが、目的はまず第一に古い建物の技術面を含めての修復と、仮説展示室や新しいサービス導入のための拡張工事でした。美術館サイドは、既存の建物の両翼を延長するのか、建物全体を拡張して、ファサードをデザインし直すなどの案を考えていましたが、はっきりした考えはありませんでした。

そこで、私たちは最初に与えられたスキームにはまったく従わず、元々同型の建物がふたつ並んでいた計画だったことに注目し、後から増築した建物を壊し、階段も壊し、美術館を再び解放しようと考えたのです。

新規の拡張工事では、オリジナルのスケールに戻そうとしたのです。すなわち、都市と融合させることを意味します。コンペのときからの案で市長にもプレゼンしましたが、後ろ側の広場からのアクセスも自由で、1 階はある意味で都市規模の広場のようになっていたのです。一方、エントランスは、街に向かって広がるようにと。

M.V. 考察しなければならなかったことは、既存の建築が好きかどうかの問題ではなく、既存の建築との釣り合いを取ることで、既存の建物と戦うのではなく、最小限の手段、どのような環境に変えられるのか、特徴は何なのかを十分理解することでした。そうしてこそ、より良く利用することができ、所々にインパクトを与えることができます。私たちは最小限の手段、特に少ない予算で物事を動かすのが好きなのです。その結果、多くのインパクトがありながら、軽量な物の実現が可能になるのです。

この場所の美しさの特徴はモニュメンタリティがあることです。広々とした空間、深さ、パースペクティブ、密と疎、光の関係性、全ての側面が

特徴となっています。私たちが初めて訪れたとき、あちこちに、間仕切りが設置されていました。そこで、私たちはこの先どのようなものをつくるかを考える前に、掃除をするように余分なものを排除をしていきました。前がどうであったかは、考えないようにしました。とても見れたものではありませんでしたからね。

J.I. エントランスからの動線も、めちゃくちゃな配置になっていたのです。

M.V. 何よりも光が入らず、美術館は閉じた形になっていました。私たちはそれを引き出しを開けるように、外に向かって解放していくことにしました。

正面側、向いの建物は同時代の県庁舎ですが、リアル人でさえどちらが何の建物なのか知らないのです。人にも知れず、美術館としての価値が忘れられた状態で放置してあったのです。私たちは、その価値を高めようとしたのです。

J.I. このようなコンペでは、クライアントにとっては単なる修復計画でしかないのですが、私たちににとっては都市計画でもありました。そこがリアル市の中心だからです。県庁舎・広場、そして美術館を合わせた都市計画の重要な一部なのです。

——後ろ側にもっとも興味深いファサードと広場が控えていますね。

M.V. 新しいファサードに「イメージ (図像)」を映すことで、美術館のアイデンティティを表現したかったのです。反射する「イメージ」によって、美術館の延長をバーチャルに実現したのです。パースペクティブな効果もあります。

ガラスの背後には赤い壁が設置されています。その赤い色は、展示されている美術品からきています。金色は、絵画の象徴である金の額縁のイメージからきています。このようなエレメントを構成して、訪れる人達を驚かすのです。

最終的にこの町で、美術館の存在を高めるとともに、感動的でもあり、生き活きとしているのです。アトリウムも赤にしたかったのですが、学芸員により、今の色にしました。今では美術館側は、赤が良いといっています。

J.I. すべてが特殊な方法で、マッシュアップでありながら細やかさも表現されています。建設から、ねじ 1 本に至るまで細やかな気を配っています。

たとえば、この建物の厚みを消すためにどのように光を取り入れたらよいかと。

M.V. 私たちは単に建物を建てたかったのではなく、「イメージ」を美術館のサインとして表現したかったのです。そのために、床の厚みを角度をつけることによって消し、バックマリオンをステンレスメッキによって消すなど、いわゆる「構築物」的なところを見ないようにしたかったのです。

——このファサードの模様パターンはどのようにして決めたのですか。

J.I. 非常に洗練されたスケッチをしました。一見、同じモジュールのガラスが並んでいるように見えますが、実際は 44 種類の違うモジュールの

イボス&ヴィタル / Ibos & Vitar
ジャン・マルク・イボス / Jean-Mark Ibos
1957 年生まれ
1982 年エコール・デ・ボザール卒業
1985-89 年 ジャン・ヌーヴェル事務所勤務
1989 年 ヴィタルと共に事務所独立
ミルト・ヴィタル / Myrto Vitar
1955 年生まれ
1984 年エコール・デ・ボザール卒業
1985-89 年 ジャン・ヌーヴェル事務所勤務
1989 年 イボスと共に事務所独立



ガラスが416枚設置されています。

M.V. 増築の建物は本館の建物の逃げ道のようなものになっています。というのは、あらゆる基準線においてふたつの建物には統一性をもたせてあるからです。

J.I. しかし、ガラスのセリグラフィー（鏡面の細工）は、完全なひとつのパターンにしなければなりません。全体を統一する目的があったのです。

ガラス細工模様のピッチは、まずモジュールがあらゆる条件に合うような基準線にあわせました。形の違うモジュールを合わせて、ひとつのユニフォームのようなものをつくりました。その後、密度を検討しましたが、これは完全にフィーリングによるものです。完璧なシステムを見つける為に100枚程のスケッチをしました。そして密度を変えたのです。最終案では25%の鏡面ガラス細工になっています。

——ガラス壁面の配置場所は、どのようにして決められたのですか。新旧の断面のプロポーションを考えたのですか。

J.I. ふたつの建物の距離は、決められた延べ床面積でおさめなければならなかったのですが、建築家のフィーリングでスケッチを重ねていくうちに、「この辺かな」と思うときがあるのです。プログレッシブなアプローチであって、もし、計算がされていて、あえて「こうした」と、いってしまったら嘘になってしまいます。

M.V. この距離は、背後に建物があるので、敷地内でできる最大の距離でもあります。

コンペ案ではこの高さよりも1層分低くなっていましたが、建物のプロポーションを少し細身して、1層足しました。そうすることによって、ふたつの建物のテンションを引き出すことができたのです。

池の地下の部屋からはガラス越しにファサードが見えるようになっています。地下に仮設展示場をつくることになり、採光のために床をガラス張りにしました。外からではほとんど見分けがつかないように1%の勾配を付けました。夏、水が張られているとき、人々にはまるでフランス式庭園の泉水のように見えるのです。光の当り方によって、建物・ファサード・水、すべてが考察されるのです。

J.I. 地下は木版の収蔵倉庫として存在し、1世紀あまりあらゆる物が収蔵されていて、ひどい状態でした。先ほどのガラスの池部分の地階は、私たちが新たに掘ったものです。

M.V. 既存の地階部分には中世の素晴らしいコレクションが展示されています。

この美術館にはあまり費用がかかっていません。展示を合わせて7500フラン/m²（約12.5万円/m²）ぐらいです。しかもこれは市立美術館です。それも問題だったのですが、最初は、グランプロジェクト（国家プロジェクト）でした。

——ガラスのファサードのアイデアはいつのものですか。

J.I. コンペ案です。すべて基礎となるアイデア

はコンペ時にありました。たとえば、中庭への解放、地下部分の拡張、ガラスのファサードなどです。ガエターノ・ベシエやジュリオ・パオリニなどの芸術家にも参加してもらいましたが、その時点では選定していませんでした。

——そのふたりの芸術家のコンセプトはどういったものでしたか。

M.V. 学芸員というのはヴォイドがあるとすぐにそこを埋めようとしませんが、私たちはこの空間を解放しておきたいと考えました。そこに、ジュリオ・パオリニは、透明なガラスを用いた、知的な作品で答えてくれました。彼はアトリウムをヴォイドにしたまま、どこに視線をもっていけば良いかという作品を提示しました。

一方、ガエターノ・ベシエのオブジェは、エントランスの円形部分に、従来閉じていた縦方向に、広がりをもたせるモニュメンタルな巨大なオブジェ（シャンデリア）をつくりました。

J.I. 夜のライトアップのときにも両側にこのオブジェが輝いているという外部との関連もあります。

M.V. またこの建物は非常に少ない予算でしたので、お金をかけたい部分をファサードなどに絞りました。その他の部分は既存のままに近いかたちで、工事しています。それも欠けた部分を直すといった最小限のものです。

J.I. そうはいても、この建物を空にして、設備などはすべてやり直しています。空調、電気あらゆる設備は壁やスラブの中に隠されています。

M.V. 特に本館の地下の展示場は宗教美術が多く、テーマを「貧しさ」とし、台座には古い質感を出すため樫の木を海水に浸したものを使用しています。そのため、この展示場は教会のように仕上がっています。

J.I. この美術館の特徴として、美術品は建物と切り離されてはいません、それどころか建物の構造自体と関わっています。

M.V. たとえば、空間をどのように照らすかというと、その建物のオリジナリティを重視しようとすれば内装の考察が必要となります。そこで私たちは、上階の床を外しスラブの中から小さな穴を開け、そこから照明を釣り下げることにしました。その結果、照明設備は目立たなくなりました。

J.I. 先程のオプティックファイバーですが、メンテナンスはフローリングの床の一部取り外し、スラブの中にアクセスできる様になっているのです。

一方、空調設備はエアコンではなく空気洗浄のみの機能です。吹き出しにはフローリングの板1枚にパンチングが施されています。柱の中にパイプが通っていて、石にもパンチングがしてあります。

照明に使われた光ファイバーのスタディには時間をかけましたし、スケールのスタディも必要としました。建物の特徴でもあります。平均天井高は8mもあるのです。そこで一般的でないアブノーマルなスケールの検討をしなければならませんでした。

お気付きになられたと思いますが、この建物の

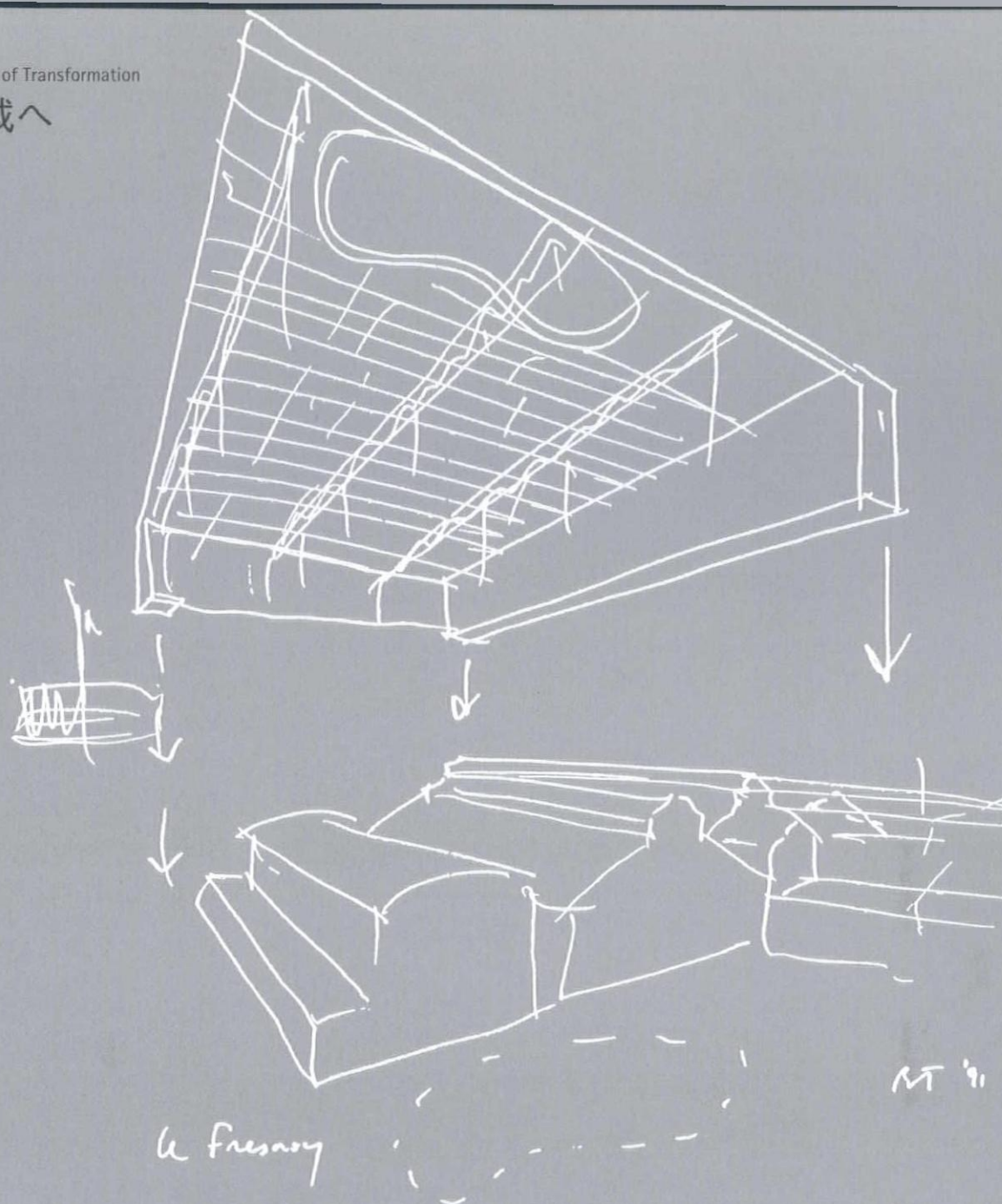
なかにはノーマルなスケールで置かれた装置はありません。

たとえば美術館のアトリウムにある本のショーケースですが、パリのブキニスト（パリセーヌ沿いの仮設本屋）のようなスケールになっています。スケールの検討は、マクロまたはミクロといったようにアブノーマルスケールに添うことなのです。さらに既存の美術館のファサードですが、いわゆる展示品の年代には当てはまらないくらい大きなスケールです。

本当の意味での統合（インテグレーション）は、フランスで言われている単なる擬態ではなく、既存のコンテクストに対しての知的表現としての統合性を表すことだと思います。

（2000年3月24日、パリにて、インタビュー：宮脇 勝十河原田千鶴子十鳥海基樹）

新しい領域へ



改造の手法は、単純な増築や改築の閉じた領域ではなく、
 多様な利用プログラムの導入、
 既存のエLEMENTと構造体の取捨選択といった相反する難解な問題を包含したまま解く、
 微妙なバランスの中での設計センスが問われている。
 新旧が溶け込むほどに、
 技術的な進歩と物への愛着を表現することが可能になるだけでなく、
 思いがけない新しい建築を再構築する可能性も秘めている。
 今、その可能性を秘めた新しいフィールドに向かっているのだ。

作品解説（特記なきもの）＝宮脇 勝

相似な増築

メゾン・コニャック・ジェイ

ルーエイル（フランス）

ジャン・ヌーヴェル

Method: The extension as a similar figure

Project name and the location: Maison Cognacq-Jay, Rueil (France)

Architect: Jean Nouvel

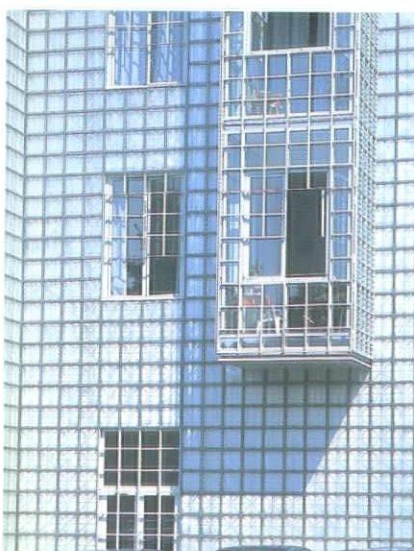
Programs: Day-care center (late 19c) → Facility for senior citizens (extension: 1999)



アプローチからの風景。手前のネオゴシック様式の建物に相似なかたちで増築棟が奥に出現した



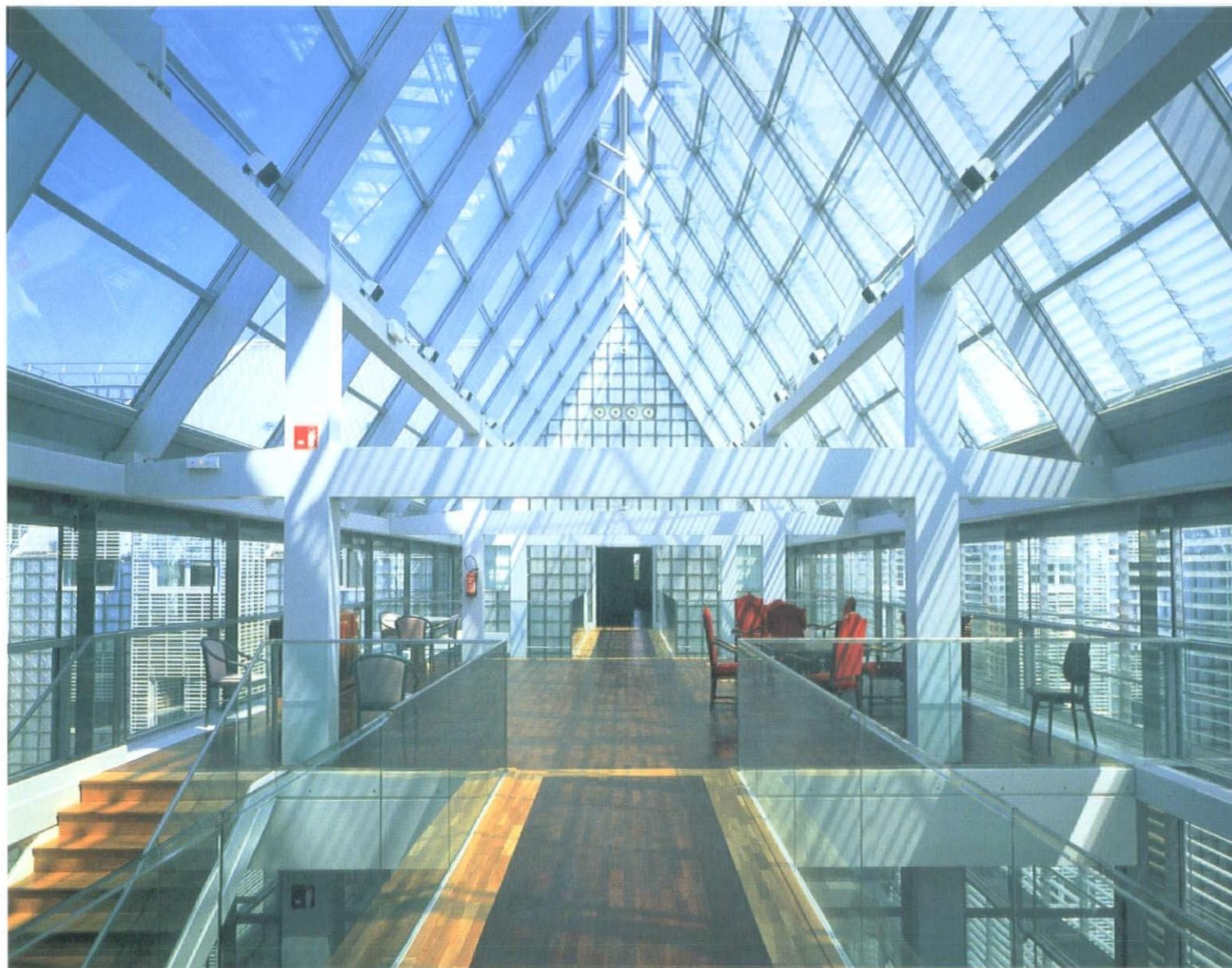
増築部の出窓



ヌーヴェル自身が特注でデザインしたガラスブロック



内部のくつろぎの空間とガラスのルーバー



中央部3階の内観。右側にガラスのルーバーが取り付けられている

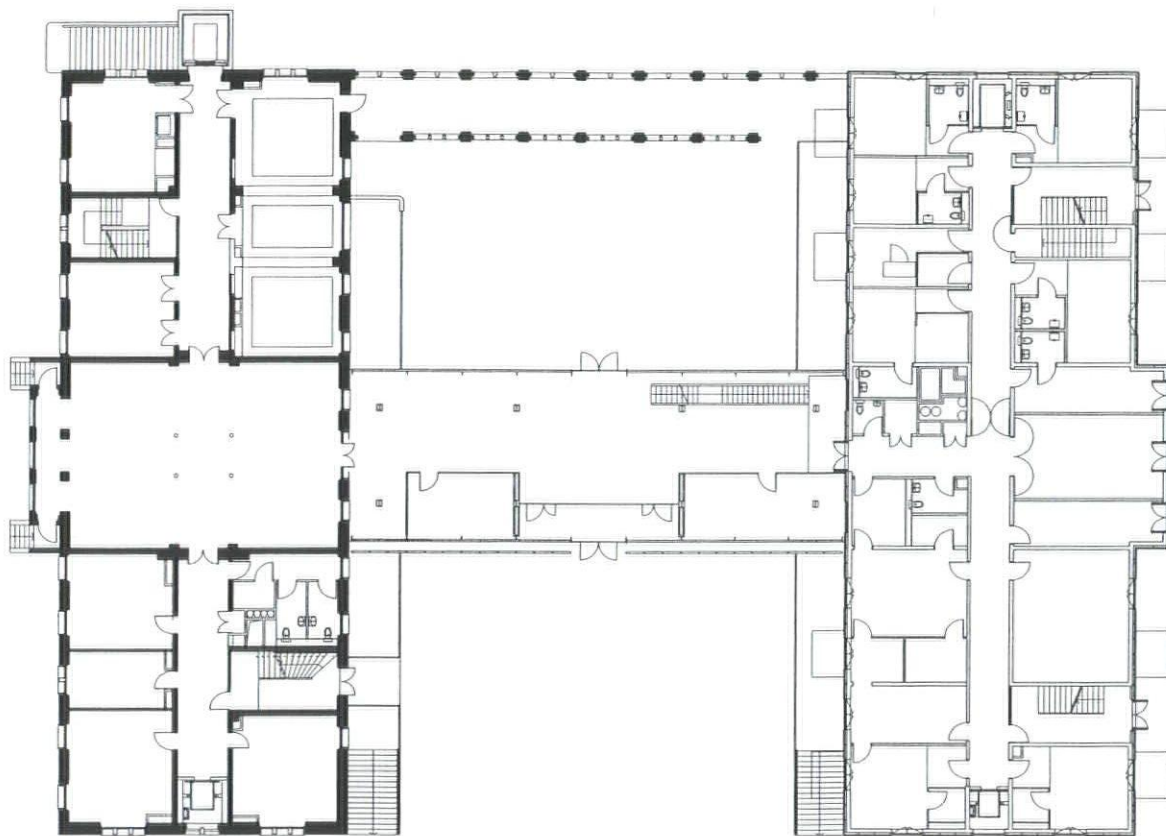
メゾン・コニャック・ジェイは、19世紀末にパリにデパートをつくったファミリーである。従業員の家族のためにデイケアセンターをパリ郊外に建設したのがこの建物である。近くには従業員のための住宅や公園の中に女学校がつくられていた。既存の建物は、19世紀英国風ネオゴシック様式である。現在は、健康保険グループの下、ジャン・ヌーヴェルによって1995年から高齢者保養施設として拡張されたものだ。

プランは、廊下・階段室をはさんで既存の建物

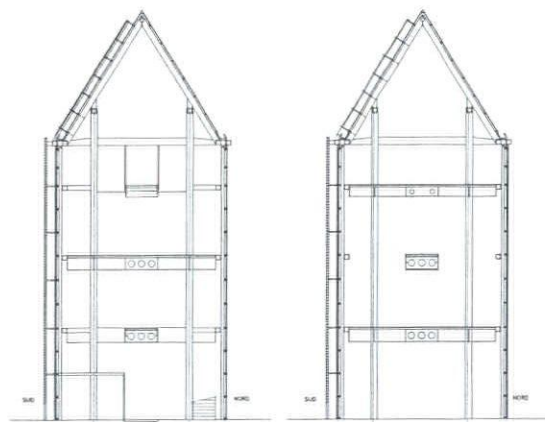
とシンメトリックにモダンな建物が同じスケールで配置されH型となった。シンメトリックな建物は両方とも宿泊用個室である。建物の階高、屋根、屋根の角度など、すべてオリジナルの建物のミラーのイメージである。彼の作品の中で、これに近い手法が用いられたものに〈a summer school at Kerjuanno in Brittany〉(1981)がある。どこか遺伝子がつながっているようであるが、決して同じではないのである。

増築部の外観は、ルーバーとガラスとガラスブ

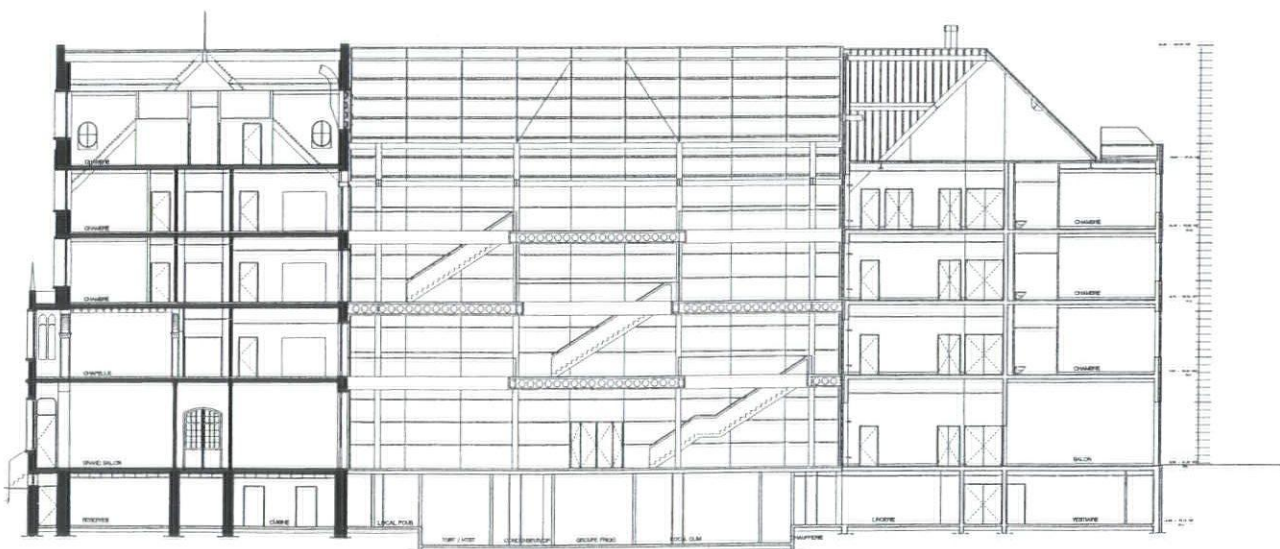
ロックなどを使用し、まったく新しい構成である。ヌーヴェルは、ガラスで建物を覆い、しかも透明ではなく住居機能のために半透明でできたものである。フレームは、40mm角のグリッド状にし、ヌーヴェル自身がデザインした特注ガラスブロックのサイズに組合わせている。室内においても、ルーバー、ガラス、ガラスブロック、フレームが透明度の中に曖昧さをもたせている。素材や構造がまったく異なるにもかかわらず、同じスケールでつながっていることに逆に驚きを感じる。



1階平面図 S=1:400 (■:既存部分) 増築部分は、既存の建物の写像となっている



中央部断面図(左右とも) S=1:400



断面図 S=1:400 (■:既存部分) 新棟は、既存の建物の写像である
SD0010

サテライトタイプのガラス増築

バンダーベーン・デパート増築

アッセン (オランダ)

ヘルマン・ヘルツベルハー

Method: The glass satellite-like addition

Project name and the location: Extension Vanderveen Department Store, Assen (Netherlands)

Architect: Herman Hertzberger

Program: Shopping center (?) → Shopping center (extension: 1998)

行政の建築限界線が広場側に逆に緩和されることになり、地元のデパートは、新しいファサードを6m分の奥行きで付加増築することが可能になった。都市が拡大していく中で、建築も徐々に拡大改築していくことは可能であろう。人々が集まる都心において、街区のファサードで閉じられがちであるが、新しいガラスの大ファサードを持ち込むことで、建物も周囲とのコントラストをつくることができる。

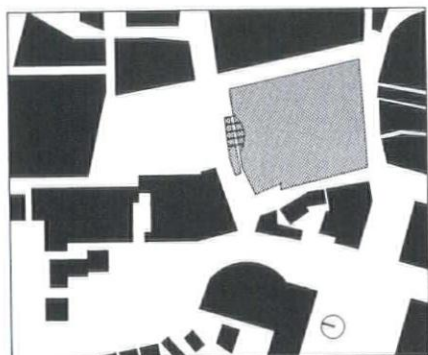
増築部分の新しいデザインは、既存の街区の中で、ちょうど停泊中の「船」と「船から港をつなぐ板の道」からイメージされている。ガラスのアトリウムでできている増築部分と既存の建物の間

は、1.5m幅の隙間により、既存の建物の構造体と離されている。断面図を見ると、いくつかの壁柱が、4.5m幅の床を既存の部分とは独立して持ちあげ、新しいファサードと高さを決めていることがわかる。増築部分は既存の建物よりも高くすることが可能で、上階では周囲を見渡すことができ、自由で独立した建物となっている。スケッチにみられるように、このサテライトタイプのガラス増築が、小さなショップオーナーたちの手で増殖され、長いプロセスを経て、街区を占拠していくことが期待されている。

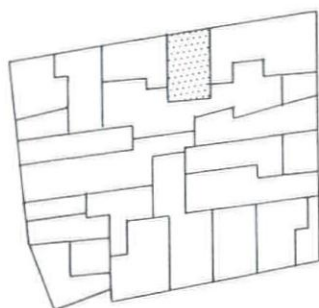
2、30年のスケールで、様々な建築が集合しているひとつの街区が、徐々にひとつの建築として

集積していくと考えるとき、オリジナルの建築ユニットの複合体は、新しい大きさをもった複合体として再認識することができるだろうとヘルマン・ヘルツベルハーはいう。その中で、個々の形態やその経済組織に応じた自立的な建築を保つこともできるという。

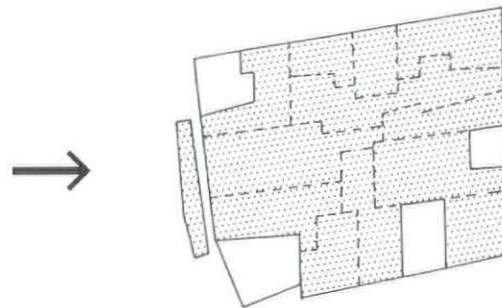
この事例のガラス増築のプロセスは大きなものであるが、広場というオープンスペースに面して釣り合うスケールである。増築されたガラスとフロアは、巨大な収納ラックのようでもある。それは、豊富なデパートの商品が街に向かってディスプレイしていくことを促進している。



配置図



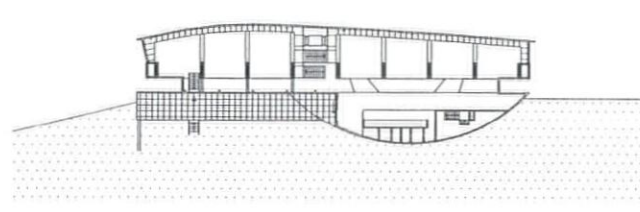
1922年の建物区分。バンダーベーンは、当初1小売店だった
(.....: 1922年の売場)



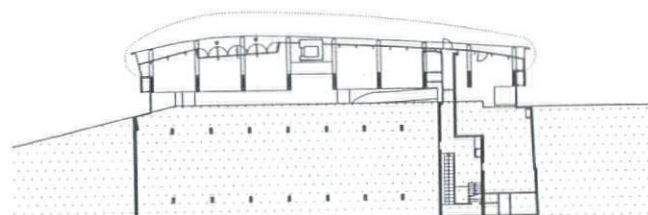
バンダーベーンは、この街区を徐々に買い占め、既存の建物を改築してつなぎ、ファミリーで経営するデパートに拡張してきた (.....: 1997年の売場)



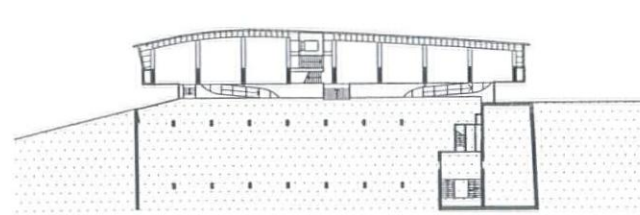
2階平面図



4階平面図



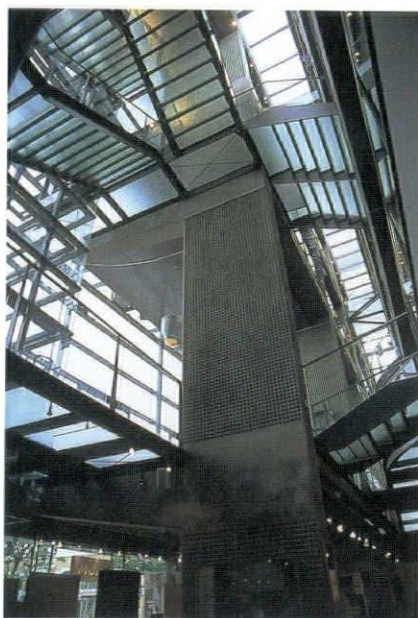
1階平面図



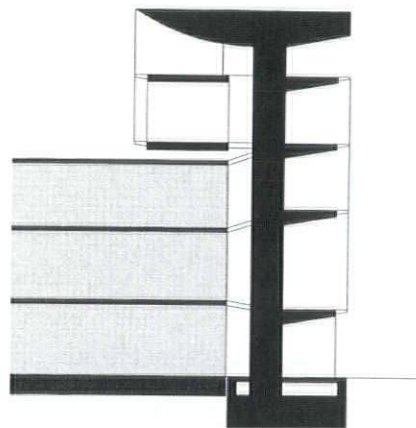
3階平面図



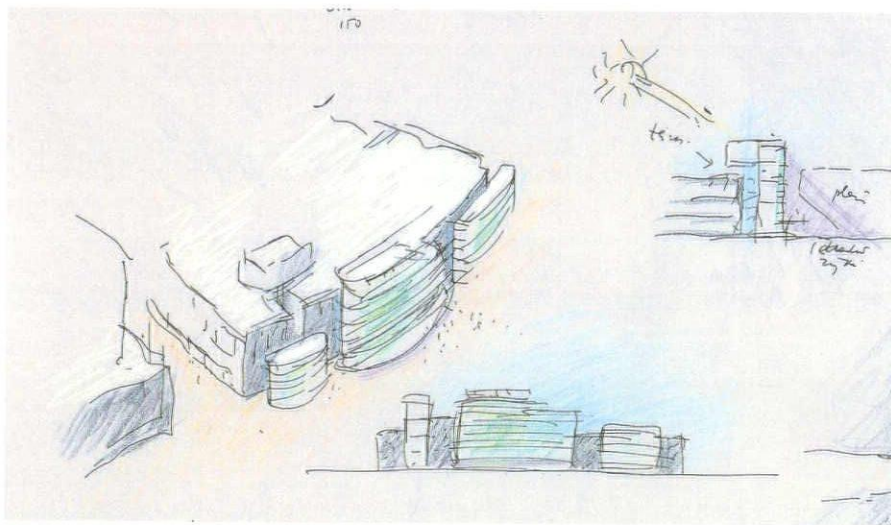
増築部ファサード



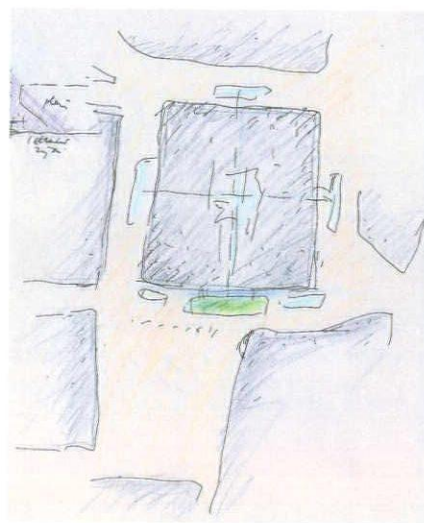
増築部の階段



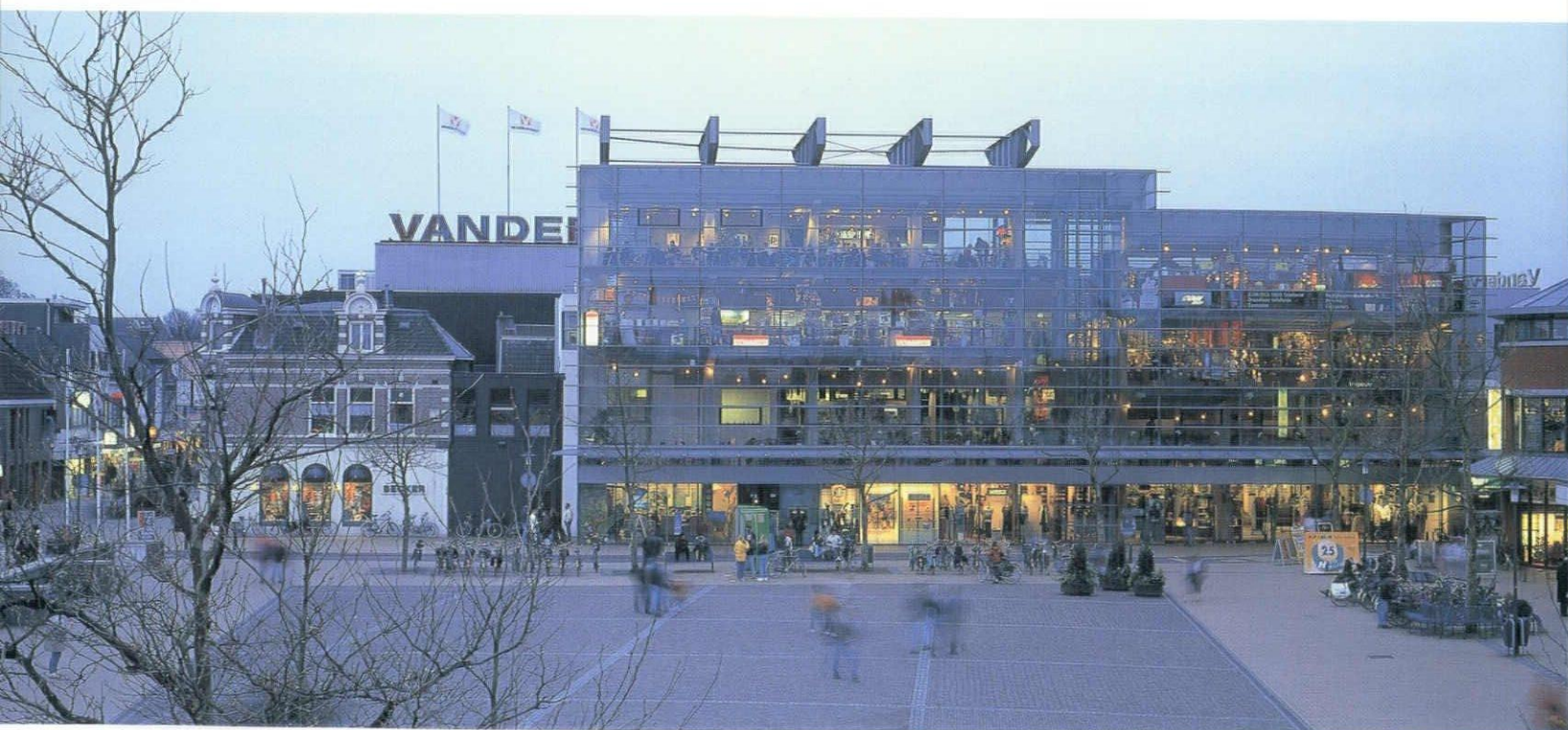
断面図。左側の既存部分（）と右側の増築部分（）は基礎構造とも独立している。最上階のカフェ厨房は増築部の構造によって吊り下げられている



当初は3つの増築で新しいファサードが構想されていた



街区の周りにいくつも増築する可能性を示している



広場の夕景。広場のショーケースのように透明性を考慮している。左側に既存の建物が残されている
SD0010



増築部分（左）と既存部分（右）との間に1.5mの隙間が開けられ、人、光、階段、スロープが交錯した立体的な空間が生まれる

新旧の強度の違いによる双方の独立

——最初にアッセン市の都心のコンテクストについて教えて下さい。どのような環境で増築を考えたのですか。

H.Hertzberger (以下 H.H.) アッセンの歴史都心地区の商店街の集まる街区では、各建物は徐々につながるように存在していました。そこでは、リノベーションのような再開発ではなく、建物同士がそのまま内部で連結しながら広がっていきかたちで開発されました。開発後も店主たちは、そこに残り、共同してマネージメントするようになったのです。

彼らが考えたのはデパートのアイデアの初期のものでした*1。

——どのような建築の提案をされたのですか。

H.H. 私は、この街区全体に対する増築を考えました (p.90のスケッチ参照)。

この歴史都心地区において、店主たちは自治体から広場側に増築することを許可されたのです。ただし、6mといったわずかな幅です。とても狭い。しかし、上に伸びることは可能だったのです。

既存の建物の構造の状態がよくなかったので、増築部分は、ひとつの太い柱で「木」のように自立しています。またキャンティレバーで各階のフロアを支えられています。また、既存の建物側の屋上にもキャンティレバーでカフェ厨房の床を張りだしています。つまり、吊り上げられているのです。ですからこれらの増築した新しい構造体は、既存の構造体には触れていません。つまり、既存の建築物の前に、新しい建築物を配置したのです (p.90を参照)。

スケッチにもそのことを描いていますが、港に停泊している船のように描いています。街区のまわりのいくつかの場所に増築できるように描きました。

新しい建物は、非常に透明で、中が良く見える、とてもオープンなデパートです。当初のイメージでは、窓側にも柱があったのですが、中央に大きな板柱を用いることで、ガラス面の透明度を増しています。

店主はとても倹約的で、オランダ人らしいメンタリティをもっていました。そこで、彼らはファサードだけ新たなものを求めたのです。また、広場の周りがある2社のデパートとの競争も重要なものでしたので、負けないように高さを大きく見えるようにと要求してきたのです。

ここでは、他とは異なってモダンなデパートにしました。透明にすることで、内部にある様々な部門が、外に現れ、ライトアップされるのです。中には、階段室やエレベータを設置し、新しい建物と古い建物との間に、1.5mのすき間を開けました。既存の建物との間にレベル差を設け、その間にガラスの階段やスロープをデザインしました。各階の内部の要求に応じて変えているのです。

——新しい構造と古い構造との関係についてどのように考えたら良いのでしょうか。

H.H. 調べてみると、既存の構造はかなり弱いものでした。それに比較して、新しい部分の構造は強度を増し、基礎も大きなものを用いています。

こうした強度の違いから、双方が触れない方が良くわかります。

——この地区には、どのような規制がかけられているのですか。建築物を建てて良い境界線があると思いますが、それを6m拡張したということは、どのように協議したのですか。

H.H. 新しい土地利用計画の中に、6m分の拡張許可を得たのです。

——そのようなことは、すべての地区で可能なのですか。

H.H. いいえ。ここだけです。隣の街区と比較すると、道路面に対して、この対象街区の方が、6m引いているので、そこまでは許可を得たのです*2。

——都市の改造と建築の改造の関係について、どのように思われますか。

H.H. このアッセン市の場合は、あまり目立たない町のプロジェクでした。有名建築といわれるようなものが、何もありませんでした。この町を開発するにあたって、自治体や行政は、周囲との調和を保つように、レンガを用いたり、古典的なデザインを指導していたのです。ですからこの建物ができることで、都会的な本当のデパートができたといわれています。

ビルバオという、スペインではあまり知られていなかった町があります。しかし、そうした町が、美術館の建築によって世界に知られるようになりました。同じように、アッセンでもそのような建築のインパクトが欲しかったのです。

人々がこのような商業ビルを望んでいたのです。私は商業建築家ではありません。透明性を考えただけです。しかしこの場合は、うまくいったと思います。

既存の建築物との連結に関わるプロジェクトとして、現在進行中のものに、アボドアの図書館、ミュージアム、シアター、ショップ、レストランの複合建築があります。1階部分がオープンなので、正面から見ると、既存の建物も複合して見えます。もうひとつは、学校を計画しているところです。

(2000年7月12日、アムステルダムにて インタビュー：宮脇 勝)

*1 この後で、店主に直接インタビューしたのだが、このオーナーの親戚で徐々に商店を買取り、カナダやアメリカに商業を学びながら、増補的につないでいったようだ。その際、大規模な建て替え再開発には至らず、構造体をそのままに、壁を取り払って拡張していった。

階高が個々に違うので、スロープや階段が各所に見られることから、その様子がわかる。

*2 この背景について補足すると、古くは、拡張していった街区の方が商業中心街で、人通りは反対側の道の方が多かったが、住宅地だった隣の街区が広場と2社のデパートに再開発されたことにより、そちら側に人が集まるようになってしまった。

これに対して、この店主は、ヘルマン・ヘルツベルハーの力を得て、広場側にファサードを新たにつくったのである。

ヘルマン・ヘルツベルハー/Herman Hertzberger

1932年アムステルダム生まれ

1958年デルフト工科大学教授

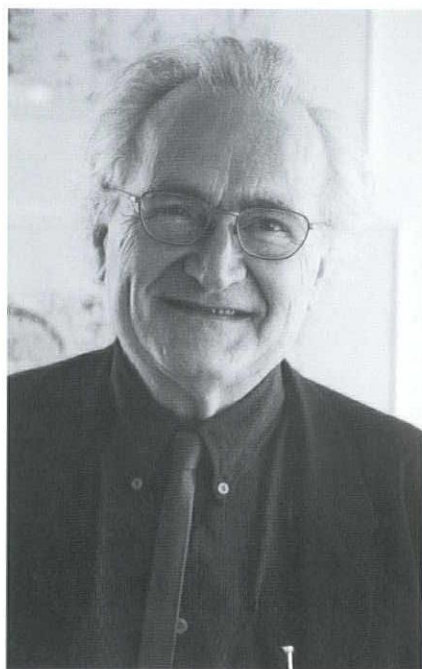
1970年デルフト工科大学教授

1982-86年ジュネーブ大学教授

1990-95年アムステルダム・ベルラーヘ・インスティテュートの学部長

セントラル・ベビリアのオフィスビル (1972) は傑作

集合住宅、学校の他に、1980年に厚生省の新庁舎を設計している



間の建築と覆う技術

国立現代アートスタジオ「ル・フレノア」

トゥールコワン（フランス）

バーナード・チュミ

Methods: In-between architecture / Covering technology

Project name and the location: National Studio for Contemporary Arts "Le Fresnoy", Tourcoing (France)

Architect: Bernard Tschumi

Program: Lesuer Complex Facility (1920s) → Research Studio (transformation: 1997)

リールから近いトゥールコワンにある現代アートスタジオである。元々は1920年代につくられた地域の娯楽複合施設だった。映画、ダンス・ホール、スケートリンク、乗馬施設などがここに集められていた。新しい計画では、地域から世界につながる施設として、1997年までにB.チュミによって改造されたものだ。

覆い被さる現代的な100m×100mの大屋根には、既存の施設ごとと保護するシェルターの役割と、新しい設備（階段・通路・空調）を上部から提供するサービスのふたつの役割がある。まるで建物がメンテナンスのために、ドックに入っているかのような景観が屋根の下にある。「In-between／イン・ビトウィーン」と呼ぶ既存の建物同士の間にある空間を歩き回することで、別の次元へ建築を再定義しようとしているようである。色の選択は、シェルターがシルバー、階段などがブルー、既存の建物がイエロー、新規の増築棟が打ち放しで、特にブルーとイエローに塗られた空間関係を歩きながら見ていると楽しい。

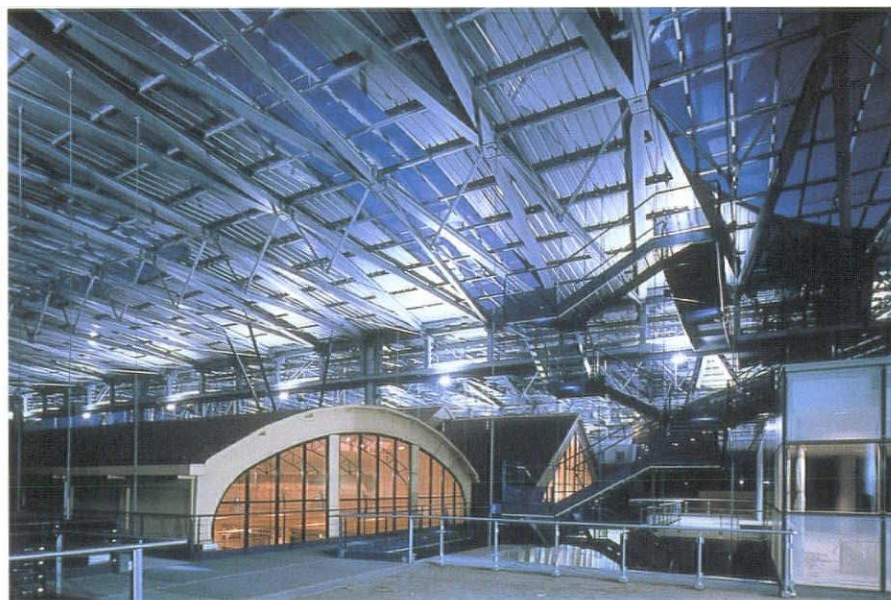
裏側には高速道路が通過しているため、屋根が引き続き折れたかっこうでシェルターの役割をしている。この建物は利用者が限定されているため、催し物があるとき以外一般公開をおこなっていない。



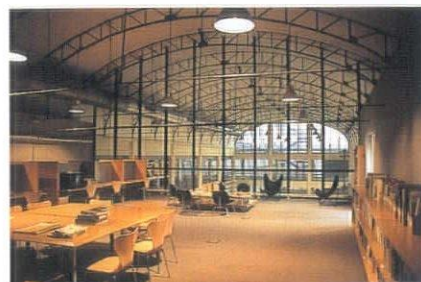
地域の娯楽施設だったころの風景



既存の建物（イエロー）、大屋根（シルバー）、間の動線システム（ブルー）とによって再構成されている



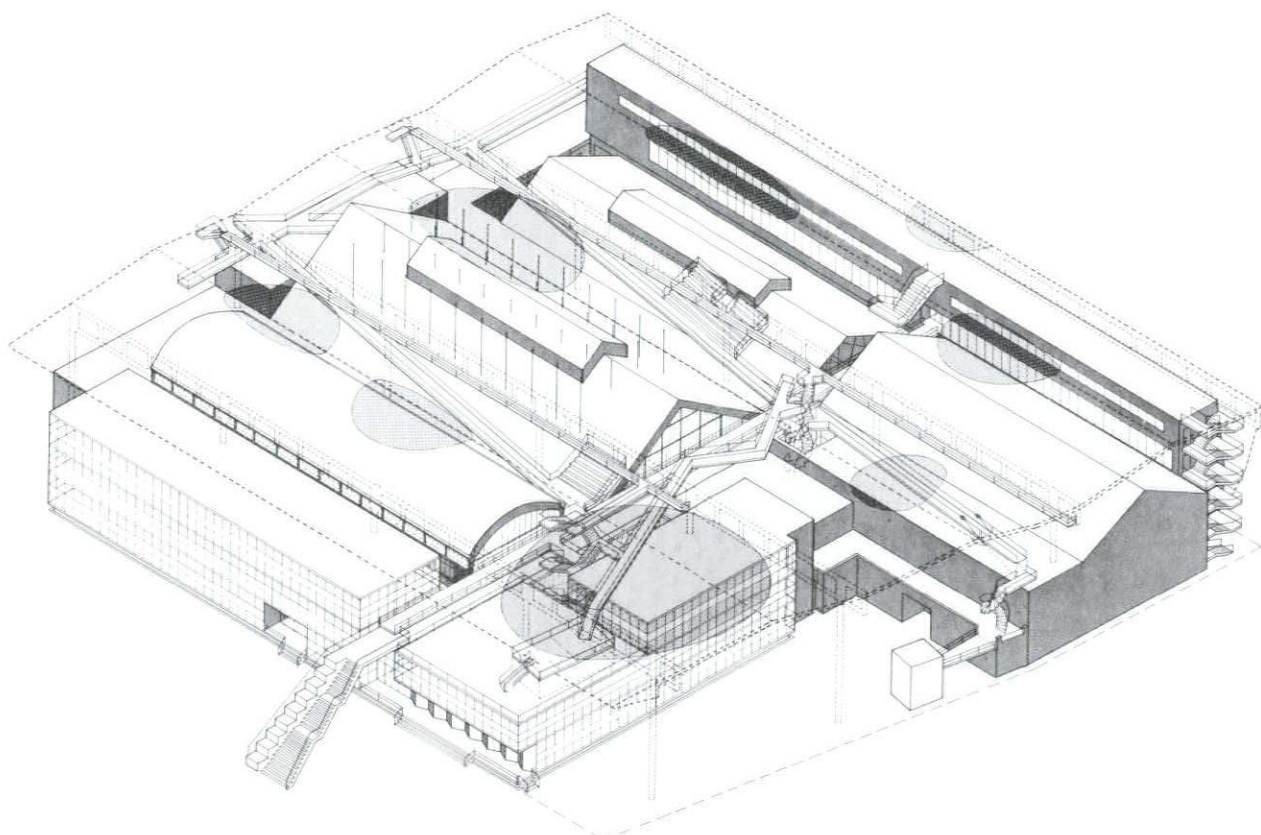
ライトアップされた半屋外の空間。B.チュミによるイン・ビトウィーンの建築空間



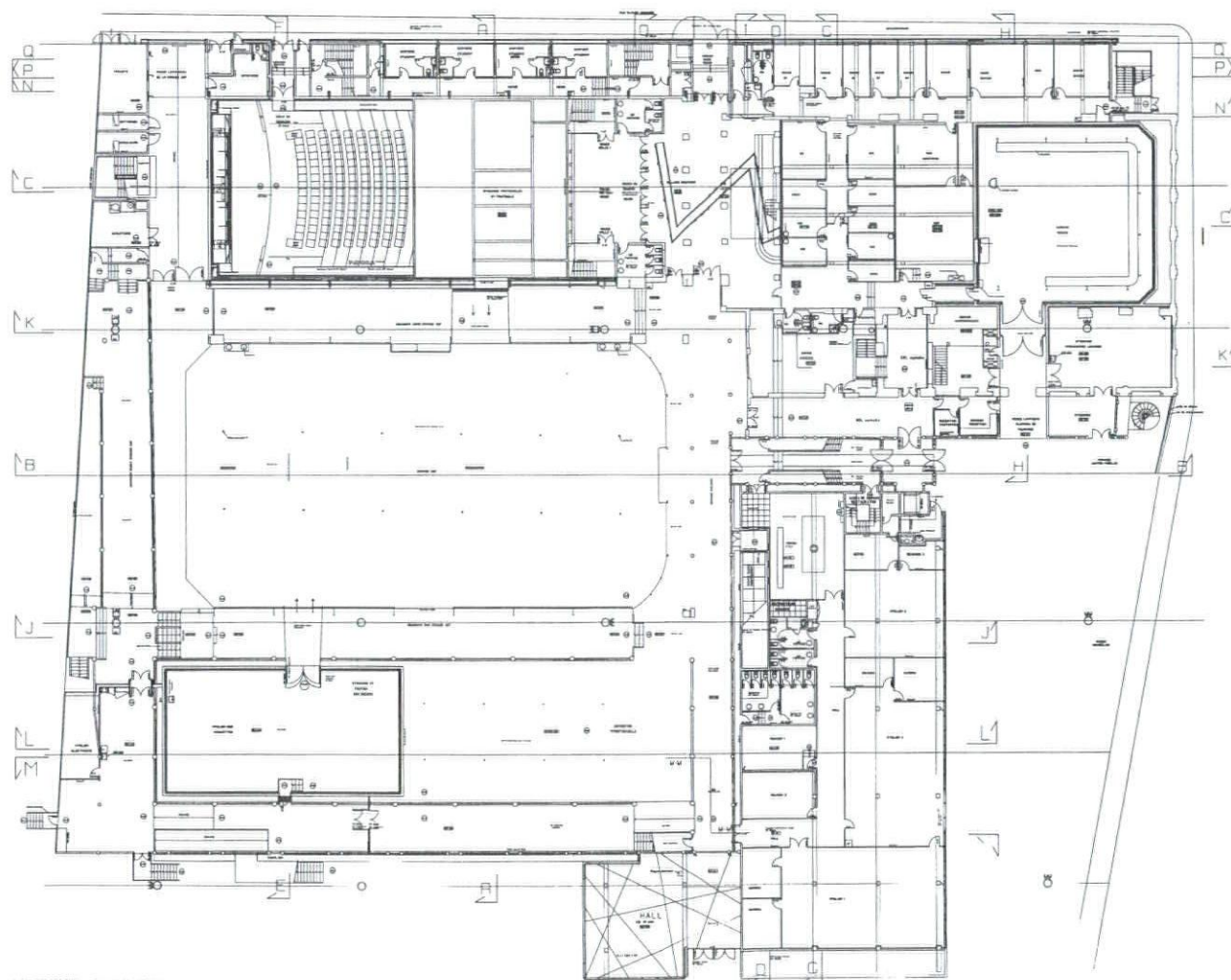
図書室



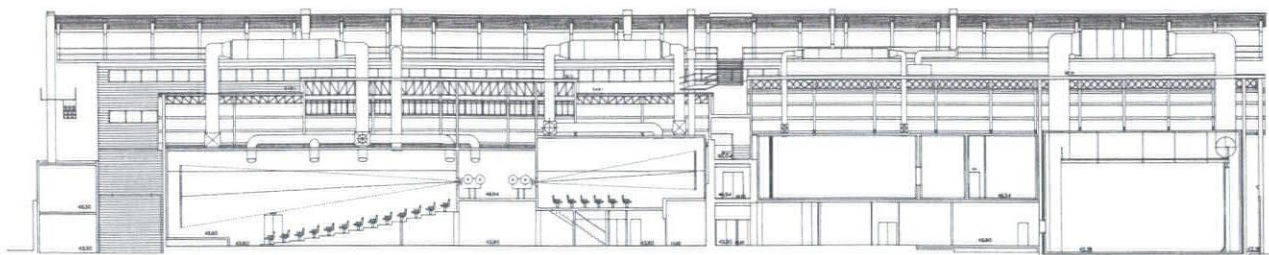
大屋根に吊り下げられたブリッジ



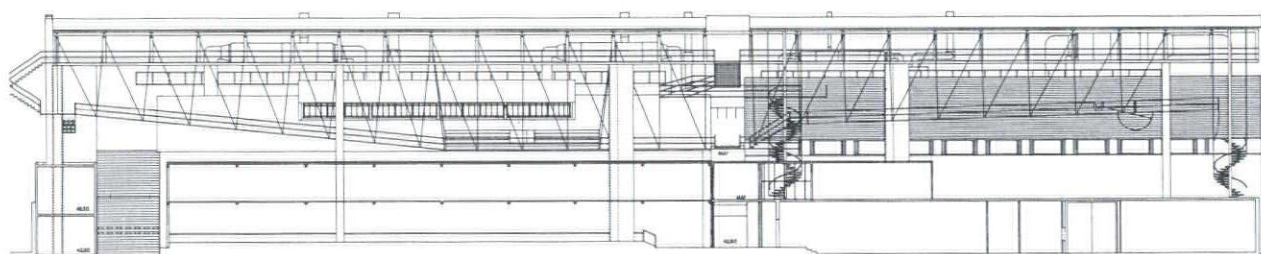
アクソメ。既存の建物、増築する建物、間のブリッジ、スロープ、階段、大屋根によって再構築している



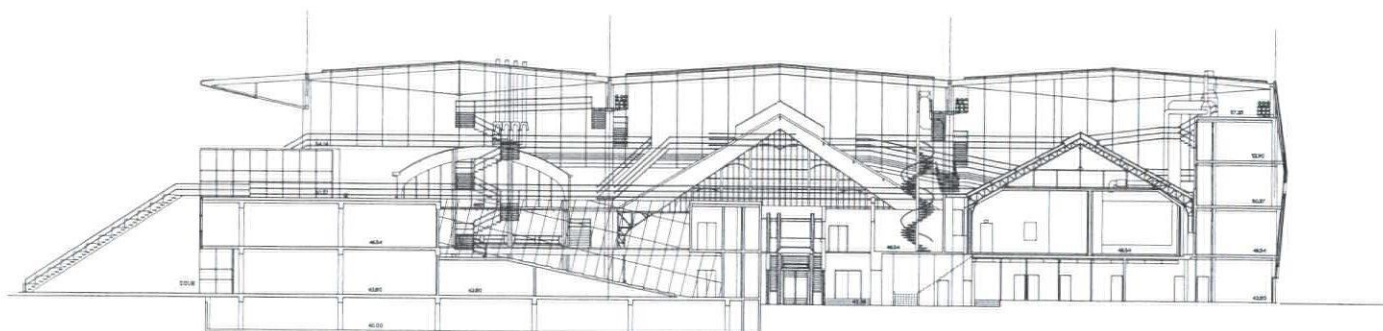
1階平面図 S=1:600



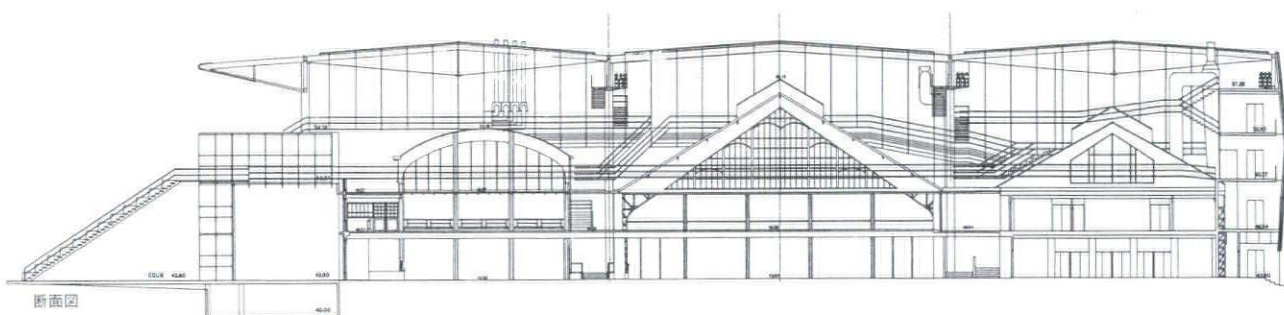
断面図



断面図



断面図



断面図

低層部のドミノ拡張

国際決済銀行指名設計競技案

バーゼル（スイス）

伊藤豊雄

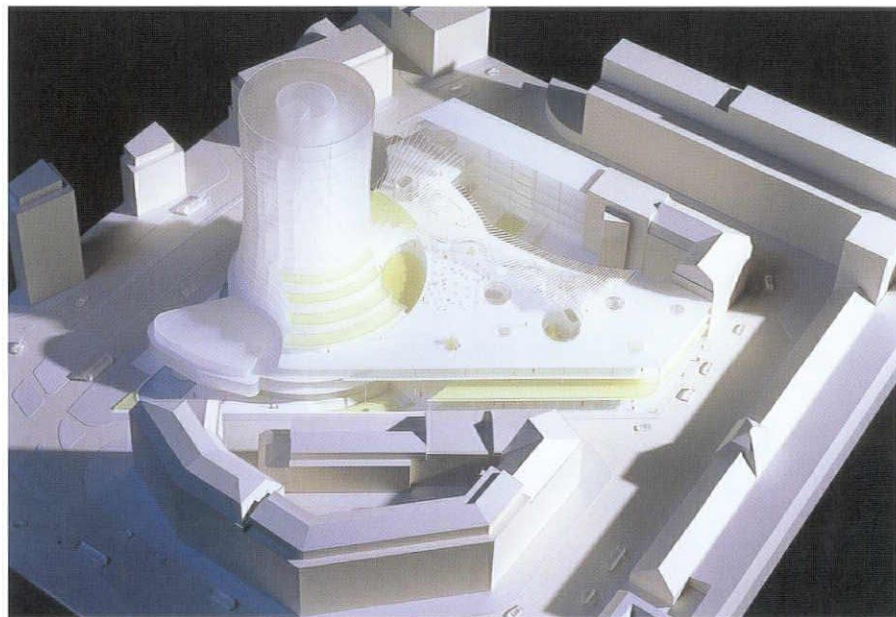
Method: Domino type expansion of lower part of the tower

Project name and the location: BIS (the Bank of International Settlements)

Extension Project, Basel (Swiss)

Architect: Toyo Ito

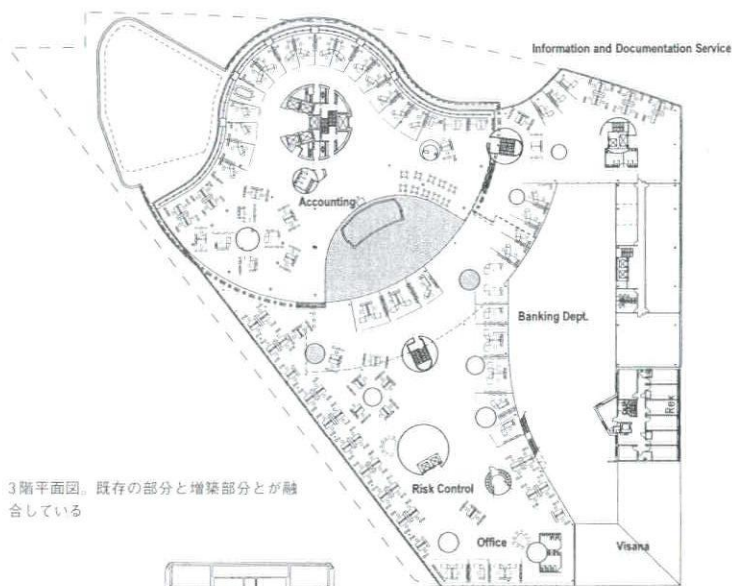
Program: Bank, Office (1975) → Bank, Office



模型写真。低層部が増築提案部分



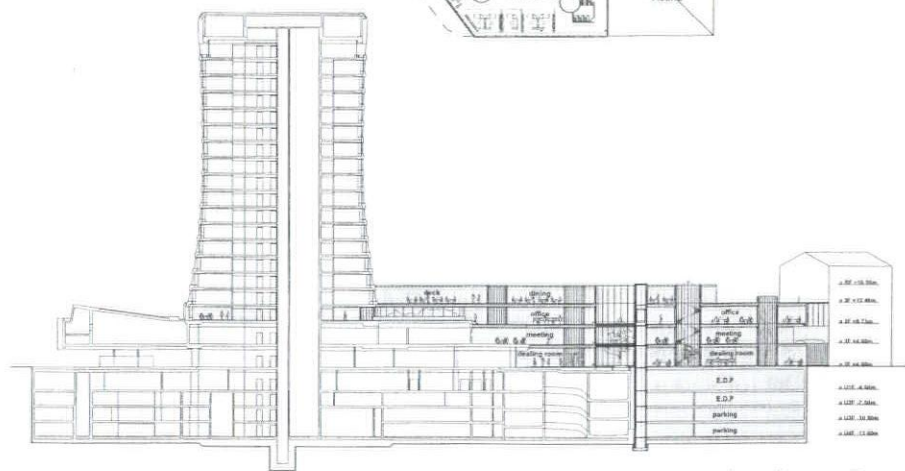
模型写真。既存の末広りのタワー部に連続した増築部分



3階平面図。既存の部分と増築部分とが融合している

スイスのバーゼル駅周辺の再開発地区に位置する国際決済銀行（BIS）の増築指名コンペ案である。他の案が、タワー棟と比較的独立したかたちでの提案だったのに対し、末広りを延長した伊東案が1等となった。コンペでは1期と2期工事の提案だけでなく、この地区での指定容積の変動が予測されることを反映し、2種類の街区容積にも対応した計4パターンの実務的な提案が要求された。

現在銀行側は、新しいビルへの移転も検討しているため実現性はわからないが、モダニズム建築への増築手法として、「新しいドミノ」と呼ばれるチューブ状のストラクチャー・システムによる、より柔軟性をもった、透明感のある増築方法が提案されている点が注目される。



断面図。グレー部分が新しい部分

SD0010

使いながら作っっていくシステムへ

インタビュー…伊東豊雄

——伊東さんの印象に残っている増改築はありますか。

伊東 ヨーロッパで印象に残っている改築にポルトガルの建築家で、ソト・デ・モウラという人が、ポルトガル郊外で修道院を改装してホテルにした例があります。非常に丁寧な仕事で、石壁を丹念に洗い、その間にガラスやメタルを実に巧みに用いて見事な空間をつくり出していました。このような仕事は現場で各場所ごとに採寸し決定していかなければならないので、根気のいる作業だと思います。本当に綺麗でした。

——今回取り上げた国際決済銀行のプロジェクトでは、どのようなプログラムが要求されていたのですか。

伊東 建物は大きくみて高層タワーと低層部からなり、それが手狭になっているので拡張することを要求されました。非常に機密性が高い建物で、各国からの相場の情報が入ってくるディーリングルームがありここでレート決定をしています。最初に説明会があったときも、チェックが厳しくて1階に人は誰もいない。日本銀行の世界版のような銀行で、一般の市民とはまったく関係のないのだとわかったんです。2階は普通のオフィス。3階には重厚な会議室が並んでいる。高層棟は日銀など世界各国から出向してきた人が常駐するオフィスになっています。他には、ダイニング、応接室があり、後はオフィス部分を増やすことにしています。

ここでの要求は、容積をできるだけ広げたいということでした。コンセプトを問うというより、古い部分をできるだけそのままにし、機能を中断しないで増築が可能であるかという実務的なことを配慮しなくてはならないコンペでした。

——モダニズム建築の延長の増改築という視点で見たと、この伊東さんのプロジェクトはどうとらえたらよいでしょう。

伊東 今回のプロジェクトは「改築」ではなく「増築」だったので、決して魅力的とはいえない建築に対してアディションをつけられるのかと悩みました。そこで、末広がりになってきた建物の段上のテラスをつけていくという、当初のコンセプトをそのままにした拡張案でやろうとなったわけです。既存のテラスは、格別なものではないのですが、使っている人は結構愛していました。それを結局は拡張して、できるだけ活かすという方針にしたのです。

——今、増改築を取り上げるときに新旧の対比だけでなく、もっと違うテクノロジーが組み合わせられるというのがあるとおもしろいと思うんですが。

伊東 今回のプロジェクトでは、そうやって対立する余裕もなかったですし、元の建物も圧倒的に大きくデザインに特徴のないものでした。特に周辺環境とのコンテクストがないような気がしていたのです。しかし、低層部に向かい合っている通りに対して、きちんとしたものをつくりたいと思い高層棟の低層部を多少壊してでも新しく伸ばそうと考えました。

——一般的な日本における増改築に対して、どのような視点をもっていらっしゃいますか。

伊東 基本的には、日本は壊すすぎていると思います。近代建築で街中で見られるような凡庸なものでも、手を加えて改修していくのも僕はおもしろいと思います。

東京のような都市部においては、建て替えてもさらに容積が増えるわけでもなくコンテクストをつくれるわけでもない。ですから、多少でも時間をかけて少し修復するなり改築する方が、新しいけれど何の新鮮さもない建築をつくるより良いと思うのですがすぐに壊してしまふ。

——公共建築の場合、行政が推進していないみたいですね。そもそも建設省が改修にお金をつけないように、自治体は壊すしかないと思っている。

伊東 それは建て替えた方が自治体にとってもやっかいな問題が起こらないからです。それに補助金がもらえないとか、現場でも決定事項が多くなる、といった問題もあるのではないのでしょうか。居住条件が完璧に空調されていないといけなとみんな思いこんでいますからね。少し性能が劣る部分があったって良いじゃないか、という考え方になってこない、これらの取り組みはなかなか難しいでしょう。

それと、一度に完成してしまうということではなく、あるところまで1回やって、それでまた2、3年かけてこれをやって、というように順次使いながらつくっていくようなシステムが成立すればいいと思います。その過程で、僕ら自身も気になっているところを「こういう使い方をした方が良いんじゃないか」と提案でき、そこで発見的なつくり方ができるんじゃないかと思うのですが。ヨーロッパの方が、そういう考え方が強いんでしょうね。実際ヨーロッパでは、新しくつくるよりも改修の方が多い。これらの考えが広くいきわたっていることがわかります。

——他にも、既存の環境を活かしたプロジェクトに取り組まれているのですか。

伊東 今度、オランダのフローニンゲンでイベントを行います。古いインナーシティに対して新しいエリアをヴィール・アレツツのマスタープランで開発しようとしており、新旧ふたつの地域を結びつけるコンセプトを求められました。

インナーシティの中に、穴が5つ開いたような場所があります。そこに小さなハウジングをつくれます。水力発電所跡地を開発地区としているニューエリアには、当時の建築や工作物が残っており、これらを使ってイベントスペースをひとつつくりたいと考えています。これらを9月に行いますが、新旧ワンペアずつ5人の建築家に頼み、それを僕らもワンペアやりかけるところです。僕たちが担当している建物はもと発電所だったところで、レンガ造のかなり大きなものです。そこをシアターにしようと考えています。フローニンゲンは小さな街でお金もない。とりあえずは仮設なことしかできないでしょう。しかしそれでも市は実にまじめに、かつ精力的に取り組んでいます。

(2000年6月29日、東京にて インタビュアー：宮脇 勝)

伊東豊雄 / Toyo Ito
1965年 東京大学工学部建築学科卒業
1966-69年 東京大学工学部建築学科卒業
1971年 株式会社アーバンロボット (URBOT) 設立
1979年 株式会社伊東豊雄建築設計事務所 設立
1986年 日本建築学会作品賞
1988年 芸術選奨文部大臣賞
1999年 日本芸術院賞
2000年 アメリカ芸術文化アカデミー
アーノルド・M・ブルーナー賞



三段階増築とスロープ・デザインの継承

サン・シーロ・サッカースタジアム

ミラノ（イタリア）

ジャンカルロ・ラガッツィ

Methods: Three phase Addition / The succession of slope design

Project name and the location: San Siro Stadium, Milan (Italy)

Architect: Giancarlo Ragazzi

Program: Stadium (1926)→Stadium (addition: 1956)→Stadium (addition: 1990)



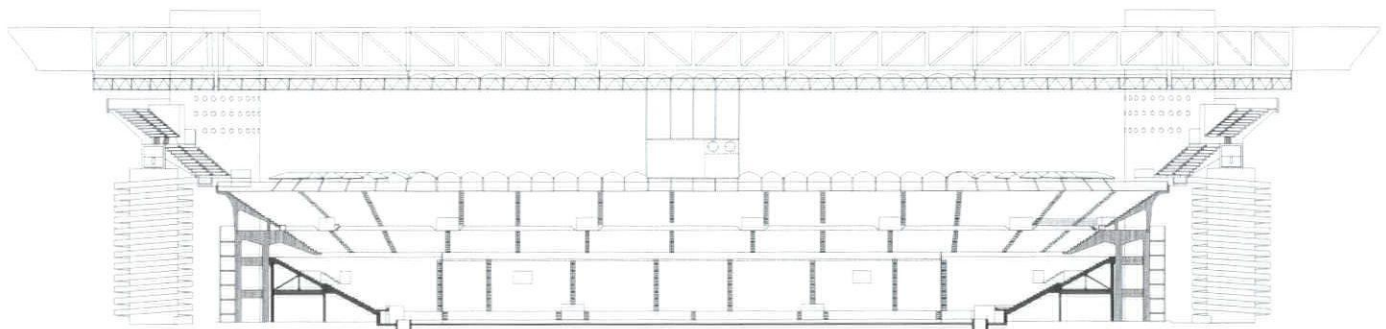
第3期の増築による外観（現在）



第1期の外観（1926年）



第2期の増築による外観（1956年）



断面図 ■ 1926年の部分 ■ 1956年の部分 □ 1990年の部分



立面図。1956年のスロープ外壁部分と、1990年のシリンダー状のスロープ構造部分との間にデザインの継続性を見出している

元々スポーツ競技施設として、3万5千席規模で1926年にAlberto Cuginiの設計で建設された。まもなく、コーナー部の増築を加え、75×120mの4万席規模のセリアAでのミラン・チームのホームスタジアムとなる。さらに、戦後、既存の客席を活かしながら、1953年に8万5千席規模への拡張工事が、Armando RoncaとFuruccio Calzolariの設計でなされた。このとき、特徴的なスロープのコンクリート構造が、既存の構造から30cm離し外側に巻かれた。ここでは既存の伝統的な構造の意味だけでなく、建築の機能や都市的なスケール効果がデザイン上議論され、19本のスロープによって、15分で会場から出ることができる安全システムとともに、パワフルな外観が採用された。

1990年ワールドカップ（イタリア）のために、各地のスタジアムは拡張と屋根の取り付け改修工事を一斉に行った。ミラノのスタジアムもまた、再建か増築かの議論を経て、拡張工事に至る。ただし、Piccolomini通り方向には敷地の関係で拡張できない条件にあった。そこで、コーナーに4本の巨大なコロンを既存の倍の高さで立ち上げ、再度独立して観客席を持ち上げる方法が採られた。

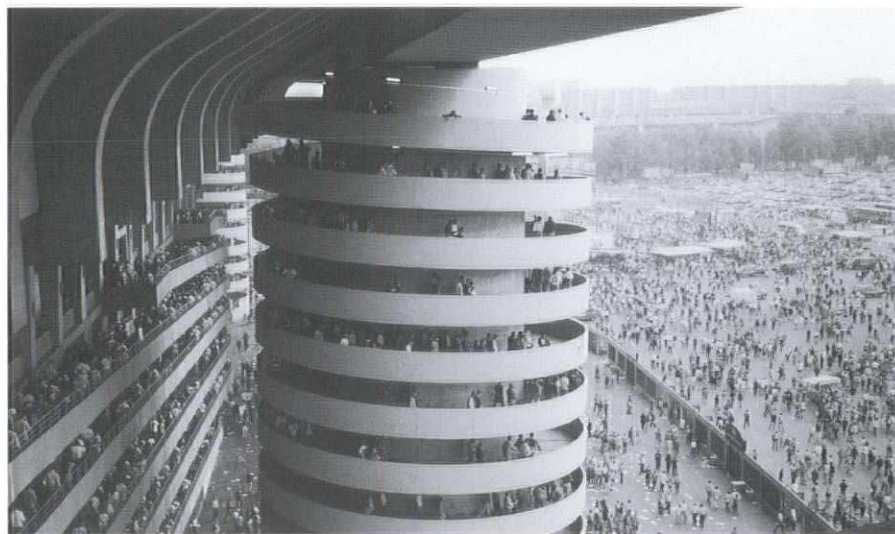
3段階目の拡張では、2段階目で作られたスロープデザインが周到され、高さ68mの巨大なコロンにもスロープが巻かれ、見る者を圧倒する。1段階目、2段階目の技術を経て、3段階目の巨大な鉄骨トラスビーム（長手方向で205mスパンもある）が飛ぶ超越的スパンは、約2万人の増席だけでなく、全席カバーする10万人以上ための屋根を持ち上げる。ここに各時代のストラクチュアが、それぞれ壊されることなく、合体ロボのように重なり合い、成長した建築を見ることが出来る。テクノロジーは、時代を経て飛躍していくのである。



1956年の外壁部分（左）と1990年の構造部分（右）



サッカー観戦風景。下段（1926年）、中段（1956年）、上段（1990年）へと席数を増席し10万人クラスのスタジアムに成長した



観戦後の人の流れ

内部増築

ミュンヘベルグ市立図書館

ミュンヘベルグ（ドイツ）

クラウス・ブロック

Method: The addition in the existing building

Project name and the location: Library of Münchebrugg, Münchebrugg (Germany)

Architect: Klaus Block

Program: Church (13C)→Ruins (1945-91)→Library (transformation: 1997)



教会内部にできた図書館の外観（教会に現れたノアの箱船）

マッスは、ノアの箱船のようにデザイン調整されている。しかしそれはミュンヘベルグのセント・マリエン・キルヘ教会に近接してつくられたものであり、内部に増築が施されている。

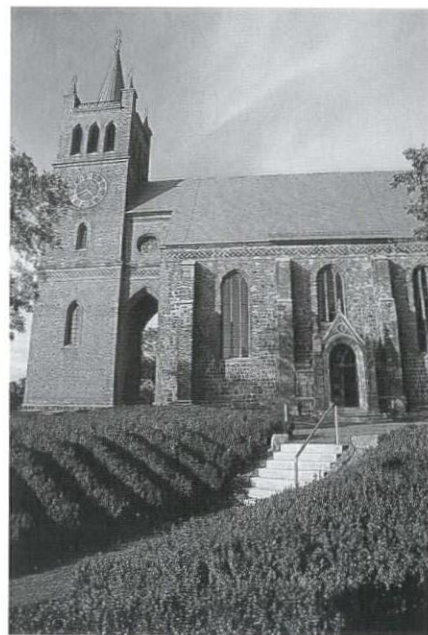
市民のための教会用の席は、聖書のメタファーをつけ加えたものである。図書館の形態は、船の形に似ているが、具象的な直喩でもない。

自治体の決定は、第二次大戦の終わりに破壊された教会を、同時代の文化センターとして拡大・

再建し、ノアの箱船の志のように共同の助け合いの価値を高めようとしたものであった。

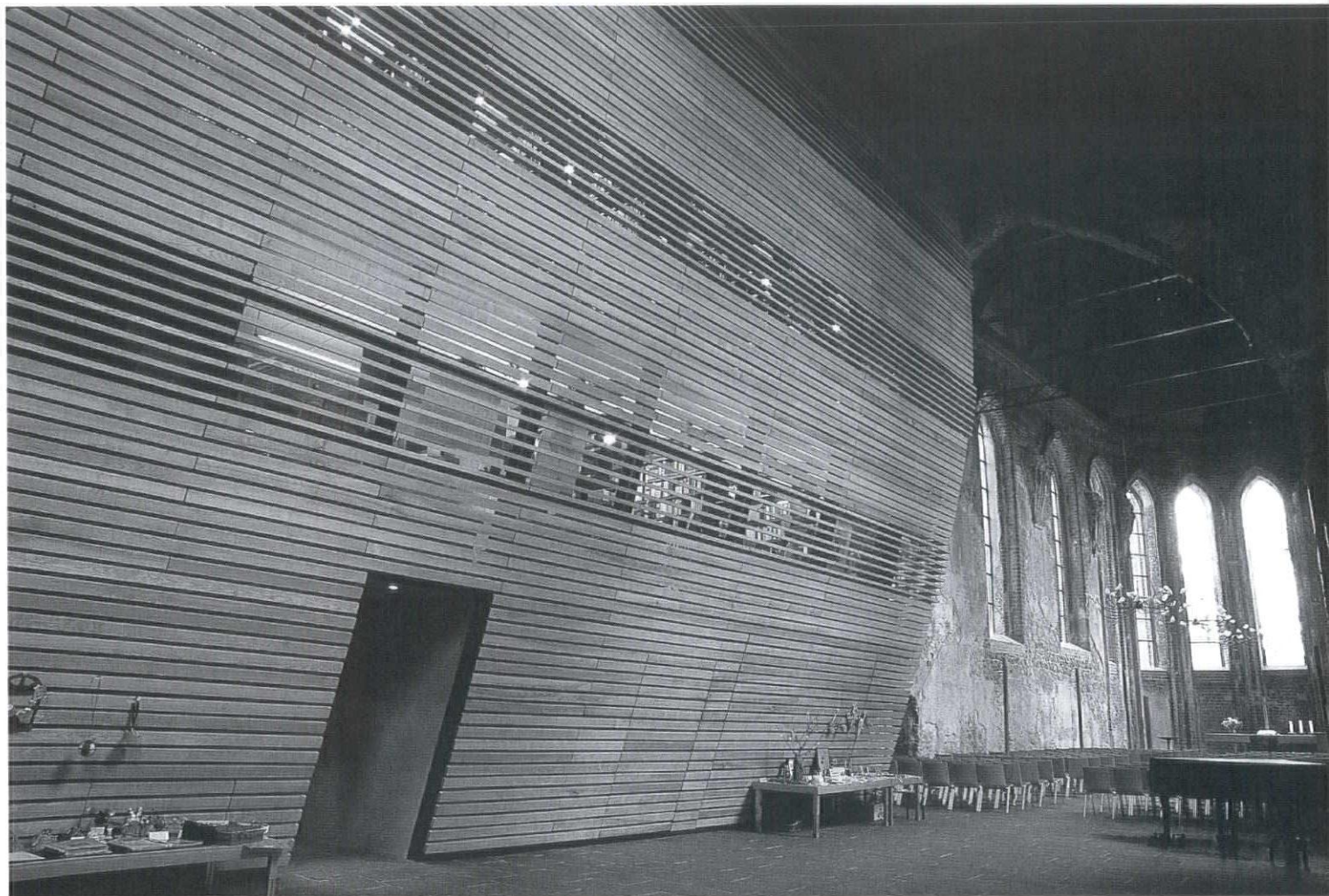
4階建ての内部は、書籍の部屋と60人用の集会室は分離され、文化的な活動や市の会議に用いられる。全体の空間は、環境的で、音響的に独立していても、教会にふさわしい神聖なる空間に重きをおいている。

「家」の中の「家」によって、内部空間が変化し、図書館の躯体と教会の内陣との間に、外部の

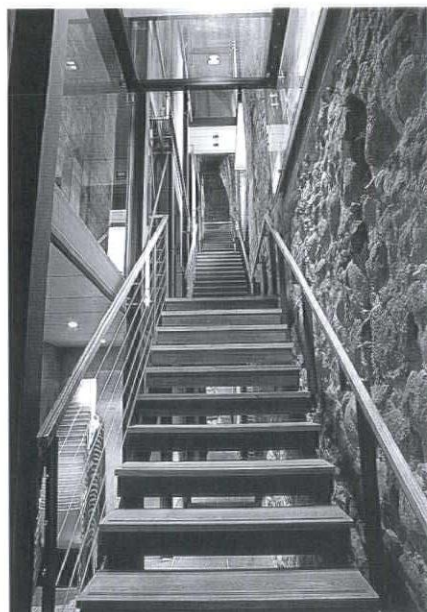


教会外部。教会は13世紀、鐘塔はシンケルによる増設。戦時中に壊れた屋根などを修復した現在の外観

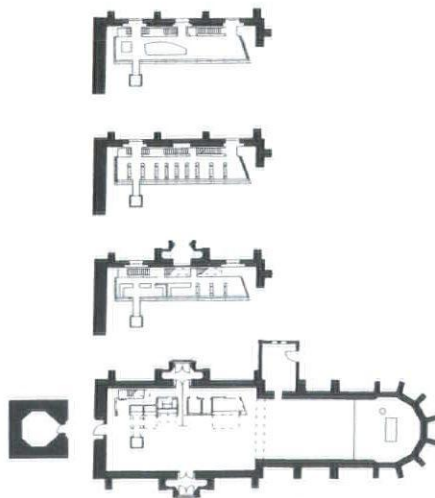
ような内部建築空間ができている。また4階建てでありながらも、木製のルーバーによって建物内部がひとつの塊になっている。階段や独立したバンチングメタルでカバーされたエレベータが設置されていて、軽快で自由な出入りを可能にしている。図書館は、教会内部の長手方向に見通せるように、古い躯体の中に、新しい鉄骨構造が固定されている。



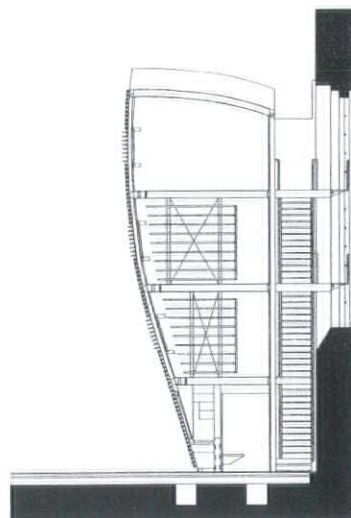
木製ルーバーによる図書館外観。1階ルーバーは回転開閉する。手前に小学生の展示がみえる。奥は教会やホールとして継続利用している



図書館アプローチ。左側が既存の壁。2階には事務室、閲覧室がある



下から1階、2階、3階、4階平面図 (■：既存部分)



断面図 (■：既存部分)

ガラスのシリンダーと組む(1)

国立国際子ども図書館

東京 (日本)

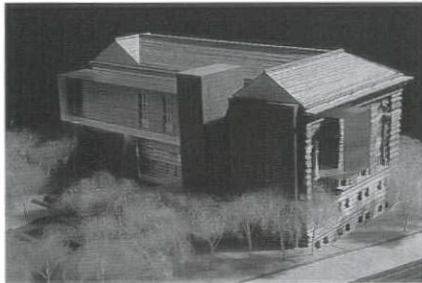
建設省関東地方建設局営繕部+安藤忠雄建築研究所+日建設計

Method: The composition with glass cylinders in an old building (1)

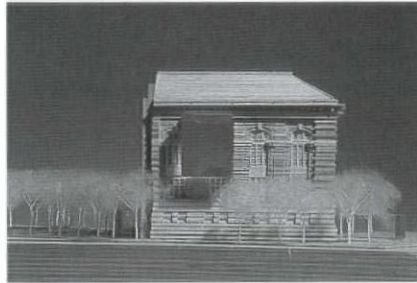
Project name and the location: Extension of International Children's Library, Tokyo (Japan)

Architects: Ministry of Construction, Tadao Ando, Nikken Sekkei

Program: Library (1906)→Library (extension: 1929)→Library (transformation phase1: 2000)→Library (transformation phase2: 2002)



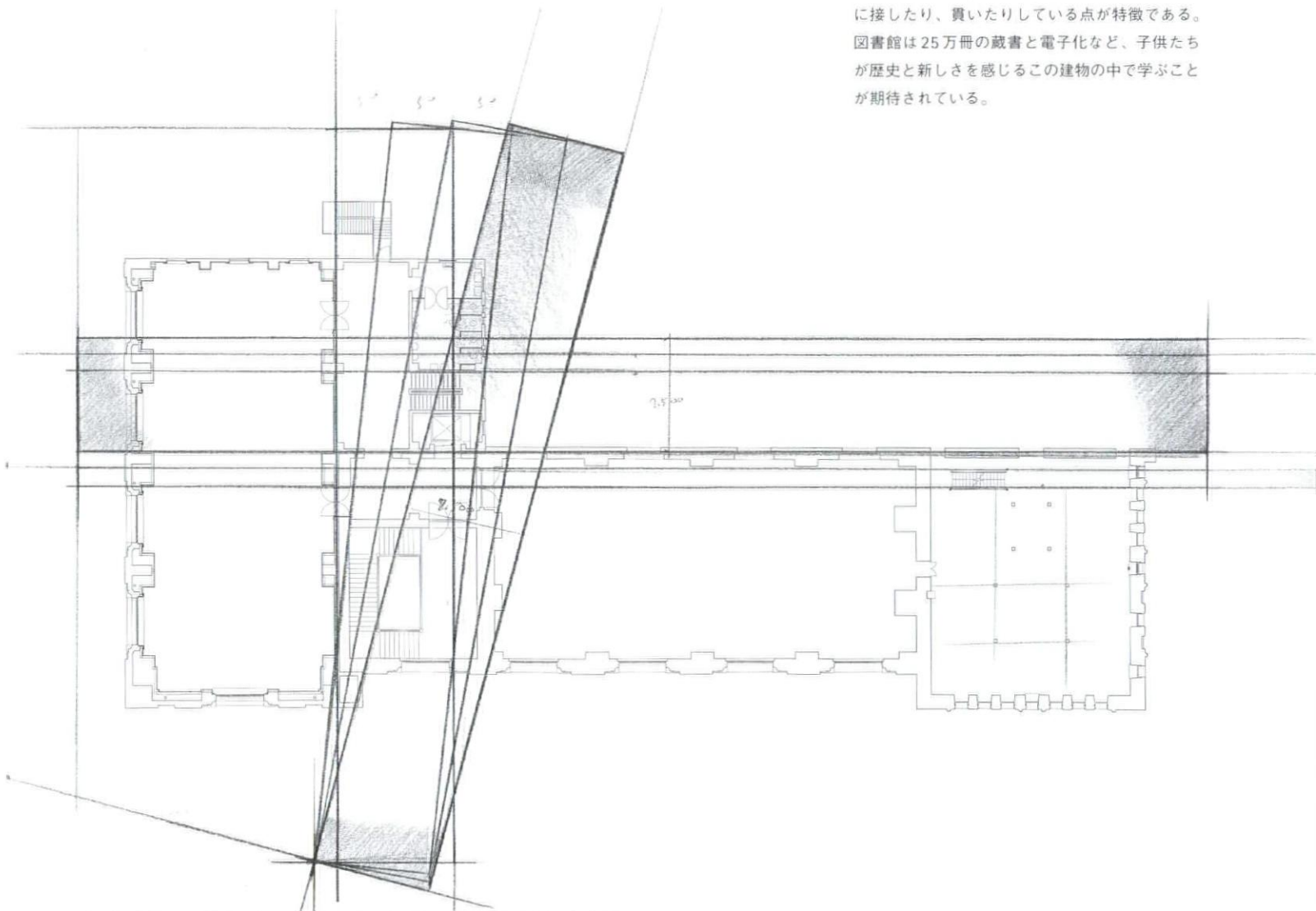
ガラスのシリンダー部分が増築部分



既存の建物にガラスのシリンダーが貫いている

既存建物は、帝国図書館として、J.コンドルに師事した文部省技師・久留正道らにより設計された。明治39年に第一期工事、昭和4年に第二期工事が完成したが、第二次大戦によって計画が中断、当初の計画の3分の1の姿であったために、正式な正面玄関がつくられていない。その後昭和24年に国会図書館支部となる。明治期のルネッサンス風であり、東京都選定歴史的建造物に指定された。

現在、国立国際子ども図書館として改造計画が実施されており、その第一期部分が2000年4月に公開された。基礎を免震レトロフィットとし、外観および内観を保存改修するとともに、ガラスとコンクリートのシリンダーが付加あるいは貫入される。1階において、玄関とカフェのためにガラスの箱を加え、裏側にガラスのシリンダーがコンクリートのボックスを持ち上げ、既存の建築物に接したり、貫いたりしている点が特徴である。図書館は25万冊の蔵書と電子化など、子供たちが歴史と新しさを感じるこの建物の中で学ぶことが期待されている。



1階平面スタディ (安藤忠雄)。入口からカフェにつながるガラスのシリンダーの角度を検討している

SD0010

ガラスのシリンダーと組む(2)

マンハッタンのパントハウス

ニューヨーク (アメリカ)

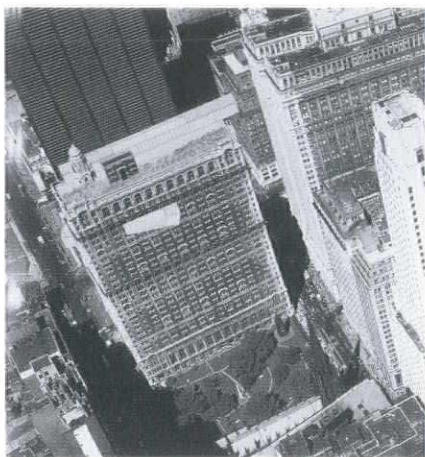
安藤忠雄

Method: The composition with glass cylinders in an old building (2)

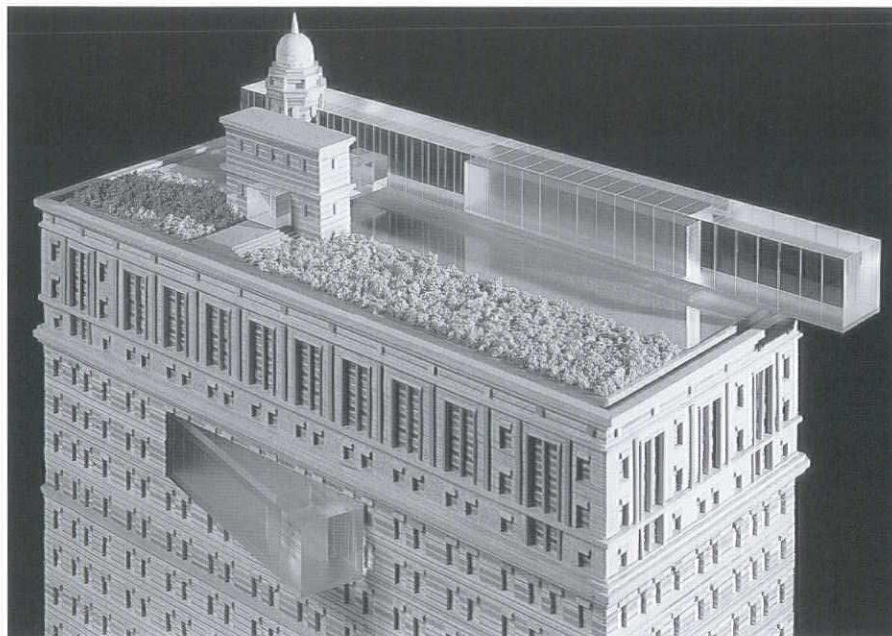
Project name and the location: The penthouse of Manhattan, New York (USA)

Architect: Tadao Ando

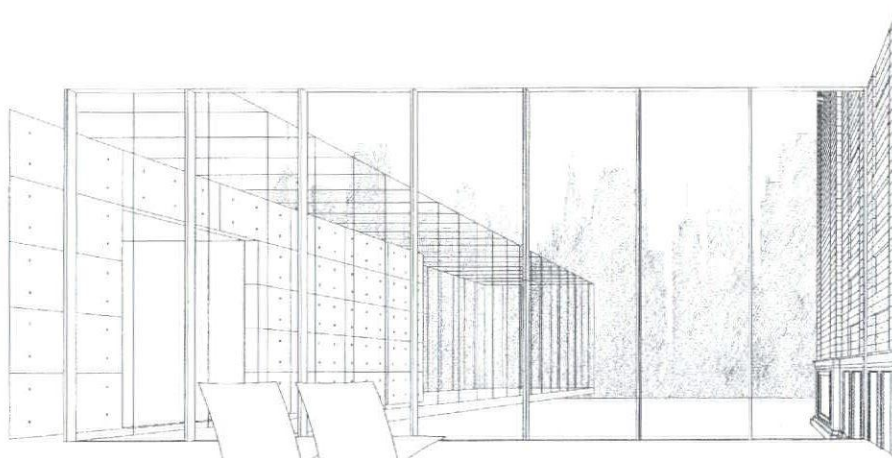
Program: Office (1920s)→Office and Penthouse (additions: 1999-)



モニター写真。屋上と上層部にガラスのシリンダーが組み込まれている



模型写真



ドローイング。パントハウスから見る風景

マンハッタンは20世紀の文明を象徴する都市である。個々の建物も魅力的なものが多いが、スカイスクレーパーの林立する集積体としてもひとつの奇跡と言っても過言ではない。世界中を旅していた、まだ建築を志したばかりのころ、セントラルパーク横の30数階建てのビルの屋上に設けられたパントハウスのレストランでマンハッタンの夜景を見て、これぞ20世紀だと感じたことを思い出す。そのときは、まさか自分がここで仕事をする事になるとは思わなかった。初めて訪れたときから30年以上の時間を経て、マンハッタンにい

くつもの高層ビルを所有しているあるオーナーから、1920年代に建てられた32階建てのビルに、自分の住居およびゲストハウスとして使用するパントハウスを増築して欲しいとの依頼を受ける機会に恵まれた。

パントハウスは、建物の最上階にガラスの皮膜で覆われたコンクリートの箱として載せられ、宙に浮いている。屋上には水が張られ、その向こうに摩天楼を見る。最上階より5階ほど下がった位置では、アメリカン・ボザール流の古典主義的な築70年の建物に、ガラスと鉄、そしてコンクリ

ートという20世紀を象徴する素材をそのままに活かした幾何学的な箱が突き刺さる。

様式的な超高層の上部に、現代技術の枠を集めて、打ち放しコンクリートの壁、佇むような水庭、宙に浮いたガラスのボックスを付加することで、建物全体が活性化されることを目論んだ。もう新たな奇跡など起こりそうもないほど人間の可能性が追求され、高密度にエネルギーの集積されたこの街に、通常ではあり得ないものを出現させ、新しい奇跡を起こしたいと思ったのだ。
(安藤忠雄)

サー・ノーマン・フォスター／Sir Norman Foster (p.14、p.48)
1935年 マンチェスター（イギリス）生まれ
1961年 マンチェスター大学卒業
1962年 イェール大学大学院終了
1967年 フォスター・アソシエーツ設立
1983年 RIBA ゴールドメダル
1994年 AIA ゴールドメダル
1999年 プリツカー賞など、190を超える賞を受賞

ジャン・ヌーヴェル／Jean Nouvel (p.24、p.29、p.86)
1945年 フェメル（フランス）生まれ
1972年 エコール・デ・ボザール卒業
1987年 フランス建築アカデミー・グランプリなど多数受賞
1991年 IFA 副所長
1993年 AIA 名誉会員

ヘルムート・シュヴィツィンスキー／Helmut Swiczinsky (Coop Himmelb(l)au) (p.28)
1944年 プツナン（ポーランド）生まれ
ウィーン工科大学、AA スクールで学ぶ
1968年 ヴォルフ D.ブリックスと共に事務所設立
1988年 ウィーン市建築賞、89年 オーストリア建築連盟特別受賞

ヴィルヘルム・ホルツバウアー／Wilhelm Holzbauer (p.31)
1930年 ザルツブルグ（オーストリア）生まれ
1949年 ザルツブルグ技術大学卒業
1953年 ウィーン芸術アカデミー大学院修了
1956-57年 MITに留学
1964年 ウィーンに事務所開設
1977-98年 ウィーン応用芸術大学建築学科長
1997年 オーストリア共和国金賞

フォルウィン・マルク／Volkwin Marg (von Gerkan, Mark and Partners) (p.38)
1936年 ケーニヒスベルグ（ロシア）生まれ
1958-64年 ベルリン工科大学、ブラウンシュバイク工科大学
1965年 フォン・ゲルカンとともに事務所開設
都市・地域・造景計画家協会会員
1979-83年 ドイツ建築家協会会長に就任
1986年 アーヘン工科大学教授に就任

ジャック・ヘルツォーク／Jacques Herzog (Herzog & de Meuron) (p.52、p.60)
1950年 バーゼル（スイス）生まれ
1975年 チューリッヒ連邦工科大学（アルド・ロッシ、ドルフ・シュネブリに学ぶ）
1978年 ド・ムーロンとパートナーになる
1989年～1994年 ハーバード大学客員教授
1999年～チューリッヒ工科大学教授

ピエール・ド・ムーロン／Pierre de Meuron (Herzog & de Meuron) (p.52、p.60)
1950年 バーゼル（スイス）生まれ
1975年 チューリッヒ連邦工科大学（アルド・ロッシ、ドルフ・シュネブリに学ぶ）
1978年 J.ヘルツォークとパートナーになる
1989年～1994年 ハーバード大学客員教授
1999年～チューリッヒ工科大学教授

ハリー・グーガー／Harry Gugger (Herzog & de Meuron) (p.52、p.60)
1956年 グレーゼンバッハ（スイス）生まれ
1990年 チューリッヒ連邦工科大学卒業
1990年 ヘルツォーク&ド・ムーロン建築事務所勤務
1991年 同事務所パートナー
1994年 ベルリン HAB 講師

クリスティーン・ビンズワンガー／Christine Binswanger (Herzog & de Meuron) (p.52、p.60)
1946年 クライツリンゲン（スイス）生まれ
1990年 チューリッヒ工科大学卒業
1991年 ヘルツォーク&ド・ムーロン建築事務所勤務
1994年 同事務所パートナー

バーナード・チュミ／Bernard Tschumi (p.93)
1944年 ローザンヌ（スイス）生まれ
チューリッヒ工科大学卒業
コロンビア大学大学院終了
1970-79年 AA スクール教授
1981-83年 クーパー・ユニオン教授
1984年～コロンビア大学学部長

クラウス・ブロック／Klaus Block (p.100)
1952年 ベルリン生まれ
1979年 ベルリン工科大学卒業
1988年 設計事務所開設
現在、ベルリン工科大学客員教授

写真クレジット／photo credits

Nigel Young／Foster and Partners：p.14（上）、p.14（左下）、p.16-17、p.48（上段、下段中央、下段右）
Ottinghaus Foto Design Studio：p.19（上）、p.20、p.21
Boris Podrecca：p.22
Georges Fessy：p.24、p.78-79、p.80下、p.81、p.82（上段右、下段）
Philippe Ruault：p.25、p.27、p.86-87
G.Fox：p.26
Coop Himmelb(l)au：p.28（下）、p.30（上段右）
Olivier Boissiere：p.29
Markus Pihhofer：p.30（上段左）
Manfred Wehdorn：p.31（上段右）
Wilhelm Holzbauer：p.31（下段右）
Duccio Malagamba：p.34-35、p.90（上段左、下段）、p.91
Aerofilms International：p.48（下段左）
Foster and Partners visualisation：p.49
Margherita Spiluttini：p.52-53、p.60、p.61（右）
Tadao Ando：p.56-p.57、p.102
Laurent Bessol／MNHN：p.64、p.65（右）、p.67
Hisao Kohyama：p.70-71
Phot'R：p.80（上）
Gaston：p.82（上段左）
Peter Mauss／ESTO：p.93（上段、中段右）
Nobutaka Saruta：p.99（下段左、下段右）
Tomio Ohashi：p.96、p.103（右）

上記以外のすべての写真は宮脇 勝（All of the other photographs：Masaru Miyawaki）
図面作成協力（p.98、p.100）足立純一（千葉大学大学院）

宮脇 勝
1966年 北海道生まれ
1990年 北海道大学卒業
1992年 東京大学大学院都市工学科修士課程修了。ローマ大学留学（イタリア政府給費生）
1995年 東京大学大学院博士課程（都市デザイン）修了
短期間だが、伊東豊雄建築設計事務所に学ぶ
1999年 千葉大学助教授。都市プロジェクト研究
共著「都市の風景計画」（学芸出版社、2000年）

Guest Editor：Masaru Miyawaki
1966 Born in Hokkaido (Japan)
1990 Graduated from the University of Hokkaido
1992 Master of the University of Tokyo
1992 Italian Governmental Scholarship for the University of Rome
1995 Ph. Doctor of the University of Tokyo (Urban Design)
1995 Learned for a brief period at Toyo Ito & Associates, Architects
1999- Associate Professor of Chiba University (Urban Project)

MITSUBISHI
三菱電機

エネルギー効率に優れた
PMギヤレス巻上機を採用。

薄形制御盤を昇降路内に収納。
全階で多様な乗場意匠を実現。

昇降路だけの エレベーター 三菱〈エレパック〉誕生。

新登場

エレパック

ELEPAQ

三菱エレベーター

機械室レスタイプ/乗用・住宅用・寝台用

機械室にあったすべての機器を昇降路内にすっきり収納しました。もちろん制御盤も昇降路内に設置。エレベーター乗場の出入口わきなどに置く必要はありません。昇降路だけのエレベーターですから、設計の自由度がアップ、すべての階で多様な乗場デザインを可能にします。

建物の設計自由度がアップ

ベントハウスがないので、日影規制への対応が容易。機械室と居室の位置関係で悩むこともなく、建物内外の設計がいっそう自由になります。

ビル有効面積の増加

機械室がないうえに、昇降路面積も従来のロープ式並みの省スペース。居室などに利用できるスペースが大きくなり、レントラブル比も向上します。

なめらかな乗り心地と省エネルギー設計

加速・減速がなめらかで騒音も少なく、エネルギー効率に優れたPMギヤレス巻上機を採用。高級エレベーター並みの、静かでスムーズな運転を実現しました。また、油圧式エレベーターに比べて電力消費量はおよそ1/3になります。

環境に配慮

油圧式エレベーターでは避けることのできなかった廃油処理の必要もありません。「環境にやさしいエレベーター」、これも〈エレパック〉の優れた特長です。

Efficient, Reliable & Comfortable
Vertical Transportation Systems
All Over The World

効率がよく (Efficient)

信頼性に優れ (Reliable)

快適な移動空間の創造 (Comfortable)

エレベーターの3つのキーワードを基に
そのすべてにおいて、世界トップクラスの製品を
全世界に向けて提供します。

三菱電機株式会社

お問合せ・資料のご請求は……………三菱電機株式会社 〒100-8310 東京都千代田区丸の内2-2-3 (三菱電機ビル)

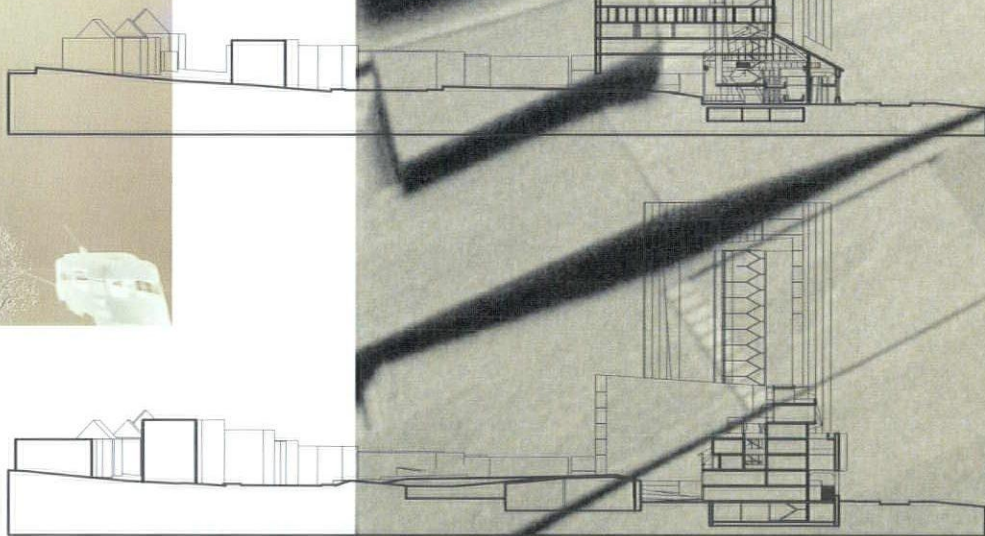
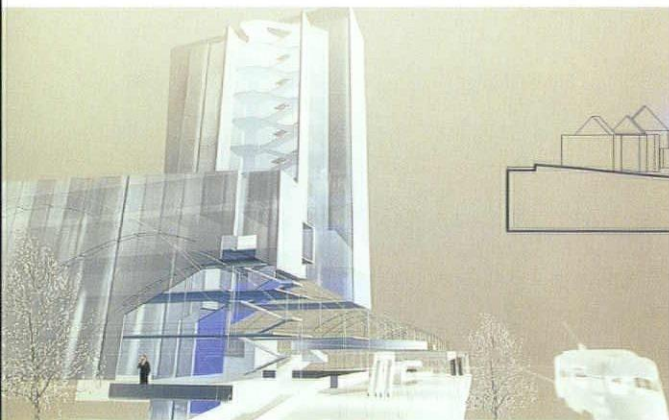
本社ビル事業部 TEL. (03) 3218-4544

ARX New York Fredric Levrat+Zolaykha Sherzad

〈CECE 工場〉 チューリッヒ・アフォルターン国際コンペ 1 等案

Zurich-Affoltern CECE

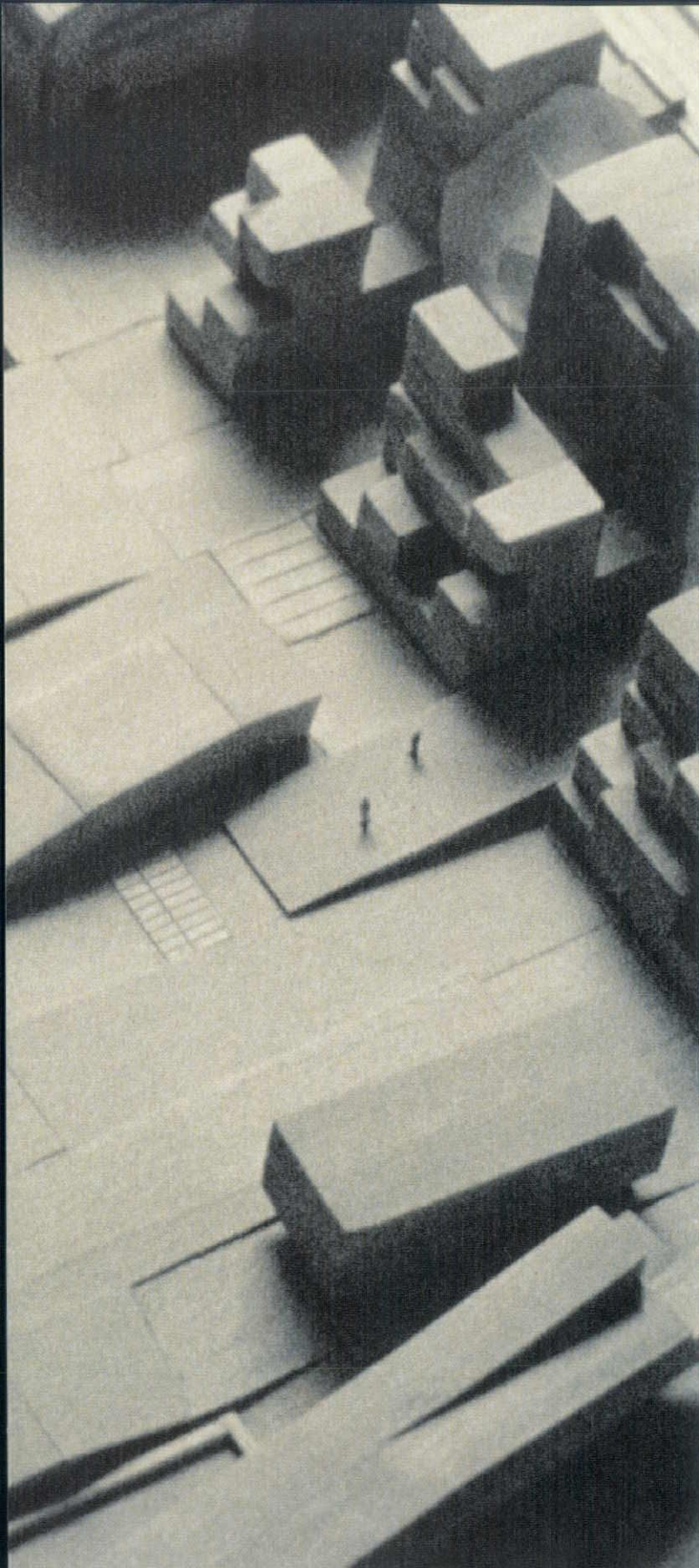
チューリッヒ_1988



設計組織「ARX New York」のフレデリック・ルヴロットとゾレイカ・シェールザッドは、チューリッヒ・アフォルターン国際コンペの1等を獲得した。現在彼らは、敷地のオーナーおよびチューリッヒ市とこの8,500万ドルの開発について交渉中である。

断続的な科学技術の発展は、我々に時空間の次元の制御の拡張を可能とさせた。“機械製の機械”は加速度とともに、空間の圧縮の術において発展を遂げさせたが、“電子パラダイム”により企てられた段階は、空間的、そして時間的な我々の環境に対する理解自体の圧縮への影響の面において、さらに強いものとなっている。我々が決定的に巻き込まれている“非・直接”のコンディションにより、我々は空間的関係の再考を余儀なくされている。

チューリッヒ・アフォルターンのサイトにおけるプロポーザルでは、プログラム自体の垂直および水平圧縮を展開させている。公から私、自然から人工、リクリエーションから仕事への空間的な連続が強調されている。プロジェクト自体はモジュール間の、あるいはモジュールのシークエンス内から派生する、変動可能な初出のリズムを統合する既存の歴史的なグラフィイトのホールにより組織されている。



Client: CECE Company
Site: Zurich-Affolten
Budget: S85 million
Date: May 1999—
Status: Competition First Prize

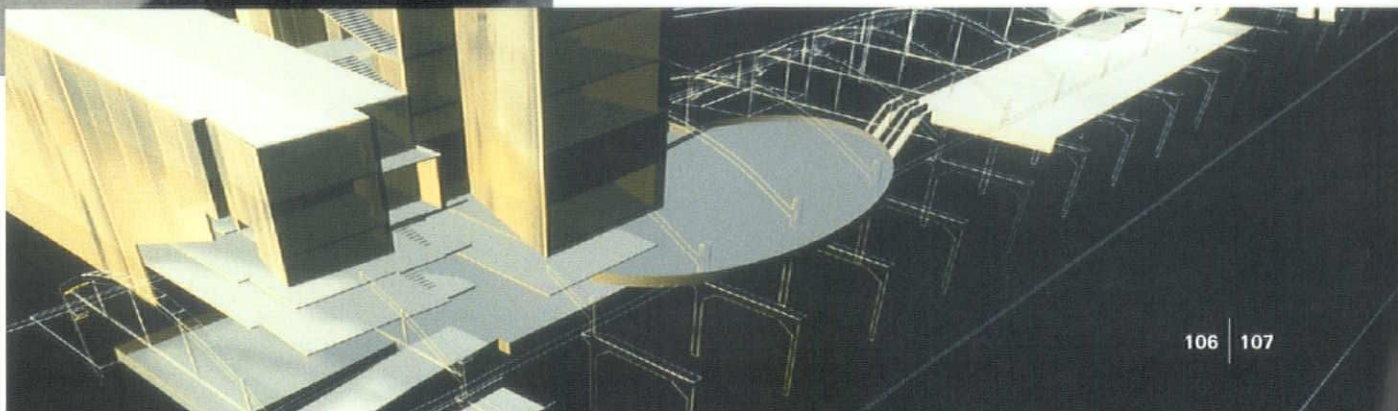
公園さえも選択と再編成とともに分離と固有化を可能とさせる、異なる生態環境を並列させた事象の連続体としてみなされている。それは建物でもランドスケープでもなく、自然と人工の間に存在する圧縮化されたハイブリッドのコンディションである。公園に付随し、3つの近接したタイポロジーが展開されている。

・ホテルと私的住居空間の中間に存在する、週3日間チューリッヒにて居住する必要性をもつ人のための小さなアパートの集合から成る Urban pied-a-terre。

・ホームオフィス軸はユニットのバリエーションの連続により組織されている。過剰な厚みを持ったバーはいくつかの中庭によって切断され、寝室とオフィス空間に採光をもたらす。

・いくつかの公共建物は自身の位置を模索すべく、狭い公園域に散在されている。児童のためのデイケアセンター、スポーツホール、プール、そしてその他のセミパブリックな機能が私的住居施設の延長として存在している。

文+デザイン：フレデリック・ルヴロット
訳：須磨一清



いま開幕、 スポーツ ニューステージ。

多目的スペースがスポーツアリーナに一変！



ロビンス・オールスターは、シカゴブルズなどのNBA公式戦やアトランタオリンピックのメイン会場など、世界中で広く使われている本格的なフローリングによるポータブル・スポーツ・フロアシステムです。

- プレーヤーへの衝撃を吸収する弾力性に加え、永年の使用にも反りや狂いを起こさない高品質設計。
- 独特のジョイント・ロッキング方式により、短時間での組立て・取外しが可能で、しかも優れた収納性。

コンベンション施設、インドアスタジアムを短時間でバスケットボールやバレーボール、バドミントンなどに最適なスポーツアリーナに変身させることができるフローリングシステムです。

ロビンス FIBA・JBA・NBA公認コート

オールスター

ポータブル スポーツフロア システム

本 社 大阪支店 名古屋支店 福岡支店 札幌支店 ヤナセ東北 ヤナセ静岡
03(3452)4311 06(6488)9801 052(241)2531 092(522)1331 011(231)2313 022(221)4171 054(261)4105

詳しい資料を差しあげます。ハガキに資料請求券を貼付のうえ、ヤナセ 商事事業部までお送りください。

good new days
人間らしい美しい未来を

ヤナセ

総輸入元 株式会社 ヤナセ
商事事業部

東京都港区芝浦一丁目6-38 〒105-0023
TEL. (03) 3452-4311

Exhibition Report

展覧会レポート

黒川紀章回顧展
共生の思想——機械の時代から生命の時代へ
会場：
埼玉県立近代美術館
会期：
2000年8月19日～9月24日
主催：
埼玉県立近代美術館
朝日新聞社
黒川紀章回顧展実行委員会
今後の巡回日程：
広島市現代美術館
2000年10月7日～12月10日
名古屋市美術館
2001年1月13日～3月18日

飯島洋一

「建てる意志」の可能性

©(株)黒川紀章建築都市設計事務所



中銀カプセルタワービル模型
(1972年、模型製作1996年)



ヴァン・ゴッホ美術館新館 (1998年)



大阪府立国際会議場 (2000年)

もう17～18年も前になるが、パリのリュクサンブール公園の近くにある「IFA」で、黒川紀章展を見たことがある。もちろん今回の回顧展のように規模の大きなものではなかったが、真っ白な空間に並んでいたそれらの模型は、明らかにモダニストのそれに見えた。禁欲性と構築性、それに記念碑性。そうした印象が、その時の記憶として私の中にいまだに残っている。

もちろん、「モダニストのそれ」という言い方はある意味で適切でないかもしれない。私が黒川展をパリで見たのは、時代が反建築を唱えたり、そこからポストモダニズムへと旋回しようとしている最中であつたし、黒川自身もモダニズムの機能主義や普遍主義を批判するところから自作の理念を構築しようとしていたからである。だが、それにもかかわらず、パリで見た彼の個展は、私には反建築というよりも、むしろモニュメントとしての建築のあり方を、明確なかたちで感じさせるものと思われたのであつた。

当時パリを席卷していたポストモダニズムも今はすでに終息した。そうした時間を経た現在になって、今回、やはりパリを起点として、ロンドン、シカゴ、ベルリン、アムステルダムを経て日本に凱旋帰国した黒川のリターン展を見た印象を一言で言えば、それはあのパリで見た個展会場で私がその時に味わった雰囲気と、不思議なくらい似ているというものであつた。

しかしこれは、何も黒川がこの18年もの間、同じような作風をただ繰り返してきたという意味では決してない。むしろ実情はその逆であらう。今回の展示には、黒川自身のステイトメントにもあるように、クロノロジカルに作品をただ並べてみせるのではなく、「メタポリズム(新陳代謝と循環)」、「シンビオシス(共生)」、「アブストラクト・シンボリズム(抽象的象徴)」、「フラクタル(フラクタル幾何学)」というように、テーマごとの展示構成になっており、それを見ただけでも彼がどのような思想的変遷を経てきたかがよくわかるからだ。

たとえば「メタポリズム」とはもっとも初期の〈農村都市計画〉(1960年)や、建築の代謝を構想した〈中銀カプセルタワービル〉(72年)を、「アブストラクト・シンボリズム」とは卵形を中心に配置した〈福井県立恐竜博物館〉(2000年)や、外国での新作〈ヴァン・ゴッホ美術館新館〉(98年)を、「フラクタル」とは〈ブキット・ウングル住宅〉(97年)、「共生」

とは今回の会場となった〈埼玉県立近代美術館〉(82年)をそれぞれ指しているのではないと思われる。

それらの模型や写真などで展示された作品群は、なるほどひとつの視点では括りきれない多様さを持っている。しかしそれをあくまでも前提としながら、なお私は、この回顧展と18年前にパリで見た個展との強い類似性を主張したいのだ。

その理由は明確である。それは黒川が、一貫して建築をモニュメントとして見続けてきたと、私が確信しているからに他ならない。

なぜそのように確信することができるのか。それには最近大阪の中之島で見た、黒川が設計の中心となった作品〈大阪府立国際会議場〉(2000年)の印象が大きい。この建築はプラザ、イベントホール、会議室などの各階が、間にきわめて厚い梁の空間を挟み込みながら積層された箱型の建物で、外観では構造の明快さをこの上ないほどに表現した作品である。しかし私が興味を持ったのは、構造の明快さだけではない。それはこの作品に、たとえば70年代に黒川が手掛けた〈福岡銀行本店〉(75年)のような、「建てる意志」とでも形容したいモニュメント性を、あらためて強く感じさせられたからである。

それを指し示すように、黒川自身もこの新作に関連して、建築は「重力に抵抗する表現」だとある場所で言っている*。私はこの発言を、彼自身が建築を、大地に対峙して屹立するモニュメントだと心情吐露したものとして受け取ったのである。

現代は「建てる意志」を表明するのに困難な時代であるとの意見もある。しかしほんとうにそうだろうか。私はその意見に対して、はっきりと異議を唱えたいが、そう断言できる根拠として、黒川紀章の存在があることは、もはや繰り返す必要はないだろう。

(いいじま・よういち／建築評論家、多摩美術大学助教授)

*黒川紀章×伊東豊雄「水/ドミノ/関係性」における黒川の発言(『新建築』2000年5月号)。

Exhibition Report

展覧会レポート

レンゾ・ピアノ展
Architectures for Life
会期：
2000年6月1日～8月20日
会場：
新ナショナルギャラリー、ベルリン
都市の建築の都市展
City of Architecture of the city
会期：
2000年6月23日～9月3日
会場：
ノイエスムゼウム、ベルリン

現在の都市改造を裏付けるふたつの展覧会 ——ベルリンの都市・建築展

レンゾ・ピアノ展／都市の建築の都市展

内山佳代子

この夏ベルリンでは、新しい建築郡が百花掬乱のにぎわいを見せる一方で、都市・建築の展覧会が目白押しだった。2000年という世紀の節目ということもあって、今年のベルリンでは夏の期間にかかわらず、大規模で大掛かりな展覧会が数々と企画されている。そういう状況の中で、建築を扱った展覧会が多くを占めるのも、ベルリンという都市と建築の関わりの深さを示しているに他ならない。

数多く行われた展覧会の中でも、その目玉となったのがレンゾ・ピアノ展とノイエスムゼウムでの展覧会だ。両者は、文化に肥えた目を持つといわれるベルリンっ子たちの高い評価を得て連日多くの来館者でにぎわい、ジャーナリストたちに大きな反響を残して幕を閉じた。

ナショナルギャラリー「レンゾ・ピアノ展」
"Architectures for Life"

レンゾ・ピアノ展の会場となった新ナショナルギャラリーは、昨年完成したポツダム広場の西側に位置する、ミース・ファン・デル・ローエの晩年の大作。展示物すべてを天井から吊るして宙に浮かせ、足元をすっきりさせて展示することでミースの建築の水平ラインがより強調されていた。ユニバーサルスペースの構想に基づいた自由で開放的なミースの空間の中に、ピアノの精緻な模型とドローイングがうまく呼応し、すっきりとした展示空間を生み出していたのが印象的だった。

展示作品では、ピアノの名を世界的に有名にした〈ボンビドーセンター〉(1976)を初めとし、同氏のワークショップ(1991)、〈関西国際空港〉(1994)、ニューカレドニアの〈ジャン＝マリー・チパウ文化センター〉(1998)、そしてベルリンの〈ポツダム広場再開発計画〉(1999)などの実施

作品の他、ローマの〈オーディトリウム〉(1994)やシドニーの高層オフィスビル(1996)、ベルリンに計画中の〈パウル・クレイ・センター〉(1999)などの構想プロジェクトに至るまで、今年63歳を迎えるピアノの建築家としての半生期を振り返っている。

約30点に及ぶピアノの作品を通して驚かされるのは、彼のもつ建築ボキャブラリーの多さだ。70年代につくられた〈ボンビドーセンター〉のあまりにも強烈なインパクトに、一般的には、ピアノはフォスターやロジャースとともにハイテク建築の御三家の一人と考えられている。しかし、決して彼の手法がひとつで留まらないということを今回の展覧会では見つけた。

さらに目を見張るのは、ひとつひとつのプロジェクトに必ず展示されている模型。デザイン検討のため、職人たちの手によって工場で製作されるという原寸大に近い木製の模型は、ひとつの芸術作品を思わせるほどの精密さだ。彼のこだわりを追求したディテールは、ハイテクというよりはむしろ、ローテクな職人技によって生み出されたものであることに気づかされる。

またピアノは、これまで美術館などの公共建築をはじめ、空港や港や駅、集合住宅、パビリオンや舞台といった様々な用途の建築を手掛けてきているが、中でも〈ジェノヴァ港再開発計画〉(1992)や〈リングット工場再開発計画〉(1995)に見られるような、既存の建築に新しい都市機能を組み込んでゆくという街づくり的な計画のうまさはずば抜けている。その集大成が、統一ドイツ後のベルリンで計画された、ポツダム広場再開発プロジェクトの〈ダイヤモンドシティ〉だといえよう。このピアノによるポツダム広場の



都市の建築の都市展、ノイエスムゼウム
SD0010



都市の建築の都市展 ミース・ファン・デル・ローエ〈ガラスの摩天楼〉案の模型

計画の是非については、コンペ当初から完成後の現在に至るまで、賛否両論があったとたたない。今回の展覧会が、その計画の行われたベルリンの地で、しかもポツダム広場を背景に望むことができる新ナショナルギャラリーで大成功をおさめたことは、ひいてはポツダム広場再開発計画の成功を多少なりとも裏付けたことになるだろう。

ノイエスムゼウム「都市の建築の都市展」

"City of Architecture of the city"

ベルリン旧市街地の博物館島と呼ばれるシュプレー川に挟まれた中ノ島には、カール・フリードリヒ・シンケルによる〈アルテスムゼウム〉(1829)をはじめとし、〈ノイエスムゼウム〉(1859)、〈ナショナルギャラリー〉(1876)、〈ボーデムゼウム〉(1904)、〈ペルガモンムゼウム〉(1930)と、新古典主義建築の流れを組んだ錚々たる博物館建築が軒を連ねている。これらの建築は旧東ベルリンに属し、傷みが著しかったため、統一以来、大規模な改修工事が現在も進行中だ。その中のひとつの〈ノイエスムゼウム〉ではこの夏、「都市の建築の都市」と題された、20世紀のベルリン建築展が催された。

〈ノイエスムゼウム〉が改修工事の真っただ中であったこともあって、館内に仮設の壁と床と階段を設けることで会場づくりが行われた。唯一、天井だけは〈ノイエスムゼウム〉に当初から残る色鮮やかな天井画が覆い、地上に広がって展示された20世紀のベルリンを見下ろした構図がおもしろい対比をつくり出していた。

展示は時代別に9つのテーマに分けられ、会場の1階部分には第二次世界大戦までの建築計画、2階部分には戦後以降のプロジェクトが配置された。9つの内容

を簡単に説明すると、最初のテーマ「近代化の改革と出発(1900~1914年)」では、工業化の発展とともにうねりを見せ始めたペーター・ペーレンスに代表される近代建築運動の作品を紹介。ふたつめの「表現主義とユートピア(1914~1923年)」と題するテーマでは、ガラスを用いて幻想的な建築を計画したブルーノ・タウト、有機的で彫塑的な形態を提案したハンス・ベルツィヒやエーリヒ・メンデルゾーンらによって描かれたカラフルなスケッチが、第一次世界大戦直後の混乱の一時に花開いたベルリンのワイマール文化をよく現していた。3つめの「ラショナルイズム——その形態とアイディア(1923~1933年)」では、ミース・ファン・デル・ローエやリュックハルト兄弟らの〈アレキサンダー広場〉のコンペ計画に見られるような、抽象主義的な建築や都市計画がインターナショナルスタイルへと融合されていく流れを見せた。4つめの「ナチズムの建築と都市計画(1933~1945年)」では、ヒトラーの元でナチズム建築を展開したアルベルト・シュペアーの計画やドローイングが展示された。

会場中央に設けられた仮設階段を上りつめたところにあるホールには、21世紀に向けての計画を含めた8m四方におよぶスケール1/500のベルリンの都市計画模型が置かれていて圧巻。新しい建築で埋め尽くされる新生ベルリンを見せているようだ。戦後以降の計画の、5つ目のテーマ「全ドイツの再出発の試み(1945~1949年)」では、戦災で都市の8割が破壊されたベルリンの復興計画を紹介、6つ目の「首都のためのアイディア——東と西(1949~1960年)」では、分断された東西ベルリンの新しい都市計画を左右の壁に比較するように展示していた。7つ目の「モダニズムが残した遺産(1960

~1972年)」では、ナチスを逃れて米国へ渡ったグロピウスやミースが、再びベルリンにもどって西側に計画したモダニズム建築の数々を展示。一方で、新しい社会理念の基に東ベルリンに次々と建てられたブレフアウの高層団地を展示し、当時頂点に達して展開されていた東西の建築バトルの様子を示した。8つ目の「都市と建築の新しい発見(1972~1989年)」では、ベルリンで行われた『IBA(国際建築展)』を紹介、最後のテーマ「大都市への道のり(1989~2000年)」では、壁崩壊以降10年にわたる数多くの建築プロジェクトが展示されていた。

これらのテーマごとに、当時を代表する建築や都市計画の写真や模型をはじめ、スケッチや図面が大小あわせて100点近く陳列された。全体的にドローイング展示が多いにも関わらず、見ごたえと迫力を十分備えていたのは、展示物のほとんどすべてがオリジナルであったからだろう。

中でも、1919年にハンス・ベルツィヒが設計したベルリン大劇場の当時の写真とスケッチの横に並べて展示されていた、同建築の解体中の写真は見る者に強い衝撃を与えた。これは、写真家の宮本隆司氏によるもので、同氏は旧東時代の1985年、ドイツ表現主義建築の幻の名作を見ようと赴いたところ、偶然解体現場に出くわし、世紀の名建築が崩されていく様子を複雑な心境で撮影したのだとあるコラムで語っていた。

展覧会全体を通して感じたのは、会場の配置の問題もあろうが、戦前までの作品の質の高い展示内容に比べて戦後以降の作品の存在感が薄かったことだ。とくに1989~2000年の最後のテーマでは、これだけ多くの新建築がこの10年の間に実際に立ち上がっているにもかかわらず、その活気が十分伝わってこなかった。というよりはむしろ、ずらりと並べられた新しい建築群が、ミースのガラスの摩天楼の構想模型やベルツィヒの解体されたベルリン大劇場のドローイングを前にして、それらと同じく虚像であるかのようになさ感じられた。

しかしひるがえってみれば、それはこの20世紀においてつねに永続性をもち得なかったベルリンという都市を物語っていると考えられないか。「都市の建築の都市」という展覧会のタイトルは、ベルリンと建築との関係をうまく言い現している。(うちやま・かよこ/建築家、在ベルリン)



レンゾ・ピアノ展、新ナショナルギャラリー

P110-111 写真: ©Peter Ruge

Book Review

書評

評者 五十嵐太郎

くまさんの非闘争宣言

この夏、ボディビルディングの世界選手権をめざす、過酷なダイエットが原因になった、ある男の死が報じられた。彼は理想の身体を構築するために、トレーニングと減量による二重のディシプリンを自己に課していた。しかし、鑑賞されるオブジェクトとしての健康美にあふれた筋肉隆々の身体は、極限において主体すらも破壊してしまう。このエピソードは、何かしら建築の危機を想起させないだろうか。

近代の建築家は闘う。例えば、映画「摩天楼」(1949年)の天才建築家のように。彼は、オレは大衆に迎合する装飾的なデザインはやらない、施主のための建築ではない、建築の施主が要るだけなんだと豪語する。さらに勝手な設計変更に怒り、現場を爆破し、裁判では、人間には真理を発見する先駆者と追従者の二種類がいて、自分は前者なのだと言説した。主人公はモダニズムの信念を貫き、ついには批評家の女性を征服してしまう。

ところが、これまで戦いのメタファーが好まれたのに対し、「負けるが勝ち」と宣言したのは隈研吾である(『新建築』2000年8月号)。1990年代の若手建築家にも、同じような構えが認められるだろう。例えば、ボクサーだった安藤忠雄が都市と戦う閉じた住居をつくったのに対し、アトリエワンはノーガード戦法のように住居を都市に開く。では、いかに戦闘的ではない建築をつくるのか? そのための理論的マニフェストが本書である。

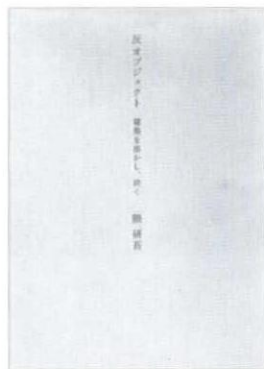
過激な建築的コラージュを実践した〈M2〉以降、とても同じ建築家とは思えないほど作風を変貌させ、一部の反感も買ったようだが、隈は必ずしも迷走したわけではない。90年代のさまざまな活動を一言で説明するキーワードが、本書の題名でもある「反オブジェクト」だ。冒頭の文章「自己中心的で威圧的な建築を批判したかった」が、その主張を明快に要約する。オブジェクトとは、周囲の環境から孤立した建築であり、モダニズムもポストモダンも逃れることができなかったという。隈の『新・建築入門』(ちくま新書、1994年)の最後に描かれた建築の起源は、「一本の柱が太古の原野に立てられ」というイメージだったが、おそらくオブジェクト化はこのときに始まっていた。今回も、建築と哲学をパラフレーズさせているが、西洋建築史をトレースするのではなく、B.タウトの〈日向邸〉を除き、自作のコンセプトとともに設計手法が具体的に語られる。

本書は全8章から構成される。各章のタイトルから、反オブジェクトの方法論を示す単語を抽出してみよう。「接続」、「流出」、「消去」、「線」、「極少」、「転倒」、「電子」、「粒子」である。そして各章では、形態の拒否による意識と物質の接続、主体と世界の亀裂を流出によって埋めること、建築の台座をなくし消去すること、物質批判のための極少化、経路という線にほどき塊をなくすこと、特権性を剥奪しながら関係性を反転させること、電子化により視覚への依存から脱却すること、形態を解体する粒子化などの議論を展開している。哲学の類推がやや強引すぎる部分もないわけではないが、設計の方法論を言語化する姿勢は最大限に評価されるべきだ。これに賛同するにしろ、反論するにしろ、重要な手がかりとなるからである。弱い建築を志向することと、議論を構築することは、決して矛盾するものではない。

ほかに興味深かった点をいくつか挙げよう。第一に、能舞台や桂離宮など、日本の伝統的建築への参照が多いことだ。したがって、『新・建築入門』の日本編としても読める。ただ、西洋=オブジェクト/日本=反オブジェクトという単純な図式に陥る可能性はなくはない。第二に、メディア論的な視点である。反オブジェクトの建築自体がメディア的な存在なのだが、写真や透視図法がオブジェクト建築を求めるのに対し、20世紀は動画的建築の時代であるという指摘が面白い。とすれば、『SD』1997年11月号の隈研吾特集が、画期的なCD-ROM付きだったのも、うなずけよう。第三に、時間の問題が導入されていることだ。かつてS.ギーディオンが唱えたのとは、違う次元で考察されている。それはとても音楽的な建築になるのかもしれない。最後に、最も魅力的だったのは、各作品に水が頻出することだ。おそらくアモルフな水は、反オブジェクトの重要なモデルになるだろう。

水のような建築。リテラルには不可能だが、美しいイメージである。もし、こうした身体があるとしたら、「ターミネーター2」や「寄生獣」に出てくる、変形可能な流動体的ではないだろうか。

(いがらし・たろう/建築史、東京理科大学・明治学院大学・早稲田大学専門学校非常勤講師)



「反オブジェクト——建築を溶かし、砕く」
隈 研吾=著
B6判 272頁
筑摩書房 2200円

Books

新刊紹介

村野藤吾のデザイン・エッセンス

第3巻『外の装い——素材とファサード』

第4巻『内の装い——素材とインテリア』

和風建築社=編

B5判 各144頁

建築資料研究社 各2800円

多彩な建築美を魅せつづけた近現代建築の巨匠・村野藤吾(1891~1984)。その精妙なディテールに焦点をあてたシリーズの第3巻と第4巻。既刊に第1巻『伝統の昇華——本歌取りの手法』と第2巻『動線の美学——階段・手摺・通路』があり、11月には第5巻『装飾の細部——ホテル・豪華客船』と第6巻『自然との交歓——建築と庭』が刊行されてシリーズが完結する予定。

各巻とも写真解説をメインに、村野のスケッチや言説が配され、巻頭には村野研究の第一人者である長谷川堯の解説論文、巻末では村野が父の周辺人物の諸相を語る。

ファサード編の第3巻は、タイル、ガラスブロック、石、コンクリート、吹付、金属、縦板張、造形といった素材ごとに、インテリア編の第4巻は、宗教施設、劇場・議場、公共施設、美術館、商業施設、住宅といったビルディングタイプで分類され、設計資料に適した構成となっている。

モダニズムの形成と同時代に生きながらも、「大勢」とはつねに一線を画し、独自の道を切り拓いていった村野藤吾。その建築の生成過程には、法則性や方法論、つまりモダニズム的な教理教条を見出すのは非常に困難である。追隨者を許さない孤高の存在たる所以ともいえよう。しかし、村野の感性をかたちに落とし込んでいる要因こそがディテールの集積ではないか、と改めて思わせるシリーズ書である。

そして村野を追隨する道のりの可能性があるとすれば、こうしたディテールの一つひとつを踏みしめてみることもなのかもしれない。施主に愛されつづけ、美しく歳を重ねる村野建築の「装い」は、十分に迫る価値のある里程標なのだ。

CG全盛の時代においても受け継ぐべき「建築家」の姿勢。感性のディテールを集成したこのシリーズから得られる示唆は少なくないだろう。



『岸 和郎 プロジェクティッド・リアリティーズ』

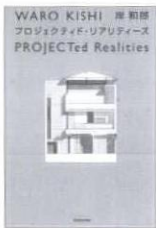
ギャラリー・間=企画・編集

岸 和郎=著

A5判 232頁

TOTO出版 1905円

著者の20年の軌跡を、模型写真、CGなど多彩な図版で解説し、「計画案」と「実作」の距離から今後の建築を展望する。ケン・タダシ・オオシマとの対談、P.アリソンの論文も収録。英文併記。



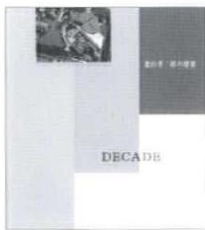
『DECADE 北山孝二郎』

北山孝二郎=著

A4変型 144頁

六耀社 3500円

P.アイゼンマンとの共作でも知られる著者が、「色彩と素材」をテーマに自作を解説し、建築観を語りながら90年代をレビューする。住宅、オフィス、商業施設から地域開発まで、幅広い設計活動を貫く独自の視線を浮かび上がらせた。



『英国ロマネスク建築巡礼』

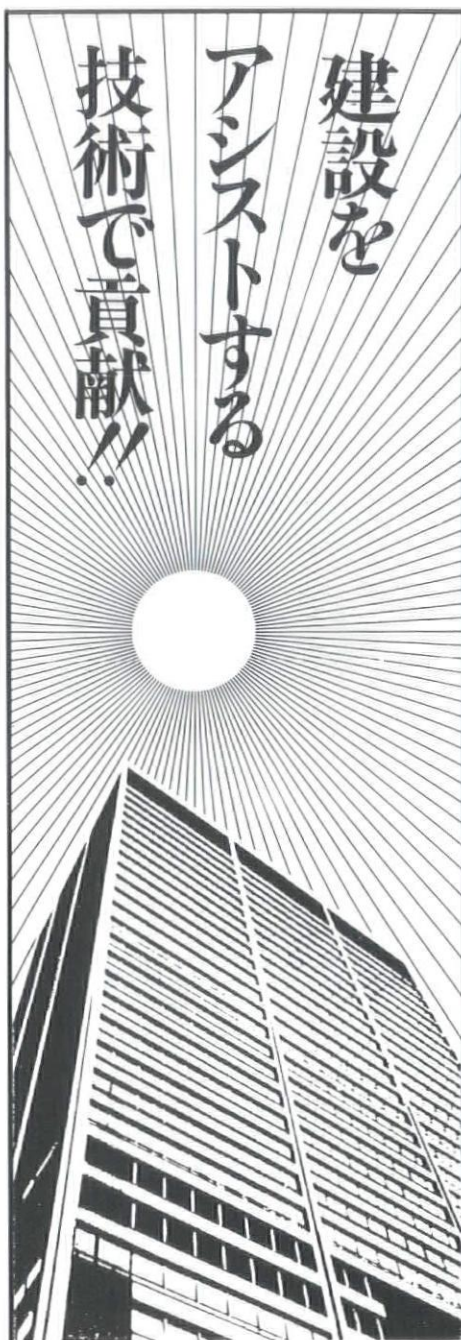
岩部定男=編

岩部 匠=写真

B6判 256頁

形文社 4000円

ロマネスク北限の地にその原点を求めて巡礼路を辿る2,700kmの写真紀行。収録された41の教会建築には、日本ではじめて紹介されるものも数多い。問い合わせ/ tel: 042-531-6813 / 上記発行社



- 一般電気設備工事=設計施工
- 防爆電気設備工事=設計施工
- 計 装 工 事=設計施工
- 電気加熱保温工事=設計施工
- 静電気接地用リール=販売

ASTEC
SHOWA ASTEC

昭和アステック株式会社

(旧社名 昭和電機工業株式会社)

取締役社長 浦 道 雄

- 本社/東京都港区東新橋2丁目7番3号
電話03(3437)3851(代表) 〒105-0021
- 支 社=関東・中部・関西・中国
- 営業所=新潟・鹿島・千葉・四日市・堺
倉敷・岩国・徳山・坂出・松山
新居浜・大分・福岡
- 駐在事務所=ジャカルタ・テヘラン・タイ
シンガポール・マレーシア

木造モダンイズム展 A.レーモンドと松村正恒の マテリアル・デザイン

期間：10月11日(水)～10月23日(月)
時間：11：00～19：00 土、日、祝日
会場：建築家倶楽部
東京都中央区銀座8-3-4 DKビル3階
入場料：500円
関連講演会
木造モダンイズムの諸相——現代日本のオリジン
1930s-1950s
講師：大川三雄、矢代真己、田所辰之助、濱野良実
日時：10月20日(金) 18：30～21：00
会場：建築家倶楽部
会費：一般2,000円、学生1,000円
問い合わせ：建築家倶楽部(担当：藤岡)
Tel: 03-3289-1888 Fax: 03-3289-1897

その日に——5年後、77年後 震災・記憶・芸術展

阪神淡路大震災から5年、関東大震災から77年。
震災はますます切実な問題になっている。「芸術
と社会」を一貫したテーマに据える岡本太郎美術館
の出発点となる展覧会。
出品作家：坂茂(建築家)、石内都(写真家)、北
山善夫(画家・彫刻家)、多和圭三(彫刻家)、藤
本由紀夫(サウンドアーティスト)
会期：9月1日(金)～10月15日(日)
時間：9：30～17：00
月曜日、祝日の翌日は休館
会場：川崎市岡本太郎美術館
神奈川県川崎市多摩区榎形7-1-5
入場料：一般700円、小・中・高・大学生300円
(団体割引有り)
問い合わせ：川崎市岡本太郎美術館
Tel: 044-900-9898 Fax: 044-900-9966

TAMA VIVANT 2000展 TOYOTA COMMUNITY ART vol.14

会期：10月18日(水)～10月29日(日)
時間：9：30～20：00 会期中無休
会場：トヨタ西東京カローラ
桜ヶ丘営業所 グランプラス
東京都多摩市関戸4-8-3 Tel: 0423-75-5111
入場料：無料
これに先立ち、9月29日(金)～10月13日(金)、
多摩美術大学八王子校舎でも展覧会を開催。
問い合わせ：多摩美術大学美術学部芸術学科内
TAMA VIVANT 企画室
Tel: 0426-79-5627 Fax: 0426-79-5649

ANY シンポジウム in Tokyo 建築と哲学の未来

1991年から毎年1回、世界中の都市で開催して
きた、建築と哲学をめぐる討議〈ANY〉コンフ
ェレンスが、この6月(ニューヨーク)を最後に
終了した。この横断的かつ国際的なプロジェクト
はそのヴィジョンを次なる世紀へと橋渡しするこ
とになるが、その締めくくりとして、東京でシン
ポジウムを開催することになった。
日時：10月19日(木) 18：00～21：00
会場：新宿紀伊国屋ホール
コーディネータ：磯崎新、浅田彰
パネリスト(予定)：石山修武、妹島和世、
柄谷行人、他。
入場料：1,500円(チケットぴあ、紀伊国屋ホー
ルにて販売)
定員：418名
問い合わせ：NTT出版
東京都目黒区下目黒1-8-1 アルコタワー11階
Tel: 03-5434-1001

建築家の手による建築教育 JIA大学 建築家空間講義8 受講者募集

開講期間：10月13日～2001年2月9日の毎週金
曜日(11/3、12/29、1/5は休講)
時間：19：00～21：30
場所：JIA館3階セミナールーム
東京都渋谷区神宮前2-3-18
受講料：15回一括＝11,000円、
各回参加＝1,500円/1回
対象：建築学科の大学院生、20代の建築家
募集人数：120名(15回一括申込者優先)
講師とテーマ：10/13(坂本一成：私の建築構成
論)、10/20(藤本隆男：建築の居場所を探る)、
10/27(木下庸子：「非核家族」の住まいを考え
る)、11/10(宮城俊作：風景の視座)、11/17
(藤江和子：空間・家具・人)、11/24(坂本 昭：
光と空間)、12/1(阿部 勤：「私の家」から)、
12/8(竹原義二：職人の技/建築の力)、12/15
(高橋 真：建築の代用品)、12/22(有馬裕之：
PRIVATE SPACE)、1/12(内田祥士：未定)、
1/19(マニユエル・タルディッツ：建築VSリア
リティ?)、2/2(渡部和生：ワークショップと光
の空間)、2/9(梅沢良三：鉄と建築)
申し込み・問い合わせ：
日本建築家協会 JIA大学建築家空間講義係
東京都渋谷区神宮前2-3-18 JIA館4階
Tel: 03-3408-7125 Fax: 03-3408-7129

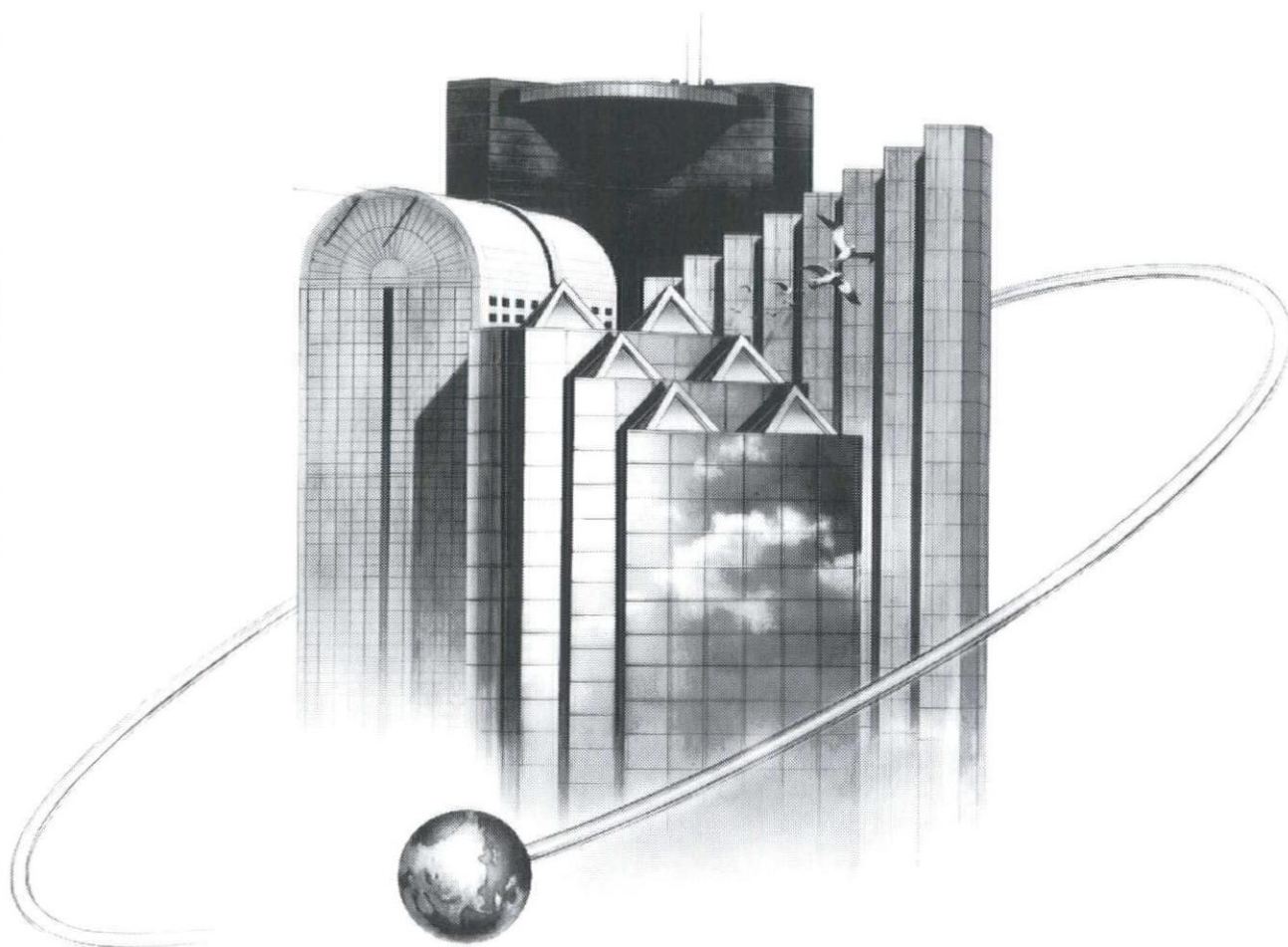
佐世保港ポートルネッサンス21計画 近海航路旅客ターミナル公開設計競技 提案募集

港を中心に発展してきた佐世保市。その中心に位
置する駅周辺地区では、「佐世保駅周辺再開発事
業」として、交通の結節点機能・にぎわいの交流
機能の充実をはかり、海・陸一体となった、うる
おいと活力のある拠点地区の形成を進めている。
本コンペは、その一環として予定している近海航
路旅客ターミナルの建設実施のための施設提案の
公開設計競技である。
応募資格：応募者(代表者)は一級建築士の資格
を有し、実施設計及び監理に際し、即座に対応で
きる体制が整っていること。また、応募者とその
他の専門家との共同設計は可能。
応募手続：10月3日(火)～10月31日(火)まで
に応募要項申込みと応募登録をすること。直接来
庁、または郵便、Fax、Eメールでの受付も可。
応募締切：1月22日(月)～1月25日(木)
事前に質疑受付、主旨説明会が行われる。
提出内容：作品(図面)はA1サイズ横使いで2
枚以内にまとめ、提出すること。審査員：池原義
郎(委員長)、三井所清典、吉田信夫、木原弘治、
西脇敏夫
賞：賞金総額450万円。最優秀賞1名 200万円、
優秀賞・佳作数名 250万円の中から適宜。最優
秀設計者には、実施設計及び工事監理を委託。
なお、提出内容、競技日程、審査方法等の詳細は
下記まで。
問い合わせ：佐世保市役所港湾部計画課(担当：
杉本、岳本) 佐世保市万津町3-5
Tel: 0956-25-9353 Fax: 0956-22-6149

住まいのインテリアコーディネーション コンテスト2001 作品募集

テーマ：生活がいそいそ動くインテリア
応募内容：1.プレゼンテーション部門(対象：イ
ンテリアコーディネートの実務に関わる個人及び
企業) 2.プランニング部門(対象：一般部門、
学生部門の2部門)
応募方法：各部門の提出要項に従って、B2サイ
ズのボード等で制作し、送付のこと。
応募締切：11月30日(木) 必着
審査員：松本哲夫、内田繁、清水忠男、他。
なお、応募内容、賞、審査内容等の詳細につい
ては下記まで。
提出・問い合わせ：社団法人インテリア産業協会
コンテスト係
東京都新宿区新宿3-13-5 クリハシビル8階
Tel: 03-5379-8600 Fax: 03-5379-8605

快適創造



人と自然と機能が調和した理想の快適環境を。

人と自然、そして機能が調和した新しい快適環境を創造する。

それが三機工業のめざす総合エンジニアリングです。

都市、コミュニティ、産業施設…人を取りまくさまざまな環境について考え、

その理想を追いつづけている三機工業は、

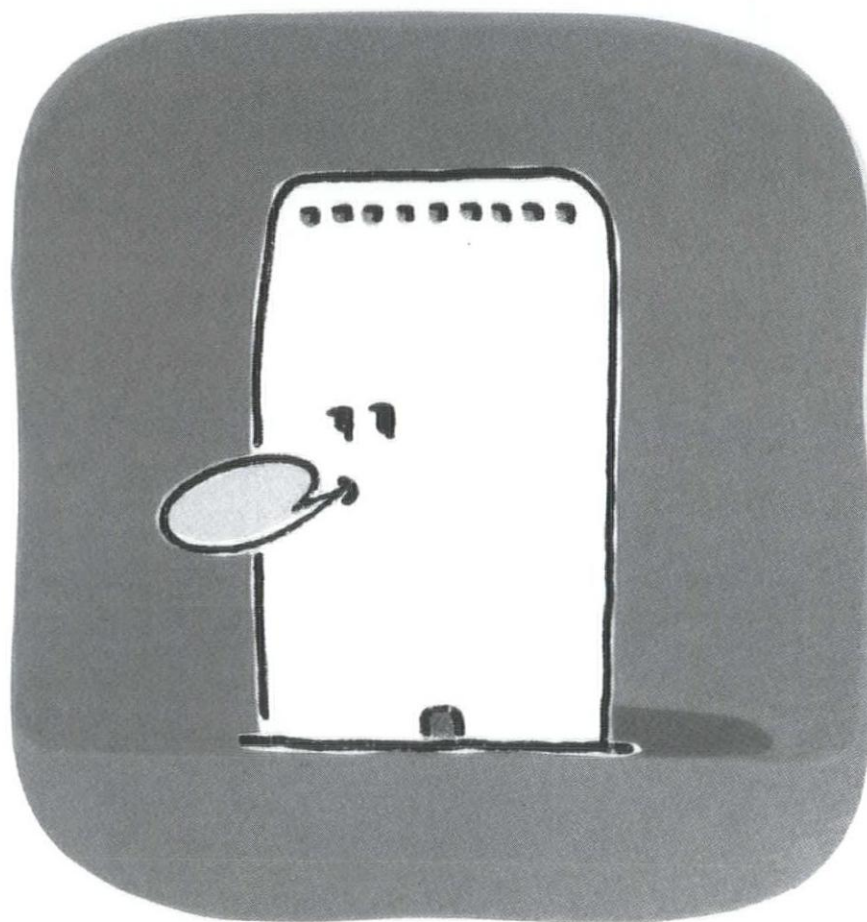
いま、地球環境という視点にたって、すばらしい未来にむけての新しい環境のかたちを提案しています。



三機工業株式会社

〒100-8484 東京都千代田区有楽町1-4-1 TEL.03(3502)6111

人間すう、はく。ビルすう、はく。



私たちの呼吸は

自然の呼吸に

支えられています。

私たち人間が意識しないで呼吸しているように、人をとりまく環境も、知らないうちに呼吸しています。海も陸地も、動物も植物も。この地球全体が、ひとつの完成された空調システムとなり酸素をつくり、酸素を消費しています。

東熱のめざすひとつの頂点が、この自然の摂理を解明し、システム化することです。温度、湿度のコントロールによる環境を超えて、フィジカルな面から、メンタルな面の可能性のヒントが自然の中に隠されています。

ビルも呼吸しています。中にいる私たちのために。さまざまな分野のさまざまな建物が呼吸しています。だから東熱はいつも考えています。次に求められる環境とは何だろう。より私たちに優しく、より私たちに身近な環境の実現のために。山の朝のさわやかな空気や、冬の夜の透明な空気を東熱は忘れません。

宇宙センサーからスポーツドームまで、東熱のマインドはあなたのまわりに息づいています。

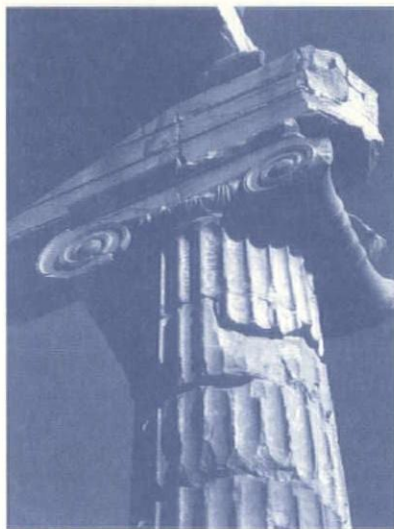
時代、呼吸、マインド
東洋熱工業

〒104-8324 東京都中央区京橋2-5-12 Tel.03(3562)1351(大代表)

今月の新刊

〔磯崎新の本〕

1960年代以降、磯崎新は日本のリーディング・アーキテクトとして、世界のISOZAKIとして走り続けた。
建築界ほか、各ジャンルの人々に影響を与えた主要論文を収録した
上製箱入りの著作選集です。



人体の影 アントロポモルフィズム

磯崎新 著

A5判 上製箱入・320頁 本体3,600円(予価)

磯崎新の建築論の集大成

古今東西の建築群のなかから厳選した6つの建築を論ずることをとおして、
『建築』の本質を解明しようとする磯崎新の建築論の集大成。
単なる作品解説でも通史でもない、リーディング・アーキテクトによる本格建築論。

主要目次

はじめに〔人体の影〕／第1章:私にとってのアクロポリス(アクロポリス)
第2章:両性具有の夢(ヴィツラ・アドリアーナ)／第3章:数と人体(サン・ロレンツォ聖堂)
第4章:崩壊のフーガ(パラディオ・デル・テ)／第5章:中心の構図(ショーの製塩工場)
第6章:建築と逸脱(サー・ジョン・ソーン美術館)

●好評既刊



見立ての手法

日本の空間の読解

A5・338頁 本体3,400円+税

めざましい設計活動を展開する国際的建築家・磯崎新の最新建築論集。日本人建築家の作家論、あるいは都市論・庭園論をとおして、日本の空間または日本文化を論じる。



イメージゲーム

異文化との遭遇

A5・306頁 本体3,400円+税

今この世界が、イメージだけが浮遊する場となり、私たちのすべてのデザイン行為が、イメージをもてあそぶゲームの様相を呈しているというポストモダンへの眼差。



始源のもどき

ジャパネスキゼーション

A5・320頁 本体3,800円+税

伊勢の式年遷宮に秘められた謎を解き明かすイセ論をはじめ、日本の建築文化の近代化の過程にくりかえし現われる和様化を論じる、グローバルな日本文化論。



造物主議論

デミウルゴモルフィズム

A5・336頁 本体3,800円+税

「建築」とは何か? という根源的な問いを自ずから投げかけ、ディマイオスからニーチェにいたるさまざまなテーマで織りなす「建築論」の一大ページェント。



空間へ

根源へと遡行する思考

A5・522頁 本体4,600円+税

磯崎新の建築家としての出発点を決定づけた「プロセスプランニング論」また思想的自伝「見えない都市」など、1960-70年代の空間論・都市論32編を収録する処女論集。



建築の解体

一九六八年の建築情況

A5・450頁 本体4,200円+税

1968年の時点で後のポストモダンの到来を予告した衝撃の書。ホライン、アーキグラム、ムーア、プライス、アレグザンダー、ヴェンチュリ、スーバスタジオを論じる。



手法が

カウンター・アーキテクチャ

A5・336頁 本体3,800円+税

建築家・磯崎新の「近代建築との絶縁宣言」としてさまざまな手法の駆使によるメディアの生成を論じた「手法論」のほか、「反建築ノート」等1970年代の軌跡の集大成。

好評既刊書

最近刊行した建築図書と、それに関連した書籍を紹介しております。

最近の新刊すべてをご覧になりたい方は、隔月で奇数月発行の「新刊案内」をご請求ください。

当社のホームページ上でも新刊書を紹介しておりますのでご覧ください。



ジェームズ・スターリング

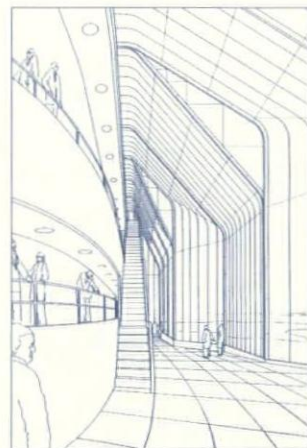
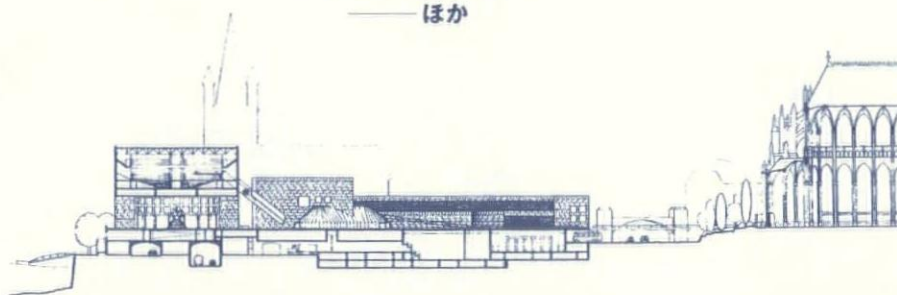
ブリティッシュ・モダンを駆け抜けた建築家

ジェームズ・スターリング 著 小川守之 訳
四六判・272頁 本体2,800円+税

1960年代半ばレスターとケンブリッジ大学の建築デザインを引っさげ
颯爽とデビューしたスターリングは、その作風に変貌をとげながら活躍し、
もっとも英国的でかつモダニスティックな建築家と称された、その全軌跡。

●主要目次

ジェームズ・スターリングの文章について (ロバート・マクスウェル)
ヴィラ・ガルシェからジャウール邸へ
ロンシャン
地域主義と近代建築
ファンクショナル・トラディションと表現
アンチストラクチャー
表現の方法と材料
——ほか



ジェームズ・スターリング James Stirling

1923年に生まれ、1950年リヴァプール大学を卒業。20世紀後半の英国に現れた最も興味深い人物のひとりである。スターリングの建築家としての活動期間は1950年から、逝去した1992年までである。その作品は常に社会的な意味、具体的なコンテキストに意を注ぎ、ドグマに捕われぬ、絶え間ない探求の賜物である。その過程で近代建築の定義は常に更新された。1955年ジェームズ・ガウワンと一緒に事務所を開き、ハムコムのフラットを設計し、「ブルータリズム」という概念に新しい意味を付け加えた。またレスター大学工学部では、「近代建築」に対する、英国におけるひとつの解釈を提出した。ガウワンと離れたのち、1964年から1970年にかけてスターリングはケンブリッジ大学歴史学部、オックスフォード大学フローリー・ビルディング、セント・アンドリュース大学学生

寮、ハイズルミアのオリヴェッティ・トレーニング・センターと、たて続けに傑作をものした。1971年以降、不慮の死に至るまではマイケル・ウルフとパートナーシップを組んだ(スターリングの死後、事務所はウルフが引き継いでいる)。デュッセルドルフ、ケルン、そしてシュトゥットガルト(ノイエ・シュターツガレリーと呼ばれる)と続いたドイツの3つの美術館計画は、ポストモダン建築の先駆けと称されたが、スターリング自身としてはあくまでもファンクショナル発想の産物で、決してポストモダンに留まるものではない、という見解であった。1978年にはアルヴァ・アアルト賞、1980年ロイヤル・ゴールド・メダル、そして1981年にはプリッカー賞を受賞して国際的な建築家としての地位を確固たるものとしたが、1992年に惜しまれながら建築家としての生涯を閉じた。

好評既刊書

建築図書の既刊書を中心に、話題の本を紹介しております。

既刊書すべてを収録した年度版の図書目録も用意しておりますので、ご請求ください。

当社のホームページ上でも既刊書を紹介しておりますのでご覧ください。



建物情報管理と ファシリティマネジメント EXCELで長期修繕計画と ライフサイクルコストを考える

柳瀬正敏 著 A5判・96頁 本体2,200円

長期修繕計画にとって建物カルテの作成には建物情報の記録・蓄積が肝要。EXCELで誰にでもできる簡便なデータ入力および計算結果事例を解説。



Space Structure 木村俊彦の設計理念

渡辺邦夫 監修 佐々木睦朗、金箱温春 他著
A5判・244頁 本体3,800円

前川国男、丹下健三など20世紀の著名建築家と共に歩んできた天才的構造デザイナー木村俊彦の仕事構造デザイン、素材、解析技術、工法などの側面から紹介。戦後の日本の建築の歩みを検証する。



西村幸夫 都市論ノート まちづくり・景観・都市デザイン

西村幸夫 著
A5判・208頁 本体2,900円+税

かつての「まちづくり」に活かされた工夫は、歴史的景観、自然環境、小都市の町並みに学ぶ点が多い。都心の景観保全、これからの都市風景、アジア都市等、自己ノートとして啓蒙する斬新な「都市論」書。



新しい高齢者住宅と環境 スウェーデンの歴史と事例に学ぶ

ヤン・ポールソン 著 今井一夫 監訳 石黒暢 訳
A5判・152頁 本体3,100円+税

21世紀の高齢社会で求められるのは、従来の老人ホームのような「施設型」ではなく、それまで住んでいた「まち」で、「すまい」により近い居住環境を実現することだ。先進国スウェーデンに学ぶ。



次世代ビルの条件

ロングライフ/フレキシビリティ&キャッシュフロー
オフィスビル総合研究所 ベースビル研究会 編著
四六判・288頁 本体2,500円+税

21世紀のオフィス建築は、社会資産として長持ちすること、フレキシブルで居住性に優れていること、地震に強く、省エネなど環境への配慮など、様々な視点が求められる。次世代ビルについて50の提案。



源氏物語空間読解

安原盛彦 著
四六判・232頁 本体2,500円+税

源氏物語に描かれる空間構成では、貴族社会の生活、生活方法の支え、意識感覚など複雑な心理描写がドラマチックに展開する。寝殿造を背景に、平安時代の建築様式および空間描写の情景を、新物語的な仮想現実で読解。文学を超えて建築空間を再現し再認識する。



巨匠 エットレ・ソットサス

ミルコ・カルポーニ 編 横山正 訳
B5変型判・280頁 本体3,200円+税

オリベッティのタイプライターのデザインで一躍有名を馳せたイタリアン・デザインの巨匠ソットサスの全貌をフルカラーで紹介。その活躍の場を都市計画、建築デザインにまで広げている。



建築プロデューサー

浜野安宏 著
四六判・240頁 本体2,000円+税

建築プロデュースという未踏の領域を切り開き、精力的に実践にこそむきこと四半世紀。その豊富な経験をもとに、建築プロデューサーが心得るべきこと、建築家に求められるものを熱情をもって書き下ろした書。



近代日本の郊外住宅地

片木篤、藤谷陽悦、角野幸博 共編
A5判・608頁 本体8,400円+税

明治以降、近代化に伴って日本各地に造られた様々な郊外住宅地30事例を紹介。住宅地の様々なタイプの代表例が、600点に及ぶ写真、図面と共に紹介される。日本各地に造られた郊外住宅地研究の集大成。



高齢化・介護福祉のための ヘルスケア施設づくりの実例

野口哲英、中田利夫 著
A5判・208頁 本体4,200円+税

高齢化社会の到来を迎え、医療は予防治療からケア回復へと転換。介護法施行により、今後の施設づくりに不可欠な医療特性の模索、地域に密着した併設機能のあり方を、事業収支、補助金、計画設計例で解説。

ル・コルビュジエ

ル・コルビュジエに関する既刊書とル・コルビュジエ自身の著作を紹介しております。
既刊書すべてを収録した年度版の図書目録も用意しておりますので、ご請求ください。
当社のホームページ上でも既刊書を紹介しておりますのでご覧ください。



[ル・コルビュジエを知る本]

ル・コルビュジエの
ペサック集合住宅

P・ブードン 著 山口知之、杉本安弘 共訳
A5判・228頁 本体2,800円+税

コルビュジエの主要な実施作であるこの集合住宅は、建設以来40年の間に住民たちによって夥しい改作がなされた。建築家である著者は、これらの変更が「住む」ことに対して与える意味を明らかにしようと試みる。



ル・コルビュジエと日本

高階秀爾、鈴木博之、三宅理一、太田泰人 編
A5判・256頁 本体2,800円+税

本書は戦前から戦後にかけて日本の近代、現代の建築に大きな影響を与えたル・コルビュジエと日本の関係を様々な角度から述べたもの。20世紀の建築史に新たな視点を与えるものとなる。

ル・コルビュジエ
理念と形態

W.J.R.カーティス 著 中村研一 訳
B5判・330頁 本体8,200円+税

20世紀最大の建築家ル・コルビュジエの生涯を包括的にとらえた研究成果の集大成。彼の創作活動を歴史を変えた特異点として無条件に顕揚するのではなく、歴史の持つ大きな流れの中に位置づける。図版多数。

《SD選書144》
ル・コルビュジエ

C.ジェンクス 著 佐々木宏 訳
四六判・244頁 本体1,800円+税

現代建築の最大の巨匠ル・コルビュジエのジャンヌレ時代から死に至る1965年までの全生涯を詳述し、その著作、建築、絵画作品を通して彼の思想や人物像を探る。コルビュジエ理解のための手引書である。

ル・コルビュジエの建築
その形態分析

ジェフリー・ペイカー 著 中田節子 訳
B判・300頁 本体6,500円+税

ル・コルビュジエの初期から晩年に至るまでの主だった作品を取り上げ、魅力的で詳細なイラストレーションにより洞察力に富んだ形態分析を展開している。見て読んで楽しい書の待望の日本語訳刊行!

[SD選書版 コルビュジエ著作集]

《SD選書15》 **ユルバニスム**
ル・コルビュジエ 著 樋口清 訳 本体1,800円+税

《SD選書21》 **建築をめざして**
ル・コルビュジエ 著 吉阪隆正 訳 本体1,800円+税

《SD選書33》 **輝く都市**
ル・コルビュジエ 著 坂倉準三 訳 本体1,800円+税

《SD選書111》 **モデローール I**
ル・コルビュジエ 著 吉阪隆正 訳 本体1,800円+税

《SD選書112》 **モデローール II**
ル・コルビュジエ 著 吉阪隆正 訳 本体1,800円+税

《SD選書120》 **人間の家**
ル・コルビュジエ 他共著 西沢信弥 訳 本体1,800円+税

《SD選書138》 **三つの人間機構**
ル・コルビュジエ 著 山口知之 訳 本体980円+税

《SD選書142》 **四つの交通路**
ル・コルビュジエ 著 井田安弘 訳 本体980円+税

《SD選書148》 **東方への旅**
ル・コルビュジエ 著 石井勉 他訳 本体980円+税

《SD選書154》 **住宅と宮殿**
ル・コルビュジエ 著 井田安弘 訳 本体1,200円+税

《SD選書157》 **エスプリ・ヌーヴォー [近代建築名鑑]**
ル・コルビュジエ 著 山口知之 訳 本体1,200円+税

《SD選書185》 **プレジジョン (上) 新世界を拓く建築と都市計画**
ル・コルビュジエ 著 井田安弘 他訳 本体1,500円+税

《SD選書186》 **プレジジョン (下) 新世界を拓く建築と都市計画**
ル・コルビュジエ 著 井田安弘 他訳 本体1,500円+税



建築ガイドブック

鹿島の建築ガイドブックは持ち歩きに便利な四六判サイズで
近代建築から最新の現代建築まで、代表的建築物を各コース別に紹介します。



東京現代建築ガイドII 2000's

松葉一清 著
四六判・256頁 本体2,800円+税

90年代に首都圏に建てられた名建築204選

11の特色のある地域別にコースを作成。
首都圏の様々な地域とそこに分布する建物を見ることにより
東京の90年代を様々な旅することができる。
最新の現代建築に興味を持つ読者に必携の建築ガイド。

【主要目次】 A地区—新宿、B地区—渋谷周辺、青山、恵比寿、C地区—皇居周辺、D地区—臨海副都心、E地区—品川、太田、目黒、
F地区—隅田川沿岸、G地区—豊島、足立、板橋、H地区—杉並、世田谷、I地区—多摩、西郊、J地区—横浜、K地区—幕張、
建築家索引、建物索引

●関連図書



東京現代建築ガイド

松葉一清 著
四六・250頁 本体2,800円+税

東京を中心とした首都圏に1980年代以降建てられた現代建築の中から200点を選んで紹介する。地域別に分けられた13のコースの冒頭にはガイドマップがついており、戦後の名建築も所要所て紹介。



ヨコハマ建築案内 1950-1994

吉田銅市 著
四六・224頁 本体2,700円+税

横浜を中心に神奈川県に建てられた1950年以降の代表的建築を紹介する。神奈川県立近代美術館からランドマークタワーまで、気鋭の建築史家が語る詳細な解説と美しい写真で構成されたガイドブックで、巻末に地図も入る。



近代建築ガイドブック [関東編]

東京建築探偵団 著 村松貞次郎、山口廣 顧問
四六・276頁 本体2,300円+税

官庁街、オフィス街、看板建築群、別荘地、産業遺跡など特徴ある24コースに沿って作品を写真と共に紹介。建築様式、設計者の紹介も盛り込み、首都圏の近代100年の変貌が建物を通して読みとれる。学生、一般向けガイド。



ヨコハマ建築暮情

吉田銅市 著
四六・232頁 本体2,800円+税

横浜を中心に神奈川県に現存する約90棟の建築に光を当て、エキゾチック・ヨコハマ、公共建築、銀行、教会、ミッションスクール、別荘建築、工場、ホテルなどテーマ別に紹介するもの。巻末にガイドブックを収録。



近代建築ガイドブック [関西編]

石田潤一郎、沢田清、柴田正己、中川理、福田晴彦 他共著
四六・312頁 本体2,800円+税

好評の関東編に続く第2弾。大阪の商業の中心、船場の商業建築にはじまりミナミの歓楽街、橋めぐり、堺の工場群、港町神戸の洋館、兵庫県の産業遺跡、あめりか村、文化の都京都の大学施設等々、24コース600余りの作品。



西洋館漫步 建築スケッチの旅

田中薫 著
四六・248頁 本体1,900円+税

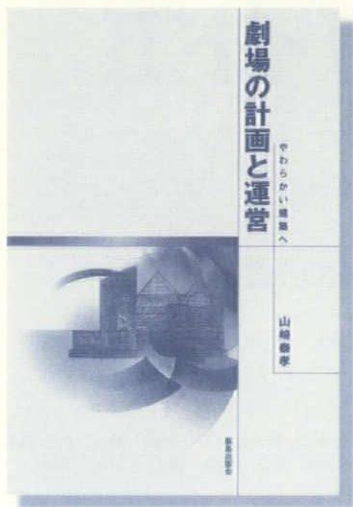
筆者が数年に亘ってスケッチをして歩いた、北海道から台湾に至る西洋館を、印象記と共に紹介するもの。それぞれの土地に息づく建物が、長い年月を経てどのような形で生きつづけているかを生き生きとした文章で語る。

劇場関連図書の紹介

既刊書の中から、劇場に関連する図書を紹介しております。

既刊書すべてを収録した年度版の図書目録も用意しておりますので、ご請求ください。

当社のホームページ上でも既刊書を紹介しておりますのでご覧ください。



劇場の計画と運営

やわらかい建築へ

山崎泰孝 著

四六判・272頁 本体3,300円+税

21世紀の劇場のあり方を施設、運営の両面から探る

21世紀の劇場のあり方を施設、運営の両面から探るもの。現在、日本各地で行われている様々な劇場の活動を豊富な資料とともに紹介。実践的な劇場論である。自治体、劇場関係者、建築家など劇場の運営、計画に携わる人々にとって大いに示唆をあたえるものとなる。

主要目次 1.昨今の劇場事情—多様化する劇場空間／2.企画運営の様々な試み／3.劇場づくりの思想と方法／4.「やわらかい劇場」の提案



ホールの計画と運営

伝統芸能劇場から新多目的ホールまで

山崎泰孝 著

四六・248頁 本体 2,900円+税

ルナホールの計画から運営まで手がけてきた著者が専門家の立場からこれからのホールの計画と運用について述べる。前半では現在、様々な様相を見せる劇場の現状分析と問題点を指摘し、後半で新しいホールへの提案をする。



演劇のための空間

伊東正示、シアターワークショップ 共編

A4変・178頁 本体5,700円+税

近年の多くの実例の中から、高い評価を得ているものを中心に精選し、豊富な写真と図面に解説を添えて形態別に分類して紹介。仮設／野外／転用／スタジオ／可変／歴史／専用／最近の事例 対談=鈴木純士+奥平与人



21世紀の地域劇場

パブリックシアターの理念・空間・組織・運営への提案

清水裕之 著

A5判・248頁 本体3,700円+税

21世紀に求められる新たな地域と劇場との関係をパブリックシアターと位置づけ、そのあり方を探る。市民の手で創造する新たな舞台芸術への提案を地域、劇場との関係をふまえて述べるもの。劇場関係者必読の書。



《SD選書195》 劇場の構図

清水裕之 著

四六・268頁 本体1,800円+税

古代ギリシャから現代に至る劇場空間の変遷を通して、演じる側と観客の位置や関係性がどのように変化してきたかを分析する。そして芸能と建築の創造的交流のための共通言語を見出すことを意図している。



劇場

舞台芸術のための建築計画と設計

ロデリック・ハム 著 劇場技術研究会 訳

B5・232頁 本体6,200円+税

英国舞台技術協会との協力のもとに書かれた劇場の計画と設計のための入門書。劇場の一般技術解説にとどまらず、規模設定、空間形式、施設運営、製作現場の諸設備に至るまで劇場に関わるすべての事象を明快に説く。

医療・福祉関連図書

既刊書の中から医療・福祉関連図書を紹介しております。

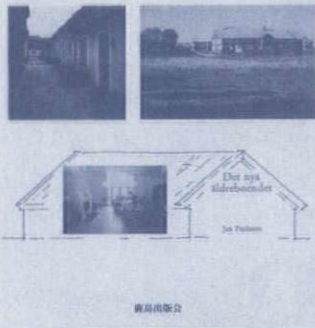
既刊書すべてを収録した年度版の図書目録も用意しておりますので、ご請求ください。

当社のホームページ上でも既刊書を紹介しておりますのでご覧ください。

新しい高齢者住宅と環境

スウェーデンの歴史と事例に学ぶ

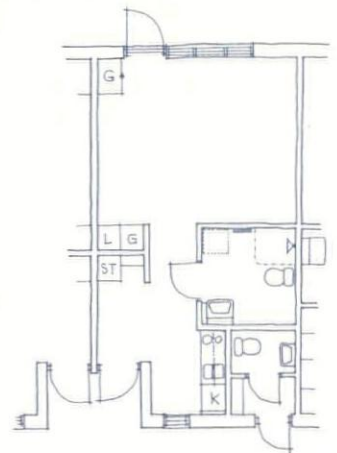
ヤン・ポールソン 著
今井一夫 監訳 石黒暢 訳



新しい高齢者住宅と環境 スウェーデンの歴史と事例に学ぶ

ヤン・ポールソン 著 今井一夫 監訳 石黒暢 訳
A5判・152頁 本体3,100円+税

21世紀の高齢社会で求められるのは、
従来の老人ホームのような「施設型」ではなく、
それまで住んでいた「まち」で、
「すまい」により近い居住環境を実現することだ。
そのために先進国スウェーデンに学ぶべきことは多い。



高齢化・介護福祉のための ヘルスケア施設づくり の実際



高齢化・介護福祉のための ヘルスケア施設づくりの実際

野口哲英、中田利夫 著
A5判・208頁 本体4,200円+税

高齢化社会の到来を迎え、医療は予防治療からケア
回復へと福転換。介護法施行により、今後の施設づ
くり不可欠な医療特性の模索、地域に密着した併
設機能のあり方を、事業収支、補助金、計画設計例で
解説。

計画・設計実務のための 病院形成の方法

小川健比子 著



計画・設計実務のための 病院形成の方法

小川健比子 著
B5判・408頁 本体16,000円+税

現代医療は、医療技術、保健医療体系から高齢化福
祉対策、ケア重視の地域医療へと変革期にある。前
著の「構成」に対し、「方法」として実際に必要な医
療段階での各諸元を、動的なプロセスで展開し、関
連する作用モデルを作成して集大成。



痴呆を癒す建築

ヨーロッパとオーストラリアの設計事例20選

スティーン・ジャッド 他共著 井上裕、浩子 訳
A5判・248頁 本体3,500円+税

グループホーム、看護ホーム、ホステルなど、痴呆
の人々がグループで生活する多様な介護環境。そ
の設計の原則と指針を先進的な事例を通して解説し、
理想の介護環境の姿を探る。



安らぎと緑の公園づくり

ヒーリング・ランドスケープとホスピタリティ

三宅祥介・浅野房世共著
A5判・228頁 本体3,200円+税

生活に身近な緑空間が「いやし」の場となる意味合
い、さらに介護者や高齢にとって歩いて行ける公園
とは何か。初めてのヒーリングランドスケープを、
究極の癒し、具体的事例、ガイドライン、ホスピタ
リティで解説。

10月号 9月25日発売

SD

本体1905円+税

特集：改造建築 公共建築の改造手法

建築の増改築をテーマとした秀作を紹介し、その設計手法に触れながら、今後の可能性を探る。

紹介作品：ドイツ連邦議事堂／ノーマン・フォスター、リヨン・オペラ座／ジャン・ヌーヴェル、ヴェネトン・アート・スクール／安藤忠雄、バリ自然史博物館／ポール・シュメトフ、スイス国際決済銀行／伊東豊雄、他。

<http://www.kajima-publishing.co.jp> 鹿島出版会 ☎03-5561-2551

10月号 9月18日発売

建築技術

本体1762円+税

特集：木造住宅の構造設計—改正建築法と品確法— 監修：大橋好光（熊本県立大学助教授）この特集では「建築基準法」と「品確法」で規定されたなかで、主に構造設計に関して実践的な内容で解説します。木造住宅の構造設計のあり方／法改正の概要（基準法と品確法の概説、設計ルートの解説他）／各規定と研究実験（基礎の構造設計、壁量と壁倍率、偏心とねじれ他）／行政対策（届出書類の種類、中間検査の内容と時期）好評連載：構造設計とコンピュータ解析、特別記事：労働安全

<http://www.k-gijutsu.co.jp> 建築技術 ☎03-3222-5951

隔月刊
No.29

好評発売中

造景

本体2800円+税

特集1 「農」の風景を造る

- ①「百年」の町並みづくり運動／山形県金山町、他
②「田園風景」への挑戦／神戸市

特集2 交通実験都市

公共交通の活用や中心部からの車両の排除など、地方都市の中心街を市民の手に取り戻すための様々な実験

連載 同潤会アパートとまちづくり③

鷺谷、三ノ輪、上野下、三田

<http://www.ksknet.co.jp> 建築資料研究社 ☎03-3986-3239

隔月刊
No.44

好評発売中

comfort

本体1905円+税

〈特集〉：建築を生かす庭

庭と共に生きる家／樹野俊明の庭園デザイン／多様な生き物が共に暮らせる環境とは？／空間デザインのための植物図鑑／ニューヨーク郊外のアゼリアの庭／木製エクステリア建材・家具カタログ／環境から発想する庭・インディジネスガーデン

〈新連載〉：おきなわたもの ①満月と想像力

<http://www.ksknet.co.jp> 建築資料研究社 ☎03-3986-3239

10月号 10月1日発売

住宅建築

本体2333円+税

特集 北海道住宅の新しい格闘（仮題）

～風土、歴史、性能、生活の変化の狭間に立って～

平尾稔幸、米田浩志、山之内裕一、土谷秀樹

住まいをサポートする道具立て：北海道の標準仕様カタログ作例

作例 瀬野和広、白鳥健二、小野正弘

<http://www.ksknet.co.jp> 建築資料研究社 ☎03-3986-3239

2000

9

10

ARCHITECTURAL

MAGAZINES

INFORMATION

9

10

ARCHITECTURAL

MAGAZINES

INFORMATION

9

10

ARCHITECTURAL

MAGAZINES

INFORMATION

9

10

ARCHITECTURAL

MAGAZINES

INFORMATION

9

10

ARCHITECTURAL

MAGAZINES

INFORMATION

9

10

ARCHITECTURAL

MAGAZINES

INFORMATION

10月号 9月28日発売 商店建築 本体1943円+税

●業種特集／和風&エスニック居酒屋

おでんと釜飯・みつげ（大阪）／サンスペース、とんかつ・さき亭（港北）／アイランドコーポレーション、焼き鳥・かわぐち（大阪）／創楽舎、和食居酒屋・茶々（白金台）／辻村久信、韓国居酒屋・ソウル・トゥ・ソウル（大阪）／ボーイカンパニー他

●素材特集／壁の表情+和紙の明かり

土壁の魅力、土壁の新しい技法（スサ入り天然土壁、江戸墨流し、土壁に七宝焼きのガラス吹き付け、その他の新しい手法）

<http://www.sk-club.co.jp> 商店建築社 ☎03-3363-5770

商店建築増刊

創刊2号 好評発売中

I'm home.

本体1714円+税

〈主な内容〉デザイナーのつくる非日常のあるホームデザイン
上質なデザインと上質な暮らしをテーマにインテリアデザイナーや建築家による都市型ホームデザインを多数紹介します

特集／光と風を感じる家に暮らそう

イキイキとした暮らしを与えてくれる自然と隣り合わせの家を紹介

特集／バルコニーガーデンのデザイン

広告企画／ナチュラルにこだわるインテリアパーツ 他

<http://www.sk-club.co.jp> 商店建築社 ☎03-3363-5770

別冊商店建築

好評発売中

SKブックス

本体 1400円+税
他 1800円+税**〈好評発売中〉シリーズ「SKブックス」は読む商店建築。**

設計のコツや施工現場で直面するトラブルを具体的に解説し、成功するための商品・店づくり他を豊富な実例を基にレポート。

- ①よくわかる現場学 ②アイラプレストラン ③困ってしまった設計の話 ④急成長するHMRの秘密 ⑤クレーム・トラブル・バスターズ ⑥飲食トレンド最前線 ⑦空の高さ ⑧U.S.A. ショップ・ウェーブ2000 ⑨ホテルクラシック ⑩商空間のライティング・レシピ ⑪アイラプレストラン・2

<http://www.sk-club.co.jp> 商店建築社 ☎03-3363-5770

My GARDEN 別冊

No.1 好評発売中

GARDEN&LANDSCAPE

本体1429円+税

特集—ロビン・ウィリアムスの世界

建築・景観設計の専門家のための新シリーズがスタート
第1号はグリーン博みやぎ'99で日本で初めて公開されたロビン・ウィリアムスの英国式庭園を徹底解説。

ガーデンデザイン実践講座—庭を飾る／遊びの場所としての庭／ガーデンプランのいろいろ 植栽デザイナー・造園施工とメンテナンス／ガーデンハウスのウェザリング／日本庭園との違い／オリジナル植栽図面／植物リスト／他

<http://www1.newweb.ne.jp/wa/marumo/p/> マルモ出版 ☎03-3496-7046

季刊
No.21 好評発売中

LANDSCAPE

本体2505円+税

特集—商店街が生きる街**街の活性化をさせる事例を紹介**

歴史と文化が息づく「大江戸麻布十番商店街」[座談会]／商店が支えるコミュニケーション・スペース—神戸市大目六丁目商店街／サンアントニオに見る水辺と緑の商空間／観光地の商店街は今・／ベルリン「大規模団地再生」の国際ワークショップ／廃棄物リサイクル対策の推進とランドスケープ ●連載—現場の知恵袋—屋上緑化の施工技術／他

<http://www1.newweb.ne.jp/wa/marumo/p/> マルモ出版 ☎03-3496-7046

■ご購入は最寄りの書店でお願いします。ここに掲載してある雑誌は、建築関係雑誌発行出版社の協力により最新号を告知しています。雑誌の一部は予定価格の表示がされているものも含まれていますが、詳しくは各出版社にお問い合わせください。（BNF事務局）

★1999年度日本都市計画学会石川奨励賞受賞★

まちづくりがわかる本 浦安のまちを読む

浦安まちブックをつくる会編著 B5・¥1905

日建設計のディテール 日建設計編著

伝承される理念と技術の展開 A4変・¥5400

坂倉建築研究所のディテール

〔東京事務所〕空間の境界とその表現

坂倉建築研究所東京事務所編著 A4変・¥5000

自然エネルギー利用のための

パッシブ建築設計手法事典 新訂版

彰国社編 A4変・¥2800

新建築学大系31

病院の設計 第二版

伊藤誠・小滝一正・河口豊・長澤泰著 A5・¥6200

デザイナーのための

建築法規チェックリスト 2001年度版

彰国社編 A4変・¥5000

プレキャストコンクリート技術マニュアル

その活用と設計・施工の手引き PCa技術研究会編著 B5・¥3000

住宅に空間力を 住まいかたと住むくふう

三澤文子著 B6・¥1800

エスキスシリーズ 第1期5冊

第一線で活躍する建築家であり、また同時に教育の場にも立つ著者らが、建築設計演習のために考えたユニークな教材・副読本のシリーズ。

学生から設計実務者まで、広い読者層を対象とする建築設計演習シリーズ

“術”を超え“学”に及ぶ実践的なテキスト、ワークブックのシリーズ

ぜひ、書店で一見のほど……

1 アクティビティを設計せよ!

学校の空間を軸にしたスタディ

小嶋一浩編著 A4変判 148p・¥3200 発売中

2 建築構成の手法

比例・幾何学・対称・分節・深層と表層・層構成

小林克弘編著 B5判 140p・¥2500 発売中

3 建築のアイデアを

どうまとめていくか?

もうひとつのテーマは「都市への戦略」

大野秀敏編著 A12取判 160p・¥2850 発売中

建築を見て設計を学ぶ

4 谷口吉生「丸亀市猪熊弦一郎

現代美術館・図書館」

古谷誠章編著 ポケット判 9月刊行予定

5 建築デザインの

デジタル・エスキス

CD-ROMによる各種手法の演習

渡辺仁史編著 A5判+CD-ROM 8月刊行予定

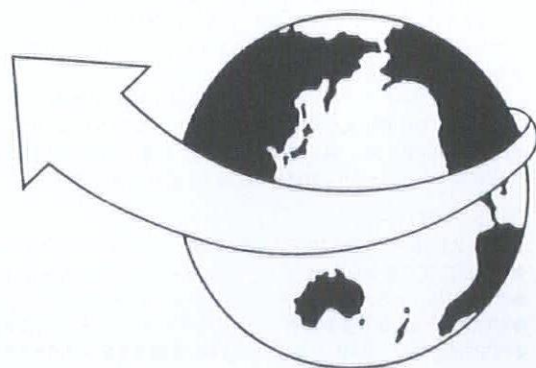
彰国社

〒160-0002 東京都新宿区坂町25 TEL 03-3359-3231 FAX 03-3357-3961 <http://www.shokokusha.co.jp>

(すべて税別価格)

未来に向って…

限りある資源
限りある空間の中で
より快適な環境づくりの
ために努力しています。



●営業品目

空気調和・冷暖房・給排水・衛生設備・設計施工



株式会社朝日工業社

本社・東京支社 〒105-0013 東京都港区浜松町1-25-7 電話 03(3434)5711

大阪支社 〒532-0031 大阪市淀川区加島1-58-59 電話 06(6302)2273

支店 北海道／東北／北関東／横浜／名古屋／中国／九州



ロビーラウンジ

ようこそ、クラシカル・エレガントな世界へ。

19世紀初頭のヨーロッパ様式で統一された本格的都市型ホテル。

すべてのファシリティに調度品に、そしてきめ細やかなおもてなしに漂う欧州の美意識。

ドアマンに迎えられホテルに一步脚を踏み込めば、
あなたの新しい物語がはじまります。

(客室&施設)

●ビジネス向き、女性向き、観光、ファミリー、個人滞在用と、目的に応じて選べる全404室。
(シングル¥15,000～ ツイン¥25,000～) ●ジャグジー、ヒーティングルームなどを付帯した
2,000㎡の“ガーデンプール”。●クラシカルなインテリアや絵画で統一された趣のあるロビー。
●個性的なステンドグラス、パイプオルガンを配したチャペル(3F)。ガーデンプールの一角
に設けられたガーデンチャペル(5F屋外)。厳肅な神殿(八幡殿＝やひろでん)(3F)。●最
大800名様まで可能な大宴会場(永代)、中、小、さまざまな8つの宴会場。●最新設備を完
備したビジネスセンター。●心身の健康管理と増進、心の交流を目的とした新しいタイプの
ヘルスクラブ“ジ・イースト”。●都内初のホテル直結型多目的ホール“イースト21ホール”。

(レストラン&バー)

●フランス料理を主としたコンチネンタル料理……………【プラスリー ハーモニー(2F)】
●本格的広東料理……………【中国料理 桃園(2F)】
●アフリカムードのメインバー……………【バー エレファント(2F)】
●旬の素材が織りなす食の芸術……………【日本料理 さざんか(21F)】
●四季折々の味覚…【鉄板焼 木場(21F)】 ●心に残る夜景…【カクテルラウンジ パノラマ(21F)】



チャペル



地下鉄東西線「東陽町駅」より徒歩7分。
東陽町駅～ホテル間、ホテル専用シャトルバス運行。

株式会社 鹿島ホテルエンタプライズ
KAJIMA HOTEL ENTERPRISES, LTD.

ホテル イースト21東京

〒135-0016 東京都江東区東陽6-3-3
TEL 03(5683)5683代 FAX 03(5683)5775



SD誌に広告をお申込みの際は下記広告代理店にご用命下さい（五十音順）

東京——東京都中央区銀座8-2-1

新田ビル (3572) 3381

FAX (3572) 3590

大阪——大阪市北区西天満3-6-8

笹屋ビル06 (6362) 6515

FAX06 (6362) 6052

東京——東京都文京区湯島2-30-8

(3818) 1961

FAX (3818) 1968

大阪——大阪市中央区淡路町1-4-9

昭栄ビル 06 (6231) 4548

FAX06 (6227) 0268

神奈川県三浦郡葉山町堀内533

0468-77-1207

FAX0468-77-1208

大阪——大阪市北区浪花町14-25

日本生命天六ビル06 (6379) 1791

東京——東京都千代田区神田須田町2-5-2

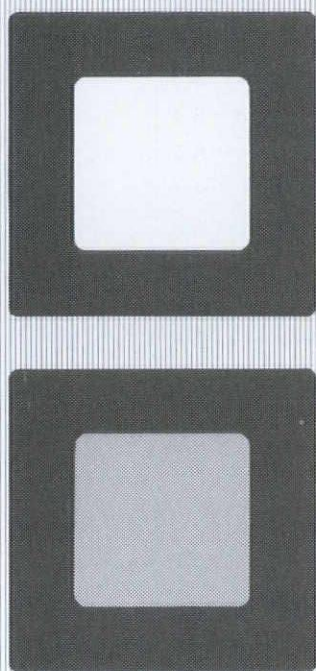
須田町佐志田ビル (3255) 8411

名古屋——名古屋市中区錦2-2-13

名古屋センタービル052(221)7641(代)

ア	株朝日工業社	A 7
カ	株関電工	表 2
	鹿島	A 2・A 3
サ	三機工業株	115
シ	株漳国社	A 7
	昭利アステック株	113
ス	住友電設株	A10
タ	高砂熱学工業株	表 3
	大興物産株	A 4
チ	株中電工	A 5
ト	東光電気工事株	A 1
	株トーエネック	A 5
	東洋熱工業株	116
ニ	日新工業株	A 6
ヒ	株日立製作所	表 4
ホ	ホテルイースト21	A 8
ミ	三菱電機株	105
ヤ	株ヤナセ	108

あなたが触れると、
私達が動く。



私達はより快適な
人間環境を追求します。

スイッチON。私達の技術がフル回転をはじめます。あなたがより創造性豊かに思考したり、より機能的に活動できるよう働きはじめるのです。あなたの身のまわりの、なんの変哲もないスイッチひとつの裏側に、私達のノウハウがいつばいつめこまれていきます。あなたはただ触れるだけ、私達の出番です。あなたが普段、なにげなく使っている設備、なにげなく過している環境に、より快適であるよう生命を与えつづけること……これが私達の仕事です。あなたの目には見えない所で、私達は快適な環境をプロデュースし、クリエイトしつづけていきます。

いろんな快適、笑顔でつなぐ。



住友電設